

# 西アフリカ・サヘル地域の人びとの暮らしと生業 —ニジェール共和国の村落の事例から—

田中 樹 監修

佐々木 夕子・小村 陽平 著





## 序 文

アフリカやアジアの半乾燥地は、一般に砂漠化と総称される資源・環境の劣化と貧困問題が不可分に連鎖する地域である。『国連砂漠化対処条約』や『ミレニアム開発目標』などに見るように、その解決は、国際社会の最優先課題の一つであり、問題解決のための学術研究と社会实践の両面での貢献が長らく求められてきた。

砂漠化問題は、地球的課題あるいは関心事である半面、本質的には、複雑で多岐にわたる局地的現象の集合とみなすことができる。その原因は、アフリカの半乾燥地を例にとれば、人々の暮らしを支える農耕や牧畜、薪炭採集などの日常的な生業活動にある。そのため、砂漠化対処には、原因である暮らしや生業を維持しながらその解決にあたるという困難が伴う。一筋縄ではいかない問題への対処法を探る取り組みには、地域の資源・生態環境や人々の暮らしに焦点を当てる等身大スケールでの丁寧なフィールド研究の積み重ねが求められる。

私たちが取り組む、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト『砂漠化をめぐる風と人と土』は、砂漠化問題への関心を起点として形成された。プロジェクト名の「砂漠化」は、研究の中心課題であり、それに関わる諸問題の解決への糸口を探る意思を表している。「風と人と土」は、砂漠化地域に住まう人々の暮らしとそれを取り巻く社会・文化・生態環境などの諸相を意味し、それらの理解のうえに、砂漠化に関する研究や実効ある対処策を見出そうという思いを込めたものである。プロジェクトの期間は2012年度～2016年度の5年間で、対象地域には、西アフリカ（ニジェール、ブルキナファソ、セネガル）、南部アフリカ（ナミビア、ザンビア）、北東アフリカ（スーダン）、南アジア（インド）、東アジア（モンゴル）が含まれる。また、砂漠化地域には、いわゆるグローバル化のなかで取り残されていく地域やコミュニティ、情報や知識に触れる機会に恵まれず何らかの取り組みに参加したくてもできない弱い立場や状況に置かれている人々が存在する。私たちは、これらの人々の存在を強く意識し、研究や砂漠化対処への取り組みの視野範囲に収めるようにしたい。これらの人々に直接向き合い、彼らが望み共鳴できる言葉や具体的な活動の形を紡ぐことでこそ学術が磨かれると信じる。

プロジェクトが本格的に始動してから2年が過ぎ、対象地域での様々な研究知見や経験がもたらされるようになってきた。これらを、地域あるいは課題により括り、社会に発信することを意図して企画したのが「フィールドノート」である。

第一号となる本書は、西アフリカ内陸部に位置するニジェールでのフィールド研究の成果を取りまとめたものである。近年、資源開発や経済発展の最後のフロンティアとして注目を集め、一方で時限を帯びて深刻化する環境問題や貧困問題を抱えつつ、アフリカの社会と人々の暮らしは大きな転機を迎えようとしている。その中であって、アフリカ大陸の西端から北東アフリカに延びる広大な半乾燥帯—一般にサヘルと呼ばれる—の一部を成すこの地域は、砂漠化と貧困の最前線の一つとして知られる。この地域は、1970年代以降、断続的に干ばつや病虫害に見舞われてきた。本書は、ニジェール西南部と中南部の二地域を事例としつつ、干ばつ常襲地域で幾度となく繰り返される危機への対処を通じて、農耕だけではなく、牧畜や採集、賃労働、出稼ぎなど複数の生業が複合して成り立つ人々の暮らしの中で形成されてきたレジリエンス性を捉えようとするものである。それは、プロジェクト名が指し示す「風と人と土」を知る試みの一つでもある。

「フィールドノート」は、まだ粗削りで、これから学術書になるのか報告書になるのかあるい

はエッセイになるのか、その行方の分からない、あたかも「原石」のようなものである。本書を含め、今後作りだされる「フィールドノート」を手にした方々からの様々な形での助言や批判を受けながら、知識や経験、発想を共有しつつ「原石」を磨く機会や場としていきたい。

(プロジェクトリーダー 田中樹)

砂漠化をめぐる風と人と土 フィールドノート1  
西アフリカ・サヘル地域の人びとの暮らしと生業  
—ニジェール共和国の村落の事例から—

目 次

---

序 文

---

001 はじめに

---

第1章 調査地の概要

---

- 003 第1節 サヘル地域
- 1 サヘル地域の気候と植生
  - 2 サヘル地域における気候の変遷と「危機の年」
- 006 第2節 ニジェール共和国
- 1 自然と気候
  - 2 民族と社会
    - 1) ザルマという民族
    - 2) フルベという民族
    - 3) ハウサという民族
  - 3 歴史
  - 4 政治
  - 5 経済
- 019 第3節 調査村
- 1 ニジェール南西部村落（ファカラ地区）
  - 2 ニジェール中南部村落（テッサウア周辺地区）

---

第2章 サヘル地域の村落における人々の暮らしと生業

---

- 025 第1節 ニジェール南西部村落における人々の暮らしと生業
- 1 フィールド調査の概要
  - 2 人々の暮らしと生業
    - 1) フルベの暮らしと生業
    - 2) ザルマの暮らしと生業
    - 3) フルベとザルマの関係
    - 4) ザルマ女性の役割と位置づけ
  - 3 有用植物が人々の暮らしに果たす役割
    - 1) アフリカ各地の様々な利用事例
    - 2) ザルマ男性が認識する有用植物と利用法
    - 3) フルベ男性が認識する有用植物と利用法
    - 4) ザルマとフルベが認識する有用植物の比較
    - 5) ザルマの性差による有用植物の利用法の相違
- 055 第2節 ニジェール中南部村落における人々の暮らしと生業
- 1 フィールド調査の概要
  - 2 調査村におけるハウサの暮らし
    - 1) 家族構成、婚姻、命名式
    - 2) 住居

- 3) 食生活
  - 4) 女性と子どもの生活
  - 5) 教育
  - 6) ラマダーンとタバスキ
  - 3 調査村におけるハウサの生業
    - 1) 農耕
    - 2) 家畜の飼養
    - 3) 採集
    - 4) 漁労
    - 5) 野菜栽培
    - 6) その他の現金獲得活動
    - 7) その他の現金獲得活動についてのまとめ
    - 8) 生業複合によって成り立つハウサの暮らし
  - 4 調査村におけるフルベの暮らし
    - 1) R村の概要
    - 2) R村のフルベ
    - 3) 住居
    - 4) 食生活
    - 5) 教育
    - 6) 水汲み
    - 7) ハウサとの関係
  - 5 調査村におけるフルベの生業
    - 1) 家畜の飼養
    - 2) 農耕
    - 3) 出稼ぎ
    - 4) 牛乳の行商
    - 5) その他の現金獲得活動
    - 6) ハウサとフルベの生業体系の比較
- 085 第3節 域外における生業としての出稼ぎ
- 1 サヘル地域における出稼ぎの変遷
  - 2 調査方法
  - 3 調査村における出稼ぎの状況
  - 4 出稼ぎ先
  - 5 出稼ぎ労働の内容
  - 6 出稼ぎ労働者コミュニティ
  - 7 出稼ぎの目的
  - 8 出稼ぎをめぐる問題

---

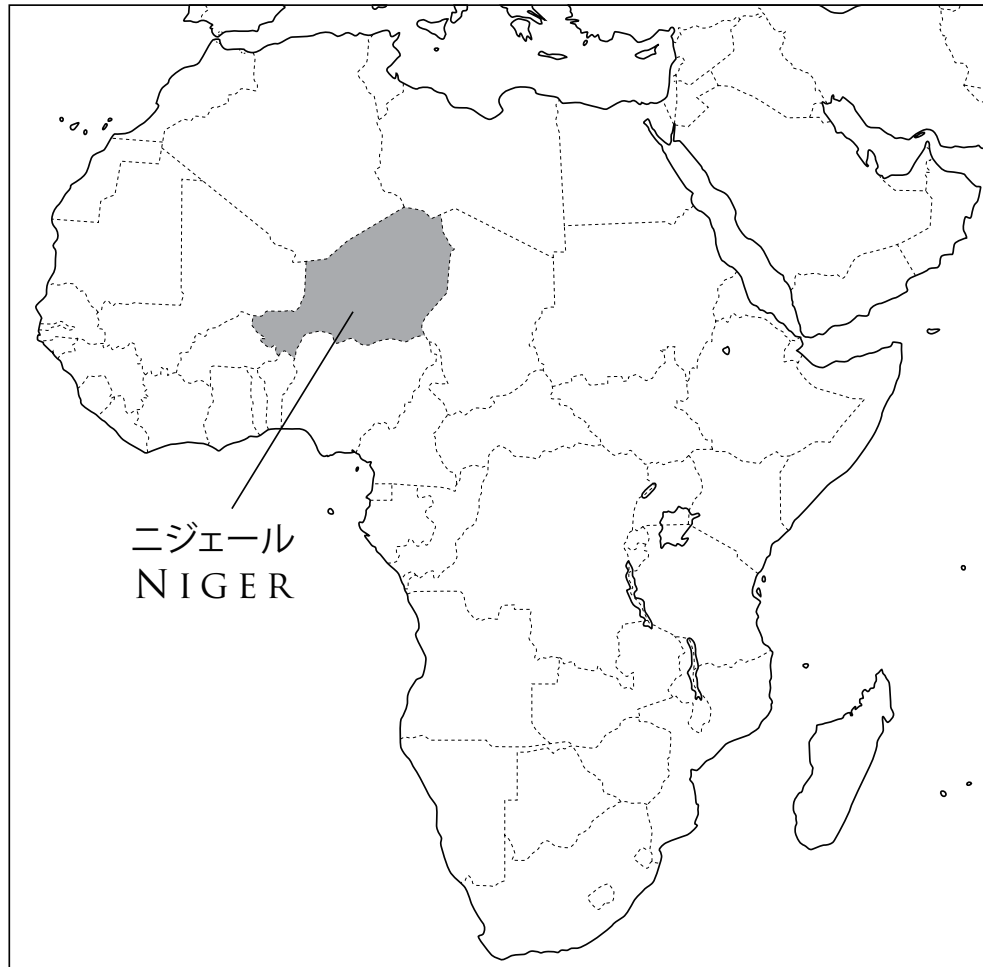
### 第3章 サヘル地域の村落における「危機の年」の認識と対処行動

---

- 093 第1節 ニジェール南西部の人々が認識する「危機の年」と対処行動
- 1 フルベの「危機の年」と対処行動
  - 2 ザルマの「危機の年」と対処行動
  - 3 フルベとザルマで異なる「危機の年」
  - 4 ザルマ女性の「危機の年」の対処行動
  - 5 ザルマ女性の「危機の年」の村落間比較
  - 6 乾季の野菜栽培にみるリスク軽減のしくみ
  - 7 「危機の年」の対処行動から恒常的な生業への移行
  - 8 ニジェール政府の対応

- 9 まとめ
- 101 第2節 ニジェール南部の人々が認識する「危機の年」と対処行動
- 1 「危機の年」の現地呼称とその意味
  - 2 1984年のサヘルの大干ばつ (*El Buhari*)
    - 1) *El Buhari*
    - 2) ビアフラ内戦
    - 3) ニジェール・ナイジェリア間の国境封鎖
  - 3 「危機の年」の認識におけるハウサの村落間比較
  - 4 「危機の年」の認識における民族間比較
  - 5 「危機の年」対処行動
  - 6 まとめ
- 111 参考文献

本書で対象とする国



著者紹介

佐々木 夕子 (ささき ゆうこ)

【所属】 総合地球環境学研究所プロジェクト研究員

【専門】 地球環境学、地域研究 (サヘル地域)

【現在関心のあるテーマ】 西アフリカ・サヘル地域および周辺国における人々の移動と域内の社会ネットワーク

小村 陽平 (こむら ようへい)

【所属】 開発コンサルタント

【専門】 専門は農村開発、地域研究 (ニジェール)

【現在関心のあるテーマ】 サヘル地域 (ニジェール)、農村開発、農業普及、社会調査



## はじめに

筆者が最初にサヘルと呼ばれる地域に足を踏み入れたのは、今から10年前の2003年4月に遡る。以来様々なかたちでこの地域の人々と関わってきた。サヘル地域は世界でも最も生活環境が過酷な地域の一つであり、およそ5800万人がこの地域に暮らしていると言われている(IRIN 2008)。また、短い雨季と不規則な降水パターンといった自然環境から、サヘル地域は長らく干ばつの常襲地である。慢性的な食料不足や砂漠化といった問題は、近年の人口増加や人間活動の拡大によってさらに拍車がかかり、危機的な状況が続いている。それに加えて、教育、保健衛生分野においても、多くの課題を抱えた地域でもある。そのため、サヘル地域の多くの国が独立を遂げた1960年代以来、様々な支援組織により開発援助が行われてきた。しかし、それから半世紀余りが経過してもなお、サヘル地域の人々の厳しい生活状況は変わらず、砂漠化や貧困といった問題は複雑かつ深刻化しているのが現状である。

筆者自身も2年間、サヘル地域の村落で現地の人々と寝食を共にしてきたので、その厳しさは身に沁みている。しかしながら、こうした厳しい環境に身を置き、日々の人々の暮らしを観察する中で、ある疑問が頭をもたげてきた。今や一般的な基準となってしまう途上国の発展レベルや貧困レベルを測る人間開発指数などといった指標が、何か事の本質を捉えていないのではないか、という違和感にも似た感覚である。地域の人々は今日、世界で取り沙汰されている「砂漠化」の言葉すら知らずに今を生きている。当の住民は、自分たちが暮らす地域が世界の最貧国というレッテルを貼られ、そのような目で見られていることなど知る由もない。そして、こうした地球規模の問題に対して策を講じる外部者もまた、当該地域の人びとの生活の実態を捉えているとは言い難い。むしろそこで暮らす当事者である地域住民を抜きにして、こうした議論は行われているのが現状である。

私たちは今一度、当事者であるサヘル地域の人々の暮らしや生業に焦点を当て、それらを正確に捉え直す必要があるのではないだろうか。なぜなら、この地域を最もよく知る人々だからこそ、私たちが考え得ない様々な知恵や生きる術を持っており、それらは彼らの生活の随所に垣間見ることができるからである。とは言うものの、サヘル地域から地理的にも遠く離れ、快適で便利な生活を享受している私たち日本人が、真に現地の人々の立場、目線に立つと言うのはそう容易いことではない。であればこそ、サヘル地域を調査フィールドに持つ研究者や実務者が長年にわたりサヘル地域で暮らしてきた人々と真摯に向かい合い、厳しい環境と折り合いをつけながら生きる術を記録として残すことがその重要な使命であると考え。その連綿と受け継がれてきた営みに外部者がどう関わっていくべきなのかを議論するのはそうした土台があって初めて可能となる。

このような認識に立ち、ニジェール共和国をフィールドに実務経験と調査研究を重ねてきた筆者らがニジェールの異なる2つの地域の村落の生業と、人々が記憶する「危機の年」とその対処行動に焦点を当てつつ記述し、議論を展開するのが本書である。

第1章「調査地の概要」では、ニジェール共和国について、自然と気候、民族と社会、歴史、政治、経済から概観し、ニジェール南西部ファカラ(佐々木)とニジェール中南部のテッサウア(小村)の概要を述べる。ニジェール川沿いを中心に優勢を誇る農耕民ザルマ社会と、ナイジェリア北部との結びつきがむしろ強く、商業にも長けているハウサ社会。このニジェールの二大民族の社会や暮らしについての調査を通して、それぞれの地域の重層的な理解と多民族社会から成るニジェールを総合的に捉えようとしている。

第2章「サヘル地域の村落における人々の暮

らしと生業」では、佐々木がニジェール南西部（ファカラ地区）の暮らしと生業についてまとめている。この地域の大多数を占める農耕民族ザルマの変遷に触れ、それから現代に至る過程を先行研究と現地調査の結果と共にひも解いている。特に、有用植物の利用について農耕民ザルマと牧畜民フルベのそれぞれの利用方法に触れ、その違いが彼らの異なる生業に由来している点を指摘している。次に小村が中南部（テッサウア地区）の暮らしと生業についてハウサ地域（以下ハウサランド）の歴史に触れたのちに調査村におけるハウサの暮らしや生業について詳細な記録と考察を加えている。同様に、中南部に住むフルベについても、その歴史と現在の暮らしや生業についてまとめている。さらに、サヘル地域の人々の様々な生業の中でも、域外との関係において行なわれる出稼ぎに着目し、村落における村人の出稼ぎの状況、出稼ぎ先と出稼ぎ労働の内容を捉え、村落部住民が生業として行う出稼ぎについての考察を加える。

第3章「サヘル地域の村落における「危機の年」の認識と対処行動」では、佐々木がニジェール南西部（ファカラ地区）で人々が記憶している「危機の年」とその対処行動を聞き取りにより明らかにしている。その際、どのような対処行動を取ったのかについても触れ、同じ地域で暮らしていても異なる生業を持つ民族間（農耕民ザルマと牧畜民フルベ）で「危機」の認識や対処行動が異なることを指摘している。さらに異なる2村落でザルマ女性にも同様の調査を行った結果を踏まえて、同一民族であっても彼女らのもつ生業オプションにより「危機の年」や「危機」への対処行動が異なることも明らかにしている。続いて、小村がニジェール中南部（テッサウア）におけるハウサとフルベが認識した「危機の年」とその対処行動を詳細に調査することを通じて、サヘル地域の人々の生業に内在された危機管理の仕組みを明らかにしている。具体的には、ハウサとフルベの村落においてそれぞれが認識した「危機の年」とその対処行動、村落の立地条件や民族による「危機の年」

の認識と対処行動の違いを捉え、それぞれの「危機の年」と各対処行動についての関係、対処行動の具体的内容および対処行動間の関係を明らかにすることにより、生業に内在された危機管理の仕組みを解明している。

（佐々木 夕子）

# 第1章 調査地の概要

## 第1節 サヘル地域

### 1 サヘル地域の気候と植生

サヘルという名前は、「海岸」、「岸部」もしくは「国境」を意味するアラビア語に由来し、サヘル地域とは、世界最大の熱帯砂漠であるサハラ砂漠の境界を指している（図1-1）。サヘル地域は3つの視点から以下のように分類できる（セン2000）。

- ①生態学的定義
- ②政治生態学的定義
- ③政治的定義

①生態学的定義は、サハラ砂漠南端に位置する半乾燥（semi-arid）地帯（降水量100～500mm）として定義することができ、この定義は熱帯ステップ植生地帯と一致する（Church and Dalby 1973）。②政治生態学的定義では、西アフリカ6ヶ国、つまりモーリタニア、セネガル、マリ、ブルキナファソ、ニジェール、チャ

ドにおける半乾燥植生地帯として定義され、より幅広く、これら6ヶ国の乾燥地帯を指すこともある（Matlock and Cockrum 1976）。そして、③政治的定義では、②政治生態学的定義と同様の6ヶ国を指して、1970年代の干ばつの影響を受けた国々として用いられることもある（セン2000）が、1970年代の干ばつを機に発足したサヘル地域国家間干ばつ対策委員会（CILSS）や、先進工業国で構成される経済開発協力機構（OECD）内に設置されているサヘル地域へのインフォーマルな援助政策調整機構とも言うべき、サヘルクラブの対象国（先の6ヶ国にガンビアとカーボベルデを加えた8ヶ国）がより③の定義に近いと言える（勝俣1992）。なお本書ではサヘル地域を①の生態学的定義に基づくものとする。

サヘル地域は、年平均降水量が少なく、乾燥月が6～8ヶ月間もあるため、年間の水収支で蒸発量が降水量を上回り、過去に蓄積さ

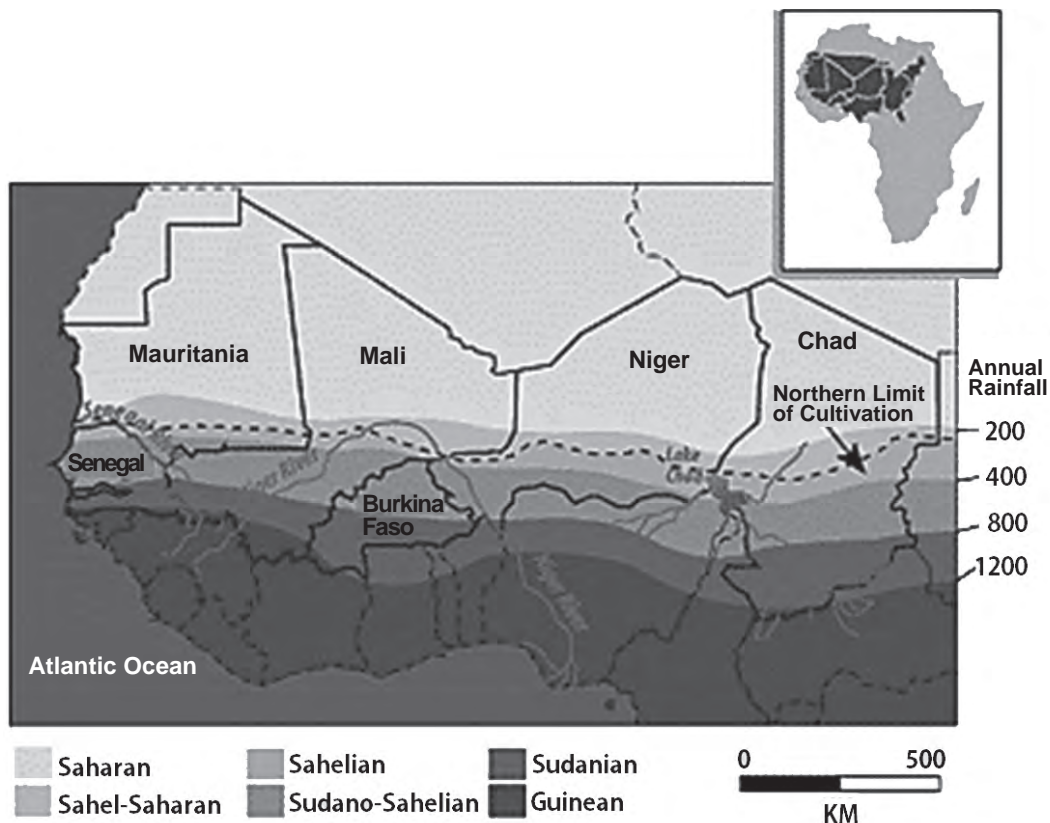


図1-1 西アフリカの自然地域の呼び方と年平均降水量分布図（USAID 2005 を一部改編）

れた地下水や外部からの水の供給がなければ人々が生活していくのは難しい地域である（今川 1992）。サヘル地域に雨が降るのは、ギニア湾からの湿った南西のモンスーンの風がサハラ砂漠の南まで届く6～9月までの4ヶ月間だけで、乾季にはサハラ砂漠上空の高気圧から吹き出す北東の貿易風であるハルマッタンの風が吹く乾季が続く（門村 1992）。サヘル地域の南北の幅は300～400 kmとなり、その幅は降水量の年々の変動に伴って南北に頻繁に変動し、その南限と北限は、多雨年には平均位置よりも200～300 kmも北上し、反対に干ばつの年には200～300 km、時には400～500 kmも南下する（門村 1992）。

サヘル地域は植生上では砂漠帯（Desert）とサバンナ帯（Savanna）の間に位置するステップ帯（Steppe）に属する（Marchal 1983）。植生景観は、灌木の疎開林、乾性サバンナから半砂漠まで多様であり、背丈の低い1年生草本の群落の中にアカシア属などの刺のある灌木が散在する景観がサヘル地域の代表的な植生景観である（門村 1992）。

サヘル地域北部の乾燥した地域では主に牧畜が、一方、より降水量の多い南部では農耕と牧畜が共に営まれている（Powell *et al.* 1996）。芽ぶく草を追っての遊牧ないし移牧を基調とした牧畜が、気候・生態的条件とよく調和し

た伝統的な基幹生業として古くから行われていたが、南部の主要な穀物であるトウジンビエ（*Pennisetum glaucum*）やモロコシ（*Sorghum bicolor*）などの降水に依存した天水農耕は、栽培限界に近いいため、ちょっとした干ばつに襲われても収量が大きく落ち込んでしまい、安定した農業を行うことがもともと困難な地域である（門村 1992）。それに加えて、肥沃度の低い砂質土壌と度重なる干ばつ、そして干ばつでない年であっても少雨かつ不規則な降水パターンが原因となり、トウジンビエの生産性は概して低い（Akponikpe and Michels 2008）。さらに1960年以降はサヘル地域では人口が急増しており、それに伴い農耕地面積が増加してきたが、一人あたりの耕作地面積は減少傾向にあり（図1-2）、土地資源への人口圧は高まっている（Abdoulaye and DeBoer 2000）。他方で嶋田(1992)は、このように気候学的にだけ見れば、単調で生産力の貧しい地域に見える一方で、その生態学的多様性とサハラ交易故に、実際にはさまざまな生業、職業が混在する地域であり、その多様性はアフリカの他地域に比べて際立ち、それ故の豊かさに恵まれてきた地域であると指摘する。また、Nielsen and Reenberg (2010) は、サヘル地域の厳しい環境下においても、地域住民は自然環境に適応した様々な生業を営んでいるとし、その柔軟性に注目している。

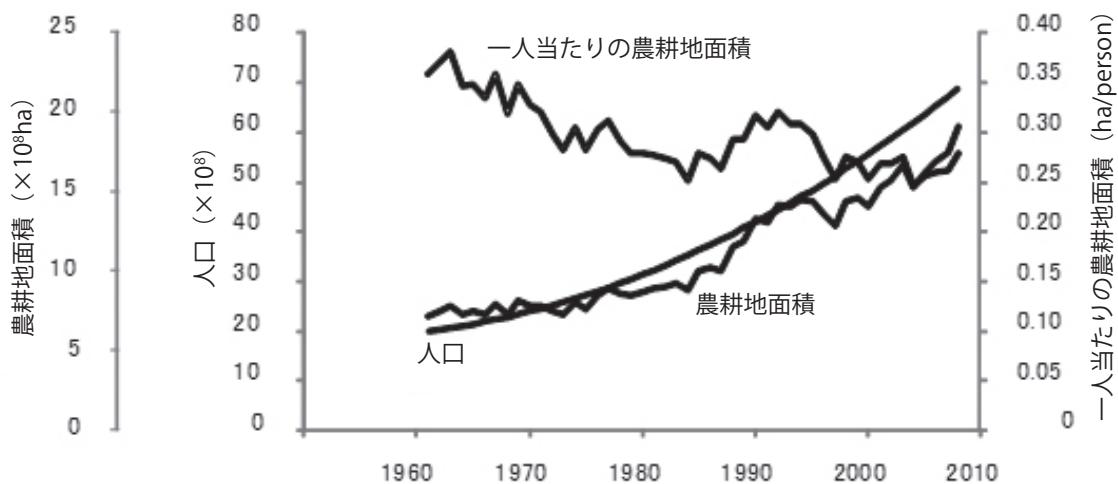


図1-2 土地利用圧の高まり

表 1-1 サヘル地域における 15 世紀以降の気候変遷

年 代	出来事	年 代	出来事
1420-1465 年	ボルヌ飢饉	1847-1848 年	モーリタニア、テラツツア飢饉
1480-1510 年	チベスチ (チャド北部)	1851-1854 年	チャド湖拡大
1537-1539 年	ニジェール川大湾曲部干ばつ、飢饉	1854-1855 年	モーリタニア、ティチット飢饉
1548-1566 年	ボルヌ (ドゥマナ時代) 飢饉	1860-1862 年	サハラ大雨
1550 年頃	湿潤期の終わり	1860-1863 年	セネガル、サンルイ少雨
1681-1687 年	ワダイ河川流路切断、干ばつ	1866-1894 年	サハラ-サヘル湿潤期
17 世紀末	チベスチ (チャド北部) 放棄	1896-1916 年	サヘル乾燥期
1711-1726 年	ボルヌ (ドゥマナ時代) 7 年の飢饉	1913-1914 年	深刻な干ばつ
1723-1745 年	モシ (ケンガ時代) 2 年の飢饉	1910-1916 年	サヘル干ばつ
1738-1751 年	ボルヌ (モハマド時代) 2 年の飢饉	1916-1918 年	サハラ-サヘル多雨
1751-1753 年	ボルヌ (ドゥマナ時代) 酷い飢饉	1941-1943 年	サヘル干ばつ
1770 年頃	チャド湖一部干出	1944-1948 年	サヘル干ばつ
1771-1775 年	モーリタニア、サヘル飢饉	1951-1954 年	サヘル湿潤
1779-1790 年	チャド湖拡大	1961-1964 年	サヘル湿潤
1801-1813 年	チャド湖縮小	1967-1967 年	エチオピア多雨
1828-1833 年	ワダイ飢饉	1972-1973 年	深刻な干ばつ
1828-1835 年	チャド湖一部干出	1983-1984 年	深刻な干ばつ

門村 (1989) より作成

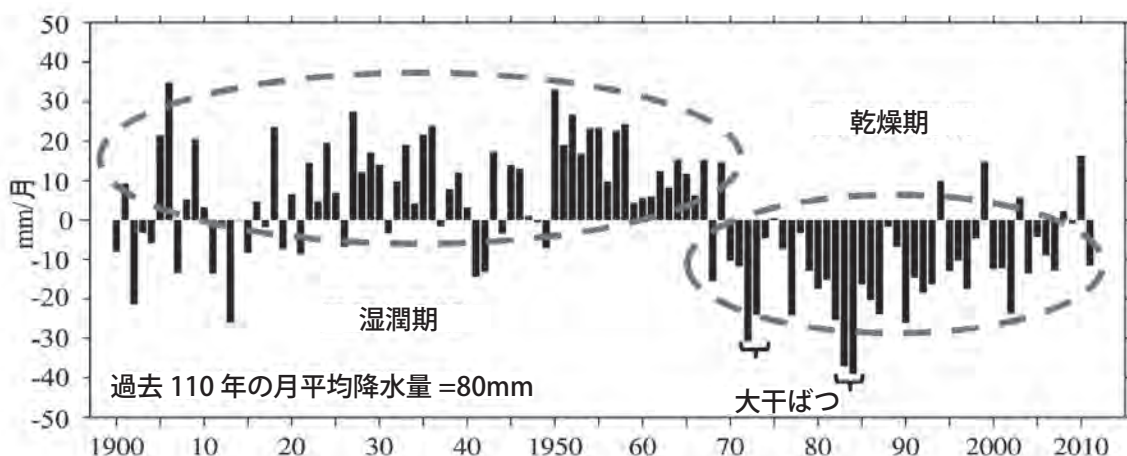


図 1-3 1900 ~ 2010 年の降水月の平均に対する各年の降水月の平均との差 (JISAO 2011 を一部改編)

## 2 サヘル地域における気候の変遷と「危機の年」

サヘル地域では、15 世紀以降、湿潤期と乾燥期を繰り返し、各地で干ばつや飢饉が起こった (門村 1989、表 1-1)。1960 年代前半までは湿潤期が続いていたが、それ以降は乾燥期が続いており (図 1-3)、1896 年頃より少雨の傾向が始まり、1913 年から 1914 年を頂点に 19 世紀初頭の干ばつ期が出現、その後、1940 年代に 2 回の小干ばつがあった後、1950 年代から 1960 年代中期までは湿潤期が続いた (門村 1982)。1968 年からは干ばつが頻発し、1973 年と 1984 年の大干ばつ (以下、サヘルの大干ばつ) では

多数の餓死者や難民が発生し、1973 年の干ばつでは 10 万人以上が死亡したと推計されており (Sen 1982、Warner *et al.* 2009)、1974 年までにニジェール、マリ、モーリタニアでは 75 万人以上が食料援助に全面的に依存する事態に陥った (Wijkman and Timberlake 1984)。

このように、サヘル地域は干ばつの常襲地域であるが、慢性的な食料不足や砂漠化といった問題は、近年の人口増加によって更に拍車がかかり (佐々木 2012)、干ばつ、不規則な降水、農作物への病虫害被害、牧草の不足、伝染病などが原因で不作や家畜の損失が起こり、人々の暮らしが著しく困窮し、「危機の年」となる

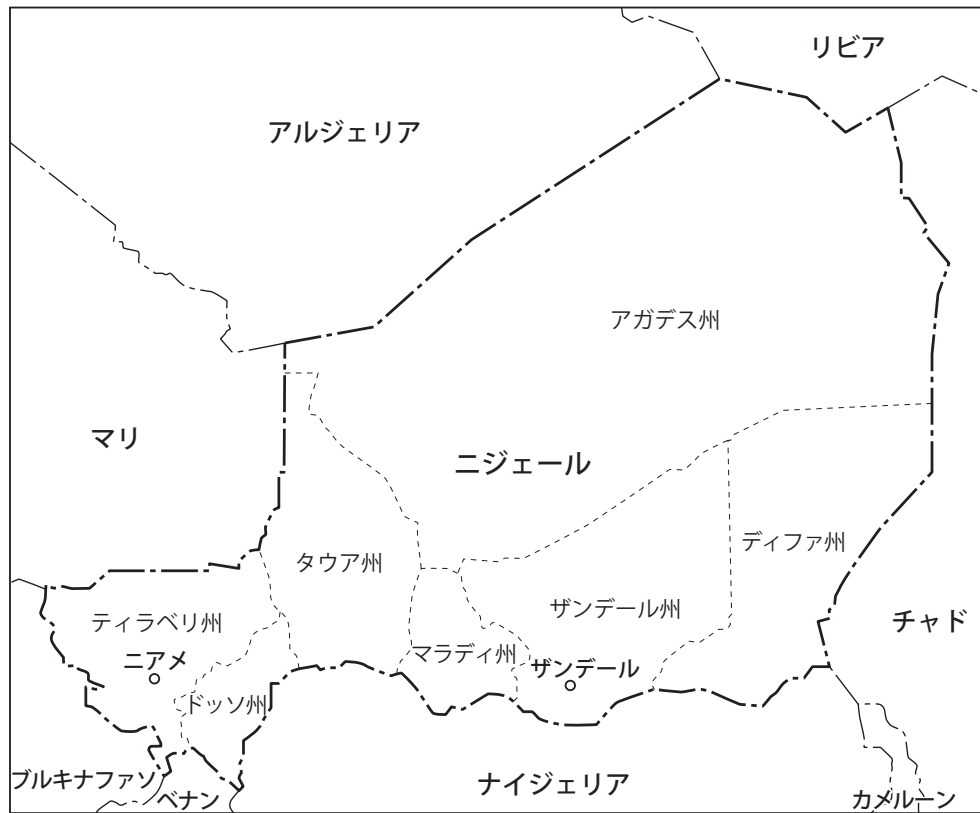


図 1-4 ニジェール国内の各州および周辺国

ことがある (Mortimore and Adams 2001)。また、気候的要因が食料生産の減少に直結し、貧困が起こることが国際社会の関心を集めており (Hermann *et al.* 2005)、1960 年代以降、サヘル地域では様々な援助機関により地域開発支援も行われてきたが、人々の厳しい暮らしの状況は変わらず、貧困といった問題は複雑化しているのが現状である (佐々木 2012)。

## 第2節 ニジェール共和国

ニジェールは北はアルジェリアとリビア、東はチャド、南はナイジェリアとベナン、西はブルキナファソとマリに囲まれた内陸国である (図 1-4)。ニジェールと隣国のナイジェリアは本来は同じ地域を指しているが、旧宗主国を異にする両地域 (ニジェールは旧フランス領、ナイジェリアは旧イギリス領) が別々に独立した際に、現在のように別の国名を指すこととなった。国土は 1,267,000 km<sup>2</sup> であり、日本の約 3.4 倍

であるが、国土の 3 分の 2 はサハラ砂漠に覆われている。ニジェール西部を流れるニジェール川はアフリカ大陸で 3 番目に長く<sup>1</sup>、全長 4,180 km である。ニジェール川はギニア山地から北東に流れてマリに入り、南東に転じてニジェールとナイジェリアを流れてギニア湾に注ぐ。ニジェール川はニジェール西部における重要な水の供給源となっており、流域では灌漑農業や漁労が行われている。また、ニジェール東部にはチャド、カメルーン、ナイジェリアの 4 ケ国にまたがるチャド湖がある。1911 ~ 1926 年までのニジェールの首都はザンデルであったが、ザンデルは水不足が深刻であったことから 1926 年に水資源が豊富なニアメに遷都された。ニジェール国内にはティラベリ、ドッソ、マラディ、タウア、ザンデル、アガデス、ディファアの 7 つの州とニアメ州が存在する (図 1-4)。ニジェール国内には複数の民族が居住しているが、代表的なものはニジェール北部、中南部 (タウア州、マラディ州、ザンデル州) に多く住むハウサ、南西部 (ティラベリ州、ドッソ州)

表 1-2 ニジェールの民族とその言語および分布地域

民族	言語	分布地域
ハウサ	ハウサ	ドッソ州ドゴンドッチ以東
ザルマ	ザルマ	ティラベリ州、ドッソ州
フルベ	フルフルデ	全国
トゥアレグ	タマシェック	アガデス州などの北部地域
カヌリ	カヌリ	ザンデル州、ディファ州
トゥーブー	トゥーブー	アガデス州、ディファ州
アラブ	アラビア	アガデス州、ザンデル州
グルマンチェ	グルマンチェ	ティラベリ州、ブルキナファソ国境近く
ソンガイ	ソンガイ	ティラベリ州、ブルキナファソ国境近く

に多く住むザルマ、ほぼ全域に住むフルベ、北部（アガデス州）に多く住むトゥアレグが挙げられる（詳しくは「2 民族と社会」を参照されたい）。国民の9割近くがイスラーム教を信仰している。主要な産業は、農林漁業、鉱業（ウラン、石油など）で一人あたりのGNIは360ドルである（World Bank 2012）。

## 1 自然と気候

端（1989）は、ニジェールの自然と気候について次のようにまとめた。

南西から北東に伸びるニジェールの国土は複雑な地形を示すが、おおまかにみると北高南低の起伏となっている。中央部から平均標高約800mを越すアイル山地が北に伸び、その東部のチャド湖盆水系と西部のニジェール分水系との分水界をなしている。南東端にはチャド湖があり、南西端をニジェール川が流れ、周辺の南部一帯はあまり高度のないラテライト（紅土）の台地となっている。気候は乾燥型で、中部、北部は砂漠気候、南部はステップあるいはサバンナ気候である。気温は高温で、年平均30度前後であり、年間降水量は最も多い最南部でも600mmを越す程度である。したがって、植生は最南部はスーダン型のサバンナとなるが、北に向かうほど貧弱となり、中部以北は砂漠となる。

## 2 民族と社会

国民の大部分は西部のニジェール川流域と南部のサヘル地域に集中している。2011年の人口は16,068,994人、農村部人口率は82%であった（World Bank 2012）。世界で最も人口が急速に増えている国のひとつであり、2012年の人口増加率は年3.5%（World Bank 2012）と世界で最も高かった。ニジェールには9つの民族が存在し、その民族構成はハウサ（55.4%）、ザルマ（21%）、フルベ（8.5%）、トゥアレグ（9.3%）とソンガイ<sup>2</sup>、カヌリ、アラブ、トゥーブー、グルマンチェなどのその他（6%）となっている（L'Institut National du Niger 2002）。人口の過半数を占めるハウサが最大民族であるが、ハウサは、Atsinawa、Gobiraoua、Bougaje、Dawrawa、Adaraua、Arawa、Barebariという7つの氏族に分けられ、氏族によって頬に彫ったキズの模様や起源が異なる。第2グループはザルマ、トゥアレグ、フルベにより構成され、その他の5民族が少数グループとなっている。フランス植民地であったため公用語はフランス語であるが、ハウサ語が広く普及している（赤阪1989）。各民族はそれぞれの言語を持ち、全域に広がるフルベを除いては民族ごとのおおまかな分布地域がある（表1-2）。アフリカ諸国には政治と民族が密接に結びついている国があるが、ニジェールでは2011年3月に就任したマハマドゥ・イスフ大統領はタウア州イレラ県出身のハウサ、首相のバリギ・ラフィニはアガデス出身のトゥアレグであり、単一の民族によっ

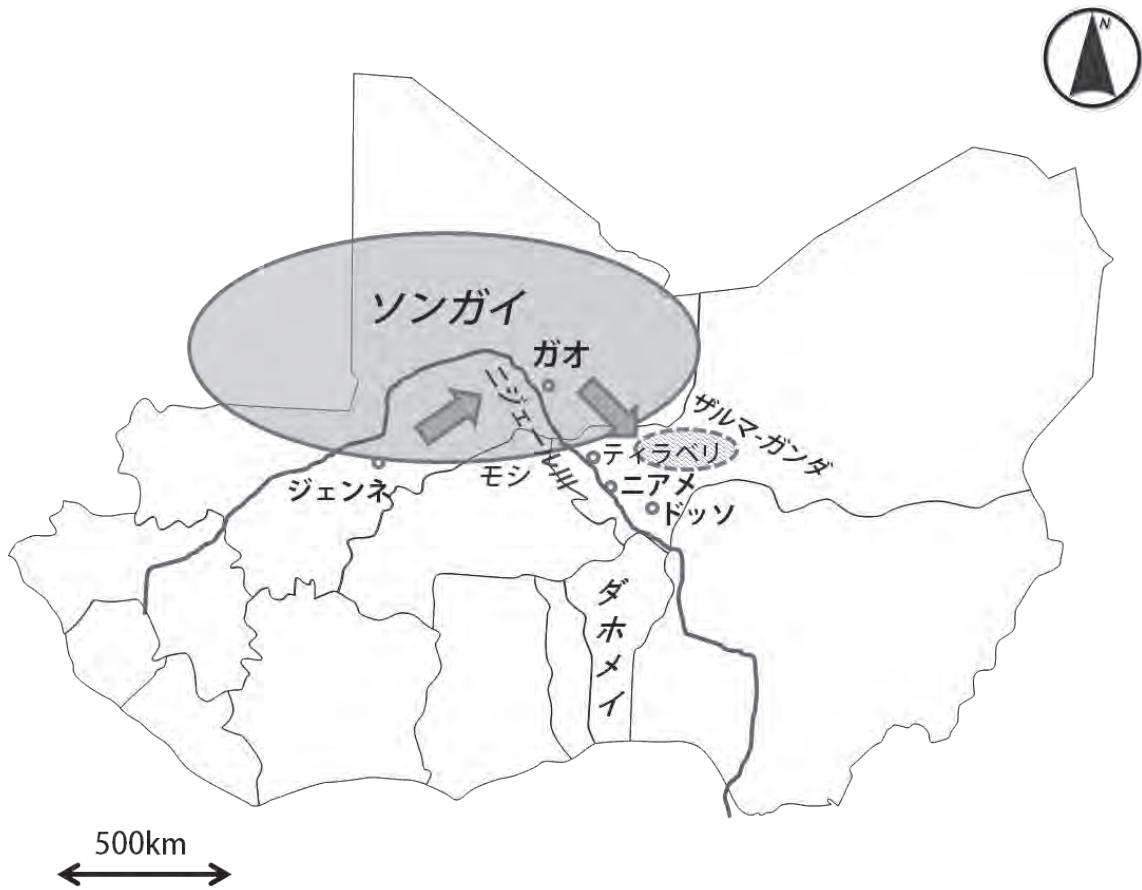


図 1-5 15 世紀のザルマの移動 (Ardant du Picq 1933 を元に著者作成)

て政治が独占されることはない。政党にも民族色は強くなく、各政党に複数民族が存在する。個人レベルでは、世帯内でも世帯構成員により支持政党が異なったりする。異なる民族間の婚姻も多く行われている。

赤阪 (1989) は、ニジェールの民族と社会について次のようにまとめた。

国民の 85 % がイスラームを信仰しており、残りのほとんどは部族固有の伝統宗教を信仰している。サハラ砂漠の南縁に位置するサヘル地域は、サハラ砂漠を横断する隊商交易の南の基地となり、早くからマラディやザンデルなどの町が開けた。10～11世紀にはイスラーム教が入り都市住民は改宗したが、村落部にまでイスラーム教が行き渡ったのは 19 世紀であった。ハウサ、ザルマ、ソンガイ、カヌリなどの農耕民は、土壌が比較的肥沃な南部を占め、トウジンビ

エやモロコシなどの自給作物に加えて換金作物も栽培する。ソンガイはニジェール川で、カヌリはチャド湖での漁労も行う。これらの人々は交易にも盛んに従事し、都市、町、村落を結ぶ市場の発達も進んでいる。特に、ハウサは有能な商人として知られている。もともと遊牧民であったフルベは、今では村落や町に定住する者が多く、遊牧の生活様式を守るものはボロロと呼ばれる。

以下、本書で扱う地域の主な民族 (ザルマ、フルベ、ハウサ) についての概要を述べる。

### 1) ザルマという民族 起源

フランスによる植民地支配 (1896 年) 以前のザルマについては、Ardant du Picq (1933) に詳しい (図 1-5)。それによれば、ザルマの起源はマリ南部に位置するジェンネ (Dyenne) であ



り、その後、ガオ（Gao）へとニジェール川を北上した。当時この地域一帯を支配下に置いていたソンガイ（Songhay）の人々との地で接触し、ソンガイによりザルマ（Dyerma）という名を与えられたという。ダホメイ（Dahomey）王国（現在のベナン共和国）の北部にはボルグ（Borgu）という民族がおり、ソンガイはその北上を阻止するべく、ザルマをザルマ・ガンダ（Djerma-Ganda）へ南下させた。ザルマ・ガンダに至るまで度々フルベとの闘争があったが壊滅的な被害は免れていた。

ソンガイ帝国へのモロッコ軍への侵攻は1591年に始まり、長期にわたる戦争でソンガイ帝国は苦戦を強いられていた。その間、ザルマはこの戦いを静観する態度を見せ、ザルマ・ガンダからさらに南へと移動を始めた。この同時期に、ティラベリ（Tillaberi）とニアメ（Niamey）の間に位置するゴテ（Gote）に西からモシ（Mosi）の侵攻も受けていた。モロッコ軍の侵攻により弱体化していたソンガイは、さらにトゥアレグの攻撃を受け（1682年）、主要都市が次々とトゥアレグの支配下に置かれ、ティラベリからニアメの村々もそれに組み込まれた（1787年）。

他方、ザルマはザルマ・ガンダで安定した独立の治世を築いており、トゥアレグの侵攻も免れていたが、次第にトゥアレグが攻勢を強めると、ザルマはドッソ（Dosso）へと移動を開始した。

ドッソに到着すると、土着の人々の多くが話すソンガイ語を学び先住民との交流を深めていき、次第にその支配を強めていった。その後、フランスの植民地支配が始まるまで、ドッソを中心に支配を拡大し、トゥアレグやフルベ、そしてソンガイとの戦いにも勝利し、その支配を

確実なものにした。

### 言語から見るザルマの生活

上記のように、ザルマとソンガイは歴史的にも密接なつながりを持っている。彼らが話す言語も非常に似通っており、文法や単語など多くの点で共通している。ザルマ語は、ハウサ語やフルベ語と異なり、男性名詞や女性名詞などがなく、文法や発音も非常にシンプルである。語彙が少ないため、同じ単語で複数の意味を持つ名詞が多々存在する。例えば、*hamuni*（ハムニ）は、i) 髪の毛、ii) 粉、iii) ハエと何の脈絡もない複数の意味を持つ単語の一つである。どんな言語にも言えることであるが、これらは前後の文脈から判断できるので、彼らにとって不都合はないようである。

言語の中でも重要なものは一日のうちに幾つもある挨拶である。朝起きてから夜寝るまでの間に、実に6つの挨拶があり使用する時間帯も決められている（表1-3）。これに加えて、対話者の健康を気遣う挨拶（*Mate gahamo?*「元気ですか？」）や対話者の家族や仕事を気遣う挨拶（*Mate ni almiyaro?*「家族は皆元気ですか？」、*Mate goyo?*「仕事の調子はどうですか？」）など、延々と続く。どんなに忙しくとも、この挨拶を省いて本題に入るとはザルマの社会においては有るまじきことであるため、こうした挨拶は幼少期に親や年配者によりしっかりと叩き込まれる。

ザルマの特に村落地域ではほぼ全ての人がいスラームを信仰しているため、イスラーム的な表現（例：「神（アッラー）は偉大である」、「神（アッラー）のご加護がありますように」など）も多い。それらに対する受け答えはザルマ語でも「*Amin*（アーミン）」である。年配者の間で

表 1-3 ザルマ語の挨拶

時間帯	5:00-10:00	10:00-12:00	12:00-15:00	15:00-18:00	18:00-22:00	就寝時
ザルマ語	<i>Kani Baani</i>	<i>Wete Baani</i>	<i>Foy Baani</i>	<i>Wicira Baani</i>	<i>Hire Baani</i>	<i>Iri ma Kani baani</i>
日本語	おはよう	こんにちは		こんばんは		おやすみなさい

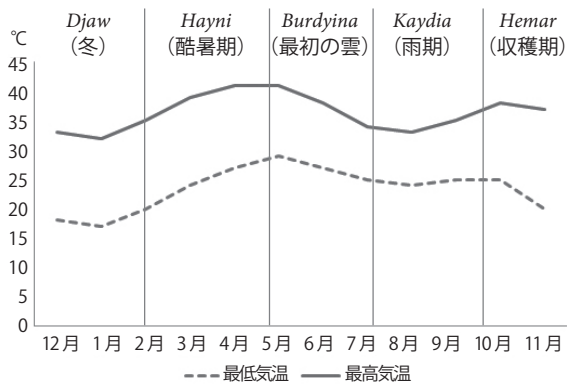


図 1-6 ニアメの気温の変化とザルマの季節

は特に、こうした宗教的な言い回しや、ことわざ、格言も好んで話され、ラジオでも専門チャンネルが設けられているほどである。

季節や月の呼び名（ヒジュラ暦）もそれぞれにあり、季節はその時々々の気候や農事歴によって決められている（図 1-6）。それぞれの季節ごとでもそれにちなんだ挨拶が交わされる。

例えば、冬の寒い季節であれば寒さ（*harugu*）について聞く（*Mate harugu?*「寒さはどうですか？」）のが一般的である。さらにハルマツタン<sup>3</sup>が吹く季節であるため、「砂塵（*kusa*）はどうですか？」という一風変わった挨拶も交わされる。こうした一連の挨拶に対する回答は *Bani samay (wala)*「大丈夫です。」であり、たとえ病気で体調を崩しているときであってもこう答えるよう教えられる。

テレビやラジオといったマスメディアや携帯電話の普及により人々の価値観やコミュニケーションが大きく変貌を遂げつつあるが、それでも都市と比較すると娯楽が乏しい農村地域においては家族や友人間でのお喋り（*fâkârey*）が重要な意味を持っている。日本で言うところの家族団欒の時間は、ザルマ社会では夜のお喋りのひと時であり、この時間に子は親や祖父母から生活に必要なあらゆることを学び、女性たちは日中の家事の忙しさから解放される貴重な時間を惜しむように夜遅くまでお喋りに興じている。お喋りも終わりに近づくと、皆 *Honda fâkârey*「楽しいお喋り（の時間を）ありがとう。」と口々に言い合い、三々五々家路に就く。

## 2) フルベという民族

### 民族の呼称と言語

江口（1989）と嶋田（2008）はフルベの呼称と言語について次のようにまとめた。

フルベは英語でフラニ（*fulani*）、フランス語でプル（*peul*）と呼ばれるが、自称の複数はフルベ（*Fulbe*）、単数はプッコ（*Pillo*）である。他称として、マンデの人々によるフラ（*Fula*）、ハウサによるフラニ（*Fulani*）、アラブによるフェラタ（*Fellata*）などがある。言語の自称はプラール語（*Pulaar*）、フルデ語（*Fulde*）、フルフルデ語（*Fulfulde*）、フルベレー語（*Fulbeere*）などといい、ニジェール・コンゴ派の西アフリカ語郡に属し、多くの名詞クラスを持つ。ヨーロッパでは言語と民族名称が混同されていて、フルベ、フラニ、プル、フルなどと呼ばれる。

### 身体的特徴

嶋田（1992、2008）は、フルベの身体的特徴について次のようにまとめた。

フルベは元来、ニジェール・コルドファン語族に属す他のネグロイド（黒色人種）系諸族とは異なった起源を有すると考えられるような特徴を持っていた。ウシ専業牧畜民であったフルベは、細身の身体など、農耕が中心の黒人系諸族とは異なった身体的特徴を持っているが、さらに、赤色ともいえるような肌の色、細く直毛に近い髪の毛、短頭型の細面の顔など、アラブ・ベルベル系民族に近いコーカサイド（白色人種）系起源を思わせる身体的特徴を有していた。定着したフルベの多くはネグロイド系農耕民諸族との混血をすすめ、その身体的特徴を失いつつあるが、遊牧生活続けたボロロは、今もこうした身体的特徴を維持している場合が多く、定着し混血をすすめた黒色フルベに対して、赤色フルベなどと呼ばれたりもする。

## 移動と分布

嶋田（1992、2008）はまた、フルベの移動と分布について次のようにまとめている。

フルベはサハラ砂漠の南の半乾燥地帯にあたる西アフリカ内陸部全域にわたって分布する民族である。フルベの起源地は、セネガルのセネガル川流域と見られている。フルベは西アフリカ西部地域で民族形成を遂げた後、東へと移動をした。中央スーダンには、13世紀頃に第一波が到着し、15世紀頃に移動は本格化し、17世紀頃にはチャド湖に至るまでの西アフリカのサヘル地域のほぼ全体にわたって分布するに至った。それまではサハラの南に専業牧畜民は存在しておらず、この空白をフルベは西から東へすばやく埋めていった。そして、チャド盆地で、同じ空白地帯を、反対方向から西に移動してきたアラブ系遊牧民のアラブ・ショアとぶつかったため、その移動は止まった。そして、18世紀のフルベの聖戦の開始ともなって、この移動は政治的運動となっていった。このようなフルベの大移動は、アフリカ中南部におけるバンツー民族の大移動に匹敵する、アフリカにおける最大の民族移動のひとつである。フルベの大移動が生じたのは政治的理由もあるが、西アフリカ内陸部はウシ牧畜民の限界地だったという生態学的条件がある。ウシ牧畜民にとって必要なのは豊富な牧草と水である。それゆえ、サハラが牧畜分布の北側限界線であったが、湿潤度が増し、雨が多く降って森が発達するようになって、ウシ牧畜民は困難となる。それはウシ牧畜民の天敵たる害虫類、とくに眠り病（トリパノゾーマ）を伝染するツェツェ蠅の害が増えるためである。西アフリカの場合、かつては年降水量が600 mm以上になると、ツェツェ蠅の分布地となった。したがって、ウシ牧畜は牧草と水の限界である年降水量200 mm以上の地とツェツェ蠅分布が始まる年降水量600 mm

ラインの間でしか可能でなかった。サハラ南縁地帯では降水量が急速に増加するため、このラインの幅はきわめて狭いものでしかなく、西アフリカ内陸部はウシ牧畜の限界地に位置していた。そのなかで、比較的条件に恵まれていたのが、西アフリカ西部のセネガル川流域とニジェール川流域であり、これら乾燥地の河川は乾季と雨季で水量が大きく変化する季節河川である。それゆえ雨季低平地を流れる両河川流域には広大な氾濫原が浅く広がり、乾季には家畜にとってのかっこうの牧草地となった。

## フルベの聖戦とフルベ王国

中村（1989）は、フルベ王国について次のようにまとめた。

フルベ王国は19世紀に西アフリカのナイジェリア北部一帯に領域を拡大、繁栄したイスラーム神政国家であった。フルベはニジェール川やセネガル川の上流域で遊牧を営む民族であったが、しだいに東方に移動し、18世紀にはナイジェリアのハウサランドに定着し、イスラームに帰依した。18世紀後半から北部ハウサランドのゴビル王国で活動が続いていたフルベの熱心なイスラーム指導者ウスマン・ダン・フォディ（1754～1817年）は、ゴビル王のイスラーム信仰を批判し、ハウサ農民とフルベ遊牧民を合体させて聖戦（ジハード）を宣言し、19世紀初めまでにハウサランド全域を平定、1908年にソコトを王都にフルベ王国を建てた（図1-7）。ウスマン・ダン・フォディは東部を息子ムハンマド・ベロに、西部を弟アブド・アッラーフに統治させ、本人は学究生活を送った。フルベ王国はイスラーム法の原理に従って統治され、ムハンマド・ベロ治下で最盛期を迎えたが、19世紀末になると支配力は減退し、ナイジェリア南部に植民地基地を置いて北進してきたイギリス軍の勢力圏下に入り、1900年北部ナイジェ

リア保護領に組み入れられた。

### 3) ハウサという民族

#### 分布地域

松下(1987)は、ハウサとその分布地域について次のようにまとめた。

一般にハウサ語を母語とする人々がハウサと定義される。ハウサは、サブ・サハラアフリカでは最大の成員数を持つ民族であり、部族といった概念を超越した存在である。ハウサは人類学的概念ではないので、身体的な特徴のステレオタイプは意味を持たない。ハウサはニジェール南部(ドッソ州、タウア州、マラディ州、ザンデル州)とナイジェリア北部(ソコト州、ナイジャ州、カノ州、カドゥナ州、バウチー州)を中心に(図1-8)、ガーナ、トーゴ、ベナン、チャドとカメルーン北部にも広がる。このハウサランドではハウサが多数を占め、ハウサ語の単言語使用が一般的な傾向となってい

る。ハウサランドは更にその範囲を広げており、特にナイジェリア中央のジョス高原周辺の中小部族を飲み込みながら、東南方向への伸張が目立つ。今後、フルベの優勢地域であるナイジェリアのアダマワ州やタラバ州もハウサランドに組みこまれる可能性が高い。ハウサランド中核部の周辺には、ハウサ語と他の言語との二重、あるいは多重言語使用地域が広がっている(図1-8)。これらの周辺部ではハウサは大多数を占めてはいないが、ハウサ・イスラーム的な生活様式が支配的である。この周辺部には、19世紀にナイジェリアのソコトを中心におスマン・ダン・フォディオのフルベの聖戦(フルベのジハード)により形成されたフルベ王国の旧範囲、ハウサランド以北のトゥワレグ優勢地域、ニジェール西部のザルマ優勢地域が該当する。ハウサ周辺部を離れると、マリのトンブクトゥ以東の西アフリカ全域に、またサヘルに沿って紅海に至るまで、大小のハウサのコミュニティが他部

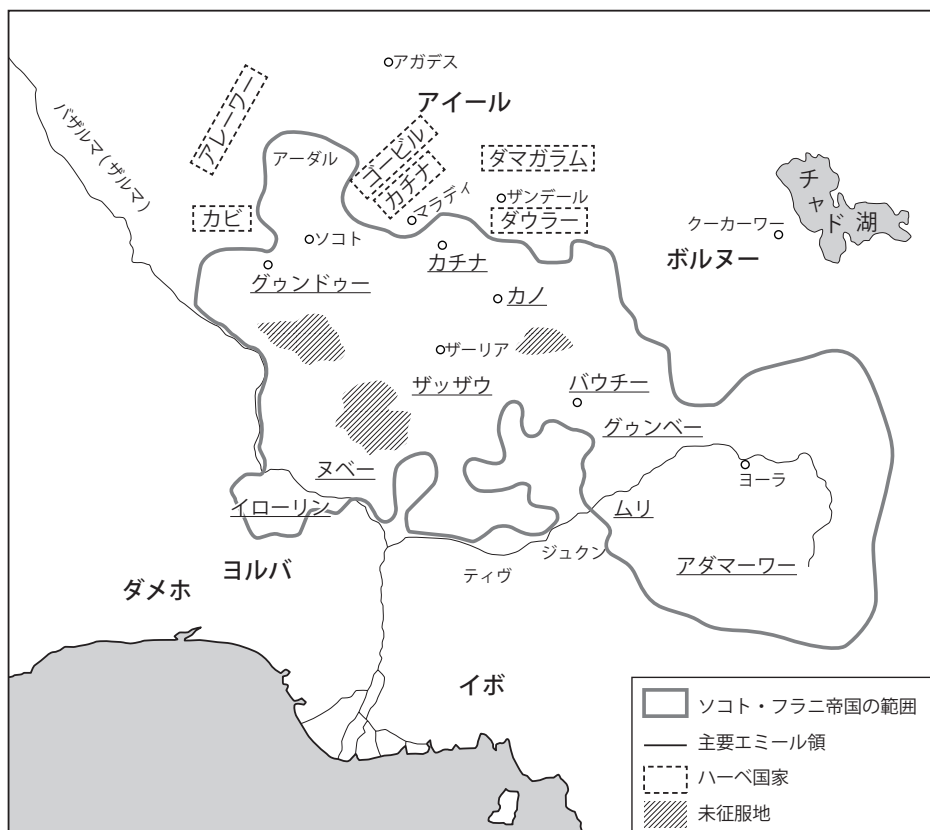


図1-7 19世紀後半のフルベ王国(松下1987を著者改編)

族の中に散在した状態で分布する。コミュニティの内部ではハウサ語が使用されるが、外の社会とのコミュニケーションに際しては、他言語を習うことが下手なハウサも、アラビア語やフランス語を習得する。コミュニティの成員は、現地に定着したハウサと移動途中のハウサに二分され、前者は流通（商業、運輸など）、サービス（床屋、仕立て、屠殺など）に従事し、後者は非熟練労働力を供給する。ハウサランドから東方、イスラームの聖地メッカ（サウジアラビア西部）に向かう巡礼ルートに沿っては、ハウサ商人の経営する巡礼宿がコミュニティの中心となっている。陸路でメッカを目指すイスラーム教徒の巡礼は、ハウサのみならず西アフリカの様々な民族も、このハウサの宿駅を利用し、現地社会からはハウサとみな

され移動を続ける。ギニア湾岸の大都市におけるハウサのコミュニティは、ハウサランドとの長距離通商の基地としての性格を持っている。1960年にハウサランドが位置するニジェールとナイジェリアはフランスとイギリスからそれぞれ独立した。ニジェールでは、ハウサは人口の半数以上を占めるにもかかわらず、支配グループとなりえずソンガイ、ザルマの後塵を拝した。ナイジェリアでは、ハウサとフルベの複合が北ナイジェリア政府と中央政府の主導権を握り、幾多のクーデターを経ている。

### 言語

ハウサの人々が話すハウサ語について松下（1987、1989）は以下のように述べている。



図 1-8 ハウサの分布地域（松下 1987 を著者改編）

ハウサ語はニジェールとナイジェリア北部の人々の母語となっている。ハウサ語は、西南アジアからサヘル以北のアフリカにかけて分布するアフロ・アジア語族のうち、チャド語グループに属しており、同じ語族に属するアラビア語や古代エジプト語とも親縁関係を持っている。また、ハウサ語は、その分布地域の広大さに比して方言間の差異が小さく、すべて方言が相互にコミュニケーションが可能である。これは、ハウサ社会が地域的に孤立することがなく、移動と交易を絶やさなかったためである。ハウサ語には、標準語とみなされる方言は存在しないが、ローマ字で記される文字言語はカノ方言を基礎にしている。母語としてではなく、異なった言語を話す成員間で用いられる言語としてのハウサ語は、さらに通用範囲が広く、ガーナ、トーゴ、ベナン北部、カメルーン北部、チャドに至る地域で使用され、アフリカ大陸における最も有力な言語のひとつとなっている。ナイジェリア北部では、ローマ字により表記されたハウサ語の新聞と雑誌や多くの出版物が発行され、初等教育にも用いられて、事実上の公用語となっている。

## 宗教

ハウサの宗教について、松下（1987）はまた以下のようにまとめている。

ハウサの大部分はイスラーム教徒であるが、イスラーム教に改宗していない一部のハウサが各所に分布している。例えば、ナイジェリアのカノ州南部に居住するグループは、マーグサーワーと呼ばれ、フルベ王国およびその後継であるイギリス領北ナイジェリア政府のイスラーム化の圧力にもかかわらず、伝統的なアミニズム信仰を保持している。ニジェールのマラディ州とザンデル州ではフルベ王国の支配が及ばず、また旧宗主国のフランスが宗教的に中立で

あったため、アンナーと称される非イスラーム教徒のハウサが人口の20～30%を占めている。イスラーム教徒のハウサはそのほとんどがカーディリーヤ派に属している。ハウサにはイスラームの教養、シャリーア法、イスラーム的な生活様式が浸透し、毎年10万人以上のハウサがメッカへ巡礼を行う。ハウサ女性の宗教生活では、イスラーム以前の宗教現象である憑きもの信仰が盛大に行われている。キリスト教徒のハウサは、統計的な数字にあらわれるほどの数にはなっていないのが現状である。

## ハウサ諸国

ハウサ諸国とは、ダウラー、カチナ、カノ、ゴービル、ザッザウ、ラノー、ガリンガバスの7国であり（図1-9）、この他にバンザー・バクワイと呼ばれる庶出7国であるザンファラ、カビ、ヌペー、グワーリー、ヤーウリー、ヤラバー、クワララファーがハウサとある程度の親縁を持つとみなされていた（松下1987）。

井上（1989）は、ハウサ諸国について次のようにまとめた。

ハウサ諸国はニジェール川の東部に広がり興亡した一群のハウサの国家である。ハウサ諸国に関する記録はフルベの聖戦の際に全ての記録が消失したため、ハウサ諸国については明らかとなっていないことが多い。しかし、19世紀末にアラビア語で書かれた「カノ年代記」によって多少の事実が明らかになっている。ハウサ諸国をつくった人々は本来ダウラという伝説的な土地から移住してきたと伝えられ、14世紀までにハウサランドに7～8の国家をつくっていた。伝説では7つの国と言われるが、7は神話上の意味を持つ数字であり、実際の国家数は時期によって異なった。ハウサ諸国は、城壁に囲まれた都市を農耕を行う村落郡が取り囲む都市国家であった。起源においても文化の内容においても共通性をもった国

家だったが、軍事的な連合を組むことはなかった。したがって、ハウサ諸国が周囲の諸国に対しその力を誇示するようなことがなく、むしろ逆に劣勢な地位にあった。例えば、ハウサ諸国は東方のカネム・ボルヌー帝国の朝貢国であったが、1512年には西のソンガイ帝国に支配され朝貢を強いられ、2国に朝貢をしていた。しかし、北アフリカと西アフリカを結ぶ交易によって栄え、16世紀にこの地を訪れたレオ・アフリカヌス（ムーア人の文人・旅行家）は、ハウサ諸国には多数の穀物、織物、工芸品があり、住民は裕福に暮らしていることを「アフリカ誌」に記している。ハウサ諸国は19世紀半ばにはフルベ王国によって完全に征服され、20世紀初頭にはイギリス植民地政府の支配下に入った。

### 3 歴史

現在のニジェールが位置する地域はフランスにより植民地化されるまでは単一の領土に統合されたことはなく、歴史的には、西部はソンガイ帝国、中部はハウサ諸国、東部はカネム・ボ

ルヌー帝国に支配されてきた（赤阪 1989）。

1960年のニジェールの独立前の歴史について大林・中村（1989）は次のようにまとめた。

9世紀頃、西部のニジェール川流域にソンガイ帝国が興り、16世紀前半には北部のアイール山地から南のハウサ諸国までを支配下に置き、同じ頃に膨張期を迎えた東のカネム・ボルヌー帝国と領土を接したが、16世紀末にモロッコ軍に倒された。黒人系部族が住んでいた北部には7～11世紀にトゥワレグ族が浸透し、以後、諸部族の抗争が続いた。

中南部には14世紀頃までにハウサ諸国が形成されたが、19世紀初めフルベ王国のウスマン・ダン・フォディオのジハード（フルベの聖戦）によって滅ぼされた。19世紀末にイギリスとフランスがこの地域に進出し、1890年と1898年の両国の協定でフランスの支配が確定、1904年と1906年の両国の合意により現在の国境がほぼ定まった。フランスは1921年までかかって現地アフリカ人の激しい抵抗を平定し、1922年にニジェール植民地を発足させ、フランス領西アフリ

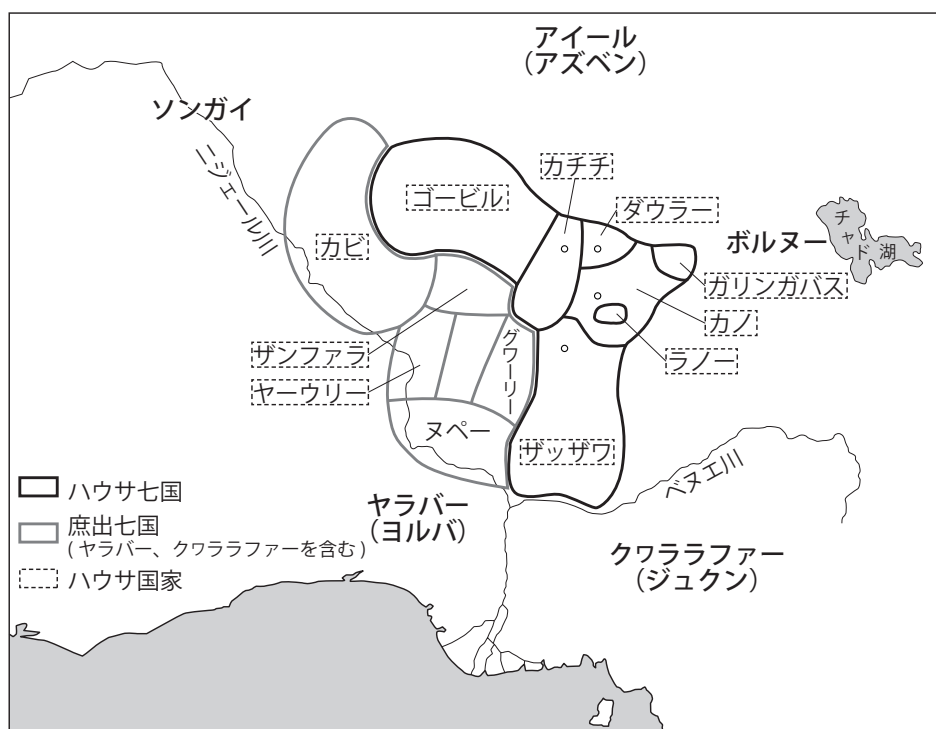


図 1-9 17～18世紀のハウサの分布地域（松下 1987 を著者改編）

カの一部とした。ニジェールの独立運動は1950年代末、後に初代大統領となった親仏派のアマニ・ディオリが指導するアフリカ民主連合ニジェール支部にあたるニジェール進歩党（PPN）と左派ジボ・バカリのニジェール民主同盟（UDN）によって進められた。1957年に自治政府が認められ、自治共和国としてフランス共同体内にとどまるか否かを問うた1958年9月の国民投票では、アマニ・ディオリは賛成を、ジボ・バカリは共同体からの離脱を主張したが、結果は78%が賛成票であった。同年12月の総選挙でPPNが勝利を収め、ニジェールはアマニ・ディオリを首相とし、フランス共同体内の自治共和国となった。アマニ・ディオリは1959年にUDNの後身であるサワバ党を禁止した。1960年8月3日、ニジェールは完全独立を達成、アマニ・ディオリは初代大統領となり、強権的支配体制を敷いた。

#### 4 政治

大林・中村（1989）は1960～1999年までのニジェールの政治について次のようにまとめた（表1-4）。

##### ◆ディオリ・アマニ政権（1960～1974年）

1960年8月3日、ニジェールは旧宗主国フランスから独立し、初代大統領にはディオリ・アマニが就任した。1967～1974年にサヘル地域で起こった干ばつでニジェールは最大の被害国となったが、ディオリ・アマニ政権は腐敗と非効率のため適切な救援を行うことができなかった。

##### ◆セイニ・クンチェ政権（1974～1987年）

1974年4月、参謀総長であったセイニ・クンチェがクーデターを起こし、自ら最高軍事評議会議長に就任し軍政を敷いた。セイニ・クンチェは駐留フランス軍を撤退させ、外交・経済関係の多角化を図るなど、それまでのフランス一辺倒の外交姿勢を改めよ

うとした。しかし、援助の41.7%（1978～1981年）はフランスが占め、フランスへの依存度は大きかった。その後、数度のクーデター未遂事件が起こるなど政情は安定しなかったが、ウラン開発の進展による経済成長に支えられて、セイニ・クンチェは次第に権力基盤を固めた。1987年11月、セイニ・クンチェがパリで病死しそれまで20年余り安定していた政局の混乱を招き、ウランの輸出が滞り経済的収益が見込まれなくなっていた同国の国政に追い打ちをかけた。

##### ◆アリ・サイブ政権（1989～1993年）

1989年9月の国民投票で99%の賛成を得て新憲法が成立し、セイニ・クンチェのいここである国軍参謀長アリ・サイブは同年12月に大統領に選出された。1990年2月、学生のデモに対して警察が弾圧し、死者3名、負傷者多数の事件が発生した。この事件をめぐって社会不安が拡大、民主化運動が高まり、アリ・サイブ大統領は11月に複数政党制の導入を表明した。1991年7月からの国民議会で、憲法の停止と暫定政府の構成が決定され、1992年12月に複数政党制を認める憲法が国民投票による賛成多数で成立した。

##### ◆マハマン・ウスマン政権（1993～1996年）

1993年3月の大統領選挙では、民主社会主義会議（CDS）のマハマン・ウスマンが54.4%の得票率を得て当選した。しかし、構造調整計画への経済財政再建計画に起因する国民の反発を受けて1994年10月に国民議会は解散となり、1995年1月の国民議会議員選挙ではマハマン・ウスマン支持の5政党が40議席、旧唯一政党の社会発展国民運動（MNSD）が中心の野党連合が43議席を獲得したが、与野党拮抗の状況下で政局が混乱し国家運営が停滞した。



表 1-4 ニジェール略史

年 月	略 史
9 世紀頃	ニジェール川流域にソンガイ帝国が興る
14 世紀	ハウサ諸国の形成
16 世紀末	モロッコ軍による侵略
19 世紀め	オスマン・ダン・フォディオによるフルベの聖戦
19 世紀末	フランスとイギリスによる進軍
1922 年	フランス領西アフリカの一部となる
1926 年	ザンデルからニアメに遷都
1958 年 9 月	フランス共同体に加盟
1960 年 8 月	独立、アマニ・ディオリ初代大統領
1962 年	西アフリカ経済通貨同盟 (UEMOA) 設立・加盟
1971 年	ウラン採掘の開始
1973-1974 年	サヘル地域の大干ばつ
1974 年 4 月	セイニ・クンチェによる軍事クーデター、軍事政権樹立
1975 年	西アフリカ諸国経済共同体 (ECOWAS/CEDEAO) 設立・加盟
1984-1985 年	サヘル地域の大干ばつ
1987 年 11 月	セイニ・クンチェ病死
1989 年 12 月	アリ・サイブ大統領選出
1990 年 11 月	複数政党制の導入
1993 年 3 月	マハマン・ウスマン大統領選出
1995 年 4 月	トゥアレグ問題 (1991 年 10 月～) に関する和平合意が成立
1996 年 1 月	イブラヒム・マイナサラ・バレによる軍事クーデター
1996 年 7 月	イブラヒム・マイナサラ・バレ大統領選出
1999 年 4 月	イブラヒム・マイナサラ・バレ大統領暗殺
1999 年 10 月	ママドゥ・タンジャ大統領選出
2000 年 5 月	ニジェール川レテ島のベナン政府施設をニジェール軍が破壊 (国境紛争)
2001 年 2 月	学生デモによりニアメ大学閉鎖
2004 年 12 月	ママドゥ・タンジャ大統領再選
2009 年 8 月	大統領三選を可能とする新憲法が国民投票採択
2010 年 2 月	サル・ジボによる軍事クーデター、タンジャ大統領拘束
2011 年 3 月	マハマドゥ・イスフ大統領選出

大林・中村 (1989)、嶋田 (1992) により作成

2000 年以降のニジェールの政治については外務省「ニジェール共和国」(2011) を参照

◆イブラヒム・マイナサラ・バレ政権 (1996～1999 年)

マハマン・ウスマン政権下で国家運営が停滞する中、1996 年 1 月にイブラヒム・マイナサラ・バレ大佐によるクーデターが勃発した。イブラヒム・マイナサラ・バレは救国委員会を設置し、憲法、政府、議会機能の停止と政党活動の禁止を宣言したが、民

政移管には積極的に取り組み 5 月に新憲法が国民投票の賛成多数で成立した。7 月の大統領選挙では、独立選挙委員会が選挙の延期を要請していたが、イブラヒム・マイナサラ・バレは選挙を強行、52.2 % の得票率を得て現職のマハマン・ウスマンらを破って当選した。

◆ママドゥ・タンジャ政権（2000～2010年）  
 1999年4月、再び軍がクーデターを起こし、イブラヒム・マイナサラ・バレ大統領は大統領警護隊により首都ニアメの空港で銃殺された。警護隊隊長のダウダ・マラム・ワンケ少佐を議長とする軍事政権「国家和解評議会」が実権を掌握し、議会は解散され、憲法も停止された。軍事政権による憲法草案の是非を問う国民投票が7月に行われ、約90%の支持で承認された。新憲法は大統領と首相の権力分担を規定した。10月の大統領選で軍の元幹部でMNSD党員のママドゥ・タンジャが当選した。ママドゥ・タンジャ大統領は12月、MNSD書記長のアマドゥ元首相を首相に任命した。2004年12月に再選を果たしたママドゥ・タンジャ大統領であったが、2009年8月4日に新憲法制定に関する国民投票を行うと表明した。憲法裁判所は違法な決定と判断したが、ママドゥ・タンジャ大統領は憲法裁判所を解散させ、国民投票は予定通り実施され、新憲法は採択された。これにより、2012年の新憲法施行までの3年間、ママドゥ・タンジャ大統領が現行憲法のもとで引き続き政権を率いることになり、更に現行憲法に存在した3選禁止規定が新憲法では削除されたことで、2012年以降もママドゥ・タンジャが大統領職に留まり続ける可能性が出た。

◆マハマドゥ・イスフ政権（2011年～）  
 2010年2月、ママドゥ・タンジャ大統領が3期目を目指し任期延長を強行しようとしたことから国内の緊張が悪化した。再び軍がクーデターを起こし、ママドゥ・タンジャ大統領と閣僚は軍により拘束された。国軍高官が「民主主義復興最高評議会（Conseil Suprême pour la Restauration de la Démocratie: CSRD）」による軍事政権の樹立を宣言し、憲法の停止と政府の解散の宣言、国境の閉鎖、夜間外出の禁止を発令した。このクーデターに対し国際社会は批判を強めた一方で、数千人の市民が軍の兵舎の周囲に集まり「軍万歳」などと叫びながら軍事政権への支持を示した国民もいた。軍出身のサル・ジボが暫定国家元首に就任し、その後2011年3月にマハマドゥ・イスフが新大統領に選ばれた。

5 経済

1971年に開始されたウラン採掘は1978～1981年の間に3.3倍となり、輸出の80%、GDP（国内総生産）比20%（1980年）を占める経済の支柱に成長した。ウラン輸出の好調に支えられ、ニジェール経済は1970年代後半にGDP年平均9.6%増という高い成長率を記録したが、1980年以後ウランの国際価格が低下すると、成長率は1%へと落ち込んだ。なお、近年

表 1-5 ニジェールの主な輸出入相手国（2010年）

輸出相手国	全体に占める割合 (%)	輸入相手国	全体に占める割合 (%)
1 フランス	39	中国	48
2 アメリカ	13	フランス	8
3 日本	10	イギリス	7
4 スイス	10	日本	4

The Observatory of Economic Complexity (2010)

表 1-6 ニジェールの主な輸出入品（2010年）

輸出品	全体に占める割合 (%)	輸入品	全体に占める割合 (%)
1 放射性化学物質	33	石油製品	9
2 ウラン	31	建築資材	9
3 金	10	車輛（物資運送用）	3

The Observatory of Economic Complexity (2010)

の経済成長率は、8.7%（2008年）、-0.9%（2009年）、8.0%（2010年）、2.3%（2011年）（World Bank 2012）である。ウラン鉱山はアイル山地にあり、フランスに本社を置きフランスとドイツを拠点とする世界最大の原子力産業複合企業のアレヴァ（Areva）を中心にウランが採掘され輸出されている。核エネルギーを使用することが現在ほど環境への脅威であるとは考えられていなかった頃までは、ニジェールの経済利益はウラン鉱の輸出に拠るところが大きく、日本もフランスに次いで2番目に多くウランを買い上げていた（関谷 2010）。しかし、1986年4月、チェルノブイリ原子力発電所の事故が発生して世界が核エネルギーの活用に距離を置き始めてから、ニジェールのウラン輸出による収益も激減した（関谷 2010）。なお、日本が輸入するウランの13%がニジェールからの輸入である（電気事業連合会 2007）。ウランの他には、スズ、鉄鉱石、リン鉱石などが採掘されており、近年では中国石油集团公司（CNPC）によりディアファ州で石油採掘が始まった。

ニジェールは農村部人口率が82%（World Bank 2012）であり、これらの農村部住民は主に農耕と牧畜を営んでいる。農林水産は独立直後、GDP比69%（1960年）を占めていたが、

1970年代の干ばつにより大打撃を受けGDP比33%（1980年）に低下した（大林・中村 1989）。近年では、農林水産業のGDP比は40%（2003年）となっている（World Bank 2012）。

ニジェールは内陸国であるため、外国との貿易は主にベナンのコトヌー港経由で行われる。ウラン輸送道路を始め道路建設が進められたが、国内に鉄道はない。2010年の主な輸出相手国はフランス、アメリカ、日本、スイスであり、輸入相手国は中国、フランス、イギリス、日本であった（表 1-5、The Observatory of Economic Complexity 2010）。2010年の主な輸出品は放射性化学物質、ウラン、であり、輸入品は石油製品、建築資材、車輛（物資運送用）であった（表 1-6、The Observatory of Economic Complexity 2010）。

### 第3節 調査村

#### 1 ニジェール南西部村落（ファカラ地区）

調査地としてニジェール南西部に位置するティラベリ州コロ県ファカラ・コミューンを選定した（図 1-10）。ファカラ・コミューン全体の面積は約500km<sup>2</sup>で、大小40の村が点在す

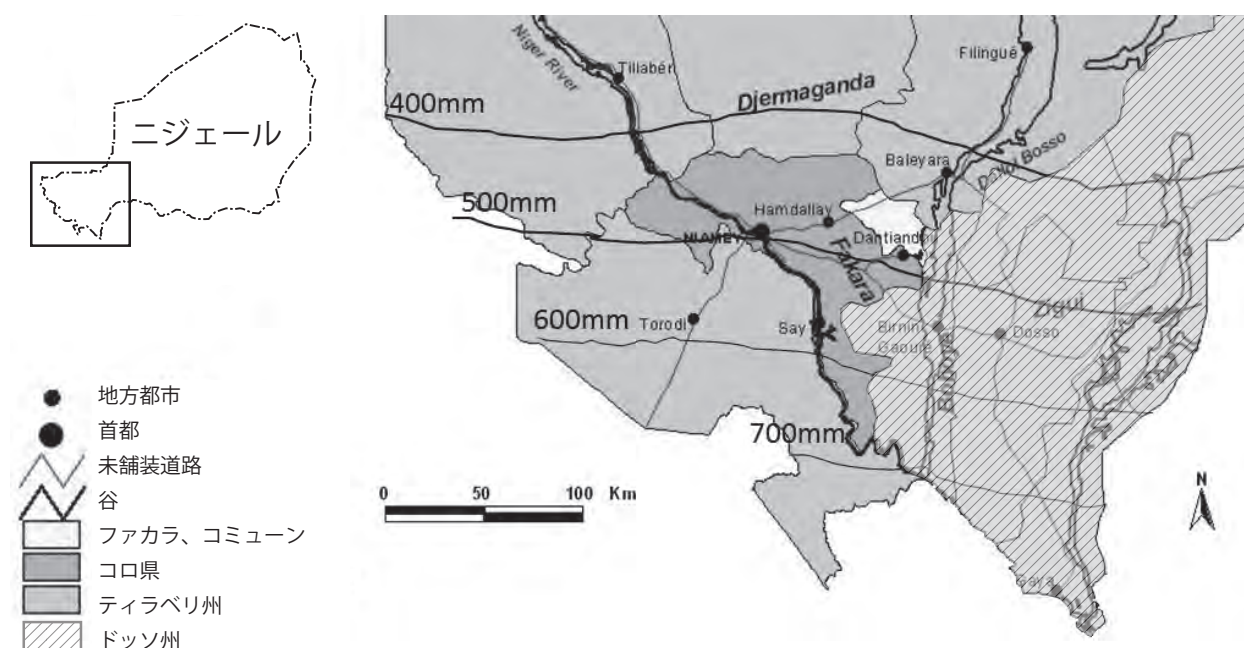


図 1-10 ファカラ地域の位置と年平均降水量の分布（Hiernaux and Ayantunde 2004 を改変）

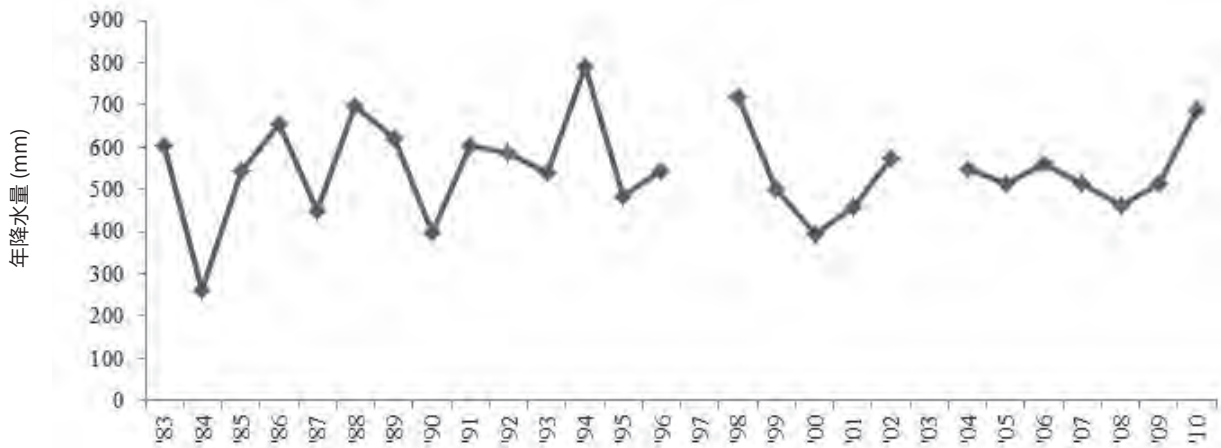


図 1-11 ICRISAT サドレ (Sadoré) 気象ステーションにおける過去 30 年間の降水量の推移

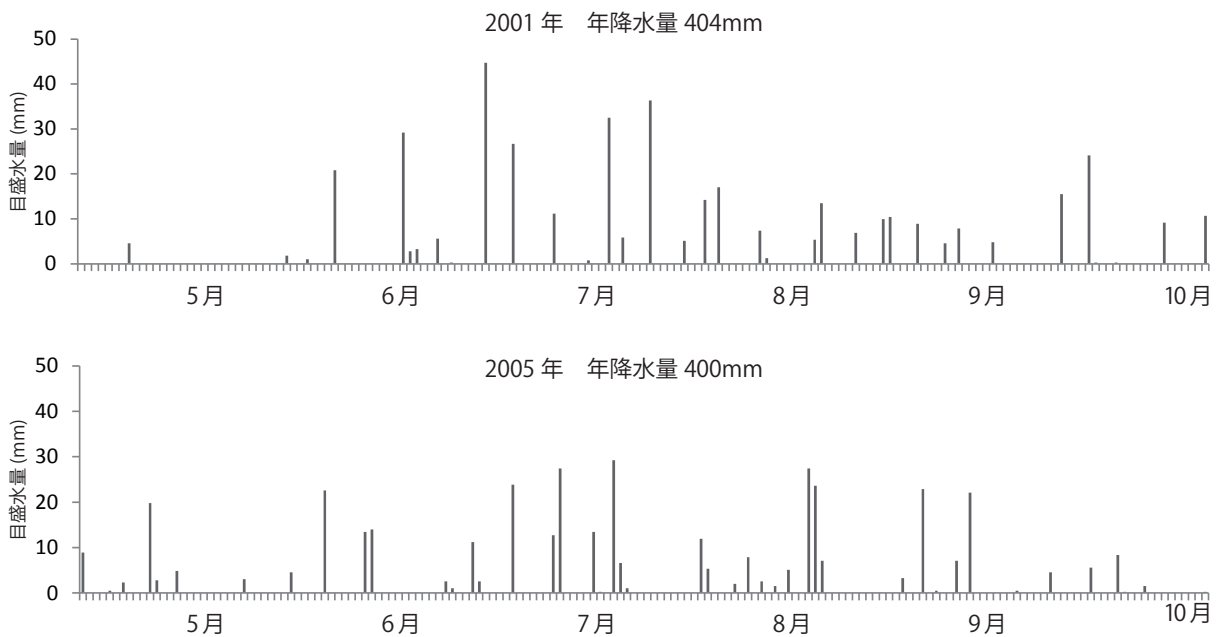


図 1-12 ファカラ地域における 2001 年 (通常年) と 2005 年 (干ばつ年) の日降水量の比較

る。そのうちの 12 ケ村<sup>4</sup>を調査対象とした (以下、調査対象村をまとめてファカラ地区と呼ぶ)。主要構成民族は農耕民族であるザルマと牧畜民族であるフルベ (フラニ、プルとも呼ばれる)<sup>5</sup>で、ザルマが構成員数でフルベを上回る (Hiernaux *et al.* 2009)。ファカラ地域のほぼ全ての住民はイスラーム教徒である。

ファカラ地域は、サヘル地域特有の農業環境条件を備えている。即ち、年平均降水量は 400 ~ 500 mm であり、土壌は砂質で肥沃度が低く、かつ近年の人口増加による耕地面積の拡大と休閑地面積および休閑年数の減少に伴って従来の土壌肥沃度管理システムの機能が低下している

(Hiernaux *et al.* 2009)。雨季は 5 月から 9 月までの 5 ヶ月間であるが、年次変動が大きく、不規則な降水がしばしば深刻な干ばつを引き起こす (図 1-11、1-12)。それを端的に表しているのが、2001 年と 2005 年であり、年間の降水量は両年とも 400 mm 前後で大きな違いは見られないが、その降水分布に違いが見られた (図 1-12)。トウジンビエは、播種後 5 日程で発芽し、品種にもよるが、概ね発芽から約 3 ヶ月で収穫できる。発芽してから開花までの 30 ~ 40 日と、開花後 5 ~ 30 日が最も降水の影響を受けやすく、逆に開花後 30 日を過ぎた結実期はそれほど水分を必要としない (Winkel *et al.* 1997)。2001 年、

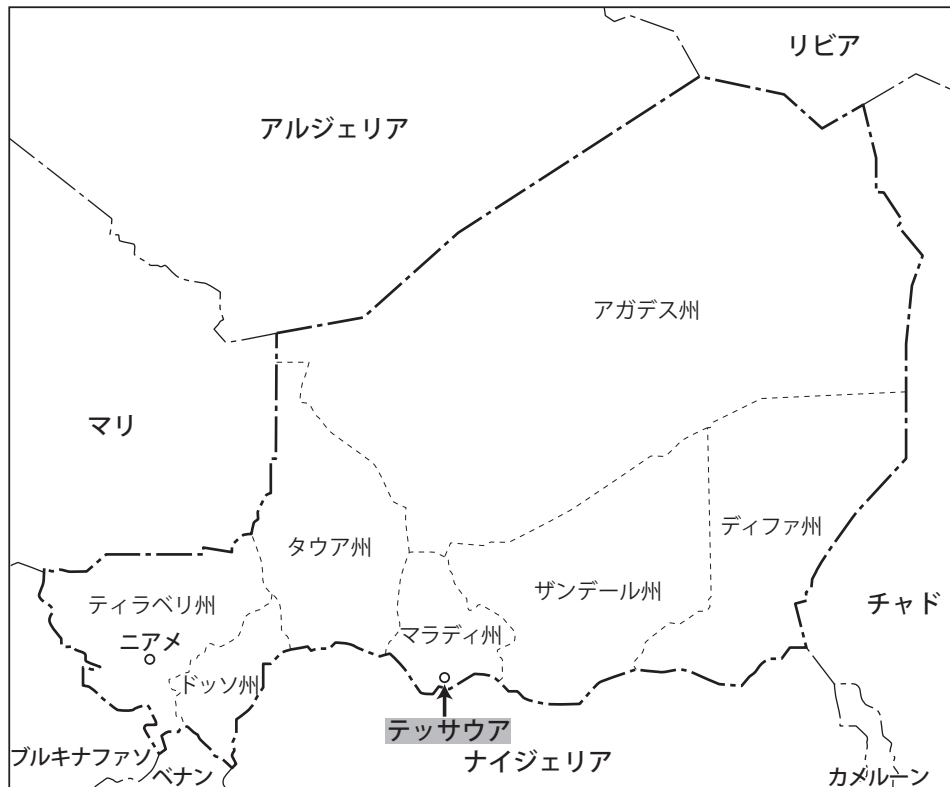


図 1-13 調査地の位置

2005 年共に 6 月の始めに 20 mm 近くの降水量があり、この時期に播種をしたとすれば、その後の 2 ヶ月の降水が重要になる。2001 年は、6 月半ば過ぎに 40 mm を超える降水があり、7 月に半ばにも 30 mm を超した日が 2 日観測されている。一方、干ばつ年にあたる 2005 年は、播種後 1 ヶ月は雨に恵まれず、7 月に入っても 30 mm を辛うじて超える日が 1 日のみで、トウジンビエの生育期に必要な水分量を獲得することができていない。この違いが、干ばつ年と通常年を分ける主要因の一つであり、多くの地域住民が 2005 年を危機の年と認識していた（第 3 章参照）。

## 2 ニジェール中南部村落（テッサウア周辺地区）

調査地には、2009 年 6 月から 2011 年 3 月までの期間、筆者（小村）が JICA（独立行政法人国際協力機構）青年海外協力隊の村落開発普及員（配属先はテッサウア県農業事務所）として活動したニジェール共和国マラディ州テッサウア県テッサウア・コミュニティを選定した（図

1-13）。本調査地を選定した理由は、研究の対象とするサヘル地域に位置していること、ニジェールにおける調査研究は西部の首都ニアメ近郊を調査対象とした研究が多いためニジェール南部という異なる地域においてハウサとフルベの村落を対象とした調査を行いたかったこと、既に本調査地における滞在経験を有していたことにより土地勘と人脈があり現地調査に入

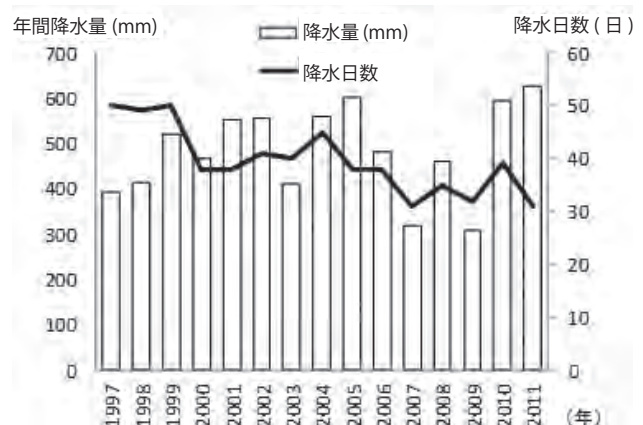


図 1-14 テッサウア・コミュニティの年間降水量と降水日数  
（テッサウア県農業局の観測データより作成）

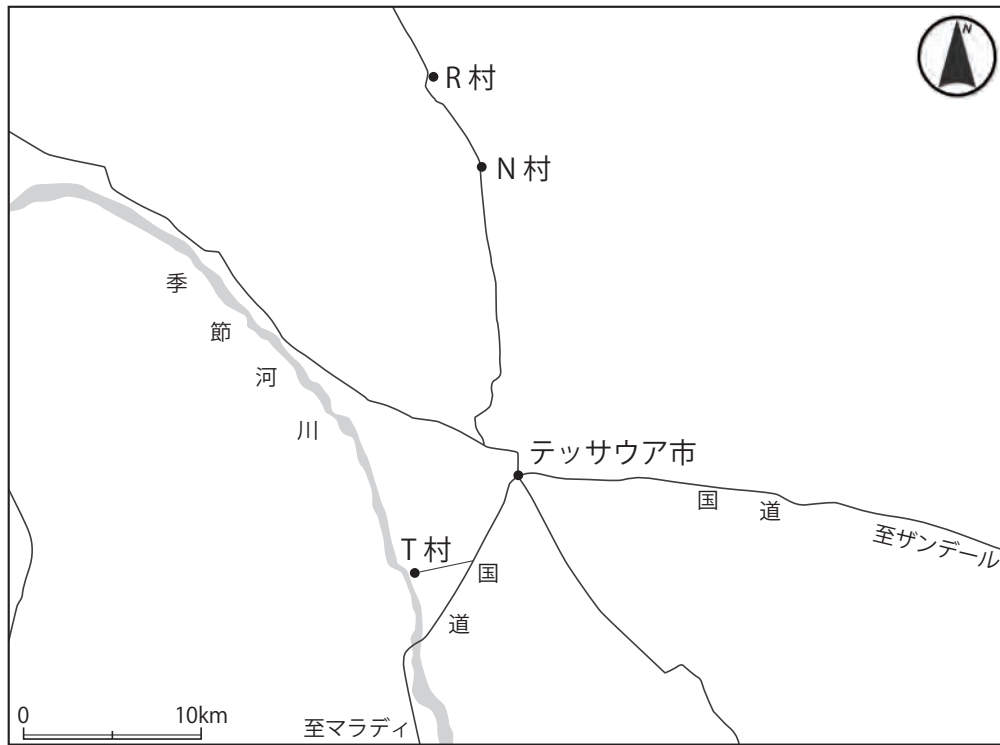


図 1-15 調査村の位置関係

りやすかったことにある。マラディ州には、テッサウア、アギエ、ギダンルンジ、マダルンファ、ダコロ、マヤイの6つ県および州都マラディがあり、テッサウア県には、テッサウア、ボデタ、ウラファン、マイジルギ、コーナ、ハワンダワキ、コルゴンの7つのコミューンがある。また、ニジェールにはカントンと呼ばれる伝統的行政区も並存しており、テッサウア県内には、テッサウア・カントン（管轄コミューン：テッサウア、マイジルギ）、コルゴン・カントン（管轄コミューン：コルゴン、コロゴン、ハワンダワキ、ボデタ、コーナ）、ウラファン・カントン（管轄コミューン：ウラファン）の3つのカントンが存在し、それぞれにカントン長（ハウサ語で *sarki*：王様の意）と呼ばれる世襲制の首長が存在する。調査村が位置する本コミューンは首都ニアメから国道1号線を東に777 kmに進んだ場所に位置し、州都マラディまで約125 km、ナイジェリア国境まで約90 kmの距離にある。本コミューンを含むマラディ州の構成民族はハウサ（87.8%）、フルベ（8.3%）、ザルマ（0.4%）であり（Direction Generale de l'Institut National de

la Statistique Republique du Niger 2011）、ハウサが主要構成民族となっているいわゆるハウサランド<sup>6</sup>である。年による降水量や降水日数の変動が大きく（図1-14）、不規則な降水や少雨が不作の原因となっている。

調査村は、本コミューン内に位置するハウサのタカサバ・マラディ村（以下、T村）とナフタ村（以下、N村）、フルベのルガゲ・ナフタ村（以下、R村）の3村（図1-15）である。ハウサとフルベの暮らしと生業に関する調査（第2章）を行うため、農耕民ハウサと牧畜民フルベという主な生業を異にする2つの民族の村落を調査対象とした。そして、「危機の年」の認識とその対処行動（第3章）におけるハウサの村落間比較を行うため、本コミューンの中心地であるテッサウア市までの距離や道路の舗装状況、季節河川の有無などの立地条件が異なる2つのハウサの村落としてT村とN村（図1-15）を選定した。また、「危機の年」の認識とその対処行動におけるハウサとフルベの民族間比較を行うため、N村に隣接し気象条件や立地条件に大きな違いがないと考えられるR村（図1-15）

を選定した。

テッサウア・コミュニンの中心地であるテッサウア市から、T村は約9 km、N村は約15 kmの場所に位置していた。T村は国道1号線の近くに位置しているため、テッサウア市までの道路は、舗装道路を利用できたが、N村はテッサウア市までの道路が未舗装であった。村人はテッサウア市まで行くには乗り合いのトラックやワゴンを利用し、テッサウア市までの料金はT村からは往復200 Fcfa<sup>7</sup>、N村からは往復400 Fcfaであった。交通費を支払うことが困難な村人の中にはテッサウア市まで徒歩で行く者もいた。一方で、少し裕福な村人の中にはバイクタクシーを利用してテッサウア市まで行く者もあり、料金はT村からは往復1,000 Fcfa、N村からは往復1,500 Fcfaであった。両村は集村形態を取り、村落の周囲には畑が広がっていた。近郊のハウサの村落までの距離はT村は約4 km、N村は約5 kmであった。両村には小学校、case de santéと呼ばれる診療所、イスラームのモスクがあった。N村のモスクは、村落の規模にそぐわないような立派なものがトルコの援助により2011年に建設されていた。両村に電気はなかったが、援助により建設された給水塔があり、村内の数ヶ所に水道が敷設されていた。水資源としては、T村の近くにはナイジェリアから8～11月にかけて流れてくるGoulbin Kabaという名称の季節河川があり、N村の近くには雨季の期間のみに水が溜まる沼があった。T村の人口は1,789人（男性879人、女性910人）、世帯数256であった（Direction Departementale d'aménagement du territoire et du développement 2012）。N村の人口は2,272人（男性1,117人、女性1,155人）、世帯数256であった（Direction Departementale d'aménagement du territoire et du développement 2012）。ニジェールの2011年の人口増加率は3.5%であったが（World Bank 2012）、両村においても人口は年々増えており、人口は10年間で約1.5倍に増えていた。したがって、以前は畑であった村落の周縁部が宅地化され、村落が拡大していく様子が見られた。

両村にはハウサ語で *mai gari* と呼ばれる村長がおり、*mai gari* は年に1度の税金の徴収（徴収後は市役所に納める）、揉め事が起きた際の調停、雨季の家畜の放牧禁止期間の決定などを行っていた。*mai gari* の役職は生きている限り続き、死亡すると *mai gari* の家系から県知事と市長の監視の元、村内の既婚男性による選挙によって後任が選出されていた。*mai gari* は無報酬であるが、村人から徴収した税金（学生を除く15歳以上の男女一人当たり年間700 Fcfa）の10%を受け取ることができていた。

#### 註

- 1 1番はナイル川、2番はコンゴ川である。
- 2 マリの Tombouctou 地方では *Songhoy*（ソングイ）、ニジェールの Tillaberi 地方では *Songhay*（ソングイ）、ザルマの間では *Sonray*（ソンライ）と呼ばれている（Rouch 1954）。
- 3 ハルマッタン（Harmattan）とはサハラ砂漠から南のギニア湾地方に向けて、11月から3月中旬の乾季）に吹く季節風である。熱風ではないが、極めて乾燥しているため湿気を奪い、細かい砂塵を多く含んでいるためこの時期に気管支炎を発症する人が多い。
- 4 12ヶ村とは、ダンチャンドウ村、ボクサイ村、マウレイ・クワラ・ゼーノ村、コデイ村、チゴテギ村、バーニズンブ村、カタンガ村、ズズベリ村、バニ・クベイ村、トンディ・チボロ村を指す。
- 5 ここで用いる民族名は現地での一般的な呼称である。
- 6 ハウサが分布する地域のこと（松下1987）。
- 7 1 Fcfa ≒ 0.16 円（2011年の通貨レート）。





## 第2章 サヘル地域の村落における人々の暮らしと生業

西アフリカ・サヘル地域は、先に見たように、年間降水量が100～500 mmの半乾燥帯に位置し、ここでは不規則な降水のため、干ばつと食料不足が頻発しており、国際的にも大きな問題となっている。そして、近年の人口増加に伴う耕作庄と放牧庄の上昇が土地の疲弊を招き、問題をより深刻にしている。しかし、このような厳しい環境下においても、地域住民は自然環境と適応しながら、それぞれの生業を営んでいる。本章の目的は、こうしたサヘル地域の人々の日々の暮らしや生業を地域ごと、民族ごとに把握し、それらについての考察や比較検討を進めることにより、重層的かつ総合的な地域理解を深めることである。

### 第1節 ニジェール南西部村落における人々の暮らしと生業

#### 1 フィールド調査の概要

2005年4～5月（農耕民ザルマ（以下ザルマ）男性対象）、2007年1～2月（牧畜民フルベ（以下フルベ）男性対象）、2008年1～3月（ザルマ男性対象）、2008年1～3月（ザルマ女性対象）の計7ヶ月間、ファカラ地域において、質問票を用いた聞き取り調査を行った。フルベ38世帯、ザルマ47世帯を貧困層、中間層、富裕層<sup>1</sup>から偏りが出ないように抽出し、世帯の基本情報（家族の構成員数、就学の有無、畑の筆数、栽培作物、主な収入源、有用植物の利用状況、市場利用状況など）と「危機」<sup>2</sup>の原因と被害状況、「危機の年」の対処行動に関する情報を世帯主である男性から収集した。またザルマ女性40人を対象に、上記の質問事項の他に、乾季にこの地域一帯で盛んに行われている野菜栽培についての情報も併せて収集した。調査はすべてこの地域の常用語であるザルマ語を用い、ザルマ語を理解しないフルベについては通訳を介し、補助的にフランス語を用いた。調査にかかっ

た時間は30分～1時間で、調査終了時にお礼としてコーラの実（*C. acuminata*）<sup>3</sup>を2、3個渡した。有用植物の調査については、対象者が知る限りの植物を全て挙げてもらい、それぞれの用途（食用、薬用、建築材、その他）、採取可能な時期と販売の有無を聞いた。学名は三浦（2011）、Etkin and Ross（1982）を参照した。なお「危機の年」について正確な年代を聞き出すことが困難な世帯については、子ども達の年齢などから割り出して年代を特定した。この章では特にそれぞれ地域の暮らしと生業についての結果を元に議論を展開する。

#### 2 人々の暮らしと生業

この地域における人々の主生業は農耕と牧畜であり、ザルマは短い雨季の間に主食であるトウジンビエを中心に一部でモロコシ、それらとの間作でササゲ（*Vigna unguiculata*）などを栽



図2-1 トウジンビエとの間作で栽培されているササゲ

培し、収穫後に自家消費、備蓄、または販売する (Hiernaux and Ayantunde 2004、図 2-1、2-2、2-4)。ザルマの青年および壮年男性(20～45歳)の多くは、収穫が終わるとすぐに近隣のベナン、トーゴ、ガーナ、ナイジェリアといった沿岸諸国へ出稼ぎに行く (Saqualli et al. 2010)。他方、フルベは栽培される作物に害をなさないように雨季には搾乳しないウシを連れて北部へ移動し、収穫後は村に戻り、作物の刈り跡や休耕地で家畜を放牧する (図 2-3)。降水が少なく牧草が十分でない年には、乾季が深まると牧草

を求めてさらに南方へ移動する。近年、ニジェールでは、フルベの置かれている状況は厳しさを増している。かつて放牧地であった土地がザルマにより耕地化され、さらにマリと国境を接する北部においては遊牧民のトゥアレグによる略奪行為により治安が悪化しているため、放牧可能な土地は縮小し続けている (Boutrais 2007)。その結果、フルベの中には定住し農耕を営む者も増え (Ayantunde et al. 2007)、土地への利用圧が増す一因となっている。



図 2-2 収穫され調理されているササゲ



図 2-3 乾季に耕地に放たれた家畜

民族	生業活動	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
農耕民	雨季作												
	耕地整備												
	播種・除草												
	収穫												
	トウジンビエ												
	ササゲ												
農耕民	乾季作												
	農地整備												
	播種・植付												
	収穫(野菜)												
	出稼ぎ労働												
牧畜民	家畜飼養												
	搾乳期(ウシ・ヤギ)												
	放牧移動												
その他	穀物購入 (備蓄食糧不足による)												

図 2-4 サヘル地域における農耕民と牧畜民の年間活動カレンダー (USAID 2005 一部改編)

## 1) フルベの暮らしと生業

### 世帯構成・出稼ぎ・土地利用・家畜飼養状況

表 2-1 はファカラ地域の 9 村（表下・所在地参照）に住むフルベの、同居者数、外国出稼ぎ者数、外国居住者数、送金受取額（年額、Fcf）、土地所有と利用状況、家畜所有状況を表したものである。同居者といっても、大抵が夫婦（妻が複数の場合もある）とその子どもという構成だが、中には世帯主の兄弟や姉妹が同居していたり、世帯主の息子夫婦が同居してい

る場合も見られる。ファカラ地域やこれまで活動してきた村の居住形態をみると、複数の親類家族が集まって一つの区域（ウィンディ：ザルマ語）を構成している場合が多く、ここでいう同居家族も一つ屋根の下に暮らす一世帯を指している場合とウィンディ全体を指している場合があることに注意しなければならない。同居家族が 10 人以上の場合はウィンディを指している可能性が高いと思われる。

次の出稼ぎの項目では外国に出る男性や外国

表 2-1 フルベの世帯構成・出稼ぎ・土地利用・家畜飼養状況（2007）

世帯 No	所在地*	世帯構成			送金受取 (CFA/年)	土地利用状況				家畜所有状況				
		同居者数	国外出稼者数	外国居住者数		耕作中	休閑中	貸出	取得方法**	ウシ(オス)	ウシ(メス)	ヤギ・ヒツジ	ロバ	家禽類
1	Ka	4	1	0	10,000	3	0	0	B3	9	1	23	2	6
2	Tch	5	0	0	15,000	1	0	0	B1	12	4	38	4	30
3	Ka	13	0	0	25,000	2	0	0	B2	5	0	7	0	6
4	Bnz	8	0	0	0	1	0	0	B1	7	2	10	2	23
5	ZS	12	0	2	0	3	0	0	B3	11	4	3	0	32
6	Bnz	8	0	0	2,000	1	0	0	B1	18	2	9	2	54
7	Ko	9	1	0	7,000	2	0	0	B2	7	3	20	1	20
8	Ko	7	0	0	0	1	0	0	B1	23	2	180	0	0
9	Bnz	7	0	1	7,000	1	0	0	B1	15	2	7	1	11
10	Bou	6	0	0	7,000	2	0	0	B2	30	15	40	3	10
11	Tch	9	0	0	7,000	1	0	0	B1	30	10	27	4	50
12	Bnz	8	0	1	7,000	1	0	0	B1	6	2	21	2	21
13	Ka	11	0	0	0	3	0	0	B3	30	4	20	6	50
14	Tch	7	0	1	7,000	2	0	0	B2	3	0	0	2	30
15	ZB	9	0	0	7,000	1	0	0	B1	0	0	4	0	0
16	Bnz	8	0	0	0	1	0	0	B1	95	5	5	1	10
17	Ko	8	0	0	7,000	2	0	0	B2	15	3	15	2	48
18	Bnz	4	0	0	7,000	1	0	0	B1	7	2	10	3	14
19	ZS	10	0	0	7,000	2	0	0	H1, P1	70	23	100	16	64
20	BK	4	0	0	0	1	1	0	B2	0	0	0	0	0
21	TC	7	0	0	7,000	1	0	0	B1	0	0	20	0	10
22	Bnz	7	0	0	0	1	0	0	?	8	2	15	1	20
23	TC	6	0	0	7,000	1	0	0	B1	0	0	10	5	0
24	Ko	11	0	0	7,000	1	0	0	B1	9	2	25	3	20
25	Ko	5	0	0	0	1	0	0	B1	30	2	15	0	15
26	Ko	8	0	2	10,000	1	0	0	B1	29	4	9	2	16
27	Ko	9	2	0	7,000	1	0	0	B1	5	2	0	1	10
28	Ko	12	1	0	12,000	1	0	0	B1	7	2	42	5	36
29	Bou	9	0	1	0	1	0	0	B1	2	2	14	3	20
30	BK	18	0	1	7,000	1	1	0	B2	1	0	155	22	180
31	ZB	11	0	1	0	2	0	0	B2	18	2	10	3	38
32	Ko	7	1	1	50,000	1	0	0	B1	7	2	9	1	11
33	Bnz	9	0	0	7,000	1	0	0	B1	16	5	24	4	1
34	Tch	7	0	0	7,000	1	0	0	B1	5	1	2	0	0
35	Ko	10	0	0	7,000	3	0	0	P3	3	1	33	4	20
36	Tch	12	0	0	0	1	0	0	B1	16	3	2	4	60
37	Tch	8	0	0	0	3	0	0	B3	10	4	53	7	40
38	Ko	8	0	2	0	2	0	0	B2	4	2	5	2	5
平均		8.4	0.2	0.3	6578.9	1.5	0.1	0.0		14.8	3.2	25.8	3.1	25.8

\* 所在地：Bani Koube (BK), Bani Zoumbou (Bnz), Boundou (Bou), Katanga (Ka), Kodey (Ko), Tchigo Tegui (Tch), Tondi Ciboro (TC), Zouzou Beri (ZB), Zouzou Samey (ZS)

\*\* 土地取得：相続 (H)、借受 (B)、贈与 (D)、購入 (P)、村からの割り当て (A)

居住者の数がザルマ（表2-4）と比べると明らかに少ないことがわかる。これは、牧畜を主な生業とするフルベ男性にとって家畜を維持することが年間を通じての仕事であるためだと推測することができる。先に見たサヘル地域年間活動カレンダー（図2-4）にもあったように、一年を通して家畜群（特にウシ）を放牧させる周回ルートができていたため、身一つで出稼ぎに出るザルマとは大きく事情が異なってくる。

次に農耕地の利用状況を見ると、ほとんどの耕地を借りていることが分かる。耕地の数もザルマと比べると少なく、ほぼ全ての耕地は休閑されることなく継続して耕作されている。一方、家畜所有状況はザルマに比べれば遥かにその数を上回っている。特に、ヒツジやヤギといった小家畜数が100頭を超える世帯も見られ、近年の大飢饉の影響で大量のウシを失う、あるいは破格の値段で売却しなければならないリスクを回避するために、ヒツジやヤギなどの小家畜へ移行している潮流が窺える。ニワトリやホロホロチョウといった家禽類を多数所有する世帯も、ザルマに比べると目につく。ザルマ世帯への聞き取り調査の際には、家禽類が毎年のように地域一帯で流行る感染症で大量死するケースが複数の村で聞かれたが、村落から比較的離れた遠隔地に居住するフルベにまで、この被害が及んでいない可能性も考えられた。

またフルベの女性は、乳牛やヤギから得られる乳やそれを加工してできるヨーグルトやバターを村や市場で売ることによって小額ではあるが定期的に収入を得ることができる。これはザルマの女性には見られない現金収入創出活動であった。

### 栽培作物および有用植物の利用状況

表2-2は、先の表2-1と同じフルベ男性に対し栽培作物と販売作物、有用植物の採集場所やその販売の有無について聞き取りしたものをまとめたものである。栽培作物数は $4 \pm 3$  ( $n=38$ )で、ザルマと比較すると品目数は少ない。主な栽培作物はトウジンビエ、ササゲ、ハイビスカ

ス、ソルガムなどで、消費用とともに市場などで販売もされている。また、ザルマに耕地を借りているようなフルベは、収穫量の何割かを使用料として支払う場合もある。栽培作物以外の有用植物で、有用植物として認識されているのは全120品目、うち販売対象となっているのは51品目であり、各世帯が利用しているのは $18 \pm 10$ 品目で、その内販売対象となるのは $10 \pm 8$ 品目であった。有用植物の採取場所のうち、叢林や草原が97品目（内販売対象41品目）で全体の80.8%（販売対象品目では80.4%）を占めた。これらのデータを後に見るザルマのものと比較すると、フルベの認識する有用植物品目数はザルマの倍以上と遥かに多い。にもかかわらず、販売対象品目はその半数で、各世帯の利用品目はザルマのそれを下回っている。これらの理由として考えられるのは、家畜とともに移動する居住範囲の広さや、家畜飼料として多くの有用植物品目を認識しているということである。かたやザルマ男性は、乾季に出稼ぎで近隣諸国へ移住はするものの、基本的には居住村およびその周辺と農耕地が生活圏となり、また家畜飼料として有用植物を認識する必要性はフルベに比べれば低いと考えられる。そのためにフルベと比較するとその品目は限られたものになっていると推測できる。しかし、野草や木の実を摂取、販売するまで日々の生活に窮していないためか、その利用頻度は非常に低い（有用植物の利用については「3 有用植物が人々の暮らしに果たす役割」を参照）。

### 市場の利用状況

表2-3はフルベ男性の市場の利用状況をまとめたものの一部である。利用市場の $3 \pm 3$  ( $n=38$ )である。各村の定期市は大抵週1回、その地域で曜日が重ならないように開かれる。表2-3を見ると、フルベの多くが複数の市場をかなりの頻度で利用していることがわかる。販売品目の殆どは家畜や牛乳（あるいはヤギ乳）やその加工品（バターなど）である。興味深いのは、乳製品を販売するのは必ず女性であるため、市場

にも夫婦で行くことである。これはザルマには見られないことである。また、家禽類を売る際にも妻か子どもがその責任を負うことも聞き取り調査結果から明らかになったことである。このように市場においても夫婦間、家族間の役割分担が明確に決められている。購入品目は主に生活必需品や食料、調味料といったものであるが、中には家畜を購入する世帯もみられる。この結

果から、必ずしも毎週のように家畜を売買しているとは言えないが、家畜販売を主な収入源としているフルベにとってできるだけ多くの市場に足を運ぶことが家畜の価格変動や仲間内から得られる情報収集において重要になってくるのだろう。

表 2-2 フルベの栽培作物および有用植物の利用と販売状況（2007）

世帯 No	所在地*	栽培作物数と販売数		有用植物の採集場所**、品目および販売の有無								合計	
		作物数	販売	叢林や草原		台地		休閑地		季節湿地		品目数	販売
1	Ka	6	6	20	7	6	1	0	0	0	0	26	8
2	Tch	3	3	25	15	2	1	0	0	0	0	27	16
3	Ka	5	5	24	11	1	0	0	0	0	0	25	11
4	Bnz	4	4	13	6	3	2	0	0	0	0	16	8
5	ZS	5	5	9	5	0	0	0	0	1	0	10	5
6	Bnz	5	5	24	7	3	1	0	0	0	0	27	8
7	Ko	2	2	13	8	2	2	0	0	0	0	15	10
8	Ko	5	5	15	7	2	1	3	3	0	0	20	11
9	Bnz	5	5	15	12	1	0	0	0	0	0	16	12
10	Bou	4	4	20	7	3	1	0	0	0	0	23	8
11	Tch	4	4	18	13	1	0	0	0	0	0	19	13
12	Bnz	3	3	15	11	0	0	0	0	0	0	15	11
13	Ka	4	4	18	6	2	1	0	0	0	0	20	7
14	Tch	4	4	18	11	3	1	0	0	0	0	21	12
15	ZB	3	3	10	7	1	1	0	0	0	0	11	8
16	Bnz	4	4										
17	Ko	6	6	17	10	1	1	0	0	0	0	18	11
18	Bnz	3	3	15	11	1	1	0	0	0	0	16	12
19	ZS	5	5	13	10	1	0	0	0	0	0	14	10
20	BK	3	3	14	6	5	2	0	0	0	0	19	8
21	TC	4	4	11	6	3	1	0	0	0	0	14	7
22	Bnz	7	7	11	5	2	0	0	0	0	0	13	5
23	TC	2	2	13	8	1	1	0	0	0	0	14	9
24	Ko	2	2	10	8	1	0	0	0	0	0	11	8
25	Ko	7	7	16	6	1	1	0	0	0	0	17	7
26	Ko	2	2	9	8	0	0	0	0	0	0	9	8
27	Ko	2	2	11	7	1	1	0	0	0	0	12	8
28	Ko	5	5	23	13	5	1	0	0	0	0	28	14
29	Bou	5	5	18	14	3	2	0	0	0	0	21	14
30	BK	7	7	12	1	1	1	0	0	0	0	13	2
31	ZB	3	3	8	4	2	1	0	0	0	0	10	5
32	Ko	5	5	19	17	1	1	0	0	0	0	20	18
33	Bnz	4	4	13	11	4	2	0	0	0	0	17	13
34	Tch	2	2	12	4	1	1	0	0	0	0	13	5
35	Ko	3	3	13	9	1	0	0	0	0	0	14	9
36	Tch	6	6	23	12	4	2	0	0	0	0	27	14
37	Tch	2	2	13	8	3	1	0	0	0	0	16	9
38	Ko	5	5	21	14	2	2	0	0	0	0	23	16
平均		4.1	4.1	15.5	8.8	2.0	0.9	0.1	0.1	0.0	0.0	17.6	9.7

\* 所在地：Bani Koube (BK), Bani Zoumbou (Bnz), Boundou (Bou), Katanga (Ka), Kodey (Ko), Tchigo Tegui (Tch), Tondi Ciboro (TC), Zouzou Beri (ZB), Zouzou Samey (ZS)

\*\* 叢林や草原：灌木や草本が混交する長期休閑地、台地：固結プリンサイトが地表近くにあり灌木と裸地が入り組む土地、休閑地：草本植生を主体とする短期休閑地、季節湿地：雨季に一時的に湛水するか湿った状態にある土地

2) ザルマの暮らしと生業

世帯構成・出稼ぎ・土地利用・家畜飼養状況

表2-4は表2-1と同じ項目をファカラ地域5村(表下、所在地参照)のザルマに聞いたものである。フルベの中では数件しか見られなかった外国への出稼ぎがここでは多くの世帯で複数名見られるのが顕著な違いの一つである。主に

外国に出稼ぎに行くのは20代から30代の青年男性で、ガーナやトーゴ、コートジボアールなどのギニア湾沿岸諸国へ出稼ぎに行くケースが大半を占める。首都のニアメや近隣の町へ出稼ぎに行く場合もあるがそれらは少数に留まっている。年間の送金額も、フルベのそれとは大きく異なり、10万 Fcfa を優に超えてくる世帯が

表2-3 フルベ男性の市場利用状況(2007)

世帯No	居住地*	利用市場場所*	頻度	販売品目	購入品目	世帯No	居住地*	利用市場場所*	頻度	販売品目	購入品目				
1	Ka	Yeda	毎週	家畜	生活必需品	13	Ka	Yeda	月3	家畜	食料・調味料				
			月1	家畜	生活必需品				Dan	年4	家畜	食料・調味料			
			月1	家畜	生活必需品							Bnz	年2	家畜	調味料
			月1	家畜	食料・調味料										
			毎週	バター	調味料				14	Tch	Dan	毎週	家畜・牛乳	食料・調味料	
毎週	牛乳・バター	食料・調味料	Tch	毎週	牛乳	食料・調味料									
2	Tch	Tch				毎週	牛乳・バター	食料・調味料	15	ZB	Dan	月1	家畜	食料・調味料	
			月2	家畜・牛乳・バター	食料・調味料	ZS	月3	家畜				食料・調味料			
			月1	家畜・牛乳・バター	食料・調味料							ZB	月2	家畜	食料・調味料
3	Ka	Yeda	毎週	家畜	生活必需品	16	Bnz	Bnz	毎週	家畜・牛乳	食料・調味料				
			月2	家畜	家畜				Wan	毎週	家畜・バター	食料・調味料			
			月2	家畜	生活必需品							Dan	月2	家畜	生活必需品
4	Bnz	Dan	毎週	家畜	調味料	17	Ko	Dan	月2	家畜・家禽類	食料・調味料				
			毎週	家畜	調味料				Kou	毎週	家畜・家禽類	食料			
			毎週	家畜	調味料							Ni	毎週	家畜・家禽類	食料・調味料
5	ZS	Yeda	月2	家畜・バター	生活必需品	18	Bnz	N'Ga	年1	家畜	生活必需品				
			月1	家畜	生活必需品				Wan	月1	家畜・バター	食料・調味料			
			毎週		調味料							Ham	月1	家畜	食料・調味料
6	Bnz	Bnz	毎週	家畜	生活必需品	19	ZS	Kou	毎週	菜・家畜	食料・調味料				
			月1	家畜	生活必需品				Yeda	月1	菜・家畜	菜			
			月2	家畜	家畜							Dan	毎週	菜・家畜	菜・食料・家畜
7	Ko	Dan	月3		生活必需品	20	BK	Bnz	月3	縄	食料・調味料				
			毎週		生活必需品				Dan	年2	縄	食料・調味料			
			年1		家畜							Yeda	月2	縄	食料・調味料
8	Ko	Dan	月2	家畜	生活必需品	21	Tch	Dan	月1	家畜	食料・調味料				
			月1	家畜	調味料				Wan	月1	家畜	食料・調味料			
			月1	家畜	調味料							Bnz	月2	家畜	食料・調味料
			毎週	家畜	調味料				Wan	月2	家畜				食料・調味料
			毎週	家畜・バター	衣服・調味料							Ball	年1	家畜	生活必需品
9	Bnz	Wan	毎週	家畜・バター	衣服・調味料	22	Bnz	Dan	月2	家畜	食料・調味料				
			毎週	家畜・バター	衣服・調味料				Wan	月2	家畜	食料・調味料			
			毎週	家畜	調味料							Ball	年1	家畜	生活必需品
10	Bou	Dan	月3	家畜	食料・調味料	23	Tch	Dan	月2	家畜	食料・調味料				
			月3	家畜	食料・調味料				Wan	月2	家畜	食料・調味料			
			月3	家畜	食料・調味料							Ball	年1	家畜	調味料
11	Tch	Yeda	毎週	家畜・牛乳	生活必需品	24	Ko	Kou	月3	家畜・バター	食料・調味料				
			月2	家畜・牛乳	生活必需品				Ni	月1	家畜・バター	食料・調味料			
			毎週	牛乳	食料・調味料							Dan	月2	家畜・バター	食料・調味料
12	Bnz	Bnz	未回答	家畜・バター	食料・調味料	25	Bnz	N'Ga	月1	家畜	食料				
			毎週	家畜	食料・調味料				Dan	月1	家畜	食料			

\* 居住地：Ballayara (Ball), Bani Zoumbou (Bnz), Dantiandou (Dan), Gaddo (Gad), Hamdallaye (Ham), Katanga (Ka), Kodey (Ko), Kouringol (Kou), Niambere (Ni), N'Gaoga (N'G), Ouagadougou (Ou), Tchigo Tegui (Tch), Wankama (Wan), Zouzou Beri (ZB), Zouzou Samey (ZS)

多くみられる。出稼ぎによる送金が各世帯収入に占める具体的な割合については一概には言えないが、地方の貧困層の平均年収 105,825 Fcfa (USAID 2005) であることを考えると、ザルマ世帯にとって非常に大きなウエイトを占めることは確かである。

次の土地所有の項目に目を移すと、ここでもフルベとの相違点が多数浮かび上がってくる。

まず耕地数自体がフルベに比べて多く、平均して3つの耕地を使用している（フルベ平均耕地数 1.5）。しかし、休閒地はフルベと同様少なく、現在のサヘル地域の農耕地の厳しい現実がこの数字に表れているといえる。土地の貸し出しをしている世帯も数件みられ、耕地のほとんどが相続によるものであることもフルベとの大きな違いの一つである。さらに家畜所有の項をみる

表 2-4 ザルマの世帯構成・出稼ぎ・土地利用・家畜飼養状況（2005、2008\*）

世帯 No	所在地**	同居者数	国外出稼者数	外国居住者数	送金受取 (CFA/年)	土地所有と利用の状況				家畜所有状況				
						耕作中	休閒中	貸出	取得方法***	ウシ(オス)	ウシ(メス)	ヤギ・ヒツジ	ロバ	家禽類
1	Ko	9	1	0	50,000	3	0	0	H3	0	0	4	0	0
2	Ko	19	2	1	146,000	6	0	0	H4, B2	1	0	15	0	0
3	Ko	10	2	0	100,000	2	1	5	H8	0	0	0	0	0
4	Tch	10	2	2	308,000	2	0	3	H5	2	1	1	0	0
5	Tch	23	3	2	90,000	4	0	0	H4	9	1	12	0	59
6	Bnz	10	0	0	0	3	0	3	H6	1	0	10	0	1
7	Tch	16	1	1	35,000	6	0	2	H7, B1	2	0	6	0	9
8	Tch	10	1	0	50,000	3	0	0	H3	0	0	10	0	5
9	Ko	7	0	0	0	3	0	0	H1, D2					
10	Bnz	12	0	0	0	2	0	0	P2	0	0	5	0	20
11	Bnz	9	0	0	0	3	0	0	H2, P1	4	1	5	0	6
12	Ko	8	2	0	175,000	5	0	0	H5, B1	2	0	3	0	2
13	Tch	9	0	0	0	3	0	2	H4, P1	2	0	0	0	0
14	Tch	9	0	1	690,000	5	0	3	H8, B1	2	0	3	0	0
15	Tch	8	1	0	50,000	2	0	0	H1, P1	2	0	2	0	0
16	Bnz	8	2	0	150,000	3	0	0	H1, P2	0	0	7	0	1
17	Bnz	8	0	0	0	2	0	0	P2	0	0	2	0	3
18	Bnz	8	2	0	150,000	4	1	0	H5, B1	0	0	3	0	0
19	Ko	9	0	1	0	2	0	0	H2					
20	Ko	8	0	0	0	1	2	0	H3	1	0	6	0	4
21	Ko	5	1	0	140,000	3	0	0	H1, P2	4	0	5	0	5
22	Tch	9	0	0	0	2	0	1	H3	1	0	7	0	7
23	Tch	3	0	0	0	2	0	3	H5	0	0	2	0	0
24	Ko	7	0	0	0	1	0	0	A1	0	0	0	1	0
25	Ko	9	0	0	0	3	0	0	H3	3	0	13	0	1
26	Bo	17	5	5	102,500	5	0	0	H1, B4	0	0	0	0	27
27	Bo	13	1	1	25,000	3	0	0	H3	3	0	0	0	6
28	Bo	7	0	0	0	2	0	0	H2	2	0	0	0	0
29	Bo	10	1	1	0	5	2	0	H5	0	0	0	0	2
30	Bo	7	1	1	50,000	4	0	0	B4	2	0	1	0	4
31	Bo	10	3	3	105,000	5	0	0	H4, B1	4	0	1	0	0
32	Bo	10	0	0	15,000	3	0	0	B3	0	0	0	0	0
33	MKZ	8	0	0	0	3	0	0	H3	0	0	0	0	2
34	MKZ	10	0	0	0	5	0	0	H5	0	0	0	0	3
35	MKZ	9	0	0	0	3	1	1	H3	0	0	0	0	0
36	MKZ	5	0	0	0	2	0	1	H2	0	0	0	0	0
37	MKZ	5	0	0	0	1	0	0	B1	0	0	0	0	2
38	MKZ	8	0	0	0	3	1	0	H3	0	0	0	1	1
平均		9.5	0.8	0.5	63986.8	3.1	0.2	0.6		1.3	0.1	3.4	0.1	4.7

\* ボクサイ (Boksay) 村およびマウレイ・クワラ・ゼーノ (Maourey Kouara Zeno) 村のデータは 2008 年 3 月の調査にて取得。

\*\* 所在地：Bani Zoumbou (Bnz), Boksay (Bo), Kodey (Ko), Maourey Kouara Zeno (MKZ), Tchigo Tegui (Tch)

\*\*\* 土地取得：相続 (H)、借受 (B)、贈与 (D)、購入 (P)、村からの割り当て (A)

と、その違いは歴然としている。全ての家畜においてその絶対数は圧倒的に少ないが、特に顕著なのはウシで所有数もさることながら、所有世帯数自体も非常に少ない。ヒツジ、ヤギなど複数所有する世帯は6割近くで、多くは女性が所有、または管理する場合が多い。家禽類については、先にも触れたとおり多くの世帯が密集し、敷地内で放し飼いにしている環境下ではフルベに比べても病気や死に至るリスクは高いといえる。

栽培作物および有用植物の利用状況

表2-5は、ザルマ男性の栽培作物と有用植物の販売状況を示したものである。まず栽培作物数であるが、7±3 (n=35) でフルベと比べると平均で3種多く栽培していることになる。主な栽培作物はトウジンビエ、ササゲ、ハイビスカス、ゴマ、ソルガムなどである。これらすべて販売もしているが、基本的には自家消費用である。栽培作物以外の有用植物で、有用植物として認識されているのは全52品目、うち販売

表2-5 ザルマ男性の栽培作物および有用植物の販売状況 (2005、2008\*)

世帯No	所在地**	栽培作物数と販売数		有用植物の採集場所***、品目および販売数										合計	
		栽培	販売	叢林や草原		台地		休閒地		季節湿地		品目	販売	品目	販売
				品目	販売	品目	販売	品目	販売	品目	販売				
1	Ko	7	7	36	16	3	1	2	0	0	0	0	41	17	
2	Ko	9	9	44	13	5	0	0	0	0	0	0	49	5	
3	Ko	7	7	23	7	6	1	2	2	0	0	0	31	17	
4	Tch	7	7	23	15	2	1	1	0	0	0	0	26	17	
5	Tch	9	9	29	19	4	1	5	3	0	0	0	38	14	
6	Bnz	9	9	22	13	1	1	1	0	1	0	0	25	5	
7	Tch	6	6	41	13	6	2	1	1	0	0	0	48	12	
8	Tch	6	6	36	22	10	3	3	1	0	0	0	49	12	
9	Ko	9	9	39	11	1	1	1	0	0	0	0	41	10	
10	Bnz	6	6	16	11	0	0	1	0	0	0	0	17	8	
11	Bnz	7	9	17	7	0	1	1	0	1	0	0	20	22	
12	Ko	7	9	32	13	2	2	2	0	0	0	0	36	21	
13	Tch	7	9	29	11	1	1	3	0	0	0	0	33	16	
14	Tch	8	8	15	7	1	0	1	0	0	0	0	17	20	
15	Tch	6	6	15	2	2	0	0	0	0	0	0	17	20	
16	Bnz	7	7	16	8	2	1	1	0	0	0	0	19	23	
17	Bnz	6	6	46	23	6	1	0	0	0	0	0	52	17	
18	Bnz	8	8	20	6	2	0	0	0	1	0	0	23	16	
19	Ko	7	7	23	12	3	3	1	0	0	0	0	27	14	
20	Ko	7	7	30	13	2	1	1	0	0	0	0	33	1	
21	Ko	9	9	28	12	7	6	1	0	10	6	46	14		
22	Tch	8	8	22	6	1	0	0	0	0	0	0	23	15	
23	Tch	6	6	23	15	2	1	1	0	0	0	0	26	16	
24	Ko	8	8	25	14	4	1	1	1	0	0	0	30	25	
25	Ko	7	7	23	8	4	2	1	0	0	0	0	28	26	
26	Bo	7	7	21	14	0	0	0	0	0	0	0	21	14	
27	Bo	7	7	18	13	0	0	0	0	0	0	0	18	13	
28	Bo	9	9	12	7	0	0	0	0	0	0	0	12	7	
29	Bo	6	6	11	11	0	0	0	0	0	0	0	11	11	
30	Bo	7	7	19	17	1	1	0	0	0	0	0	20	18	
31	MKZ	4	4	14	14	1	1	0	0	0	0	0	15	15	
32	MKZ	9	9	18	12	1	1	1	1	2	0	22	14		
33	MKZ	6	6	13	9	1	1	1	1	0	0	15	11		
34	MKZ	6	6	9	9	0	0	0	0	0	0	9	9		
35	MKZ	6	6	18	15	0	0	0	0	0	0	18	15		
平均		7.1	7.3	23.6	11.9	2.3	1.0	0.9	0.3	0.4	0.2	27.3	14.6		

\* ボクサイ (Boksay) 村およびマウレイ・クワラ・ゼーノ (Maourey Koira Zeno) 村のデータは2008年3月調査にて取得。  
 \*\* 所在地: Bani Zoumbou (Bnz), Boksay(Bo), Kodey (Ko), MKZ (Maourey Koira Zeno), Tchigo Tegui (Tch)  
 \*\*\* 叢林や草原: 灌木や草本が混交する長期休閒地、台地: 固結プリンサイトが地表近くにあり灌木と裸地が入り組む土地、休閒地: 草本植生を主体とする短期休閒地、季節湿地: 雨季に一時的に湛水するか湿った状態にある土地





図 2-5 有用植物の葉からロープを編む男性 (ボクサイ村)

対象となっているのは 26 品目である。

各世帯が利用しているのは平均 27 品目であるが、村によってかなりばらつきがあることがわかる。多い世帯では 50 以上挙げており、他方で最も少ない世帯は 9 品目のみであった。その内販売対象となるのは  $14 \pm 12$  品目であり、同様にかんりのばらつきがあることが見て取れる。有用植物の採取場所のうち、叢林や草原が 46 品目（内販売対象 23 品目）で全体の 88.5%（販売対象品目でも 88.5%）を占めている。先のフルベのところでも触れたとおり、ザルマの有用植物の利用頻度は高く、特に「危機の年」において女性は木の実や野草などを採集して食料不足を補ってきた（第 3 章参照）。ザルマ男性の有用植物の用途も多岐にわたっており、食料から薬品、塀や屋根を作る材料などに利用しているが、家畜飼料として市場や村で販売するケースも多く見られる。いずれにしても有用植物が特にザルマの生活にとって果たす役割は大きく、乾季の重要な現金収入源の一つにもなっている（有用植物の利用については「3 有用植物が人々の暮らしに果たす役割」を参照）。

#### 市場の利用状況

表 2-6 はザルマ男性 24 人に対して地域の市場利用状況等を聞いたものである。表 2-4 のフルベの結果と比較すると、いくつかの相違点が浮かび上がってくる。先にも触れたとおり、フルベで乳牛やヤギを所有する世帯は大抵夫婦で市場へ出かける。これは乳製品を販売する役割が女性と決められているためであることは先にも指摘したとおりである。しかし、ザルマは大抵家長（夫）一人か、もしくは息子とともに市場へ出かける。購入品目の中に食料や調味料がある場合でも男性が世帯を代表して購入するが多い。利用市場数は  $2 \pm 3$  で、フルベの利用数よりも若干少ないが、利用頻度は押し並べて高い。販売品目はトウジンビエやササゲが主であるが、家畜や藁、薪などと多岐にわたっている。フルベの販売品目が年間を通して家畜であるのに対して、トウジンビエやササゲといった収穫物を年間を通して販売できる世帯はごくわずかである。大抵は収穫直後から数か月で販売に回せる穀物は底をついてしまう。最も穀物の値段が上がる雨季に売って利ざやを稼ぐことができるのは一部の富裕層に限られている。

表 2-6 ザルマ男性の市場利用状況 (2005)

世帯 No	居住地	利用市場場所	頻度	販売品目	購入品目	世帯 No	居住地	利用市場場所	頻度	販売品目	購入品目				
1	Ko	Kour	毎週	トウジンビエ・ササゲ	調味料・穀物	12	Ko	Kour	毎週	トウジンビエ・ササゲ	トウジンビエ				
		Dan	毎週	ササゲ	調味料・穀物			Dan	毎週	トウジンビエ・家畜・ござ	トウジンビエ・家畜				
		Niam	毎週	トウジンビエ	調味料・コーラの实			Dan	毎週	ヤギ	トウジンビエ				
2	Ko	Dan	毎週	家畜・ござ・ソー	家畜・衣料・穀物・調味料	13	Tch	Wan	年2	藁・薪・トウジンビエ・ササゲ	調味料・穀物・衣類				
		Kour	毎週	藁・トウジンビエ	家畜・衣料・穀物・調味料			Dan	毎週	トウジンビエ・ササゲ・薪					
		Niam	毎週	トウジンビエ	家畜・衣料・穀物・調味料			Yeda	毎週	藁・建築材					
		Bou	毎週	藁				14	Tch	Yeda		毎週	家畜・トウジンビエ	家畜・調味料・穀物	
N'Go	年3	家畜		Dan	毎週	家畜・トウジンビエ・ヤムイモ	家畜・調味料・穀物								
3	Ko	Kour	毎週	トウジンビエ・ササゲ・藁	穀物・調味料	15	Tch	Dan	毎週	トウジンビエ・ササゲ・家畜	家畜・調味料・穀物				
		Dan	毎週	トウジンビエ・ササゲ	穀物・調味料			Yeda	毎週	家畜・トウジンビエ・ササゲ・藁	家畜・調味料・穀物				
		Niam	毎週	トウジンビエ・ササゲ・藁	穀物・調味料			16	Bnz	Wan	年2	家畜・トウジンビエ・ササゲ・ハイビスカス	穀物・家畜・衣類・調味料		
4	Tch	Yeda	月2	トウジンビエ・ササゲ・家畜	穀物・調味料・コーラの实	Dan	年4			家畜・トウジンビエ・ササゲ・ハイビスカス	穀物・家畜・衣類・調味料				
		Dan	毎週	家畜・トウジンビエ・ササゲ	穀物・調味料・衣料・塩	Bnz	毎週	家畜	調味料						
		Kogo	毎週	藁・薪・トウジンビエ		17	Bnz	Wan	年3	家畜	穀物・調味料・コーラの实				
		San	毎週	薪・藁				Dan	年2	家畜	穀物・調味料・衣類など				
5	Tch	Dan	毎週	家禽・家畜・穀物	家畜・穀物・調味料	18	Bnz	Wan	月1	トウジンビエ・ササゲ・小家畜	衣類・ウシ				
		Kogo	藁	穀物・調味料・家畜	Dan			月1	大型家畜	穀物・調味料・コーラの实					
6	Bnz	Dan	年6	家畜	家畜・調味料	19	Ko	Kour	毎週	トウジンビエ・小家畜	調味料・穀物				
		Bnz	毎週	ササゲの茎葉・家畜	調味料			Dan	毎週	トウジンビエ・小家畜	調味料・穀物				
		Wan	年10	家畜	家畜・調味料			Niam	毎週	トウジンビエ・小家畜	調味料・穀物				
7	Tch	Yeda	月2	トウジンビエ・藁	穀物・調味料・マンゴ	20	Ko	Kour	毎週	トウジンビエ・ササゲ・家畜	家畜・調味料・穀物				
		Dan	月2	トウジンビエ	穀物・調味料・マンゴ			Dan	毎週	家畜	家畜・調味料・穀物				
8	Tch	Dan	毎週	バンバラ豆・ハイビスカス・家畜	家畜・穀物・調味料			Niam	毎週	トウジンビエ・ササゲ・家畜	家畜・調味料・穀物				
		Yeda	毎週	トウジンビエ・ササゲ・家畜	家畜・穀物・調味料	21	Ko	Kour	毎週	藁・薪・トウジンビエ	調味料・穀物				
9	Ko	Kour	毎週	トウジンビエ・ササゲ	調味料・穀物・コーラの实			Dan	毎週	麦藁帽子	調味料・穀物				
		Dan	毎週	家畜・ござ	調味料・穀物・コーラの实・家畜			Niam	毎週		調味料・穀物				
		Niam	毎週	トウジンビエ・ササゲ	調味料・穀物・コーラの实	22	Tch	Dan	毎週	家畜・トウジンビエ・バンバラ豆	家畜・調味料・穀物				
10	Bnz	Bnz	毎週	ヤギ	ヤギ・調味料			23	Tch	Yeda	月2	トウジンビエ・ササゲ・家畜	穀物・調味料・コーラの实		
		Dan	毎週	ヒツジ	ウシ・調味料					Dan	毎週	家畜・トウジンビエ・ササゲ・ハイビスカス	穀物・調味料・衣類・塩		
		Wan	毎週	ヤギ・ヒツジ	穀物・調味料	Kour	毎週			藁・薪・トウジンビエ					
11	Bnz	Wan	月2	ウシ	マンゴ・調味料・穀物	San	毎週	薪・藁		24	Ko	Kour	毎週	薪・藁	調味料・穀物・コーラの实
		Dan	月3	トウジンビエ・ウシ		Dan	毎週	薪							
		Bnz	家畜			Niam	毎週	薪・藁	調味料・穀物・コーラの实						

\* 居住地：Bani Zounbou (Bnz), Boula (Bou), Dantiandou (Dan), Kogori (Kogo), Kouringol (Kour), N'Gonga (N'Go), Niambere (Niam), Sandire (San), Wankama (Wan), Yeda (Yeda)



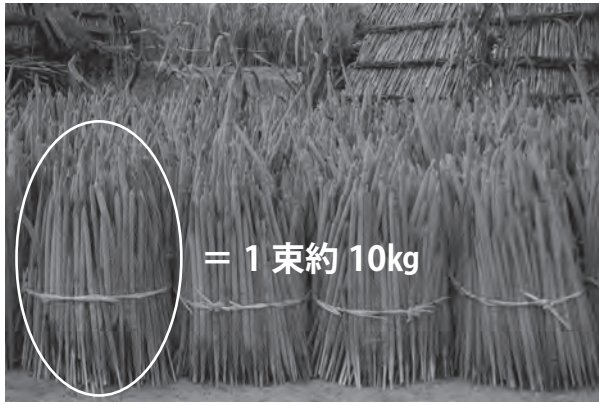


図 2-8 収穫時のトウジンビエ



図 2-9 ハイビスカス（花部分乾燥）

MKZ 村の男性各 20 人に、雨季の栽培作物について聞いたものである。大部分の男性が 2～5 筆の畑を所有しており、質問はすべての畑での栽培作物について質問した。これによると大部分の畑で主食のトウジンビエとササゲが混作されており、ハイビスカスも多くの畑で栽培されていることが分かる。これらは自家消費と販売用とに大きく分かれるが、Bo 村と MKZ 村とではその割合や販売品目、販売量も大きく異なっていた。

Bo 村では 10 人中 8 人がトウジンビエ、ササゲ、ハイビスカスのいずれを販売していた。8 人全てがトウジンビエの販売をしており、一人あたりのトウジンビエの平均販売量は 24 束で平均収入 28,781 Fcfa であった。トウジンビエ一束が 10 kg 前後（図 2-8）であるので、約 240 kg を販売に回していることになる。トウジンビエに次いで販売が多い作物がハイビスカスで、花の部分を乾燥させたもの（図 2-9）を販売する。多い人では 300 kg を 31,000 Fcfa の高値で販売しているが、平均して 50 kg 前後を販売に回している。他方、MKZ 村では 10 人中 6 人がトウジンビエ、ササゲ、ハイビスカス（種）のいずれかを販売しているものの、その量は Bo 村と比較すると少量であった。トウジンビエにいたっては僅か 3 人が販売すると回答し、うち 2 人が 100 kg のトウジンビエをそれぞれ 12,000 Fcfa 前後で、あとの 1 人は 3 束のみを販売していた。その他の収穫物についても、ササゲの販売は 2 人、ハイビスカス（種）の販売は

1 人であった。後にみる「危機の年」に関する質問項目において、大部分の女性が 2007 年を「危機の年」と回答したように、MKZ 村ではファカラ地域の他の村と比べても極端な貧困状態に陥っていた。それは MKZ 村男性の雨季の収穫物の販売量調査からも窺えた。

また、これはファカラ地域全体に言えることであるが、近年の人口増加により休閑地は休閑期間がますます短くなり、長年にわたる連続農耕が土地の肥沃度を著しく低下させ、本来農耕に適さない斜面や侵食が進んでいる土地などを切り拓かざるを得ない状況になっている。それにより、フルベは放牧地を失い、土地所有をめぐる新たな対立を生む結果にもなっている。

表 2-7 は Bo 村、ダンチャンドウ村（以下 Dan 村）のザルマ男性各 25 人に乾季の仕事に

表 2-7 Bo 村、Dan 村のザルマ男性の乾季の仕事

乾季の仕事	Bo 村 (N = 25)	Dan 村 (N = 25)
(国内外への) 出稼ぎ	13	9
手仕事（縄編みなど）	1	
草刈	6	2
畑整備	4	1
野菜栽培	1	4
井戸掘り（職人）	1	
鍛冶屋（職人）	1	
薪売り	1	
レンガ造り	1	
果樹栽培		1
小売業		3
公務員		1
運転手		1
何もしない		4

複数回答（2008 年調査）

ついて聞き取りしたものである。仕事内容について、両村を比較すると、幾つかの違いが見て取れる。出稼ぎ（主にガーナ）がいずれの村でも最も多い活動であるが、それ以外は両村で多少異なっているのが分かる。村の20代から30代の男性の多くは近隣諸国へ出稼ぎに出るのが主流のようである。それでもDan村では、それに代る主要な現金収入取得手段として野菜栽培を選び、村に残る若年層も徐々にではあるが増えつつある。その他の活動に目を移すと、Bo村では、伝統的に乾季に行われてきた男性の仕事は今もなお受け継いでいるのが特徴である。縄編みや藁で編んで作る塀などは特に年配者が木陰で行っており（図2-5）、井戸掘りも鍛冶屋も祖先から引き継いで行われている技術職である。一方、Dan村ではそのような昔ながらの活動は姿を消しつつあり、代って小売業や公務員、運転手といった村においては比較的新しい職種が見られるようになってきている。さらに、「何もしない」と答えた男性が4名いたが、彼らはいずれも年配者（60～70代）であり、雨季の農作業だけで体力的に精一杯だと話していた。たとえ年を取っても細々と縄編みなどを行っているBo村と比べると、経済的に余裕があるためなのか、あるいは村の規模の違いによるものなのか、いずれにしてもわずか4kmしか離れていない両村でも、地域の中心村と周辺村というだけでこれだけの違いが生じてきていることは特筆すべきことである。

### 3) フルベとザルマの関係

図2-10は2008年10月にBo村とDan村のザルマ男性（無作為選抜）50人にフルベとの現在の関係について聞いたものである。これによると、Bo村の特に若い世代（20～30代）の男性の多くがフルベとの関係で少なからず問題を抱えていることが分かる。その大半は、収穫前の畑にフルベの家畜が侵入し、特にササゲなどの収穫物を食べてしまうという被害である。この地域に在住するある研究所の技官の話では、畑を家畜に開放する日は正式に政府により決定

され、ラジオ等の媒体を通して住民に伝えられるとのことである。通常はトウジンビエの収穫が終了してから1ヶ月後で、2008年は12月15日が解禁日だった。

もちろんこれより前に家畜を開放した場合の罰則もあることにはある。例えば、複数の家畜が他人の畑に侵入した場合、家畜所有者はウシ一頭につき5,000 Fcfa、ヒツジまたはヤギ一頭につき2,000 Fcfaの罰金を払わなければならない。しかしこの規則は全く機能していないに等しいということである。家畜の侵入被害を受けている男性の多くは、毎年のように同じ被害が繰り返されていると話していた。しかしこれもとで何か諍いや深刻な問題が起きているかといえば、そこまで事態は悪化せずにザルマからフルベへ注意を呼びかける程度で済んでいるという。

次の図2-11は、ファカラ地域のフルベ男性37人にザルマとの関係を聞いた結果である。やはり半数以上がザルマとの間に問題があると回答している。その内容についてまとめたものが表2-8である。ここでも、耕地や菜園への家畜侵入による加害が大部分を占めている。頻度にすれば、10年間で数回と回答した人が全体の6割とそれ程多くはないが、毎年何かしらの問題があると答えた男性も3人いることにも注意を払う必要がある。家畜がザルマの耕地または菜園に侵入する時期で最も多いのは、やはり10月から11月の収穫期であり、収穫後の耕地

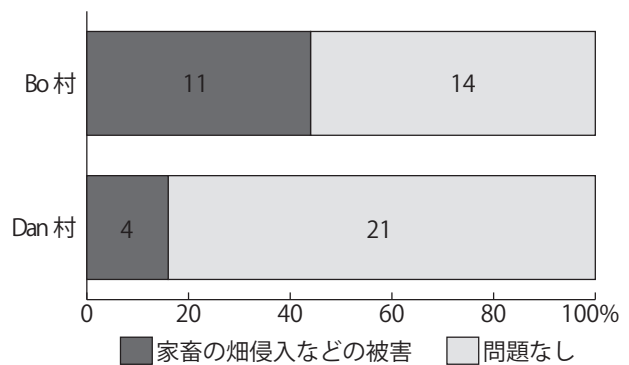


図2-10 フルベとザルマの関係  
(グラフ内数字は回答数)

表 2-8 ザルマへの加害状況 (2007)

世帯 No	居住地*	内容	頻度**	時期(月)
1	Ka	家畜の畑侵入	3	6-7
2	Tch	家畜の畑侵入	4	6-11
3	Ka	家畜の畑侵入	1	6-10
4	Bnz	家畜の畑侵入	3	11-12
5	ZS	回答保留		
6	Ko	家畜の畑侵入	3	6-10
7	Bou	家畜の畑侵入	1	6-11
8	Tch	家畜の畑侵入	3	6-11
9	Ka	家畜の畑侵入 土地問題	3	10-11 酷暑期
10	Ko	家畜の畑侵入	2	6-10
11	ZS	家畜の菜園侵入 (被害総額 300,000 Fcfa/年)	1	12-5
12	Ko	家畜の畑侵入	3	3
13	Ko	家畜の菜園侵入	3	11-6
14	Ko	家畜の畑侵入	3	6-10
15	BK	家畜の畑侵入	4	6-10
16	Ko	家畜の畑侵入	3	10-11
17	Tch	家畜の畑侵入	4	6-11
18	Tch	家畜の畑侵入	3	10-11
19	Ko	家畜の畑侵入	3	6-11

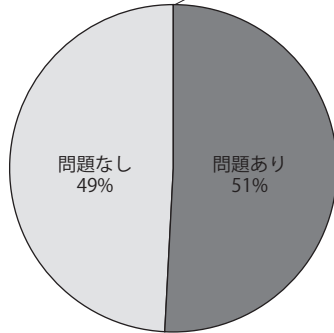


図 2-11 フルベ男性からみたザルマとの関係

\* 居住地: Banizoumbou (Bnz), Katanga (Ka), Kodey (Ko), Tchigo Tegui (Tch)

\*\* 頻度: 1 (毎年)、2 (10年間定期的に)、3 (10年間で数回)、4 (まれ)

開放より前に家畜を侵入させてしまっていることがここからも明らかである。

このようなフルベとザルマの衝突は、この地域に限ったことではなく、程度の差こそあれ、両者が住む地域には必ずと言っていいほど生じる問題である。例えば、ファカラ地域から 40 km ほど南下したところにボボイ (Boboye) と呼ばれる地域があるが、そこでもフルベとザルマの問題が絶えず、雨季から収穫期にはそれが暴力沙汰にまでおよんだ。特に若い世代には昔から培われたザルマとフルベの友好的、互助的な感情が薄れてきており、ザルマの自治権を主張するものや排他的な思想を持つ者さえ出てきているという (Amadou 1999)。

元々遊牧民であるフルベは、以前は牧畜のみによって生計を支えていた。その当時は図 2-12 に示すように、ザルマは雨季の収穫が終わると、畑をフルベに開放し、畑に残るトウジンビエの残渣やササゲの葉や茎をフルベの所有する家畜の飼料として提供する代わりに、一定期間フルベの家畜をザルマの畑に停泊させることで家畜

の排泄物を畑に落とすという契約が成り立っていた。しかし、近年はフルベの多くが農耕を営み、定住するようになった。村の周辺の畑は当然、ザルマによって占有されているため、村からより離れた地域に定住するようになったのである。中にはザルマから土地を借りるものもいるが、多くはザルマの畑を取り囲むような形でフルベが新たに土地を切り拓いてきた。比較的多くの家畜を所有するフルベは、収穫後すぐに家畜を自ら所有する畑に放つ。そのため、ザルマに以前のように家畜を貸す期間は図 2-12 で示したように収穫から 4~5 ヶ月近く経過してからということになる。

ザルマとフルベの関係が大きく変化したのは、フランスの植民地支配時代からだといわれている。それ以前、特にニジェール川左岸地域においてはフルベが支配権を有しており、その支配のもと一部のフルベが定住するようになったといわれている (Salifou 1989)。

植民地支配下でザルマ (ニジェール東部ではハウサ) が政治的な影響力を獲得するにつれ

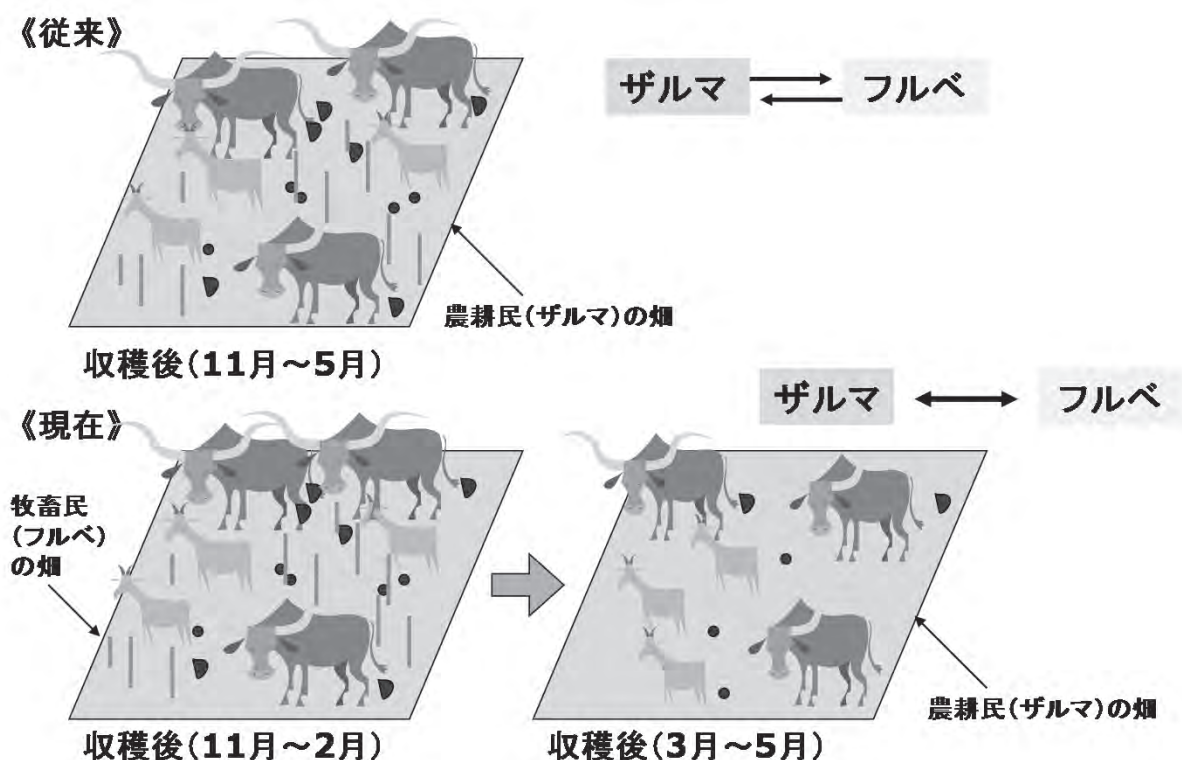


図 2-12 ザルマとフルベとの関係の変遷

て、フルベは徐々に周辺化していった。その政治的、社会的状況は少なからず現在でも続いている (Olivier de Sardan 1984)。しかし、村落地域ではトウジンビエやモロコシなどの穀物を耕作しながら、大規模な牧畜を行っているフルベは今もなお多数を占めている。家畜もウシだけでなく、飼料をあまり必要としないヒツジやヤギを組み合わせることで、慢性的に起こる干ばつや飢饉に備えるリスク管理を行っている。

#### 4) ザルマ女性の役割と位置づけ

ここではザルマの女性に焦点をあて、ザルマ女性が各世帯においてどのような役を果たしているのかを明らかにする。それを知る手がかりになるのが 2007 年 12 月から 2008 年 3 月までの 3 ヶ月間に、ファカラ地域の 3 村の女性 40 人を対象に行った聞き取り調査である。聞き取り調査の主な項目は以下の通りである。

- ① 家族構成 (年齢、学歴、職業、仕送りの有無など)
- ② 畑 (女性自身が働いている) の管理状況 (取得方法、主な栽培品目、労働形態)

- ③ 栽培作物について (種類、使用方法、栽培期間、栽培場所、販売の有無)
- ④ 有用植物の採集 (品種名、使用方法、採取時期、採取場所、販売の有無)
- ⑤ 主な現金収入源
- ⑥ 販売・購入市場について (市場名、頻度、販売品目、購入品目)
- ⑦ 女性の日課 (季節などに応じて)

まずこれらの基礎情報について概観し、ザルマ女性の役割や位置づけについて考察する。図 2-13 は質問項目①の中の女性の就学状況についてまとめたものである。アンケート回答者の平均年齢は、Bo 村で 51.1 歳、Dan 村で 38.7 歳、MKZ 村で 28.9 歳だが、実際の年齢を本人が把握していない場合が多々あり、年齢に関する信憑性は薄いといわざるを得ない。ニジェールにおける初等教育就学率は今もなお、途上国の中でも低い水準にある。近年になってようやく女子の就学率向上を求める潮流が全国で盛んに起こっているが、十数年前まではそれを声高に訴えるよう運動はほとんど起こっていなかった。とりわけ農村地域の女性は、都市の女性と比較

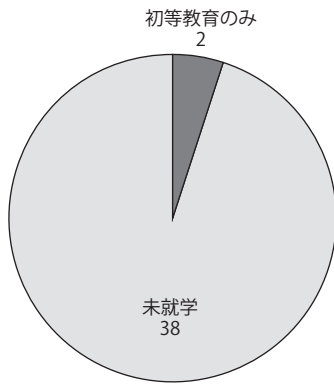


図 2-13 ザルマ女性の就学状況

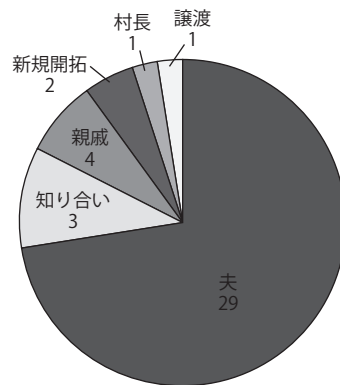


図 2-14 雨季女性畑の取得経緯

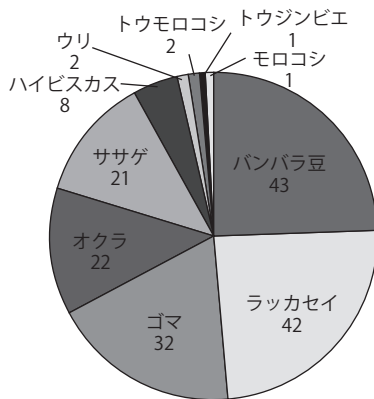


図 2-15 雨季女性畑の栽培作物



図 2-16 バンバラ豆 (収穫時)

すると婚姻年齢が早く（平均 14～15 歳）、結婚後は家事や子育てに追われる日々を余儀なくされる。現在もこのような風習は、特に農村部で根強く残っており、就学期の子を持つ親を対象に、教員や地方行政官らが中心になり各地で啓発活動が行われている。しかし、今回聞き取り調査に答えた 40 人の女性は、それより以前の世代である。Bo 村や MKZ 村に小学校ができたのもここ数年のことで、当時は男女を問わず、とりわけ農村地域での教育へのアクセスが難しかったといえる。

次に図 2-14 は②の雨季の女性畑地の取得経緯の結果を示したものである。3 村の女性の大部分が夫からの借地を利用している。親戚、知り合い、村長からはいずれも借地を表しており、女性自身が新たに土地を切り拓いて耕作したのは僅かに 2 件、譲渡も 1 件のみであった。つまり 40 人中 37 人が誰かしらの土地を借りていることになる。また、新開拓地 2 件を除く 38 件は全て、休閑地ではなく継続して使用されてい

る畑を借りている。ここから、土地の所有権がいに男性（家長）に限られているかがわかる。これはニジェールのみならずアフリカの多くの農村地域でみられることで、伝統的な慣習法によるところが大きい (Joireman 2008)。しかし、女性が得た収穫物や現金収入の使い道については女性の裁量に任されており、選択の自由が認められている。

図 2-15 はファカラ地域の女性が雨季にどのような作物を栽培しているかを表したものである。どの村の女性もバンバラ豆（図 2-16）を主に栽培しており、ついでラッカセイ、ゴマ、ササゲなどが続く。これらの作物は自家消費が主で、販売すると答えた女性は Dan 村で 6 人、Bo 村では 2 人、MKZ 村では 1 人と少数に留まっている。販売といってもバンバラ豆やラッカセイを茹でたものを 5 Fcfa 単位で村内で売り歩く程度で、そこから得られる収入はごく僅かである。Dan 村においてはラッカセイから油を精製する活動が外部からの援助によって始





図 2-17 ラッカセイの収穫風景



図 2-18 女性畑のハイビスカス

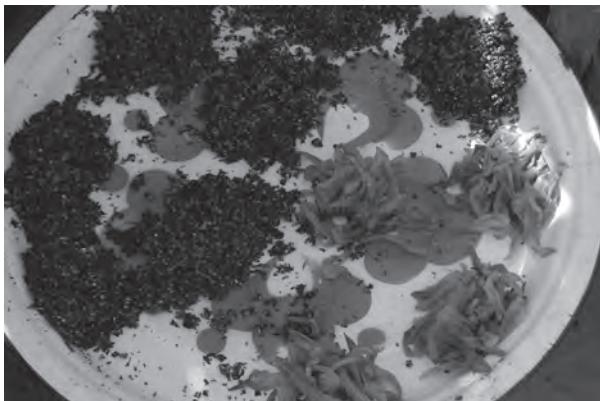


図 2-19 市場で売られるハイビスカスと  
ゴマの惣菜



図 2-20 ゴマの収穫風景  
(ニジェール川近くの村にて)



図 2-21 収穫したオクラを切る女性

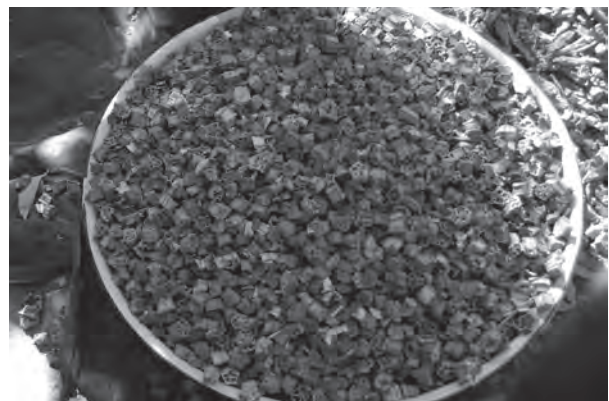


図 2-22 市場で売られる乾燥オクラ

められ、そのためのグループも存在するようであるが、それがどこまで、どの程度世帯収入に貢献しているかは定かではない。また、オクラ (*Abelmoschus esculentus*) は収穫後すぐに輪切りにして乾燥させ (図 2-22)、長期保存が可能なかたちに加工作るのが一般的である。

筆者(佐々木)が以前活動をしていたニジェール川沿いの村々ではオクラ栽培が非常に盛んで、オクラ収穫の最盛期にはほぼ全ての家庭で

女性や子ども達が昼夜問わず、オクラ切りに勤しんでいた。しかしファカラ地域ではそのような光景に出くわすことはほとんどなかった。ニジェール川周辺の村落でオクラと並んで雨季の女性畑でよく栽培されていたトウガラシもファカラ地域ではあまり見られない。これらのことから、同じザルマ女性でもその地理的条件で栽培作物も異なり、またそれによって生活形態も変わってくるのがわかる。また男性畑で主に

栽培されているササゲやハイビスカス、モロコシやトウジンビエも少数ではあるものの女性畑でも栽培されている。これらもほとんどが自家消費用であるが、ハイビスカスについては花びらの部分を乾燥させたものを茹でて胡麻和えにした惣菜（図 2-19）を乾季に村内や市場などで販売している姿をよく見かける。

表 2-9 は、ザルマ女性の栽培作物と有用植物の販売状況を示したものである。まず栽培作物数は  $7 \pm 5$  (n=40) とザルマ男性とほぼ同じ数の作物を栽培している。ザルマ男性と異なるのは、雨季と乾季の栽培作物を合わせた数である。男性は雨季だけで平均 7 種の作物を栽培するが、女性は乾季の野菜も合わせて平均 7 種と

表 2-9 ザルマ女性の栽培作物および有用植物の販売状況

世帯 No	所在地*	栽培作物数と販売数		叢林や草原		有用植物の採集場所、品目および販売数						合計	
		栽培	販売	品目	販売	台地		休閑地		季節湿地		品目	販売
						品目	販売	品目	販売	品目	販売		
1	Dan	10	9	2	1	1	1	6	5	0	0	9	7
2	Dan	6	2	3	2	0	0	1	0	0	0	4	2
3	Dan	2	0	3	3	0	0	1	0	0	0	4	3
4	Dan	9	5	12	11	3	3	1	0	0	0	16	14
5	Dan	8	8	11	5	0	0	0	0	0	0	11	5
6	Dan	9	8	8	7	0	0	1	1	0	0	9	8
7	Dan	10	2	6	5	1	1	4	2	0	0	11	8
8	Dan	8	0	14	14	0	0	11	9	0	0	25	23
9	Dan	9	1	10	10	0	0	3	1	0	0	13	11
10	Dan	7	0	4	1	0	0	2	1	0	0	6	2
11	Dan	8	3	9	6	0	0	4	1	0	0	13	7
12	Dan	8	1	8	4	0	0	6	4	0	0	14	11
13	Dan	8	1	8	3	0	0	2	2	0	0	10	5
14	Dan	11	4	16	9	3	3	3	2	0	0	26	14
15	Dan	9	1	10	10	0	0	1	0	0	0	12	5
16	Dan	7	4	9	8	1	1	4	3	0	0	15	12
17	Dan	10	3	6	4	1	1	3	1	0	0	6	11
18	Dan	13	7	18	11	0	0	10	7	0	0	28	20
19	Dan	4	0	18	10	0	0	14	8	0	0	32	18
20	Bok	8	2	27	17	1	1	5	5	0	0	33	23
21	Bok	8	0	10	9	0	0	4	4	0	0	14	13
22	Bok	10	0	6	4	0	0	3	2	0	0	9	6
23	Bok	5	0	4	4	0	0	3	3	0	0	7	7
24	Bok	4	3	4	4	0	0	3	3	0	0	7	7
25	Bok	5	1	10	5	0	0	4	4	2	0	16	9
26	Bok	9	0	12	7	1	1	3	3	0	0	16	11
27	Bok	9	1	9	8	0	0	3	2	0	0	12	10
28	Bok	4	1	4	2	0	0	1	1	0	0	5	3
29	Bok	8	1	3	2	0	0	2	2	0	0	5	4
30	Bok	3	1	10	5	0	0	0	0	0	0	10	5
31	MKZ	6	0	8	6	0	0	1	1	0	0	9	7
32	MKZ	6	0	3	3	0	0	0	0	0	0	3	3
33	MKZ	8	0	2	1	0	0	1	0	0	0	3	1
34	MKZ	5	0	4	2	0	0	0	0	0	0	4	2
35	MKZ	8	3	8	4	0	0	0	0	0	0	8	4
36	MKZ	9	0	9	6	0	0	0	0	0	0	9	6
37	MKZ	12	0	8	8	0	0	0	0	0	0	8	8
38	MKZ	9	2	9	9	0	0	1	1	0	0	10	10
39	MKZ	7	3	7	0	0	0	0	0	0	0	7	0
40	MKZ	7	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5	0
平均		7.6	1.9	8.4	5.7	0.3	0.3	2.7	1.9	0.05	0	11.6	8.1

\* 所在地：Boksay (Bok), Dantiandou (Dan), Maourery Kouara Zeno (MKZ)

なっている。しかし、換金作物数は男性の場合と異なり、 $2 \pm 7$  ( $n=40$ ) と非常に少なくなっている。それが顕著であるのは Bo 村と MKZ 村であり、Dan 村では栽培作物と同一の作物を販売していると答えた女性が目立っている。栽培作物の半数以上は乾季の野菜が占めており、比較的多くの種類の野菜を栽培し、なおかつ定期的な市が立つ Dan 村ではそれだけ現金収入につながる機会に恵まれているのだろう。他方で、特に MKZ 村では後述するように、乾季に複数種類の野菜栽培をするものの、その多くが実を結ぶことなく終わっている。こういった村によって異なる背景がこの数字からも読み取ることができる。

栽培作物以外の有用植物で、有用植物として認識されているのは全 92 品目、うち販売対象となっているのは 56 品目である。その数は、フルベ男性には及ばないまでも、ザルマ男性を遥かに上回っている。また、販売品目も全品目の 60% にも及んでおりフルベ男性、ザルマ男性と比べて最も有用植物に依存していることがわかる。特に、後に触れる「危機の年」における対処法で、多くの女性が木の実や野草を摂取して飢えをしのいでいたと回答していることから、その重要性が窺える。採取場所で見ると全 92 品目のうち、70 品目は叢林や草原であり 76% を占める。次に多い採取場所としては村およびその周辺 (21 品目) で、女性の行動範囲が男性に比べて狭いことがこれらの数値から推測できる。各世帯が利用しているのは平均 11 品目 (うち平均販売品目数は 8) であるが、これも村によってかなりばらつきがある。多い人では 30 品目以上から少ない人では 3、4 品目までと、年配の女性になればなるほど回答数は多くなる傾向も見られた。さらに細かく用途などを見ていくと、食用と並んで最も多いのが木の皮や葉などを薬として使用するというもので、病院や薬局で高価な薬を買うことができない村落世帯の多くが治療薬として有用植物を利用していることがわかる。

表 2-10 は Dan 村、Bo 村、MKZ 村 3 村の女

性の市場利用状況を表したものである。男性のもの (表 2-6) と比較すると明らかに利用市場の数、頻度ともに少なくなっている。Dan 村の女性に限ってみれば例外的に毎週市場に足を運ぶ女性が過半数を占めるが、そのほとんどが Dan 村の市場である。販売品目を挙げる女性も少数で、ほとんどが主食の穀物を粉にして熱湯で練って餅状にしたものにかけるソースを作る材料 (図 2-23) や野菜等を買求めるために市場を利用していることがわかる。

Dan 村の販売品目を見るとキャベツの葉やハイビスカスの花などを使った惣菜 (図 2-24) やバッタを炒ったもの (図 2-25) などで、女性の重要な現金収入源となっている。Bo 村の女性もその近さゆえ Dan 村の市場を主に利用している。しかしその頻度は Dan 村の女性ほど高くない。Bo 村の女性の多くが販売品目にごぎを挙げていた (図 2-26)。市場で売ると一枚 1,000 ~ 1,500 Fcfa の収益が見込める。後の「危機の年」の対処法の章でも触れるが、特に Bo 村の女性にとってこのごぎ作りは重要な意味を持っている。

購入品目は Dan 村同様調味料がその大半を占めていた。MKZ 村の女性は、Dan 村から 30 km も離れているため利用市場は最も近い Wankama 村がほとんどである。近いといっても北に 15 km の位置にあるため歩いて行くには遠すぎる距離である。そのため市場の利用頻度も 3 村の中で最も低くなっている。中には男性



図 2-23 市場で売られる調味料の数々 (Dan 村市場)

表 2-10 ザルマ女性の市場利用状況 (2008)

世帯 No	所在地*	利用市場		販売品目	購入品目
		場所	頻度		
1	Dan	Dan	毎週	なし	調味料・タマネギ
2	Dan	Dan	毎週	なし	調味料
3	Dan	Dan	毎週	なし	調味料
4	Dan	Dan	毎週	なし	調味料
5	Dan	Dan	毎週	なし	調味料
6	Dan	Dan	毎週	バツタ・野草	調味料
7	Dan	Dan	毎週	惣菜	調味料
8	Dan	Dan	毎週	なし	調味料
9	Dan	Dan	毎週	なし	調味料
10	Dan	Dan	時々	なし	調味料
11	Dan	Dan	時々	なし	調味料
12	Dan	Dan	時々	なし	調味料・惣菜
13	Dan	Dan	毎週	トウジンビエの粥・食事	調味料
14	Dan	Dan	毎週	惣菜	調味料・レモン
15	Dan	Dan	まれ	なし	調味料・砂糖
		Dan	毎週	ごぎ	調味料・タマネギ
16	Dan	Nya	時々	なし	ササゲ・タマネギ
		Yeda	時々	なし	調味料
17	Dan	無回答			
18	Dan	Dan	時々	なし	調味料
19	Dan	Dan	時々	なし	調味料
20	Dan	Dan	時々	焼き団子	調味料・ササゲ
21	Bok	Dan	時々	ごぎ	調味料
22	Bok	Dan	時々	ごぎ	調味料
23	Bok	Dan	時々	ごぎ	調味料・野菜 (イモ類)
24	Bok	Dan	年1~2	ごぎ	調味料・穀物
25	Bok	Dan	時々	カボチャ	調味料
26	Bok	Dan	毎週	なし	調味料
27	Bok	Dan	時々	ごぎ・カボチャ	調味料
28	Bok	Dan	時々	ごぎ・カボチャ	調味料
29	Bok	無回答			
30	Bok	Dan	毎週	惣菜	揚げ菓子・ラッカセイ
31	MKZ	Wan	時々	なし	調味料
32	MKZ	Wan	夫が行く		
33	MKZ	Wan	まれ	なし	調味料
34	MKZ	Wan	時々	なし	調味料
35	MKZ	Wan	時々	なし	調味料
36	MKZ	Wan	年1	なし	調味料
37	MKZ	Wan	毎週	なし	調味料
38	MKZ	Wan	まれ	カボチャ	調味料
39	MKZ	Wan	月3	なし	調味料・油・小麦粉
		BZ	月2	なし	調味料・油・小麦粉
40	MKZ	無回答			

\*所在地: Bani Zounbou (BZ), Bokysay (Bok), Dantiandou (Dan), Maurey Koira Zeno (MKZ), Nyambere (Nya), Wankama (Wan)

に買い物を託し本人は市場へ出掛けないという女性もいた。MKZ 村の女性は専ら購入者として市場を利用しているのがここから見てとれる。もっとも市場から遠いこの立地条件では、販売品目があったとしても市場を利用することは難しいだろう。購入品目は Dan 村、Bo 村同様調味料が大半を占めていた。

次に女性の農繁期と乾季の日課について概観する。図 2-27 はファカラ地域の典型的なザルマ女性の一日を表したものである。既に見てきたように農繁期には男性の畑の一角を借りて、雨季栽培作物の栽培、収穫に多くの時間を費やす。その他の時間も穀物つきや水汲み、薪集めといった重労働を要する多くの家事が常につい



図 2-24 キャベツの葉の惣菜売り  
(Dan 村市場)



図 2-25 バッタの惣菜  
(Dan 村市場)

て回り、早朝の礼拝から就寝までほとんど休む暇なく働いていることがわかる。女性の場合は乾季も同様に多忙で、村によっては野菜栽培に日中の大半の時間を取られる場合もある。しかし農繁期の雨季と比較すると所々で時間的な余裕があるのが見て取れる。この余暇の時間の使い方は様々であるが、Bo 村の女性はこの時間を菜園の水遣りやござ作りなどの現金収入創出活動に回しており、まさに寸暇を惜しむように働いている。Dan 村の女性も雨季の収穫が終わると同時に野菜栽培の準備に入り、空いている時間をみては菜園へ行き水遣りや畑の整備などに余念がない。また年配の女性は家事の大半から解放され、代わって嫁や娘が穀物つきや水汲み、食事の準備等を行っており、世帯内に複数の妻がいる場合には食事は妻の間の取り決めで当番制にしている場合もある。裕福な家庭になれば、こうした家事の一切は家政婦を雇って補い、子育てや料理のみを行う女性もみられた。

このように一言で女性の日課といっても図 2-27 のように季節によってもその仕事量は異なり、村の環境や子どもの数、妻の数、世帯収入など様々な要因によって変わってくる。また女性の日課に限らず、女性の役割や位置づけについてもこれと同じことが当てはまる。サヘル地域のザルマ女性という大まかな括りで、外部者からはとかく「貧しくて弱い」存在として形容されがちだが、この調査からも明らかなように彼女たちの村落社会における役割や位置づけ

は一様ではなく、さまざまな要因から実に多岐にわたっている。よってここにその定義づけをすることは避けるが、唯一この調査から言えることは、彼女たちは例え貧しくとも決して弱い立場、存在ではないということである。どんな苦境に立たされても子ども達や家族のために男性と同じく家計を支える一翼を担っている。そこには性差も優劣もなくただひたすらに厳しい環境を生き抜く強さを感じることができる。



図 2-26 ござを編む女性 (Bo 村)

農繁期（雨季：6月～収穫期：11月）

5h 6h 7h 8h 9h 10h 11h 12h 13h 14h 15h 16h 17h 18h 19h 20h 21h 22h																						
お祈り	トウジンビエつき	朝食準備	朝食	畑に行く		畑仕事		昼食	薪拾い	帰宅	お祈り	トウジンビエつき	お祈り	掃き掃除	水汲み	夕食準備	お祈り	水浴び	お祈り	夕食	おしゃべり	就寝

農閑期（乾季：12～5月）

5h 6h 7h 8h 9h 10h 11h 12h 13h 14h 15h 16h 17h 18h 19h 20h 21h 22h																					
お祈り		朝食準備	朝食	掃き掃除	トウジンビエつき	水汲み	昼食準備	昼食	菜園水遣り	洗濯	お祈り	トウジンビエ脱穀	お祈り	製粉機へ	夕食準備	お祈り	水浴び	お祈り	夕食	おしゃべり	就寝



トウジンビエつき



水汲み



薪拾い



トウジンビエの風選



食事準備

図 2-27 ザルマ女性の日課（農繁期・農閑期）

3 有用植物が人々の暮らしに果たす役割

1) アフリカ各地の様々な利用事例

休閑地や灌木帯で多く見られる野生植物は、アフリカ諸国のいたるところで様々な利用がなされている。これら地域特有の植生は、日々の食料や伝統的な薬として利用され、その知識や利用方法は、太古の世代から綿々と口承伝達により受け継がれている (Hillocks 1998)。野生植物の薬用機能についての研究は古く、それに関する記述も多く残されているが、食用としての役割が注目され体系的に研究されるようになったのは比較的最近のことである (Grivetti and Ogle 2000)。それらは食料不足や干ばつといった「危機の年」はもとより、日常生活においても重要な役割を担っている (Wezel and haigis 2000)。例えば、Wolcott (1928) は除草などで耕地内の雑草生態を破壊することがかえって栽培作物への害虫被害を拡大すると報告し、有用植物の防除の役割を初めて指摘した。その後も 2,000 種を超える防除的要素を持つ有用植物が

報告されている (Secoy and Smith 1983、Grange and Ahmed 1988、Hillcoks 1998)。

こうした有用植物に関する研究では、具体的な国や地域、民族などによる多様な利用方法や知識について紹介する事例も見られる。Rahmato (1988) は、野生植物がエチオピアの農民の生活に占める役割について報告し、*Portulacca oleracea* と *Amaranthus spp.* の摂取により 1984 年の干ばつに伴う飢饉を凌いだとし、また有用植物に関する知識は女性の方が豊富であると報告している。ボツワナのカラハリ東部の乾燥地においては、年齢や性別による厳格な有用植物や野生小動物の摂取の規定が 1984 年の大干ばつ時においても飢饉に陥らない強固な生存戦略を確立させた (Grivetti 1978)。マリ南部では様々な地域で野生植物のあらゆる部位が伝統的な料理の材料として認識されているが、栄養面の重要性は未だ不明瞭なままである (Nordeide et al. 1996)。栄養面での重要性を指摘した事例としては、セネガル北部の村で特に

*Adansonia digitata*, *Balanites aegyptiaca*, *Ziziphus Mauritania*, *Boscia senegalensis*, *Cassia obtusifolia* の5種がよく利用されており、季節的にビタミンA、B<sub>2</sub>、Cが不足する時期にそれを補う機能を果たしている (Becker 1983)。タンザニアのある村における食事調査では、すべての食事の32%に野生植物の利用が確認されており (Fleuret 1979)、ニジェール東部では80種以上の有用植物が93%の世帯で日常的に使用され、日々の栄養に欠かせない銅、鉄分、マグネシウム、亜鉛の摂取に貢献し、さらにこれらの植物を販売することで、家計の足しにもなっている (Humphrey *et al.* 1993)。ガンビアにおいてはさらに、食用の雑草の中でも特に妊娠中や授乳中の女性に摂取されるものがあり、後の検査でこうした女性に不足しがちなビタミンAの不足がこの地域の女性には見られなかったことを報告し (Villard and Bates 1987)、スーダンのダルフル地方では、有用植物を日常的に摂取しているグループの方がそれらを利用していないグループと比べると乳幼児死亡率が低いことも明らかにされた (Salih *et al.* 1992)。このように土着の有用植物の中には栄養価の高いものも数多く含まれており、地域の人々の栄養バランスの維持管理に不可欠なものも多く (Becker 1983, Grivetti 1987)、とりわけ社会的弱者層 (幼児、子ども、妊娠中や授乳中の女性、年配者) にとって重要な栄養源となっている (Lockett *et al.* 2000)。

サヘル地域では今後も野生の有用植物に大きく依存することが予想され、それゆえ長い歴史の中で培われてきた有用植物についての在来の知識は重要性を増すと考えられている (Grivetti and Ogle 2000, Ayantunde *et al.* 2009)。その一方で、近年ではこうした知識が消滅の危機にさらされており、この知識の喪失が将来の世代の有用植物の利用をより困難なものにすると考えられている (Grivetti 1978, Lockett *et al.* 2000, Kalinganire *et al.* 2007)。有用植物の食用としての利用が逡減している理由として、安価な輸入商品が、村落地域のマーケットにも流入し始め、

それによる人々の嗜好の変化が少なからず影響していることと、そしてより深刻な要因として、近年の人口増加と、それに伴う灌木林の消滅が挙げられる (Falconer 1990)。また、若い世代の有用植物に関する知識の欠如や理解不足から起こる野生植物の誤った摂取により、かえって栄養失調や飢餓を加速させる要因にもなっている (Grivetti and Ogle 2000)。

## 2) ザルマ男性が認識する有用植物と利用方法

ザルマ男性が有用植物と認識する野生植物の総数は150種に上った。そのうち上位50種を示したものが表2-11である。特に利用頻度が高い植物は、現地呼称 (学名は括弧内に表示) *Batta* (*Ctenium elegans*)、*Darrey* (*Ziziphus mauritiana*)、*Delligna* (*Combretum nigricans*)、*Gadagui* (*Alysicarpus ovalifolius*)、*Gao* (*Acacia albida*)、*Garbey* (*Balanites aegyptiaca*)、*Kokorube* (*Combretum glutinosum*)、*Kossey* (*Piliostigmareticulatum*)、*Koubou* (*Combretum micranthum*)、*Milia* (*Azadirachta indica*)、*Sabara* (*Guiera senegalensis*)、*Zamtouri* (*Prosopis Africana*) である。これらはいずれも複数の用途がとられており、特に家畜飼料としての利用が多くみられた (表2-11)。各有用植物を詳しく見ていくと、*Garbey* は樹皮、種、根などは整腸剤としての利用がよく知られており、葉は下痢や赤痢の治療薬として摂取され、同様に *Sabara* の葉が特に胃腸の薬として消化不良から赤痢までアフリカ各地で幅広く使われている (Etkin and Ross 1982)。調査地におけるザルマ男性の結果を見ると、薬よりも食料としての用途が目立っており、また家畜飼料としても利用されていた (表2-11、図2-28)。これは *Garbey* が乾季 (11~4月) の食料が希薄な時期に花や実をつける (FAO 1995) ためだと考えられる。また、*Sabara* は薬に次いで家畜飼料としての用途を挙げた回答者が多数を占め、次いで建築材としての利用を挙げていた。ナイジェリア中部では、*Sabara* の葉が家畜の病気 (トリパノソーマ症<sup>4)</sup>) の治療にも使われ

表 2-11 ザルマが挙げた有用植物（上位 50 種）

No	現地呼称	学名	用途				販売の有無
			家畜飼料	建築材	薬	食料 肥料	
1	Baguey	<i>Cadaba farinosa</i> Forsk.	4		5	5	○
2	Ballasse	<i>Commelina Forskalei</i>	19		3		○
3	Batta	<i>Ctenium elegans</i> Kunth	18	18			○
4	Bouboure	<i>Acacia macrostachya</i> Reichenb. ex. DC.	5	1	3		
5	Dani	<i>Cenchrus biflorus</i> Roxb.	11			2	○
6	Darkassa		2		6		
7	Darrey	<i>Ziziphus mauritiana</i> Lam.	13	7	16	17	○
8	Delligna	<i>Combretum nigricans</i> Lepr. Ex Guill. et Perr.	18	1	7	18	○
9	Diney		5		4	4	
10	Dore	<i>Chrozophora senegalensis</i> (L.) A. Juss. ex Spreng.	3		6	2	○
11	Falounfa		4		6	5	○
12	Fantou	<i>Detarium microcarpum</i>	10	1	10	11	○
13	Farka hanga		10	2	10		○
14	Fegui mani		11				
15	Fokou	<i>Corchorus aestuans</i> L.	6			6	○
16	Foubey	<i>Gynandropsis gynandra</i> (L.) Briq.	9		3	6	○
17	Fourkoutou	<i>Jacquemontia tamnifolia</i> (L.) Griseb.	15			1	
18	Gadagui	<i>Alysicarpus ovalifolius</i> (Schum. Et Thonn.) J.Leonard	20		19	3	○
19	Gamssa	<i>Parinari macrophylla</i>	3		8	14	○
20	Ganda Bani/ Dossari	<i>Chamaecrista mimosoides</i> (L.) E. Greene	20		2		
21	Ganda foy /Foy yuttu	<i>Ceratotheca sesamoides</i> Endl.	7		1	9	○
22	Gao	<i>Acacia albida</i> (Del.) Chev.	25		25		8
23	Garbey	<i>Balanites aegyptiaca</i> (L.) Del.	15	6	19	20	○
24	Goulloume		4	6	2	1	○
25	Guirti	<i>Indigofera astragalina</i> DC.	9	3	12	1	○
26	Hassou	<i>Boscia angustifolia</i>	7	1	8	4	○
27	Incomdi		5		4	4	○
28	Kangaou	<i>Hyphaene thebaica</i> (L.) Mart.		2	4	3	7
29	Koh	<i>Adansonia digitata</i> L.	5		6	8	○
30	Kokorube	<i>Combretum glutinosum</i> Perr. Ex DC.	18	15	20		
31	Kongo Zara	<i>Merremia pinnata</i> (Hochst. ex Choisy) Hallier	9		5		○
32	Kossey	<i>Piliostigmareticulatum</i> (DC.) Hochst.	20	4	20	21	○
33	Koubou	<i>Combretum micranthum</i> G. Don	8	16	18	4	○
34	Koulloume	<i>Eragrostis tremula</i> Hochst. Ex Steud.	13	14	4		○
35	Louley	<i>Sclerocarya birrea</i>	5		5	6	○
36	Markou	<i>Zornia glochidiata</i> Reichb. ex DC.	15				○
37	Massa	<i>Tephrosia purpurea</i> (L.) Pers.	7		6		
38	Millia	<i>Azadirachta indica</i>	9	8	26	12	○
39	Moufa	<i>Annona senegalensis</i> Pers.	8		13	11	○
40	Namari	<i>Bauhinia rufescens</i>	7		8	1	○
41	Sabara	<i>Guiera senegalensis</i> J. F. Gmel.	21	18	28	2	○
42	Sagaye	<i>Calotropis procera</i> (Ait.) Ait. f.	9	1	6	2	
43	Sayi Kaina		3		2	7	○
44	Sinsane		6		11	1	○
45	Soubou gna	<i>Andropogon gayanus</i> Kunth	8	8			○
46	Soubou Kirey	<i>Schizachyrium exile</i> (Hochst.) Pilger	13	1			○
47	Soubou Koirey	<i>Schoenofeldia gracilis</i> Kunth	13	3			○
48	Tchourche		9		1	7	
49	Tondi Fara	<i>Gardenia sokotensis</i> Hutch.	2		8		
50	Zamtouri	<i>Prosopis Africana</i>	21	9	24		

複数回答、数字は各植物の名前を挙げた人の数 [学名は三浦 (2011)、Etkin and Ross (1982) を参照]

ている (Atawodi *et al.* 2001)。Darrey は、乾季 (11 ~ 2 月) に林檎に似た味の小さな実をつけ (Becker 1983)、採取された実は市場などでも売られている。ヨツバナカズラ属シクンシ科

<sup>5</sup> (*Combretum*) の Delligna、Koubou、Kokorube はつる性あるいは低木状の木本植物で、世界の熱帯地域に約 250 種が分布しており、熱帯アフリカでは 10 種以上の種が民間薬として利用さ



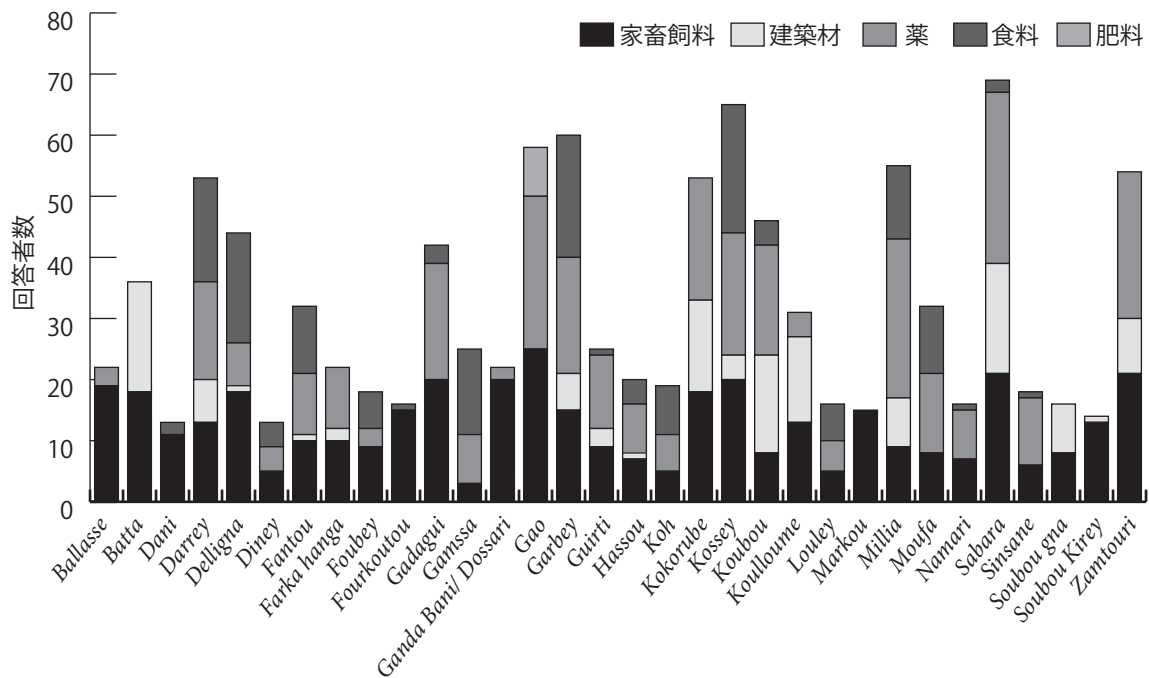


図 2-28 主要有用植物の用途（ザルマ男性）

れている（堀田 2002）。*Koubou* の葉は抗糖尿病の効果があることが科学的にも証明されており（Chika and Bello 2010）、ザルマ男性の回答の約 4 割が薬用としての利用であった（図 2-28）。*Delligna* はゴム（*Gum Arabic*）の原料で、食料として摂取されている。ゴムの収穫は乾季（11～12月）で（FAO 1995）、乾季の重要な現金収入源ともなっている。調査地の女性の証言によれば、*Delligna* は食料というより美容と健康のために摂取されている。ザルマ男性の回答では *Kokorube* の利用で最も多いのは薬用であるが、他の西アフリカ諸国（マリ、コートジボアール、セネガルなど）においては葉が黄色の染料として広く利用されている（PROTA 2005）。*Gao* の用途で最も多かったのが、薬と家畜飼料であるが、肥料という回答も目立っていた。これはフルベの回答にはなかったものである。エチオピア東部の高地においても *A. albida* 周辺のトウモロコシ（*Zea mays* L.）やモロコシ（*Sorghum bicolor* L. Moench）の収穫はそれ以外の場所と比較して平均して 56% 高くなっていることが報告されており、薪炭材や家畜飼料としても広く活用されている（Poschen 1986）。*Milia* は調査村落や村周辺でよく見られる木本の一つであ

る。乾燥に強く、成長も早いことから多くの家庭の敷地内に植樹され、居住空間に木陰を提供する貴重な木本である。また現在でも *Milia* の枝は伝統的な歯ブラシとして使用されているほか、葉を煎じた水を目薬や喉の薬にするなど薬用としての使い道が調査結果からも明らかになった。村や村周辺に多く自生する植生のためか、ザルマの使用がフルベのそれを大きく上回っていた。さらに害虫駆除の効果も持ち合わせているため、高価な農薬を購入できないサヘル地域の農民にその効果を伝え、普及する活動が地域開発支援の一環としてとられているが（Ahmed and Grainge 1986）、その加工に手間がかかることや市販の農薬ほど効果が見込まれないといった理由で、農薬としての利用は対象地域の人びとからは聞かれなかった。

*Zamtouri* の種は、多くの地域で多岐に渡って使用されている。種子は調味料として、また新葉や新芽は乾季の終わりの貴重な家畜飼料、枝や幹は良質の薪や建材として人々に認識されており、葉や木の皮、根は頭痛薬など痛み止めとして使われている（Maydell 1986）。しかし、調査地のザルマ男性の用途は食料と家畜肥料、建築材に占められており、薬用としての用途は見

表 2-12 フルベが挙げた有用植物（上位 50 種）

No	現地呼称	学名	用途				販売の有無
			家畜飼料	建築材	薬	食料	
1	Anza gna		7		9	4	○
2	Baguey	<i>Cadaba farinosa</i> Forsk.	2		2	2	○
3	Ballassa	<i>Commelina Forskalei</i>	17			2	○
4	Batta	<i>Ctenium elegans</i> Kunth	24	16	1		○
5	Bossey		3		2	3	○
6	Borbotto	<i>Pennisetum pedicellatum</i> Trin.	10	1	3	2	
7	Dagna		10	5	7	3	○
8	Dani	<i>Cenchrus biflorus</i> Roxb.	18		1	1	○
9	Darrey	<i>Ziziphus mauritiana</i> Lam.	25	3	23	30	○
10	Delli gna	<i>Combretum nigricans</i> Lepr. Ex Guill. et Perr.	21	8	10	16	○
11	Diney		6	1	4	5	○
12	Doum		2			2	○
13	Fantou	<i>Detarium microcarpum</i>	14	2	15	15	○
14	Farka Hanga		14	6	14		○
15	Foubeye	<i>Gynandropsis gynandra</i> (L.) Briq.	3		1	3	○
16	Fourkoutou	<i>Jacquemontia tamnifolia</i> (L.) Griseb.	8				
17	Gadidji	<i>Alysicarpus ovalifolius</i> (Schum. Et Thonn.) J.Leonard	20		10	1	○
18	Gamma	<i>Neocarya macrophylla</i> (Sabine) Prance	10	3	9	10	○
19	Ganda Bani	<i>Chamaecrista mimosoides</i> (L.) E. Greene	7				○
20	Ganssi	<i>Panicum laetum</i>	5			4	○
21	Gao	<i>Acacia albida</i> (Del.) Chev.	37	8	31		○
22	Garbey	<i>Balanites aegyptiaca</i> (L.) Del.	24	5	20	24	○
23	Guitti-gna	<i>Indigofera astragalina</i> DC.	13	4	11	4	○
24	Harandan gna		9				○
25	Hamane	<i>Leptadenia hastata</i>	2		2	2	○
26	Hassou gna	<i>Boscia angustifolia</i>	18	2	6	5	○
27	Hintchinya Kangué	<i>Mitracarpus scaber</i> Zucc.	6	1			
28	Kaney	<i>Citrullus lanatus</i> (Thunb.) Matsum. & Nakai	5			3	
29	Kassarwa	<i>Aristida mutabilis</i> Trin. et Rupr.	6	7			○
30	Koh	<i>Adansonia digitata</i> L.	3		4	6	○
31	Kokorbe	<i>Combretum glutinosum</i> Perr. Ex DC.	26	19	22	1	○
32	Kossoye	<i>Piliostigma reticulatum</i> (DC.) Hochst.	19	8	18	11	○
33	Koubou	<i>Combretum micranthum</i> G. Don	18	21	11		○
34	Koulloum	<i>Eragrostis tremula</i> Hochst. Ex Steud.	35	10	4		○
35	Louley	<i>Sclerocarya birrea</i>	10		9	10	○
36	Markou	<i>Zornia glochidiata</i> Reichb. ex DC.	27		1		○
37	Milliya	<i>Azadirachta indica</i>	1	4	5		
38	Moufa	<i>Annona senegalensis</i> Pers.	2		2	4	○
39	Namari	<i>Bauhinia rufescens</i>	5	2	5	1	○
40	Patouki		3	1		3	○
41	Sabara	<i>Guiera senegalensis</i> J. F. Gmel.	27	34	34		○
42	Sediya gna	<i>Ficus thonningii</i> Blume	1	1	1	1	
43	Sinsan		7	2	8	1	○
44	Soubou kirey	<i>Schizachyrium exile</i> (Hochst.) Pilger	5				○
45	Soubou koirey	<i>Schoenofeldia gracilis</i> Kunth	3				○
46	Soubou gna	<i>Andropogon gayanus</i> Kunth	28	22			○
47	Tchakaye gombo	<i>Borreria radiata</i> DC.	6				○
48	Tchangarssa		5	2	4	1	
49	Yololo		2		2	2	
50	Zamtouri	<i>Prosopis Africana</i>	29	24	23	1	○

複数回答、数字は各植物の名前を挙げた人の数 [学名は三浦 (2011)、Etkin and Ross (1982) を参照]

られなかった (図 2-28)。

### 3) フルベ男性が認識する有用植物と利用法

フルベ男性が認識する有用植物の総数は 125

種でザルマのそれより下回っていた。そのうち上位 50 種を表 2-12 に記した。それらの中にはザルマ男性の回答にはない植物 (16 種) も多く含まれていた。現地呼称だけでは学名を

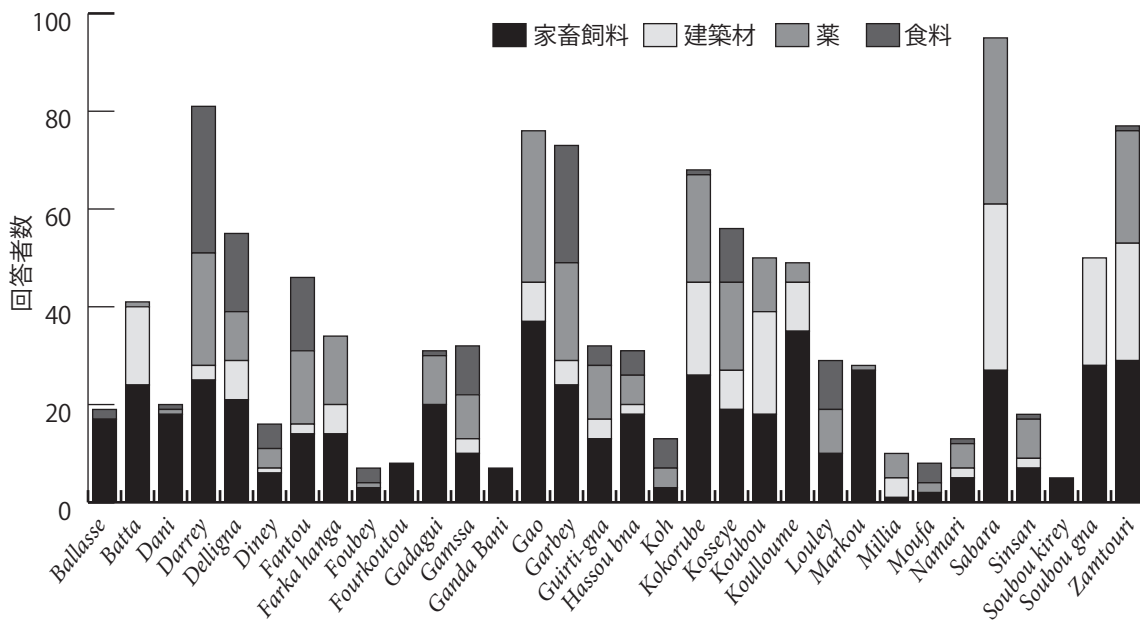


図 2-29 主要有用植物の用途（フルベ男性）

同定できない植物も含まれているが、その用途を見ると大半が家畜飼料であり（表 2-12、図 2-29）、また同じ植物を挙げていても利用頻度や用途が異なるものも見られた。特に利用頻度が高い植物は、現地呼称（学名は括弧内に表示）Batta (*Ctenium elegans*)、Darrey (*Ziziphus mauritiana*)、Delligna (*Combretum nigricans*)、Gao (*Acacia albida*)、Garbey (*Balanites aegyptiaca*)、Kokorube (*Combretum glutinosum*)、Kossey (*Piliostigma reticulatum*)、Koubou (*Combretum micranthum*)、Koulloum (*Eragrostis tremula*)、Markou (*Zornia glochidiata*)、Sabara (*Guiera senegalensis*)、Soubou gna (*Andropogon gayanus* Kunth)、Zamtouri (*Prosopis Africana*) で、その半数以上が家畜飼料として利用されていた（表 2-12、図 2-29）。Koulloum、Markou、Soubou gna はザルマ男性の回答では上位に挙げられなかった植物で、いずれも家畜飼料としての利用が際立っていた（図 2-29）。Valenza and Diallo (1972) によれば、年間降水量 520 mm 以下のセネガル北部の *Andropogon ampectens* と *Zornia glochidiata* が優占する 2.5 ha（乾季なら 7.5 ha）当りの牧草地で、雨季なら 200 ~ 300 kg の家畜に必要な栄養を補うことができる。これら飼料用の植物は村の定期市や首都ニアメにおいて

も一年中売られている。雨季は新鮮な状態で、乾季には乾燥した状態で販売されており、家畜を持たないザルマにとっても重要な現金収入源となっている（Lamers *et al.* 1995）。

#### 4) ザルマとフルベが認識する有用植物の比較

これまで見てきたように、ザルマ、フルベが認識している有用植物は日々の生活に欠かせない薪や食料としてばかりでなく、薬や建築材、家畜飼料、現金収入源として幅広く利用されており、その総数は、ザルマ、フルベともに 100 種を超えていた。

有用植物の採集場所（図 2-30）は、両者ともに灌木林が最も大きな割合を占めているが、それぞれの生活圏を鑑みれば、年間を通じて家畜とともに牧草を求めて移動する生業形態（図 2-4）を持つフルベが、採集場所の 9 割近くを灌木林で占めるのは頷ける。それに対して、ザルマは台地や沼地、居住地周辺など、フルベほど移動範囲は広くはないが、様々な場所で有用植物を採集していることが分かる。またそれぞれの有用植物の用途について見ると、どちらも家畜飼料としての用途が最も多く、次いで薬、ザルマは次に食料として、フルベは建築資材としての利用を上位に挙げていた（図 2-31）。

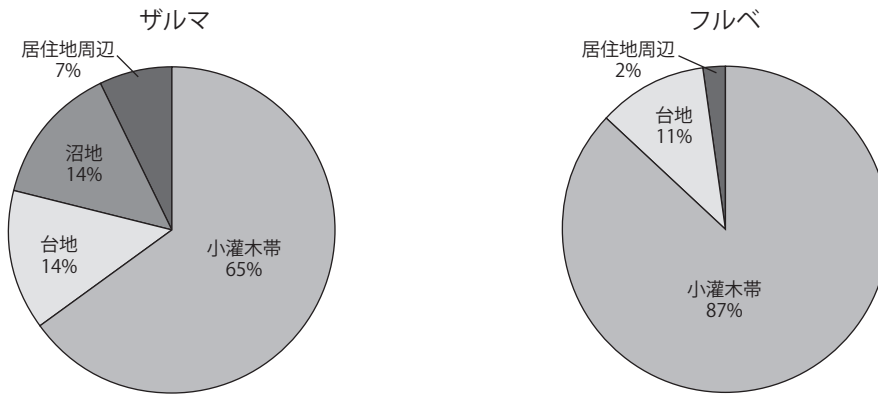


図 2-30 ザルマ男性とフルベ男性の有用植物の採集場所 (100%は総有用植物種数)

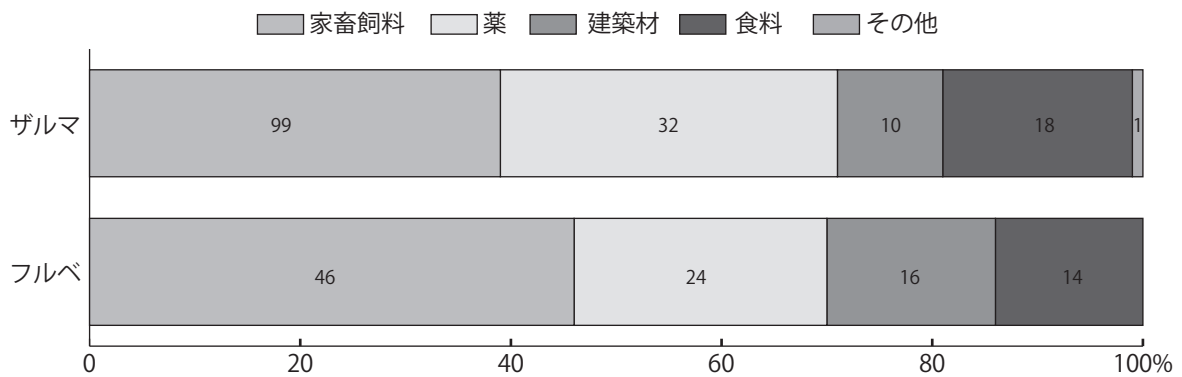


図 2-31 ザルマ男性とフルベ男性の有用植物の用途 (グラフ内数字は回答数)



図 2-32 seko を編んでいる様子



図 2-33 seko でできたフルベの家

移動性の高いフルベ世帯の住居は、*Soubou gna* (*Andropogon gayanus*) や *Batta* (*Ctenium elegans*) といったイネ科の多年草を編んでできる *seko* (図 2-32) を用いて家を建てる (図 2-33)。しかし、サヘルのできる気候条件下において草製の家屋の老朽化は早く、2~3年という早いサイクルで *seko* を張り替えなければならない。それゆえ草製の家屋に居住する多くのフルベにとって、有

用植物の建築材としての役割が上位に挙げられるものと推測できる。気温が 50 度近くまで上昇する乾季の終わり (3~5月) においては通気性の良い草製の家屋は快適である。しかし、気温が 20 度を切り砂塵混じりのハルマッタンが吹く乾季の始めから中旬 (11~2月) にかけては、昼間の熱を吸収した日干しレンガのザルマの家屋の方が、気温の下がる夜間から明け

方にかけて程よく暖かく快適である。近年は、フルベの中にも定住し、農耕を営む世帯が増えているため、壁は雨風を凌ぐのに優れた日干しレンガ、屋根のみを草製にする農牧折衷型の家屋に切り替える世帯も見られ、ザルマの世帯でもフルベのような草製の家屋に好んで居住する世帯も徐々に増えてきている。

### 5) ザルマの性差による有用植物の利用法の相違

ザルマ女性が挙げた有用植物のうち特に回答数が多かったのは *Garbey* (*Balanites aegyptiaca*)、

*Darey* (*Ziziphus mauritiana*)、*Milia* (*Azadirachta indica*)、*Fantou* (*Detarium microcarpum*)、*Gao* (*Acacia albida*) であった (表 2-13、図 2-34)。有用植物を用途別に見ると、薬、食料としての利用だけで 8 割を占めていた。薬としての利用で目立つのは *Garbey* で、ザルマ男性の用途と同じく樹皮、種、根などは整腸剤としての利用され、特に葉は下痢や赤痢の治療薬として摂取されていた。食料として採取されている木の実などは、女性や子ども達によって採取され、市場でも売られている。また、日常の食事のソースの原料となる *Koh* (*Adanosonia*

表 2-13 ザルマ女性が挙げた有用植物 (上位 33 種)

No	現地呼称	学名	用途							販売の有無	備考	
			家畜飼料	建築材	薬	食料	調味料	燃料	その他			
1	<i>Bangi</i>	<i>Cadaba farinosa</i> Forsk.			4	2					○	薬 (葉・腹痛) / 食料 (葉)
2	<i>Boy</i>				3	7					○	
3	<i>Célia</i>	<i>Ficus thonningii</i> Blume			6	4			1		○	薬 (下痢止め)
4	<i>Darey</i>	<i>Ziziphus mauritiana</i> Lam.		17	18	27					○	薬 (腹痛)
5	<i>Deri nya</i>	<i>Combretum nigricans</i> Lepr. Ex Guill. et Perr.				13			8		○	
6	<i>Fantou</i>	<i>Detarium microcarpum</i>			21	23			1(日陰)		○	薬 (樹皮・腹痛)
7	<i>Farouka hanaga</i>		2	1	3						○	
8	<i>Gamssa</i>	<i>Parinari macrophylla</i>			6	10					○	実 (食料)・薬 (下痢止め)
9	<i>Ganda baani</i>	<i>Chamaecrista mimosoides</i> (L.) E. Greene	1		7						○	
10	<i>Gao</i>	<i>Acacia albida</i> (Del.) Chev.		16	15				4		○	
11	<i>Garbey</i>	<i>Balanites aegyptiaca</i> (L.) Del.			25	29	19		1(石鹼)		○	食料 (葉・実)
12	<i>Girti</i>	<i>Indigofera astragalina</i> DC.			8						○	
13	<i>Hanamou</i>				1	9					○	薬 (食料)
14	<i>Hassu</i>	<i>Boscia angustifolia</i>			3	3					○	
15	<i>Jey jey</i>					5					○	
16	<i>Kangaou</i>	<i>Hyphaene thebaica</i> (L.) Mart.				7			1		○	ござの材料 (葉) 実を潰して飲むと足腰が丈夫になる
17	<i>Koh</i>	<i>Adansonia digitata</i> L.			3	4					○	腹痛 (樹皮・葉) / ひび割れ
18	<i>Kokorbey</i>	<i>Combretum glutinosum</i> Perr. Ex DC.	1		10				1		○	樹皮 (腹痛)
19	<i>Kosey</i>	<i>Piliostigma reticulatum</i> (DC.) Hochst.			17	16					○	
20	<i>Koubou Hottou</i>	<i>Combretum micranthum</i> G. Don	1		3	3			2		○	食料 (葉)
21	<i>Kühottou</i>				1	5					○	食料 (実・葉)・腹痛 / 母乳がよくなる
22	<i>Louley</i>	<i>Sclerocarya birrea</i>			8	12					○	
23	<i>Milia</i>	<i>Azadirachta indica</i>			19	17			9	1	○	
24	<i>Moufa</i>	<i>Annona senegalensis</i> Pers.			11	14			1		○	
25	<i>Namari</i>	<i>Bauhinia rufescens</i>	6		16	1					○	食料・薬 (葉)
26	<i>N'comdi</i>				2	3					○	薬 (根)
27	<i>Sabarey</i>	<i>Guiera senegalensis</i> J. F. Gmel.	4	7	9	1			1		○	
28	<i>Say</i>				1	6					○	実
29	<i>Subu nya</i>	<i>Andropogon gayanus</i> Kunth	2	6							○	Seko の材料
30	<i>Tamarouza</i>				1	3				1	○	樹皮 (薬)
31	<i>Tassa</i>	<i>Grewia flavescens</i> Juss.			3	4					○	腹痛 / 実 (食料)
32	<i>Tokai</i>	<i>Diospyros mespiliformis</i>			2	3					○	
33	<i>Zamtouri</i>	<i>Prosopis Africana</i>	4		5				2		○	樹皮 (薬)

\*複数回答、数字は各植物の名前を挙げた人の数 [学名は三浦 (2011)、Etkin and Ross (1982) を参照]

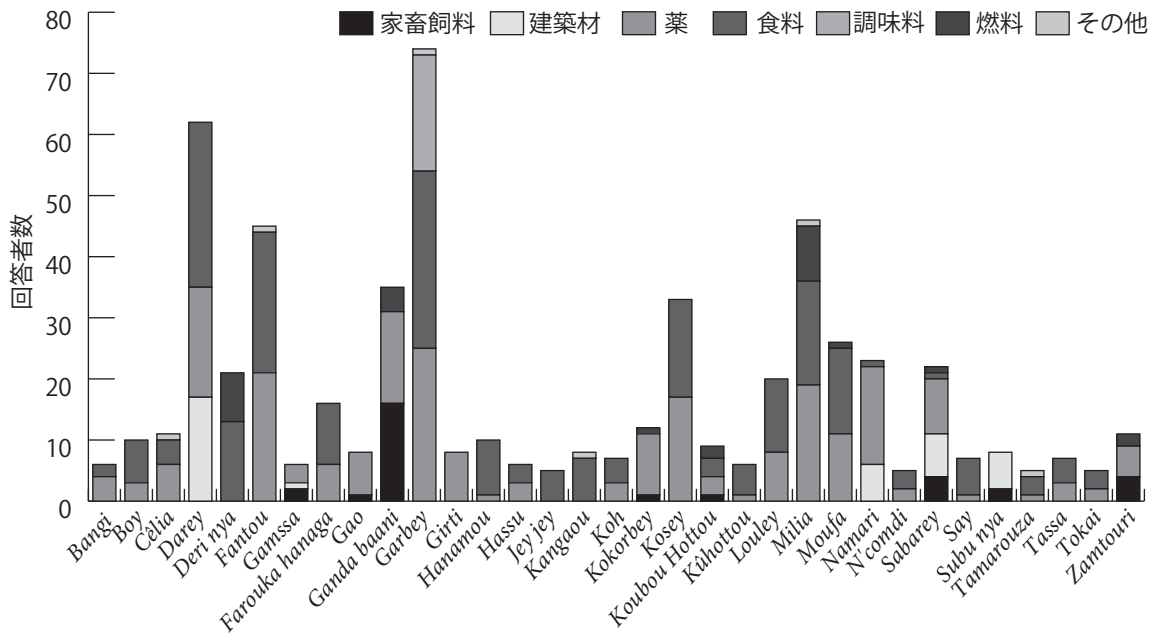


図 2-34 主要有用植物の用途（ザルマ女性）

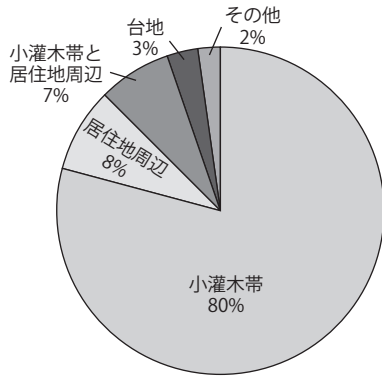


図 2-35 ザルマ女性の有用植物の採集場所（100%は総有用植物数）

*digitata*) や *Foku* (*Corchorus aestuans* L.)、*Ganda foy*<sup>6</sup> (*Ceratotheca sesamoides* Endl.) の葉は女性だけに聞かれた回答であった。

男性の用途で最も多かった家畜飼料としての

利用の回答数は7件を数えるのみである。また男性の回答にはなかった燃料、調味料という、農村の女性の生活と密接に結び付いた用途が見られた。また灌木の根や塊茎などは、様々な薬として使用されるだけでなく、干ばつが起きた際には貴重な水源として利用される場合もある (Falconer 1990)。サヘル地域で神聖な木として知られるバオバブも、平常時においては、葉がソースとしてよく使われているが、干ばつや飢饉の際には、その根も重要な栄養源として摂取された (Becker 1983)。調査地においては、*Garbey* (*Balanites aegyptiaca*) や *Gamssa* (*Neocarya macrophylla*) と呼ばれる木の実を採取し、危機の際の飢えを凌いだという回答が数多く聞かれ



図 2-36 市場で売られる木の実 (Tokay)



図 2-37 市場で売られるゴム (Dellinya)

た。

有用植物の採集場所を見ると、小灌木林が8割を占めていた(図2-35)。これはザルマ男性(65%)よりも高い。日々の薪を集めるために多くの女性は村から遠く離れた灌木林へ時間をかけて徒歩で出かけなければならない、その距離は年々長くなっているという回答が聞かれた。また比較的時間に余裕がある乾季も、男性の多くは国外へ出稼ぎへ出てしまうため、村に残された女性は寸暇を惜しんで食料となる木の実や葉を集め、時にはそれを市場などで売るなどして現金収入を得ていた(図2-36、2-37)。

## 第2節 ニジェール中南部村落における人々の暮らしと生業

### 1 フィールド調査の概要

現地調査は主に質問表を用いた聞き取り、村人との対話、村落に滞在しての参与観察により行った。聞き取りには、村人が話すハウサ語を中心に、補助的にフランス語を用いて現地人アシスタントとともに行った。また、法律、行政、地域事情、歴史についての聞き取りは、テッサウア県農業事務所員、同県畜産事務所員、同市役所の職員、同市小学校の教諭からの聞き取りと現地資料の収集により行った。現地調査は4回に分けて行い、2011年8月15日から11月13日(第1回)、2012年1月25日から3月(第2回)、2012年6月から7月(第3回)、2012年11月から12月(第4回)に行った。調査村の村人は農業暦に合わせて雨季の始まりである6月から乾季の終わりである翌年の5月までを1年と捉えているため、本調査においても6月から翌年の5月までを1年と考えることとした。例えば、2012年とは2012年6月～2013年5月を示す。現地語であるハウサ語による固有名称は聞き取りをもとにローマ字で記録したが、補助的に『ハウサ語小事典』(松下1988)を参照した。

ハウサの暮らしと生業についての現地調査の

対象はT村とN村の各村25世帯ずつの合計50世帯であり、世帯主である男性から情報を収集した。調査対象世帯は、世帯の経済状況により調査結果に差異が出る可能性があるため貧困層、中間層、富裕層に偏りがないように抽出した。回答者の平均年齢(標準偏差)は、T村は56歳(8.5)、N村は59歳(9.9)であった。

ハウサの暮らしを理解するために、両村の基礎情報(立地、村落形態、インフラ、公とも施設、人口、世帯数、村長に関する情報)、村人に関する情報(年齢、家族構成、言語、婚姻、命名式に関する情報)、イスラームに関する情報(礼拝と巡礼、ラマダーン、タバスキ)、住居、食事、女性の仕事、教育に関する情報を収集した。また、ハウサの生業については、農耕に関する情報(畑の筆数、取得方法、栽培方法、収穫の量、換金作物の売却など)、牧畜に関する情報(家畜の種類と数、飼養の方法、売買の状況など)、採集(採集の有無、採集の時期など)、野菜栽培(栽培作物、収穫作物の消費、換金など)、漁労(時期、方法、収入など)、その他の現金獲得活動(賃労働、小売り、食品の行商、縄編み、理髪、住居の建設、鍛冶屋、薪売り、家畜飼料売り、服の仕立て屋、運搬など)に関する情報を収集した。

### 2 調査村におけるハウサの暮らし

対象村のT村とN村の村人はハウサであり、両村内にフルベやザルマは居住していなかった。ニジェール西部では、ザルマやフルベなどの複数民族が混住する村落が存在するが、本調査地では村落における複数民族の混住は見られなかった。村人は居住する村落の出身者ばかりであったが、女性の中には婚姻により近郊のハウサの村落から移り住んで来た者もいた。両村の村人のほとんどはイスラーム教徒であり、キリスト教徒は見られなかったが、少数のアニミズム信者がいるようであった。村人はマッカの方向に向かってイスラームで義務付けられている1日5回の礼拝を行っていた。礼拝は、男性は村内のモスクや村人の溜まり場において同刻

に集団で、女性は自宅にて個人単位で行っていた。金曜日は集団礼拝（サラート・ル・ジュマア）の日であり、男性は村内で最も大きなモスクにて同刻に集団で、女性はモスクまたは自宅で礼拝をしていた。両村には陸路でマッカ（メッカ）に巡礼に行った老人男性（*El hadji*）が少数おり、これらの男性は途中で労働に就きながら複数年かけてニジェールからチャド、スーダン、エチオピア、ジブチ、イエメンを通過してマッカに巡礼に行っていた。マッカに巡礼した女性（*El hadjiya*）は調査村にはいなかった。なお、現在ではニアメまたはナイジェリアのカノから航空機を利用して巡礼に行くのが一般的であり、陸路で行く者はいないという。村人はハウサ語を用いて会話をしていたが、読み書きのできる村人は少数であった。公用語のフランス語を話せる村人はごくわずかであり、村人は数字と *bonjour*（こんにちは）、*merci*（ありがとう）などの簡単な挨拶を話す程度であった。

1) 家族構成、婚姻、命名式

ニジェールでは一夫多妻制（polygame）が採用されており、男性は妻を4人まで娶ることができる。ただし、トゥアレグ、カヌリ、トゥーブーは一夫多妻制を採用していない。T村の調査世帯では、妻が4人または3人の世帯が1世帯ずつ、2人の世帯が10世帯、1人の世帯が13世帯であった（表2-14）。N村の調査世帯では、妻が4人の世帯はなく、妻が3人の世帯が2世帯、2人の世帯が12世帯、1人の世帯が11世帯であった（表2-14）。子どもの数は、一世帯あたり平均してT村では8.0人、N村では8.4人であった（表2-14）。多民族間や異なる氏族のハウサ間の婚姻も行われており、女性は村

外の男性と婚姻した場合には夫の居住する村に移り住んでいた。子の氏族は父系優先となっていたが、調査村では他民族間の婚姻は見られなかった。収穫が終わり農閑期となる11月頃からは、婚姻が多く行われる時期となっていた。婚姻は、早い者は男性は17歳から、女性は14歳からしていた。女性は早い者で14歳で初産をし、乳児を抱えながら家事をする者もいた。独身男性の中には婚姻をしたいが婚資（婿が嫁の親族に対して送る現金や財産）を準備できない者がおり、婚資の準備ができなことが原因で婚期が遅れている男性がいた。婚姻の際、夫は妻に対して婚姻の贈物（マハル）をすることがクルアーン（イスラームの聖典）で定められている。婚資の額は婿の経済状況により異なり、婚資は15～20万 Fcfa が一般的であった。また、現金以外には婿は嫁のために住居や家財道具を準備したりしていた。なお、1973～1974年の大干ばつにより人々が財産を失い婚資を準備できなくなった際には、当時の指導者セイニ・クンチェが婚姻を促すことを目的に婚資を5万 Fcfa にするよう呼びかけたという。結婚式は、男性が妻を娶る度に行われていた。結婚式は嫁の実家で催され、出席した家族、親戚、友人、近隣住民はお祝いとして現金を渡していた。結婚式ではヒツジまたはヤギがマラブー（イスラームの指導者）によって処理された後に調理され、女性たちが共同で料理を準備したり自宅から持ち寄ったコメなどの村人にとっては普段に比べ少し贅沢な食事が出席者に振舞われていたが、食事の場所は男女別々であった。結婚式は音楽や踊りとともに夜中まで続いていた。なお、離婚と再婚は頻繁に行われていた。

子どもが生まれると、生後7日目にイスラ

表2-14 T村とN村の調査世帯の妻と子どもの人数

T村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	平均
妻の人数	2	1	1	1	3	2	1	1	1	2	1	1	2	2	2	1	1	1	2	2	1	0	2	2	4	1.6
子どもの人数	10	11	8	5	24	8	4	4	4	1	11	0	9	7	16	3	7	2	15	12	5	2	10	8	14	8
N村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	平均
妻の人数	3	1	1	2	2	2	1	1	1	2	1	0	2	2	1	2	1	2	2	2	2	2	1	1	3	1.6
子どもの人数	14	7	7	16	4	17	3	2	5	8	6	2	8	17	4	16	11	12	13	7	4	16	4	5	4	8.4

(人)



ムの儀式でありハウサ語で *Suna* と呼ばれる命名式（仏名：baptême）が新生児の両親の自宅で行われ、新生児に名前が授けられていた。命名式は、朝7時頃から行われ、*fatiya* と呼ばれる礼拝を奉げた後に新生児の名が発表されていた。命名式には、家族、親戚、友人、近隣住民が出席し、出席した者は現金あるいは石鹸や布などの物品を新生児の親に渡していた。命名式においてもヒツジまたはヤギがマラブーによって処理され、調理されて参加者に振舞われていた。*fatiya* の前にはナツメヤシ（*Phoenix dactylifera*）の実、コーラの実などが供され、*fatiya* の後には食事が出席者に振舞われていたが、食事の場所は男女別々であった。

## 2) 住居

住居には単一世帯だけが暮らしている場合と家長世帯とその複数の既婚男子の世帯が共同で暮らしている場合があった。敷地内には複数の居住用の家屋があり、家長の家屋、妻の人数分の家屋、世帯によっては子どもの家屋があった。家屋は、日干しレンガを積み上げ粘土で固めて作られており、天井には木材を数本並べ、その上にビニルシートを被せていた。扉と窓にはトタンと木材で作られたものが取り付けられていた（図 2-38）。日干しレンガの家屋は完成度にもよるが5～10年の耐久性があるという。しかし、日干しレンガの壁は雨に打たれると溶けて徐々に薄くなるため、数年が経過すると修復



図 2-38 日干しレンガ造りの家屋

が必要となっていた。2011年は1回の降水あたりの降水量が多かったため、倒壊した家屋がいくつか見られた。敷地は、日干しレンガの壁やトウジンビエの茎などで作られた垣に全ての周囲が囲まれていた。居住用の家屋以外に敷地内には、水浴びをしたり小便をしたりするために柵で囲われた場所、三つ石かまどを置いた屋外の調理場（図 2-39）、水瓶を置いた場所、家畜の夜間停泊場所があった。住居の外にはトウジンビエを貯蔵した穀物倉庫や有機肥料として使うために作物残渣などを溜めた場所があった。住居の敷地内や住居の外には植林されたインドセンダン（*Azadirachta indica*）が多く育っており、女性はその木陰を利用して食事の準備などの家事を行っていた。また、少数ながらバオバブが植林されており、バオバブの葉は乾燥させて食用に用いられていた。

## 3) 食生活

村人の食事はトウジンビエが中心であり、それを餅状や粥状にして食べていた。昼食にはハウサ語で *fura* と呼ばれるトウジンビエを粥状にし、牛乳を混ぜたもの（図 2-40）を調理していた。都市部では *fura* に砂糖を入れることもあるが、調査村では入れられていなかった。多くの世帯では *fura* は2日に1回、午前中に調理されていたが、世帯構成員が多い世帯では毎日午前中に調理されていた。作り置きされた *fura* はヒョウタン（*Lagenaria siceraria*



図 2-39 三つ石かまどを置いた調理場



図 2-40 *fura* を飲む男性



図 2-41 主食の *tuwo*

*var. gourda*) で作った器に保存され、来客があると振る舞われていた。夕食にはハウサ語で *tuwo* と呼ばれる、トウジンビエを粉にして沸騰した湯に入れてかき混ぜて餅状に練り上げたものに、トマト (*Solanum lycopersicum*)、オクラ、バオバブの葉などで作ったソースをかけて食べていた (図 2-41)。収穫したトウジンビエが底を尽いた後はトウジンビエ、モロコシ、トウモロコシ (*Zea mays*) などの穀物をテッサウア市の定期市 (以下、定期市) で購入していた。*fura* はトウジンビエ以外からは調理されないが、主食である *tuwo* はトウジンビエ、モロコシ、トウモロコシ、コメの 4 種類の穀物から調理することができ、その年や時期に応じて安価な穀物を選んで購入をしていた。定期市で売られていたトウモロコシは主にナイジェリアから、コメはタイ、ベトナム、パキスタンなどから輸入されたものであった。朝食は、前日の残りの *tuwo* や *fura* を食したり、村内で行商されている食品を購入して食べていた。トウジンビエの他には、コメ、マカロニ、スパゲッティを食べていたが、現金支出を避けるためにこれらを食す回数は少なかった。特に、村人にとってコメは値段が高いため、多くの世帯ではコメを食す回数は少なかった。村内では肉屋を営む者がヤギ肉を焚き火で焼いており、男性は時折そこで肉を購入して食べていたが、女性や子どもが肉を食べるのは結婚式、命名式などのお祝いごとやタバスキ、ラマダーン明けのお祭りの時

くらいであった。その他には、村内で行商されている小麦粉、トウジンビエ、ササゲなどを粉状にして練って油で揚げたもの、サツマイモ (*Ipomoea batatas*)、キャッサバ (*Manihot esculenta*)、ヤマイモ (*Dioscorea japonica*) を蒸かしたものを食べていた。嗜好品としてはナツメヤシ (*Phoenix dactylifera*) の実、コーラの実、サトウキビ (*Sacc harum officinarum*)、炒ったラッカセイ (*Arachishypogaea*)、ビスケット、飴などを食べていた。村内ではタバコが売られており、少数の村人がタバコを吸っていたが、村内では酒は売られておらず、酒を飲む村人もいなかった。喉が渴いた時には水や *fura* が飲まれ、昼過ぎになると男性たちは村内の溜まり場においてハウサ語で *shayi* と呼ばれるお茶に砂糖を十分に入れて飲んでいていた。なお、フランスの植民地であったため都市部ではフランスパンが路上で売られており都市部住民の常食となっていたが、両村内ではパンが売られていることは稀であった。

多くの世帯では収穫したトウジンビエだけでは 1 年間の世帯の食料を賄うことができず、収穫前の端境期は最も食料事情が悪化し、雨季の農耕も重なり生計が最も辛い時期となっていた。主食となるトウジンビエ、モロコシ、トウモロコシの購入は、定期市または穀物を安価に販売するニジェール政府直営の食料販売所 (OPVN: Office des produit vivrier de Niger vente à prix modéré) にて行われていた。穀物は内容量



図 2-42 tuwo を調理する女性

30、50、100 kg などの食料袋に入ったものが購入されていた。塩、油、砂糖、調味料などの購入は、定期市や村内で小売りを営む者から購入していた。

テッサウア市では毎週日曜日に定期市（グラン・マルシェ）が開催されていた。調査村の男性のほとんどは、食料、衣料品、日用品の購入、家畜の売買、人々との交流を目的に毎週日曜日には定期市を訪れていた。その他、テッサウア市の定期市のみならず、ガザワ（金曜日）、マイジルギ（土曜日）、アギエ（月曜日）などの近郊都市の定期市に行く村人もいた。

#### 4) 女性と子どもの生活

女性は日常では食事の準備（図 2-42）、掃除、洗濯、水汲み、薪の収集（図 2-43）などの家事の全てを担い、朝から晩まで働いていた。世帯によっては、女性は雨季に播種、除草、収穫といった農耕に従事し、野菜栽培ができる T 村では多くの女性がそれに従事していた。ニジェールでは女性一人あたりの出産数は高く、調査村においても一人の女性が 7～8 人の子を出産していた。女子の初等教育の就学率は男子に比べて低く、幼い頃から母とともに家事労働をする女子が多かった。調査村では、母親が家事に多忙であり、また一世帯あたりの子どもの人数が多く、面倒を見切れないことから、兄や姉が 1～3 歳くらいの幼児の世話をしていた。就学前年齢の子ども達は、家事をする母親、兄



図 2-43 薪や作物残渣の収集をする女性

や姉の後をついて回っていた。就学年齢に達した子どもの中には、小学校に就学する子どもと就学しない子どもがいた。また、小学校の就学の有無に関わらず、クルアーン学校（アラビア語のクルアーンを学ぶための学校）に通う子どもがいた。日中に小学校、夕方にクルアーン学校と 2 つの学校に通う子どもは多忙であった。就学していない男子は農耕などの父親の仕事を、女子は母親の家事を手伝ったり、村内での行商を行ったりしていた。

#### 5) 教育

ハウサの各村落には公立の小学校があり、T 村と N 村にも村のはずれに公立の小学校があった。各世帯では、就学年齢に達した全ての子どもを就学させるわけではなく、男子だけを就学させる世帯、長男または次男だけを就学させる世帯、一人も就学させない世帯などがあり、子ども全員を就学させる世帯は稀であった。これは、親が小学校で教育を受ける必要がないと考えていること、農耕や家事の労働力として子どもが必要なことが原因となっていた。T 村の小学校の校長によると、ニジェールの教育政策は初等教育の就学率向上を目指しており、毎年、新年度の開始時期である 10 月には児童の就学を呼びかけているという。

近年は就学率は向上してきたが、就学率向上に向けての村長や世帯主の理解と協力を得ることは難しいと述べていた。ニジェールの初等教



図 2-44 T 村の小学校



図 2-45 授業の様子

育は6年制であるが、学年が上がるにつれ児童数は減少し、特に女子の児童数は減っていた。教室はコンクリート造りであるが教室の数は足りておらず、保護者の協力によりトウジンビエの茎などで作られた仮設の教室が設けられていた(図2-44)。教員の数も足りておらず、T村では4クラスに対して3名の教員で指導を行っていた。教室内の机と椅子も限られおり、児童の人数分の机と椅子はなかった(図2-45)。児童はノート、ボールペン、チョーク、ノートくらいの大きさの黒板、水筒などを持って登校していたが、教科書を購入できる児童は限られており、3~4人で貸し出し用の教科書1冊を使用していた。なお、小学校卒業後にテッサウア市内の中学校へ進学する児童は毎年数名であった。

#### 6) ラマダーンとタバスキ

村人のほとんどがイスラーム教徒である調査村では、ラマダーン(ヒジュラ暦の第9月)明けのお祭り(イード・アル=フィトル)とタバスキ(犠牲祭、イード・アル=アドハー)が最も大きな祭事となっていた。

ヒジュラ暦は純粋な太陰暦で閏月による補正を行わないため、毎年11日ほど早まる。そのため、調査時に入った2011年は8月1日~29日、2012年は7月20日~8月18日であった。ラマダーンの期間中は、イスラーム教徒の義務のひとつである断食(サウム)として、村人は

日の出から日没までの間は飲食を絶っていた。2011年と2012年のようにラマダーンの時期が雨季の農繁期と重なった場合には、飲食を絶って農作業を行うことは肉体的に過酷である。したがって、村人たちは2回目の除草作業を終わらせてからラマダーンを迎えており、ラマダーンの開始後は村人たちは無駄な体力を消費しないように労働は行わず、村内で会話をしたり昼寝をしたりして過ごしていた。ラマダーンが終わると、村人たちはニワトリを捌いたり、コメやササゲのような普段よりも少し贅沢な食事を準備してラマダーン明けを祝っていた。

調査時のタバスキは、2011年は11月7日、2012年は10月26日であった。タバスキはイスラーム教で定められた宗教的な祝日であり、村人は、服を新調し、特別な料理を準備してお祝いをしていた。タバスキでは、各家庭においてウシ、ヒツジ、ヤギなどの家畜が1頭または複数頭捌かれるが、村人にとって家畜は価値が高く、全ての世帯が家畜を捌くことができるわけではなかった。そのため、数名のグループでウシを共同購入して捌くということも行われていた。

なお、ラマダーンの始まりと終わり、タバスキの日は新月の確認によって行われるため、ニジェール国内でも地域間や都市と村落間でラマダーンの始まりと終わり、犠牲祭の日が異なることはままあることである。

### 3 調査村におけるハウサの生業

#### 1) 農耕

ザルマと呼ばれるハウサの主たる生業は農耕であり、T村とN村のハウサは主要自給作物であるトウジンビエやモロコシの栽培を中心に、換金作物であるササゲ、ラッカセイ、ゴマ (*Seasamum indicum* L) を雨季の天水により栽培をしていた。

ニジェールでは、人々の主食となるトウジンビエが主要栽培作物であり、それに加えてモロコシの栽培も行われるが、調査村ではモロコシの栽培量は少なくトウジンビエの畑にわずかに間作される程度であった。

サヘル地域では、換金作物の栽培は、旧宗主国であるフランスによるラッカセイの買い付けが盛んであった1930～1960年代 (Devereux 1993、セン 2000) に始められたと考えられる。聞き取りによると、調査村では換金作物であるササゲ、ラッカセイ、ゴマの栽培は1950年以降にフランスにより導入されたという。換金作物は現金獲得の機会が少ない村人にとって重要であり、換金作物を栽培していない世帯はなかった。それぞれの換金作物の価格は、収穫後すぐの時期は市場に在庫が溢れているため最も低く、その後次第に価格は上がっていく。したがって、収穫後すぐに現金が必要な世帯は価格が低くても売却するが、そうでない世帯は価格が上がるのを待ってから換金作物を売却していた。換金作物の売却は主に定期市で行われていた。

村人の多くは複数の畑を所有しており、それら複数の畑の場所は分散していた。畑は家から離れた場所にあり、村人は収穫物の運搬をする場合を除いては徒歩で畑まで通っていたが、バイクを所有する一部の村人の中には畑までバイクで通う者もいた。畑は遠い場所では村から5

km以上も離れており、村人は徒歩で1時間以上かけて通っていた。村人は相続により畑を取得していたが、村人間で畑の売買が行われたり、金を支払って他人から畑を借りている村人もいた。畑の所有者が死亡すると畑は子である男女に相続されていたが、女子の畑の相続面積は男子の2分の1であった。世帯によっては世帯主の死後しばらくの間は兄弟姉妹で共同で農耕を行う世帯もあった。また、婚姻した息子が父母と共同生活を営む世帯では、親子で共同で農耕をする世帯もあった。畑は借金をするための担保ともなり、畑の使用権を差し出すことにより借金をし、借金の返済により使用権を返還してもらうということも行われていた。サヘル地域では、人口の増加とともに農耕地面積が増加している一方で、一人当たりの農耕地面積は減少していたが (図 1-2)、調査村においても同様の現象が起きていると村人は述べていた。そのため、多くの村人は収穫量を増やすために農耕地面積を増やしたいと考えていたが、調査村に余っている土地はなく、購入や借用以外には農耕地面積を増やす方法がないのが現状であった。土壌肥沃度の回復を目的とした畑の休閑は伝統的には行われていたが、ほとんどの世帯では収穫量が不足しているため全ての畑を耕作しており、休閑は行われていなかった。人口増加とともに相続による畑の細分化が進んでいるため、今後、更に状況は厳しくなると考えられる。

調査村では、耐乾性の高いトウジンビエが最大の栽培面積を占める主要な栽培作物であった。トウジンビエが生育するためには普通の品種で3～4ヶ月の生育期間と月に50mm以上の降水が必要であるが、サヘル地域では年間降水量300mmを下回ることも稀ではない (門村 1989、1992)。豊作年や一部の篤農家を除き、村人にとってトウジンビエは食用であり換金は

表 2-15 農事暦 (トウジンビエの栽培)

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
雨季 // 乾季 ++	///	///	///	///	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++
農作業	播種	間引き・除草 (2回)		収穫			有機肥料の施肥					整地

表 2-16 農作業の分担（トウジンビエの栽培）

	男性	女性	
有機肥料の施肥	○	×	
整地	○	×	
播種	○	○※	※世帯による
除草	○	○※	
間引き	○	○※	
化学肥料の施肥	○	×	
収穫	○	○	

されていなかった。トウジンビエの栽培は、有機肥料の施用、整地、播種、間引き、2回の除草、収穫の順に行われていた（表 2-15）。また、世帯によっては播種後に化学肥料の施用を行う世帯もあった。これらの農作業は男性のみによって行われるものもあれば、男女が共同で行なうものもあった（表 2-16）。Shinjo *et al.* (2008) が報告するように、調査村においても作期は雨季に対応しており、5月あるいは6月に播種し、

10月に収穫していた（表 2-15）。ニジェールの他の地域には、モロコシの栽培が盛んな地域（タウア州マダウア県周辺）もあるが、調査村ではモロコシは栽培量がわずかであるため換金はされず、収穫後はすぐに消費されていた。ササゲ（図 2-47、2-48）は基本的に換金作物であり収穫のほとんどは換金されていた。しかし、世帯によっては自家消費や加工品販売のために、収穫の全てを換金せずに一部を残す世帯もあった。ササゲは単作されることはなく、トウジンビエ畑で間作されていた。ラッカセイも換金作物であり、収穫のほとんどは換金されていた。世帯によっては自家消費、搾油、加工食品の製造のために収穫の全てを換金せずに一部を残す世帯もあった。ラッカセイはササゲと同じく、トウジンビエ畑で間作されていることが多かったが、世帯によってはひとつの畑でラッカセイ



図 2-46 女性が収穫したモロコシ



図 2-47 畑で栽培されたササゲ



図 2-48 女性と子ども達で収穫したササゲ



図 2-49 単作されたラッカセイ

の単作を行っている世帯もあった（図 2-49）。ラッカセイはササゲとゴマに比べて高く換金できる作物であり、多くの村人は現金獲得のためにラッカセイの栽培を行っていた。しかし、ラッカセイは種子の値段が高いため、播種時に種子を持ち合わせていない村人や種子を購入することができない村人は栽培ができていなかった。

テッサウア・コミューンはゴマ（図 2-50）の栽培が盛んな地域であり、全国的にもゴマの産地として有名である。ゴマはササゲやラッカセイと同じく換金作物であり、調査村においてもゴマの栽培を行っている世帯は多かった。ゴマは畑で間作されることはなく、そのほとんどは別の畑で単作されていた。収穫は男性により行われていたが、収穫後の脱穀は女性により行われていた（図 2-51）。ゴマに砂糖を加えて作ったテッサウアのゴマ菓子も全国的に有名であ

り、村内のみならずテッサウア市内の国道沿いのバス停などで旅行者向けのお土産として売られていた。

有機肥料（主に家庭で溜めたウシ、ロバ、ヒツジ、ヤギなどの家畜糞、脱穀後のトウジンビエの穂、作物残渣、その他の家庭ゴミなど）の施用は、農閑期である乾季の 12～2 月に行われていた（図 2-52、2-53）。この時期に有機肥料の施用を行うのは、この時期が農閑期にあたり村人に時間があるため、施用することにより時間をかけて有機肥料が土壌になじみ土地が改良されるからであると村人は述べていた。有機肥料の畑への運搬はウシやロバのトロッコを利用して行われていたが、運搬手段を持たない村人の中には運搬業を営む者に金を払って有機肥料の施用をさせる村人もいた。全ての村人が有機肥料の施用を行うわけではなく、家畜数が少



図 2-50 収穫されたゴマ



図 2-51 女性によるゴマの脱穀



図 2-52 家の前に溜められた有機肥料



図 2-53 有機肥料が施用された畑

ないため家畜糞が手に入らない、畑が遠い、運搬手段がないことを理由に有機肥料の施用を行わない世帯もあった。

5月または6月に雨季が始まると播種が行われるが、播種の前の時期には畑の整地が行われていた。畑の整地の内容は、畑の中にある灌木の伐採、前年のトウジンビエの根の除去であった。灌木の伐採は所有する畑の状況に応じて行われており、灌木の伐採を必要としない畑もあった。前年のトウジンビエの根の除去は、根をひとつひとつ掘り返していく作業であり、この作業をすることによりトウジンビエの生育が良くなるという。しかし、この作業も全ての農民が行っているわけではなく、手間がかかるため行わない農民もいた。なお、石本（2012）は、ブルキナファソ北東部では干ばつ年には収穫直後にトウジンビエの茎などの作物残渣を家畜飼料として集める際に根から掘り起こされるため、干ばつ年の翌年は整地はされないと報告している。

雨季が約3～4ヶ月と短い調査地では、主要栽培作物であるトウジンビエの播種のタイミングは非常に重要である。雨季の始まりが近づくと、村人は熱心にラジオで他の地域の降水情報を聞き取っていた。村人はその年の1回目または2回目の十分な降水があった日の翌朝に播種を行っていた。どのタイミングで播種を行うかは世帯主の判断により決められ、同じ村内でも世帯によっては播種の時期が異なっていた。日常では時間にルーズな村人たちも播種のタイミングには敏感であり、他の仕事や用事の全てに優先して播種を行っていた。播種は主に世帯主である男性や息子により行われていたが、世帯によっては妻や娘を含む一家総出で播種を行っていた。播種には、播種のために保存しておいた前年に収穫したトウジンビエの中で実が大きなものを播種の前に脱穀して用いていた。播種は2人1組で行われ、1人がハウサ語で *songumi* と呼ばれる鍬で播種用の穴を掘り、もう1人が後ろをついて歩き、播種をするという形で作業が行われていた。前者は成人男性によ

り行われ、後者は成人の男女あるいは男女の子どもにより行われていた。播種はトウジンビエの種を親指、人差し指、中指の3本の指で適当に掴んだ量が播種されていた。トウジンビエは畑に条播され、その間隔は1～1.5mであった。このように播種の間隔を広く取り、植栽密度を疎にするのは、作物同士の水分および養分の競合を防ぐためであるという。播種の間隔は畑によって異なっており、村人によると、播種の間隔は農耕地面積の大小や村人の好みにより決まる。なお、播種時の穴掘り作業を成人男性が行うのは、穴掘りは経験に基づいて播種の間隔を考えて行わなければならないためであった。面積が大きい畑を所有する世帯や複数の畑を所有する世帯は、一度に播種が終わらず、その後の雨を待って播種作業を続ける世帯もあった。1回目の播種の後に1週間～10日間雨が降らずトウジンビエが枯死し播種が失敗に終わった場合には、次の雨を待って再播種が行われていた。しかし、再播種はトウジンビエの生育期間の短縮となること、種子の損失となること、再度の労働投資となることから村人は再播種となることを好んではいなかった。また、種子を多めに播種することから、トウジンビエが発芽しないことは稀であるが、鳥やネズミなどによる食害、播種の穴が深すぎた、種子の品質、害虫などが原因で欠株になることがあるという。トウジンビエの播種が終わると、モロコシ、ササゲ、ラッカセイ、ゴマの順に播種がされていた。

トウジンビエの生育期間中に、2回の畑の除草が行われていた。また、除草と同時にトウジンビエの間引きが行われていた。除草を行う目的は、雑草からの蒸散、雑草と作物間の水分と土壌養分の競合を抑制するためである（石本2012）。調査村ではハウサ語で *haywa* と呼ばれる手押し鍬を使用して除草が行われていたが（図2-54、2-55）、ウシやハウサ語で *kamuda* と呼ばれる鍬を使って除草を行う地域もあるという。手押し鍬による除草はサヘル地域ではセネガル、ブルキナファソ北部からニジェールにかけて使用されている（Raynaut and Delville





図 2-54 除草具の haywa



図 2-55 haywa を使った除草

1997)。除草は、雑草の生育状況を見ながら、播種の約 2 週間後と更にその約 2～3 週間後の 2 回に分けて行われていた。雑草が多い年には 3 回の除草が行われることがある一方で、怠けて 1 回の除草しかしない世帯もあるという。1 回目の除草時には雑草は耕地一面に生えるが、2 回目の除草時には雑草はまばらにしか生えない。2 回目の除草後には作物が大きくなり、背丈が高くなるため、日光、水分、土壌養分の作物との競合の上で不利になった雑草の育成は抑制される（石本 2012）。除草は土が軟らかくなる雨の日の翌日に、7 時頃の涼しい時間から 14～15 時頃までの時間帯に行われていた。また、2 回目の除草の際には、トウジンビエの生育の障害となる他の植物の伐採をするという整地も除草と同時に行われていた。除草は主に男性と子ども（男子）の作業であるが、人手が足りない世帯では女性も除草を行っていた。また、除草は賃労働により行われることも多い。

化学肥料の施用が一部の村人により行われていた。化学肥料はテッサウア県農業事務所で購入した場合は 50 kg で 13,500 Fcfa、定期市で購入した場合は 15,000～17,000 Fcfa であり、村人にとっては高額なものであった。したがって、多くの村人は化学肥料を欲しているものの、購入することができないのが現状であった。また、世帯によっては一部の畑のみに化学肥料を施用していた。化学肥料の施用は男性と子ども（ある程度成長した年齢の男子）により、トウジン

ビエの間引きの後と穂が出たときの 2 回に分けて行われていた。施用の方法はトウジンビエの根のそばに 5 cm ほどの小さな穴を掘り、そこに施用をしていた。村人に連れられて、隣接する化学肥料を施用した畑と施用していない畑のトウジンビエの生育の違いを目で確認したが、その生育状況の差は非常に大きく、村人が化学肥料に頼りたくなる理由が理解できた。

トウジンビエの穂が登熟し始めると、当年の収穫を祝ってまずは数本の穂を収穫し、直火で焙って食べていた。この慣習はハウサ語で *tumu* と呼ばれ、全世帯により行われていた。収穫の順序は、ササゲ、トウジンビエ、モロコシ、ラッカセイ、ゴマの順であった。トウジンビエの収穫は穂が登熟し収穫できると判断されると行われ、通常は 10 月初旬に行われる。収穫は生育の良いトウジンビエの穂から始め、生育が遅い穂は後回しにされていた。害虫被害にあったり、生育が悪い穂は家畜の飼料用として畑に残されていた。2011 年のように登熟後に害虫被害が出始めた年や、2012 年のように降水に恵まれて生育が良い年には、これよりも早く収穫が行なわれていた。調査村ではハウサ語で *susa* と呼ばれるトウジンビエの穂の中に入り込む害虫の被害が起こる年があるが、*susa* は収穫すると穂の中からいなくなるため、*susa* が出た年には早めの収穫が行われていた。収穫はトウジンビエの穂の部分のみを刈り、250～300 本の穂をナツメヤシの葉で束ねて（図 2-56）牛



図 2-56 収穫されたトウジンビエと穀物倉庫



図 2-57 トウジンビエの脱穀



図 2-58 トウジンビエの風選



図 2-59 トウジンビエの製粉

車で畑から家まで運んでいた。ウシを持たない世帯は、ウシを持つ親戚に頼んだり、ウシを持つ者に金を払って依頼したり、人力により収穫の運搬を行っていた。

収穫したトウジンビエは1週間ほど乾燥させた後に、脱穀せずに穂のまま手作りの穀物倉庫(図 2-56)に貯蔵されていた。貯蔵したトウジンビエは定期的に1週間分や10日分の消費量を取り出し、女性により脱穀が行われていた。脱穀は、片手でトウジンビエの穂を持ち、反対の手の親指と人差し指で穂の付け根から先端までの穀実をそぎ落とすという方法と(図 2-57)、ビニルシートの上にトウジンビエの穂を置き棒で叩くことにより穀実を落とすという方法で行われていたが、前者の方法が多く用いられていた。脱穀後はトウジンビエの穀実をヒョウタンで作られた容器に入れ、風選することにより実

入りの悪い穀実や小さな穀実を飛散させて良い穀実を選別していた(図 2-58)。脱穀後の穂軸は有機肥料などを溜めた場所に投棄されていた。トウジンビエは製粉すると日持ちしなくなるため、脱穀したトウジンビエは調理をする前に製粉されていた。製粉は女性と子ども(女子)によって杵と臼を使って行われるのが伝統的な方法であり(図 2-59)、多くの世帯がこの方法により製粉を行っていた。しかし、村内には製粉機を使って製粉業を営む村人がおり、それらの製粉小屋で金を支払って製粉する世帯もあった。

調査世帯の2009～2011年の3年間のトウジンビエの収穫束数を尋ねたところ、T村では3年間の平均収穫に大きな差はなかった(表 2-17)。一方で、N村では2010年の収穫が平均83束であったのに対し、2011年は22束であ

表 2-17 T村とN村の調査世帯のトウジンビエの収穫量（束）（2009～2011年、N=25）

T村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	平均
2009年	80	150	25	35	80	79	30	20	60	70	120	30	70	45	60	15	70	40	50	80	35	12	20	150	35	58
2010年	60	120	19	40	60	70	30	35	70	50	100	30	40	35	40	19	40	35	40	60	25	11	12	100	40	47
2011年	50	50	40	45	40	66	25	47	50	60	80	25	35	30	30	25	42	20	50	23	8	11	80	50	40	
平均収穫量	63	106	28	40	60	71	28	34	60	60	100	28	48	36	43	21	45	39	36	63	27	10	14	110	41	48
N村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	平均
2009年	27	30	190	50	20	70	12	20	24	5	200	2	10	60	20	60	43	150	13	150	76	20	65	5	0	53
2010年	50	70	230	100	50	350	38	56	40	55	150	2	30	70	12	100	60	220	100	100	38	15	60	30	50	83
2011年	5	60	110	20	30	60	9	15	1	30	17	2	8	10	2	50	10	25	13	30	3	7	10	17	6	22
平均収穫量	27	53	177	57	33	160	20	30	22	30	122	2	16	47	11	70	38	132	42	93	39	14	45	17	19	53

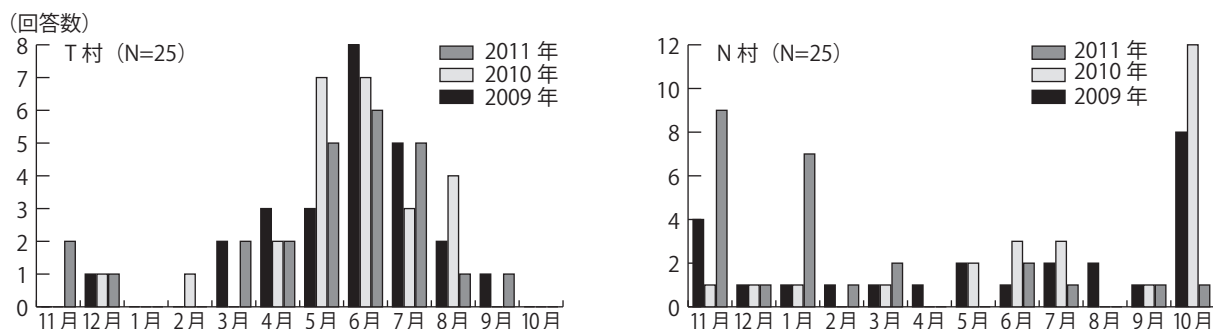


図 2-60 T村とN村でトウジンビエの収穫が払底した月（2009～2011年）

り、年によって収穫に約4倍の差があった（表2-17）。また、図2-60は、2009～2011年の両村の調査世帯のトウジンビエの収穫が払底した月を示したものであるが、T村では、2009～2011年の間に収穫が翌年の収穫月（10月）までに払底しなかった世帯はなかった。T村では収穫が払底した時期が各年とも5～7月に集中しており、この3年間の収穫の状況に大きな変化はなかったと言える。

一方、N村では、2009年と2010年は収穫が収穫月までに払底しなかった世帯が多くあったが、2009年は11～3月という早い段階で収穫が払底した世帯が多かった。以上から、収穫の状況は同じテッサウア・コミュニティ内の村落でも異なること、同じ村落においても年によって収穫の状況が大きく異なること、調査世帯では収穫したトウジンビエだけでは翌年の収穫までの食料を賄えないことが多くあることが明らかとなった。

ササゲの収穫は、トウジンビエの収穫後に主に女性と子ども（男女）によって行われていた。収穫したササゲは3日～1週間の期間、乾燥させていた。収穫後のササゲは濡れると品質が低

下するため、村人は収穫後の予想外の雨に注意を払っていた。ラッカセイも女性により収穫され、その際は素手で根ごと掘り抜いていた。

収穫後に畑に残されたトウジンビエとモロコシの茎の中で太くて丈夫なものは建材利用のために家に運ばれていた。それ以外は家畜の飼料や調理用の燃料としてに家に持ち帰られ、小屋の屋根の上、木材で作った棚の上、倉庫の中などに保管、もしくは放牧されている家畜に食べられないように根元から掘り起こし、根の部分を外側にして立方体に積み上げて保管されていた。石本（2012）は、干ばつの年には自己の家畜飼料としての優先利用を目的として、他者の家畜に食べられないようにするため、畑の中のほぼ全ての作物残渣を集めて保存すると報告している。ラッカセイの茎の部分は、家畜が好んで食べるため穀物袋に入れて保存したり、定期市に持ち込んで売ったりしていた。

## 2) 家畜の飼養

調査村では農耕に加えてヒツジやヤギなどの小家畜の飼養が行われており、T村では20世帯（80%）が、N村では23世帯（92%）が飼

表 2-18 T村とN村の調査世帯が飼養していた家畜の数と頭数

T村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	合計
ウシ (オス)	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5
ウシ (メス)	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ヒツジ (オス)	0	0	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	8
ヒツジ (メス)	0	1	1	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	10
ヤギ (オス)	0	1	2	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	1	1	4	0	0	0	0	2	0	2	15
ヤギ (メス)	0	5	2	0	3	1	1	2	2	4	1	0	0	0	3	2	3	8	2	0	10	0	2	1	2	54
ニワトリ	6	2	0	0	0	0	2	0	3	0	0	30	0	2	6	1	6	5	0	3	0	5	3	3	1	78
N村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	合計
ウシ (オス)	1	1	2	1	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0	3	1	0	0	0	0	0	17
ウシ (メス)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヒツジ (オス)	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
ヒツジ (メス)	0	0	10	4	0	4	4	2	2	0	0	1	0	6	0	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0	38
ヤギ (オス)	4	0	0	0	1	1	2	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	2	0	0	0	1	0	16
ヤギ (メス)	6	1	4	3	2	6	6	2	3	0	4	1	0	0	3	5	4	0	10	6	8	2	0	2	3	81
ニワトリ	4	4	7	1	0	3	0	0	2	0	6	0	0	0	0	5	7	1	0	4	0	0	2	0	10	56

養をしていた (表 2-18)。各世帯は飼養する小家畜の増加を望んでいるため、T村では 74 %、N村では 85 % の小家畜がメスで、ウシの飼養はT村では 5 世帯 (20 %)、N村では 12 世帯 (48 %) が行っていた (表 2-18)。ウシに対する小家畜の飼養頭数の割合は T村では 93 %、N村では 88 % であり、各世帯が飼養する主たる家畜は小家畜であった (表 2-18)。世帯の家畜は世帯構成員により共同で飼養されていたが、家畜の所有権は個人に帰属し、男性だけでなく、女性や子どもも家畜を所有していた。調査世帯にはなかったが、村内にはウマ、ロバ、ネコ、ニワトリやホロホロチョウなどの家禽を所有する世帯もあった。なお、調査地にはラクダも生息するが、両村においてラクダの飼養をする世帯はなかった。

サヘル地域の人々にとって家畜は農作物に比べ高い商品価値を持つ財産 (セン 2000) であり、飢饉の際の担保 (佐々木ほか 2011) となる。このことを表すかのように村人は所有する小家畜のことを「Banque (銀行)」と述べていた。村人が小家畜を飼養する主な目的は、現金を家畜に換えて貯金をすること、家畜の成長により価値を高めること、増殖により財産を増やすことにあった。搾乳ができるメスのヤギからは朝 7 ~ 8 時頃に搾乳が行われていたが、ヒツジからは行われていなかった。小家畜のオスはある程度成育するとメスに優先して換金、また

は結婚式や命名式の際に食用として屠殺されていた。小家畜は、結婚式、命名式、タバスキ、ラマダーン明けのお祭りを除いては、食用を目的として家庭で屠殺されることはなかった。小家畜の出産の間隔は約 1 年であり、ヒツジは 1 回の分娩で 1 頭を産むが、ヤギは多い時で 3 頭出産する。なお、ウシとヒツジは草本を、ヤギは木本を好んで食するため、ヤギは干ばつにより植物の生育が悪い年にも家畜飼料を確保でき、降水量の変動に強い (石本 2012)。これに対して、ウシとロバのような大家畜は主に運搬使役を目的として飼養されていた (図 2-61)。運搬使役に使われるウシとロバはその全てがオスであり、メスが運搬使役に使われることはないことから、調査村で飼われていたウシは 2 頭を除いた全てがオスであった (表 2-18)。運搬使役



図 2-61 ウシを利用した収穫物の運搬

の内容は、収穫作物の畑から家までの運搬、有機肥料の家から畑までの運搬、水の運搬、日干しレンガの季節河川や沼から家までの運搬、換金作物の家から定期市までの運搬、購入した食料の定期市から家までの運搬などであった。大家畜は、小家畜よりも更に価値が高いため、食用を目的として家庭で屠殺されることはなかった。大家畜の出産間隔は約2年であり、1回の分娩で1頭を出産し、繁殖速度は小家畜に比べて遅い。家禽は、主に食肉や卵を獲得するために飼われていたが、売却されることもあった。

収穫が終わり乾季になるとヒツジ、ヤギ、ウシは放牧により飼養されていた。これらの家畜は自分の家を記憶し戻ってくる習性があるため、毎朝解放され、畑の刈り跡で作物残渣などを食し、日が沈む頃に家に戻ってきていた。夜間から朝にかけては家の敷地内に立てられた棒に縄で足を繋がれ、畑に施用するための家畜糞が溜められていた。出産を控えた家畜、出産後間もない家畜とその幼獣、売却前の家畜、購入や贈与により新しく手に入れた家畜、病気の家畜は家の敷地内で飼養されていた。これらの家畜を家の敷地内で飼養する理由は、①出産を控えた家畜の流産の危険性を減らすため、②出産後間もない家畜はその幼獣が放牧に出ることができないため、③売却前の家畜を肥育させることにより売却価格を上げるため、④購入や贈与により新しく手に入れた家畜に飼い主の住居を憶えさせるため、⑤病気の家畜に体力を回復させるためであった。

雨季に入り、播種され、収穫が終わるまでの期間、家畜による作物への食害を防ぐために放牧は禁止されていた。放牧の禁止期間は各村の村長の指示によって決まり、決まりを破って家畜を解放した場合には、罰金を支払うことになっていた。放牧の禁止期間中は、家畜は住居内で飼養されていた(図2-62)。そのため、播種や除草で忙しい時期にも関わらず、雨季には家畜の飼料収集を行わなければならなかったが、飼料収集は主に子ども(男子)の仕事となっていた。また、この時期には家畜飼料の需要が

あるため、家畜飼料を収集して売却するという仕事が増え、村内や定期市で家畜飼料の売却が行われていた。家畜への給水には水道の水を用いて1日に1回行われ、給水をする際には家畜の成育を促すためにトウジンビエの糠が混ぜられていた。石本(2012)は、家畜の肥育飼養と放牧飼養について次のようにまとめた。

家畜の肥育飼養と放牧飼養を比較すると、肥育飼養は摂取カロリーが増加し、消費カロリーが低下するため、相互の間には栄養状態に差が出る。そのため、肥育飼養は成長速度が速くなり、毛の色つやも良くなるため、売値で大きな差がつく。利益を得ることを目的として転売用に購入された家畜は1~2ヶ月と短期間ではあるが、購入者によって肥育飼養されたのち、売却されることが多い。

家畜の売却は、主に定期市において世帯主である男性により行われていたが、N村では毎週金曜日に開かれる村内の小市場においても売却されていた。村人による家畜の売却は、当年のトウジンビエ収穫が底を尽き食料の購入のために現金が必要になった時に行われることが多かった。その他には、結婚式や命名式などのお祝い事で現金が必要になった時、家畜が病気になった時(病死した家畜は食用に用いないため、病死する前に肉屋を営む者に低価格で売却され



図2-62 家の敷地内でのヤギの飼養

ていた)、急に現金が必要になった時などに売却されていた。このように現金が必要になった際に売却される家畜は主に小家畜であり、価値の高い大家畜に優先して換金されていた。売却する小家畜は、必要とする現金の額、家畜の大きさ、オスとメスの違い、出産の状況、成育状況などを考慮して選ばれていた。ヒツジ1頭を売却して、売却金額でより価値の低いヤギ1頭を買い、残りを現金利用するというも行われていた。なお、家禽もメスに優先してオスから売却や消費がされていた。

家畜の購入は、換金作物の売却や出稼ぎにより現金を得た場合に行われていた。その他には、所有する家畜の構成を変更したい場合の買い替え(ヒツジ1頭を売却してヤギ2頭を買うなど)などが行われていた。村人による家畜の購入は売却に比べて少なく、村人は主に繁殖により家畜数を増やしていた。

1年で最も家畜の価格が高騰する時期は、タバスキの時期である。この時期は、ニジェール国内および主な家畜の輸出先であるナイジェリアでも家畜の需要が高まるため家畜の価格が高騰し、この時期での売却を狙って家畜を飼養する村人もいた。なお、タバスキが終わると家畜の価格は下がっていた。収穫前の雨季には、当年のトウジンビエが底を尽くため、多くの人々が食料購入のために現金が必要となり家畜を売却していた。しかし、その時期が当年のタバスキの時期に当たる場合を除いては、家畜の需要が低いためその価格は低い。また、不作の年には、現金を必要として家畜を売却する人々が増えるため、家畜の価格は低下する。

小家畜の価格は、同種で同じくらいの大きさの場合には、ヤギのオス、ヤギのメス、ヒツジのメス、ヒツジのオスという順序で価格が上がっていく。定期市での家畜の価格は時期と家畜の種類、品種、大きさ、オスとメスの違いにより異なるが、ヤギの価格は6,000～25,000 Fcfa、ヒツジの価格は15,000～60,000 Fcfa程度であった。定期市の中には、家畜の取引が行われる場所が設けられており、入場料として

家畜1頭あたり150 Fcfaの支払いが必要であった。場内には複数の仲介人がおり、家畜の所有者の希望売却額と仲介人が予測した時価により売却金額が決められ、仲介人が売買を成立させた場合には購入者が仲介人に手数料として150 Fcfaを支払っていた。なお、隣国のナイジェリアには家畜税が導入されている(池谷2006)が、ニジェールでは家畜税は導入されていない。

### 3) 採集

両村の全調査世帯において、木の実や野草などの野生植物の採集が村落近郊にて女性や子ども(女子)によって行われていた。男性が採集を行う様子は両村では見られなかった。最も採集が盛んな時期は、木の実や野草が最も生育しており、収穫が終わり時間に余裕のある11～12月頃であった。採集は主に手で行われ、使われていた道具はナイフくらいであった。採集した植物は容器に入れて家に持ち帰り、主に*tuwo*にかけるソースの調理に用いられていた。Bernus(1967、1980)は、サヘル地域におけるケル・タマシエックの採集は日常に行われる食料獲得活動であり、食料不足の際には例年以上に重要になると報告している。また、石本(2012)は、採集の食料確保への貢献度は低下しつつあるとし、その理由として食料購入を可能にする出稼ぎや賃労働などが浸透したこと、生活用水・家畜用水や家畜飼料を居住地周辺で賄うことが可能となり移動生活を営む必要性が低下したこと、価値観の変容などが相互に影響しながら進行したためと説明し、他方で現金収入が少なく食料購入が困難な世帯、すなわち、家畜所有数が少なく、出稼ぎや賃労働に従事できる成人男性のいない世帯にとってはいまだに重要な食料獲得手段であると報告している。

### 4) 漁労

T村は季節河川の近くに位置(図1-15)しており、8～11月にかけての漁労が古くから行われていた。村内には2つのグループが組織され、合計74名の青年および壮年男性(20～45



図 2-63 漁労の様子



図 2-64 捕獲した魚



図 2-65 野菜に灌水する男性



図 2-66 野菜菜園にて水汲みをする女性

歳)が漁労を行っていた。漁労は、夕方に、手作りの編み籠の中にトウジンビエの糠を入れて水中に仕掛け、翌朝に捕獲する方法で行われていた(図 2-63)。捕獲した魚(図 2-64)は毎朝 T 村に買い付けに来る商人に買い取られ、捕獲量に応じて 1 日 1 人あたり 500 ~ 5,000 Fcfa を稼いでいた。食料が最も不足する端境期に、漁労による現金収入の手段があることは立地条件を活かした T 村の重要な生業と言える。なお、N 村の近郊には漁労を行うことのできる水資源はなかった。

### 5) 野菜栽培

T 村では同じく季節河川の近くで年間を通じた野菜栽培が行われていた(図 2-65、2-66)。野菜栽培は古くから乾季のみに行われていたが、2007 年に国際連合食料農業機関 (FAO) の

援助により 1 ha の野菜菜園が設置されてからは規模を拡大し、通年を通して行われていた。

村内には 6 つのグループが組織され、合計 134 名(男性 33 名、女性 101 名)が野菜栽培に従事していた。雨季にはキュウリ (*Cucumis sativus*)、トウモロコシ、モリンガ (*Moringa*) などが、乾季にはトマト、キャベツ (*Brassica oleracea*)、レタス (*Lactuca sativa*)、ジャガイモ (*Solanum tuberosum*) などが栽培されていた。収穫した野菜は主に自家消費されていたが、村内のみでの売買もわずかに行われていた。端境期や仕事がない乾季に野菜栽培ができることは漁労と同じく立地条件を活かした T 村の重要な生業と言える。なお、N 村では野菜栽培は行われていなかった。

### 6) その他の現金獲得活動

T村では全回答世帯が、N村では14世帯が世帯構成員による村内での現金獲得活動により収入を得ていた。現金獲得活動の内容は、賃労働、小売り、食品の行商、縄編み、理髪、住居の建設、日干しレンガ作り、鍛冶、薪売り、家畜飼料売り、服の仕立て、運搬などであった。以下、それぞれの現金獲得活動の内容について概観する。

#### 賃労働

両村において主に行われていた賃労働はトウジンビエ畑での除草で、その他には目立った賃労働はなかった。除草は農作業の中で最も肉体的に辛い労働であり、村人たちは口を揃えて除草作業をしたくないと述べていた。賃労働を行う村人の中には自分の村のみならず近郊の村落に日帰りで行って除草を行う村人もいた。賃労働の日当は1,000～2,000 Fcfaであり、前年の収穫が良かった年は賃労働を希望する者が少ないため日当は高くなるという。また、多雨により雑草が多く賃労働の需要がある年にも日当は高くなるという。

#### 小売り

両村には村内に日干しレンガ造りの店舗を構えたり、ござを広げたりして小売りをすることにより現金収入を得ている男性がいた(図2-67)。売られている商品は、コメ・トウジン

ビエ・トウモロコシなどの穀物、調味料、電池・マッチ・サンダル・ペンなどの生活用品、ビスケット・飴・タバコなどの嗜好品、薬などであった。小売りを営む村人は定期市で商品を調達し、転売することにより利益を得ていた。T村には4軒、N村には5軒の店舗があり、それぞれの店舗は成人男性が集まる溜まり場となっていた。

#### 食品の行商

村内での食品の行商は、就学していない小学生くらいの年齢の女子、または成人男性により行われていた(図2-68)。女子により行商されていた食品は、女性が調理した *tuwo*、トウジンビエの粉を練って油で揚げたもの (*baka*)、ササゲを粉にして練って油で揚げたもの (*kosai*)、大豆を粉にして練って油で揚げたもの (*awara*)、小麦粉を練って油で揚げたもの (*fanke*)、ラッカセイを炒ったもの、ゴマを砂糖で固めた菓子、コーラの実、ナツメヤシの実などであった。食品の行商が行われる時間は朝と夕方であり、夕方には主に *tuwo* が夕食用に売られていた。成人男性により行商されていた食品は、サツマイモ、ヤマイモ、キャッサバなどのイモ類を蒸かしたものであり、主に昼から夕方にかけて売られていた。両村では、日曜日には多くの村人が定期市に出かけるため、食品の行商はほとんど行われていなかった。



図2-67 村内で小売りをする男性



図2-68 村内で加工食品を売る少女たち



## 縄編み

縄編みは乾季に出稼ぎに行かないような高齢の男性により主に行われていた（図 2-69）。縄編みはナツメヤシの葉を利用して行われ、編んだ縄は穀物倉庫や家の垣、収穫したトウジンビエを束ねるために利用されたり、販売されたりしていた。伝統的にはござ編みも行われていたが、近年では輸入されたビニル製品が村内でも使われるようになり、ござ編みをする村人はいなかった。縄は1本が25 Fcfa と非常に安価で売られており、縄編みは他の現金獲得活動に比べて獲得できる現金が少ない活動であった。

## 理髪

両村には理髪師として現金収入を得ている男性がいた（図 2-70）。ハウサの男性は子どもから老人までほぼ全ての者が丸刈りであり、これらの理髪師が手動のバリカンで村人の髪の毛を刈っていた。髪の毛を刈る頻度は人により異なっていたが、2週間から1ヶ月に1回髪の毛を刈っていた。料金は1回当たり100～150 Fcfa であった。女性は家族や友人に髪を編んでもらったりするが、普段は子どもから老人まで頭に布を巻いて頭髪を覆っている。

## 住居の建設

住居の建設は、収穫が終わった後の農閑期に最も多く行われていた。この時期に住居の建設が多く行われるのは、雨が降らないこと、収穫

が終わり時間に余裕ができること、季節河川や沼の水を利用して日干しレンガ作りのできる時期であることなどが理由として挙げられる。住居の建設は依頼主が maçon（仏語）と呼ばれる男性職人を1名雇い、作業はその maçon を中心に依頼主とその男性家族や親戚により行われていた。maçon は住居の建設により現金収入を得ており、1日あたり1,500～2,000 Fcfa の謝礼を受け取っていた。家屋の大きさ、資材の調達状況、手伝う者の人数にもよるが、ひとつの小屋を作るには10日～2週間を要していた。村内で maçon として現金獲得をしていた村人は、村内での建設の仕事がなくなると国内外の都市に出稼ぎに行き、建設の仕事に従事していた。

## 日干しレンガ作り

調査村のハウサの住居や塀は日干しレンガで作られており、T村では季節河川において、N村では水溜りで、日干しレンガ作り職人により作られていた（図 2-71）。日干しレンガ作りが行われていた時期は、収穫の後から、T村では季節河川の、N村では水溜りの水が枯れるまでの期間であった。日干しレンガ作り職人は、T村では季節河川の、N村では水溜りの近くの粘土質の土を掘り起こし、それに水を混ぜて長方形の木枠で模ることによって作っていた。完成した日干しレンガはひとつ25 Fcfa で売られていたが、購入後の運搬は購入者が運搬手段を探さなければならなかった。



図 2-69 縄編みをする老人



図 2-70 村内で理髪をする男性

### 鍛冶屋

鍛冶屋として農具などの製作や販売と修理をすることにより現金収入を得ている世帯が、T村には4世帯、N村には2世帯あった(図2-72)。鍛冶屋は世襲制で、鍛冶屋の息子は父親を手伝いながら鍛冶の技術を学んでいた。鍛冶屋を営む世帯は、親子や兄弟などの複数名で仕事に従事していた。鍛冶屋は雨季の除草の時期には、主に除草具である *haywa* (図2-54) の製作や販売、修理をしており、その他には鍬、斧、ナイフなどが製作、販売されていた。*haywa* の価格は1本1,500～2,000 Fcfa であった。鍛冶屋は村内または近隣の村落の村人から注文を受けて農具などを製作、販売していたが、定期市に製品を持ち込んで販売をする者もいた。R村には、村内に鍛冶屋がないため、農具の購入や修理はN村で鍛冶屋に依頼をしていた。なお、鍛冶屋の中にはその技術を生かして、出稼ぎに先でも鍛冶屋を営む者もいた。

### 運搬

両村にはウシやロバを利用した運搬を請け負い現金収入を得る男性がいた。村内では、収穫作物、有機肥料、日干しレンガなどの運搬、定期市で売却するための換金作物や家畜の定期市への運搬、定期市で購入した食料や家畜の村への運搬にウシやロバによる荷車の需要があったが、全ての世帯がウシまたはロバを所有しているわけではなかった(表2-18)。そこで、ウシ

またはロバを所有する村人は、所有しない者から依頼された物を運ぶことにより現金収入を得ていた。運搬の料金は物の大きさや量、届け先までの距離により交渉で決められていた。

### 薪売り

両村には、薪を採集し売却することにより現金収入を得ている男性がいた。薪の採集は、自家消費のみを目的に各世帯において日常でも行われるが、売却を目的に薪の採集を日常的に行うのは一部の村人のみであった。植生の保存が必要な本地域では、森林局によって木の無断伐採は、たとえそれが自己の敷地内の木であっても禁止されていた。木の無断伐採を取り締まる森林官は銃の携行を許されており、森林官に木の無断伐採が見つかった場合には一人当たり2,000 Fcfa の罰金を支払わなければならなかった。したがって、薪売りを行う村人は森林局に税金(荷車1台分で1,000 Fcfa)を納めて許可を得てから木の伐採を行っていた。伐採された木は村内を持ち帰られ、調理用の燃料として利用できる大きさに割られて定期市で売られていた。

### 家畜飼料の販売

両村には家畜飼料を収集し売却することにより現金収入を得ている男性がいた。家畜飼料の販売は年間を通じて行われていたが、特に、雨季中は子ども(男子)によって多く行われてい



図2-71 日干しレンガ作り



図2-72 鍛冶屋

た。雨季中、両村では栽培作物に害を与えないために村長の指示によりウシ、ロバ、ヒツジ、ヤギなどの家畜の放牧が収穫が終わるまでの期間は禁止されていた。この決まりを破った場合には、罰金を支払わなければならないというルールも定めてあった。このように雨季中は家畜の放牧が禁止されるため、各世帯は家畜に給餌する飼料を集めなければならない。そのため、家畜飼料を収集して販売している村人がいた。これらの村人は村内と定期市において、収集した飼料を販売していた。



図 2-73 服の仕立て屋

### 服の仕立て屋

両村には服の仕立て屋を営んで現金収入を得ている男性がいた。服の仕立て屋の多くは日干しレンガで作られた簡易な店を構えていたが、店舗を構えずに木陰で仕事をする者もいた(図 2-73)。村人、特に女性は購入した布を仕立てて服を作るため、村内では服の仕立て屋の需要が常にある。服の仕立て屋は足こぎミシンを使って客から依頼を受けた服を仕立てていたが、客からの依頼は新しい服の仕立だけでなく、破れた服の修理も行われていた。ラマダーンやタバスキの時期には子どもを含む多くの村人が服を新調するため、年間で最も忙しい時期となっていた。

### 7) その他の現金獲得活動についてのまとめ

以上のように、村人は村内において様々な現金獲得活動に従事しており、現金獲得活動には、年間を通じた活動と季節的な活動があった(表 2-19)。多くの現金獲得活動は男性により行わ

れていたが、食品の行商、鍛冶屋、家畜飼料売りなどの活動においては子どもも重要な労働力となっていた。

成人女性は行商する食品の調理をしていたが販売は行っておらず、現金獲得活動における女性の関与は少なかった。これは、女性の労働力は家事と農耕・家畜の飼養・野菜栽培などの他の生業に多く分配されているからだと考えられる。住居の建設や鍛冶屋などの活動を行っていた村人は、その技術力を活かして出稼ぎに行った際にもそれらの仕事に従事していた。それぞれの活動における現金収入は決して多くはなかったが、それでも村人がこれらの活動を行っているということは、これらの活動による現金収入が生計における補填として必要であるからだと考えられる。

### 8) 生業複合によって成り立つハウサの暮らし

農耕民と呼ばれるハウサの主たる生業は農耕であった。半乾燥地域、砂質土壌、短い雨季と

表 2-19 ハウサが行う様々な現金獲得手段とその担い手

年間を通じた現金獲得活動		季節的な現金獲得活動		
活動	担い手	活動	担い手	時期
小売り	男性	賃労働(除草)	男性	7~8月
食品の行商	男性、少年少女	住居の建設	男性	10~12月
理髪	男性	日干しレンガ造り	男性	10~12月
鍛冶	男性、少年	縄編み	男性	乾季
薪売り	男性			
服の仕立て	男性			
運搬	男性			
家畜飼料の販売	男性、少年			

いうサヘル地域の条件から栽培作物に多様性はなく、自給作物としてトウジンビエとモロコシが、換金作物としてササゲ、ラッカセイ、ゴマの5品目が栽培されていた。村人の日常の食事は収穫されたトウジンビエであったが、調査村においても人口増加による土地の細分化、干ばつ、不規則な降水が原因となり、収穫だけでは世帯の1年分の食料を賄うことができないことが多かった。このように食料生産が不安定なサヘル地域の村落に暮らすハウサにとって、食料の獲得が暮らしの最優先課題となっていた。食料の獲得は農耕以外には採集と野菜栽培によっても補填されていたが、主食となる穀物の獲得は二次的には購入されていた。また、村落での暮らしの中で村人は、住居の建設、婚資、農耕や牧畜への投資、税金の支払い、衣類・日用品・調味料・嗜好品の購入などのために現金が必要となっていた。つまり、ハウサの暮らしは食料と現金の獲得により生計が立てられていた。そして、食料は一次的には農耕により、二次的には購入により獲得されていた。現金を獲得するための生業が、換金作物の栽培、小家畜の飼養、漁労、その他の現金獲得活動であった。このように、ハウサは様々な生業を時期と担い手を変えて組み合わせた生業複合により暮らしを営んでいた(図2-74)。そして、このように生業を複合的に組み合わせることで、ひとつの生業が失敗した際の危機管理の機能を果たしている

考えられる。

#### 4 調査村におけるフルベの暮らし

##### 1) R村の概要

R村を含むマラディ州では、フルベ(8.3%)はハウサ(87.8%)の次に人口が多かった(L'Institut National du Niger 2001)。それぞれのフルベの村落はハウサの村落に衛星的に立地しており、ハウサのT村の近郊にはフルベのルガゲ・タカサバ・マラディ村が、ハウサのN村の近郊にはフルベのR村が立地していた。なお、村落の名称に「ルガゲ」(Rougague)と付されている場合、その村落がフルベの村落であることを示していた。R村はN村から更に約2km北東に位置しており、テッサウア・コミュニティの中心地であるテッサウア市までの距離は約17kmであった(図1-15)。R村から更に3km北東にはハウサのダンジルガオ村があり、R村はハウサの村落に挟まれる形で立地していた。なお、R村は行政上、ルガゲ・ナフタ1とルガゲ・ナフタ2に分けられ、それぞれ別の村長が存在していた。両村はそれぞれのsarki(王様)が異なるために分けられており、ルガゲ・ナフタ1のsarkiはボデタ・コミュニティに、ルガゲ・ナフタ1のsarkiはハワンダワキ・コミュニティに所属していた。なお、本研究の調査対象はルガゲ・ナフタ1の村落およびその住民のみである。

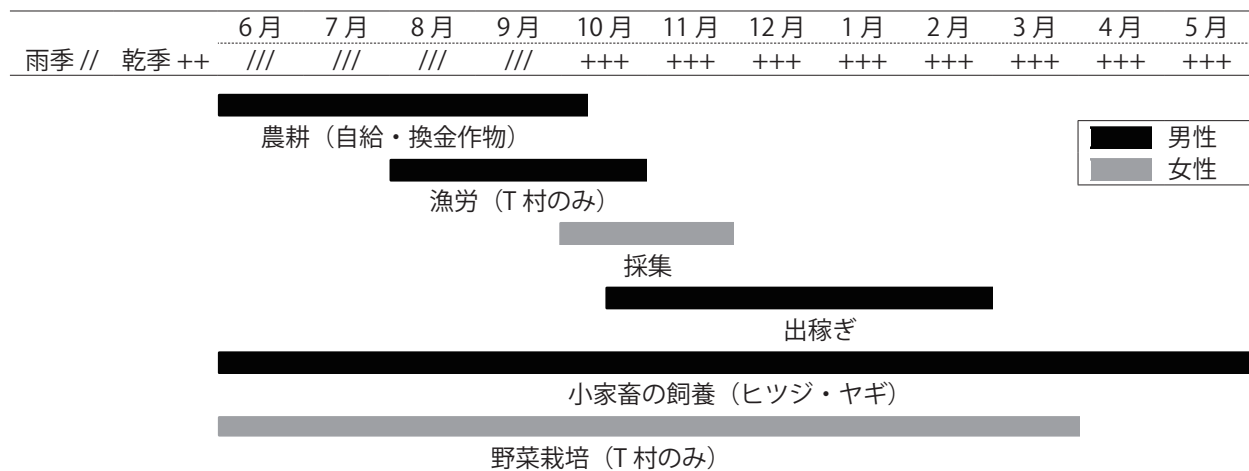


図2-74 ハウサの生業複合の例

R村のフルベは散村形態を取っており、集村形態を取るハウサとは村落形態が異なっていた。各世帯は畑を所有しており、それぞれの畑の中に住居を構えていた。R村の人口は364人（男性178人、女性186人）、世帯数52であった（表2-20、Direction Departementale d'aménagement du territoire et du développement communautaire de Tessaoua 2012）。人口を世帯数で割ると、一世帯あたりの人数はおおよそ7人であり、人口は10年間で約1.5倍に増加していた（表2-21）。村内にあった公とも施設は、小学校、井戸、日干しレンガ造りのモスクであった。R村では2006年に小学校が建設され、小学校はコンクリート造りの1教室とトウジンビエの茎で作られた1教室があったが、コンクリート造りの教室は半分が倒壊していた。ハウサの村落にあった case de santé と呼ばれる診療所はR村にはなく、R村の村人は病気や怪我の場合にはN村の診療所に通っていた。電気はなく、井戸が2002年にニジェール政府の援助によって設置されていた。井戸の使用は無料であり、詳細調査世帯aの世帯主が無報酬で井戸の管理者となっていた。モスクは日干しレンガで作られた簡易なモスクが村長の家の近くにひとつあった。R村の村長の役割は税金の徴収、調停、家畜の放牧禁止期間の決定などハウサの村長と同じであり、村人から徴収した税金の10%を報酬として受け取ることができる点とも通っていた。R村には以前は村長はいなかったが、主に税金を徴収させるために、行政によって2003年からR村にも村長の役職が設けられた。

## 2) R村のフルベ

サヘル地域のフルベは伝統的には遊牧民であり飼料資源を求めて各地を転々としてきたが、家畜の飼養は遊牧的な形式から定着的な形式へと変化し、作物生産が組み込まれるようになった（Shinjo *et al.* 2008）。元来、遊牧民であったフルベの定住化が進み、フルベは遊牧フルベ（*Bororoje*）と牧畜に加え農耕を行うフルベ

表2-20 R村の概要

	R村
民族	フルベ
人口※	364人
世帯数※	52
言語	フルフルデ ハウサ
村落形態	散村
テッサウアまでの距離	17km
テッサウアまでの往復交通費	400 Fcfa
テッサウアまでの道路状況	全て未舗装

※ Direction Departementale d'aménagement du territoire et du développement 2012

表2-21 R村の人口推移

	2001年	2009年	2012年
R村	244人	326人	364人

※ Population de Commune Tessaoua (2012) より作成

（*Wuro*）に分類され、近年は後者が増えた（池谷2006、Ayantunde *et al.* 2007）。

R村のフルベは早い世帯で1890年代から、遅い世帯で1962年からR村に移住し、定住を始めていた（表2-22）。R村に移住してくる前は、テッサウア県南部のボデタ・コミューン、マラディ州アギエ県南部、ナイジェリアのカチナ州などのR村よりも南に位置する場所に居住していた。R村に移住してきた理由は、南の地域では畑の細分化が進んでいいたため作物収量が減ったこと、家畜の維持が厳しい状況にあったことが挙げられた。全調査世帯は移住前から定住による農耕を行っており、R村のフルベの移住は定住農耕フルベの移住であった。R村のフルベの祖先はR村に移り住んできた際に無償で土地を取得し農耕を始めていた。R村のフルベが移住してきた時にはR村近郊には土地が十分にあったため無償で取得できた。しかし、およそ30年前からはR村近郊に余分な土地はなくなり、現在では移住してきたとしても無償で土地を取得することは難しい状況となっていた。

全村人がフルベであり、村内にハウサやザルマなどの他民族は居住していなかった。R村のフルベのほとんどはイスラーム教徒であり、キ

表 2-22 詳細調査世帯の R 村への移住の状況

	世帯 a	世帯 b	世帯 c	世帯 d	世帯 e
回答者の出生地	R 村	R 村	R 村	R 村	カチーナ
R 村に移住した年	1910 年代	1890 年代	1962 年	1957 年	1949 年
移住時の世帯主	祖父	祖父	父	母 (夫死亡)	父
移住前の居住地	コロゴン (テッサウア県)	カチーナ (ナイジェリア)	グワラム (アギエ県)	ラウニ (アギエ県)	カチーナ (ナイジェリア)

表 2-23 調査世帯の妻と子の数

R 村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	平均
妻の人数	1	2	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	2	2	2	2	2	2	1.4
子どもの人数	4	6	7	10	4	6	5	5	8	2	4	6	5	6	2	7	3	13	7	7	7	10	6	10	10	6.4

リスト教徒は見られなかったが少数のアニミズム信者がいるようであった。フルベもハウサと同じく 1 日 5 回の礼拝を行っていた。日常の礼拝は、成人男性は自宅やモスク、村内に 5ヶ所ある礼拝場所などで同刻に集団で、成人女性は自宅にて単独で礼拝を行っていた。集団礼拝の日である金曜日は、成人男性は N 村のモスクに行きハウサと一緒に同刻に集団で、成人女性は一部が N 村のモスクで、その他は自宅で礼拝をしていた。R 村にはマッカに巡礼した男性 (*El hadji*) が 7 人、女性 (*El hadjiya*) が 3 人いた。これらの巡礼者は陸路ではなく、巡礼の時期に首都ニアメやナイジェリアのカノから出る巡礼者用のマッカ行きの航空機で行っていた。この航空機の運賃は、年によって変動はあるが、おおよそ 120 万 Fcfa であり、マッカ巡礼者は 1 頭あたり 20 ~ 40 万 Fcfa のウシを 4 ~ 6 頭売ることにより航空券を購入していた。また、R 村では、ラマダーンとタバスキもハウサの村落と同様に行われていた。

フルベはフルフルデと呼ばれる言語を話す (江口 1989、嶋田 2008)。R 村のフルベも家族間やフルベ間ではフルフルデを用いて会話を行っていた。R 村の成人男女のフルベはフルフルデだけでなくハウサ語も話すことができ、N 村やテッサウア市に行った際にはハウサ語を用いてハウサと会話を行っていた。また、定期市や礼拝などで日常的にハウサと交流を行っており、そのため R 村のフルベもハウサ語を話すようになったと考えられる。なお、年齢が低い子どもほどハウサ語を話すことができなかった

が、これは子どものうちはハウサとの交流がなく、ハウサ語を話す必要がないからであると考えられる。公用語のフランス語を話せる村人はおらず、小学校に通う児童がわずかに話せる程度であった。R 村の村人はハウサと比較して数字や簡単な挨拶すらフランス語で表現できない者が多かった。

R 村のフルベも一夫多妻であり、一人の世帯主である男性が複数の妻を娶っていた。調査世帯では妻が 2 人の世帯が 11 世帯、1 人の世帯が 14 世帯であり、妻が 3 人または 4 人の世帯はなかった (表 2-23)。妻は R 村の出身もしくは近隣のフルベの村の出身者であり、親同士が知り合いで婚姻に至った場合が多かった。婚姻の儀式、婚資、時期はハウサと同じであった。ハウサと同じく離婚と再婚も行われ、離婚した女性は親元へ戻っていた。初婚年齢の平均年齢は、男性は 21 歳、女性は 15 歳であった。子どもの人数は平均 6.4 人であった (表 2-23)。

女性は日常では食事の準備、掃除、洗濯、薪の収集などの家事の全てを担い、朝から晩まで働いていた。世帯によっては、女性も雨季に播種、除草、収穫といった農耕に従事していた。現金獲得活動としては、13 世帯の女性が牛乳の行商を行っていた。ニジュールでは女性一人あたりの出産数は高く、調査村においても多い女性で 7 ~ 8 人の子どもを出産していた。女子の初等教育の就学率は男子に比べて低く、幼い頃から母とともに家事労働をする女子が多かった。

### 3) 住居

R村のフルベの住居（図2-75）は、それぞれの世帯の畑の中にあった。敷地内には、単一世帯だけが暮らしている場合と家長世帯とその複数の既婚男子の世帯が共同で暮らしている場合があった。敷地内にある家屋は、村落で収集できる草木などの自然素材のみを用いて建てられていた。家屋の耐久年数は完成度にもよるが5～10年であるという。敷地内には世帯主の家屋、妻の家屋（妻が複数の場合にはそれぞれの家屋）、子の家屋があり、トウジンビエの茎などの作物残渣で作られた垣が一部設けられていた。垣は風を防ぐために北東の方向に設けられていたり、人目を避けるために道路側に設けられていたりしていた。その他、水浴びをしたり小便をしたりするために作物残渣の柵で囲われた場所、三つ石かまどを置いた屋外の調理場があった。フルベは搾乳や牛乳の行商の際にヒョウタンで作られた容器が必要となるため、雨季には敷地内でヒョウタンを栽培していた。

住居のそばには家畜を夜間停泊させる（コラリング）場所があり（図2-76）、家畜糞の施用により畑の肥沃度の向上を図っていた。村人は住居を1～3年のローテーションで畑の中の違う場所に移動させていた。住居の移動は、小屋を屋根と壁に分解して移動させ、再度組み立てることにより行われていた。住居の場所を移動する理由は、畑の中でもトウジンビエの生育が悪い場所に変えることにより、住居のそばで行

うコラリングによってその場所の土地肥沃度を回復させるためであった。

また、フルベは耕作地内に穀物倉庫を所有しており、穀物倉庫を住居のそばに設けている世帯もあれば、離れた場所に設けている世帯もあった。穀物倉庫は住居の近くにあった方が便利であるが、上記のように定期的に畑内の異なる場所に住居の移動をすることから、住居と穀物倉庫の場所が異なる世帯があった。つまり、住居は移動させるが、穀物倉庫は移動させていないということである。ハウサの住居では、家屋や塀には主に日干しレンガが用いられていたが、R村で日干しレンガが用いられていたのは世帯bの住居と簡易モスクだけであった。

### 4) 食生活

R村のフルベもハウサと同じくトウジンビエを主食とし、昼食に *fura*、夕食に *tuwo*、朝食には *fura* や *tuwo* の残り物を食していた。収穫したトウジンビエが払底した後は穀物を定期市またはOPVNで購入していた。フルベは飼養するウシから搾乳をすることができ、牛乳は *fura* に混ぜられたり、直接飲まれたりしていた。フルベにとって所有する家畜は財産であり食用ではないため、結婚式、命名式などのお祝いやタバスキ、ラマダーン明けのお祭りを除いては飼養する家畜が屠殺されることはなく、成人男性は調理された肉をN村や定期市で購入して食べていた。散村であるR村では、ハウサの



図2-75 フルベの住居



図2-76 コラリングされた畑

村落とは異なり食品の行商はされておらず、村人の食事は自炊が中心であった。男性がN村や定期市に出かけた際には、村内では手に入らないイモ類や加工食品などを家族のために購入し持ち帰っていた。

### 5) 教育

R村には公立の小学校があったが、この小学校ができる前はR村の子どもはN村の小学校に通っていた。R村の小学校は就学者が少ないため高学年と低学年の2クラスによる複式学級で授業が行われていた。就学率は低く、調査世帯の就学年齢に達した子どもの就学率は25%であった。男女別の就学率は、男子は39%、女子は10%であり、ハウサと同じく女子に優先して男子に就学させる傾向にあった。世帯内でも就学年齢の男子の就学状況は異なり、男子の中から数名だけが就学するなど、男子全員が就学している世帯はなかった。就学率が低い理由は、親が小学校で教育を受ける必要がないと考えていること、農耕や放牧、家事の労働力として子どもが必要なことにあった。2名の小学校の教員はハウサであり、フルベの言葉であるフルフルデを話すことはできず、授業は公用語であるフランス語で行われていた。R村の小学校もハウサの小学校と同じく学年が上がるにつれ児童数は減少し、特に女子の児童数は減っていた。小学校卒業後にテッサウ市内の中学校へ進学した児童は調査世帯の中では1名のみ

だった。クルアーン学校の就学率は24%であり、男子は26%、女子は22%であった。

### 6) 水汲み

R村の村人は、2002年にニジェール政府の援助によって設置された井戸で水汲みを行っていた。この井戸ができる前は、村人はN村で水汲みを行っていた。雨季は人力で水を汲み上げることができるが、乾季には水位が低くなるためウシやロバを利用して水汲みが行われていた(図2-77)。水汲みは17~25歳くらいの男性が中心となって行い、これらの男性が各世帯から水汲みに来た子どもたちが持つ25ℓのポリタンクに水を入れてあげていた。各世帯は毎日午前中に水汲みを行い、水汲みの量は世帯構成員の人数や飼養する家畜の数によって異なっていた(表2-24)。水汲みの量が少ない世帯はロバに直接ポリタンクを吊り下げて井戸まで来ていたが(図2-78)、水汲みの量が多い世帯はウシやロバの荷車にポリタンクを積んで水汲みに来ていた。家に持ち帰った水は、飲料水、調理、食器洗い、礼拝、洗濯、水浴び、家畜の給水に用いられていた。飼養する家畜の数が多い世帯は家畜を井戸まで連れて行き、井戸のそばで家畜に給水をしていた。

### 7) ハウサとの関係

R村のフルベは毎週金曜日の集団礼拝をN村のモスクにてハウサと一緒にに行っていた。礼



図2-77 ロバによる水汲み



図2-78 ロバに乗って水汲みに行く少年



表 2-24 調査世帯の世帯構成員数と 1 日あたりの水汲みの量

調査世帯	a	b	c	d	e
世帯構成員の人数	10	20	14	10	12
1日あたりの水汲みの量	75ℓ	375ℓ	125ℓ	150ℓ	250ℓ

拜の後に開かれる N 村の小規模定期市には、多くの R 村のフルベ男性が日用品の購入や人々との交流を求めて集まっており、そこはハウサとの交流の場ともなっていた。また、塩、砂糖、油、石鹼などの日用品が必要な際には N 村に買いに行き、牛乳の行商は N 村を含めた近郊のハウサの村で行われており、交易を通じたフルベとハウサの交流もあった。このように、礼拝、定期市、交易を通じてフルベはハウサと密接な関係を築いて暮らしを営んでいた。

なお、フルベがハウサの家畜を預かったり、契約コラリング<sup>7</sup> (Shinjo *et al.* 2008) を行っているという事例は R 村では見られず、牧畜を通じたフルベとハウサの関係は家畜の売買以外には見られなかった。農耕を通じたフルベとハウサの関係では、フルベとハウサの間で畑の賃借関係や売買が行われていた。また、フルベはハウサの畑の除草をして賃労働を行っていた。

## 5 調査村におけるフルベの生業

### 1) 家畜の飼養

フルベはウシ牧畜民と呼ばれるが (池谷 2006、嶋田 2010)、R 村のフルベの牧畜にはウシの飼養にヒツジやヤギなどの小家畜の飼養が加わっていた (表 2-25)。ウシに対する小家畜の飼養頭数の割合は 72 % であり、小家畜の割合が高いことが明らかとなったことから、ウシの価格の暴落による損失を最小限に抑えるために小家畜の飼養に切り替えるフルベが近年増えているという報告 (Ayantunde *et al.* 2007) は R 村のフルベにも当てはまると言える。また、石本 (2012) は、頭数比の調整は、商品価値が極めて高いが増殖率は低く乾燥に弱いウシ、商品価値は高く増殖率も高いが乾燥に弱いヒツジ、増殖率が高く乾燥に強いが商品価値は低いヤギ、といった各家畜種の経済的価値と耐乾性を

考慮して行われると報告している。フルベは家畜の増加を望んでいるため、ウシの 78 %、小家畜の 83 % がメスであった。その他の家畜としては、ラクダ、ウマ、ロバ、イヌ、ネコ、ニワトリやホロホロチョウなどの家禽などを飼養していた世帯があった。21 世帯が 1984 年の大干ばつ以前と比較するとウシと小家畜の数が減少したと回答し、3 世帯は大干ばつの年にウシと小家畜を全損したまま回復できずにいた (表 2-25)。

家畜は世帯構成員により共同で管理・飼養されていたが、家畜の所有権は個人に帰属し、男性だけでなく、女性や子どもも家畜を所有していた。

乾季には小家畜は耕作地の刈り跡や休閑地への放牧により飼養されていた。ウシは牧夫が付き添った日帰りの放牧により飼養されていた。小家畜は飼い主の家を記憶し戻ってくる習性があるため、毎朝 7 ~ 8 時頃に開放され、畑の刈り跡で作物残渣などを食し、日が沈む頃に家に戻ってきていた。夜間から朝にかけては、住居の近くに立てられた棒に縄で小家畜やウシの足を繋いで夜間停泊させることにより畑への施肥が行われていた (図 2-76)。出産を控えた家畜、出産直後の家畜とその幼獣、売却前の家畜、購入や贈与により新しく手に入れた家畜、病気の家畜は、家の敷地内で飼養されていた。乾季の給水は、家畜数が多い世帯は家畜を井戸に連れて行き、その場で給水をし、家畜数が少ない世帯は汲んできた井戸の水を家庭内で給水していた。

雨季に入り播種され収穫が終わるまでの期間、家畜による作物への食害を防ぐために家畜を放牧することはなかった。特に、フルベの家畜がハウサの作物を食べた場合は、ハウサとの間で問題が生じると述べていた。池谷 (2006)

表 2-25 R村の調査世帯が飼養していた家畜の数と頭数

R村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	合計
ウシ (オス)	0	3	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	2	0	0	1	0	0	3	0	0	0	17
ウシ (メス)	0	0	1	2	0	1	5	0	0	0	2	4	3	4	1	2	3	1	1	1	2	5	20	0	2	60
ヒツジ (オス)	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	10
ヒツジ (メス)	0	1	2	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	6	1	10	0	0	1	0	0	4	10	3	0	43
ヤギ (オス)	0	2	0	0	2	2	3	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	2	0	0	2	1	2	2	2	23
ヤギ (メス)	2	5	10	4	5	2	10	0	0	0	3	5	4	10	0	12	6	5	0	0	8	10	8	3	2	114
ラクダ (オス)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
ラクダ (メス)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ロバ (オス)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	1	0	1	2	1	2	0	11
ロバ (メス)	0	2	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	2	2	2	2	0	15
ニワトリ	15	20	10	2	6	3	6	4	6	0	6	6	11	11	21	11	14	25	0	3	6	16	1	17	6	226

表 2-26 R村の調査世帯のトウジンビエの収穫量 (束) (2009～2011年)

R村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	平均
2009年	0	20	0	6	6	0	10	10	55	50	20	50	40	20	20	80	45	60	5	5	5	100	18	10	20	26
2010年	40	110	200	50	60	70	200	40	40	50	100	120	120	120	42	150	45	500	50	60	150	70	120	110	80	108
2011年	15	20	40	16	15	30	30	8	9	2	50	30	30	30	13	55	6	30	20	10	40	50	22	50	30	26
平均収穫量	18	50	80	24	27	33	80	19	35	34	57	67	63	57	25	95	32	197	25	25	65	73	53	57	43	53

も、ナイジェリアにおいてフルベの家畜がザルマの栽培作物を食べたことにより、フルベと農耕民の間に暴力や裁判が起こった事例を紹介している。そのため、R村のフルベは雨季に家畜を放牧させる場合には必ず牧夫を付き添わせ、ウシの口に手作りのマスクを付けるなどして作物に害を与えないようにしていた。13世帯は雨季の間に小家畜とウシの飼養をするために、農耕が行われない北部のより乾燥した地域へ牧草を求めて季節移牧をしていた。雨季中、ハウサは小家畜を家庭において飼養していたが、ハウサに比べ家畜の飼養数の多いフルベは家庭における飼養では対応できないため移牧をしていた。移牧を行っていなかった12世帯は家畜数の減少により、敷地内における飼養が可能であるため移牧を行わなくなったと述べた。なお、ウシは給餌の量が多く家庭内での飼養が困難であるため、ウシを少数のみ飼養する世帯は他の世帯にウシを預けて移牧をしてもらっていた。Shinjo *et al.* (2008) が報告するように、R村においても移牧には複数の世帯から牧夫が供され共同で行われ、移牧に行かない世帯構成員は村に残り、農耕に従事したり移牧しない乳牛や子ウシの世話をしていた。

### 2) 農耕

全回答世帯が祖先から相続した畑で農耕を営んでおり、R村のフルベは牧畜に加えて農耕を営む定住農牧フルベであった。祖先はR村に移住してくる前から農耕を営んでいたが、R村に移住してからも自給作物の栽培をしていた。換金作物の栽培は買い取りが盛んだった時期に始めたと述べており、旧宗主国であるフランスによるラッカセイの買い付けが盛んであった1930年代から1960年代 (Devereux 1993、セン 2000) に換金作物の栽培を始めたと考えられる。

N村とR村の回答世帯の2009～2011年のトウジンビエの収穫穂重量の合計の世帯平均は、N村は53束、R村も同じく53束であった (表 2-17、2-26)。また、R村の栽培作物、農事暦、農作業の順序・方法・従事者、畑の様子はハウサとほぼ同じであったが、フルベは畑の中でコラリングを行うため、ハウサのような有機肥料の施用という作業は行っていなかった。なお、全回答世帯が農耕地面積を増やしたいと述べ、6世帯は農耕地面積を増やすためにN村のハウサから畑を借用していた。

### 3) 出稼ぎ

R村では収穫が終わり乾季になると多くの青

年および壮年男性が出稼ぎに行っていた。各世帯では世帯主または就労できる年齢に達した息子により出稼ぎが行われており、世帯構成員による出稼ぎの経験がある世帯は25世帯中18世帯(72%)であった(表2-27)。主な出稼ぎ先は、国内ではアーリット、アガデス、ガザワ、アバラック、ウラファンであり、国外ではラゴス、カノ、イバダン、ワリ、フントウワ、シャガム、ボルノ(以上、ナイジェリア)、コトヌー(ベナン)であった(第3節、図2-82)。出稼ぎ労働の内容は、建設、水売り、廃品の回収、井戸掘り、乾季畑の除草や収穫などの農作業であった。

出稼ぎで稼いだ金は、主に食料と衣料の購入に使われていた。世帯主またはその息子が出稼ぎに行った場合、稼いだ金は主に世帯の食料の購入のために使われていた。また、別生計を営む老いた父母がいる場合には、出稼ぎで稼いだ金のいくらかが父母に仕送りされていた。

出稼ぎについてその希望を聞いたところ、24人が出稼ぎには行きたくないと回答した。その理由として、家族と離れたくないから、肉体労働が辛いから、ナイジェリは治安が悪く危険だから、賃金が支払われないことがあるから、年を取ったから、息子が出稼ぎを始めたからなどと回答した。1人は出稼ぎに行きたいと回答した。その理由として、出稼ぎは村内では稼ぐことのできない現金収入を得ることができるとともに他の場所を見ることは良い社会勉強になるからと回答した。

#### 4) 牛乳の行商

池谷(2006)は、フルベの家畜、畜産品、乳製品のほか、皮、肉、毛、糞に至るまで商品価値があると報告している。R村では13世帯が女性による牛乳の行商により現金収入を得ていた。搾乳できるウシを飼養する世帯の多くは牛乳の行商を行っていたが、搾乳量が少ない世帯は牛乳の行商を行わずに自家消費していた。飼養するウシの中に搾乳できるウシがない世帯、またはウシを飼養していない世帯の中には、牛乳を村内の他の世帯から購入して転売することにより利益を得る世帯もあった。搾乳は主に女性の仕事であり、ウシとヤギの搾乳は毎日行われていた。搾乳の回数は飼養するウシとヤギの頭数や状態によって世帯で異なり、ウシの搾乳は朝7~8時頃に1回だけ行う世帯と夕方19~20時頃にもう1回行う世帯があり、ヤギの搾乳は朝7~8時頃に1回だけ行われていた。ウシからは1回あたりおよそ1~3lが搾れ、ヤギからはおよそ1l弱が搾られていた。牛乳の行商は妻あるいは息子の妻によって、定期市、N村、近隣にあるハウサの村で行われていた。行商の回数は、多い世帯で週3回、少ない世帯で週1回であった(表2-28)。販売量は多い世帯で1回20l、少ない世帯で5lであり(表2-28)、1lあたりおよそ250 Fcfaで売っていた。例えば、販売量が多かった世帯bは20lの牛乳を週3回売っており、1lあたりおよそ250 Fcfaで売った場合には月60,000 Fcfaの現金収入を得ていることになった。しかし、搾乳牛を飼養していない世帯aと搾乳牛が少ない世

表2-27 R村の調査世帯の世帯構成員による出稼ぎ経験の有無

R村	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	合計
世帯主による出稼ぎ	○	×	×	×	○	×	○	×	○	○	×	×	○	○	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	○	11
息子による出稼ぎ	×	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	10

表2-28 詳細調査世帯の牛乳の行商の回数と販売量

調査世帯	a	b	c	d	e
1週間あたりの行商の回数	3回	3回	1回	2回	行商しない
1回あたりの販売量	約5l	約20l	約12l	約8l	約2l

※世帯a,cは牛乳を購入して転売していた

帯cは、購入した牛乳を転売していたため売り上げがそのまま利益となるわけではなかった。

### 5) その他の現金獲得活動

#### 賃労働

R村の村人が行う主な賃労働は、ハウサの賃労働と同じくトウジンビエ畑の除草であり、その他には目立った賃労働はなかった。賃労働で除草を行うフルベは、R村だけでなく近郊のフルベやハウサの村落に日帰りで出かけて賃労働を行っていた。除草による賃労働の日当は1,000～2,000 Fcfaであり、日当のほかに昼食を賄われていることもあった。

#### 縄編み

フルベの中にも縄を編み、それを売却して現金を獲得している者がいた。ハウサと同じく縄編みは乾季に出稼ぎに行かない男性や高齢の男性により主に行われていた。また、放牧をしながら縄編み用の草を集め、歩きながら縄編みをする牧夫もいた。ハウサは現金収入のため、穀物倉庫や家の垣を作るため、収穫したトウジンビエを束ねるために縄編みを行っていたが、フルベはそれらに加えて住居を作るために縄編みを行っていた。売却する場合には一本25 Fcfaで売られており、大きな現金収入とはなっていなかった。

#### 理髪

理髪師として現金収入を得るフルベも見られた。フルベの男性もハウサの男性と同じく子どもから老人までほぼ全ての者が丸刈りであり、これらの理髪師が手動のバリカンで村人の髪の毛を刈っていた。理髪により現金収入を得ていた世帯aの世帯主は、1回当たり100～150 Fcfaの料金をR村の村人の髪の毛を刈っていた。また、世帯aの世帯主はR村の5世帯と理髪に関する契約を交わしていた。その契約は、契約する世帯の男性全員の髪の毛を1年間刈る報酬としてトウジンビエ1束（1束はおよそ300本の穂であり、トウジンビエの穀実が

10～15 kg）を受け取るという内容であった。フルベの女性はその身体的特徴として、ハウサの女性に比べて髪の毛が伸び、家族や友人と髪の毛の編み込みをしたり、装飾品を付けてたりしていた。

#### 薪売りと運搬

定期市やN村で薪売りをして現金収入を得ていたフルベもいた。その他、薪売りの状況はハウサと同じであった。ウシまたはロバを所有する村人は、他人から依頼された物を運ぶことにより現金収入を得ていた。運搬の内容は、定期市で売却する換金作物や家畜の運搬、定期市で購入した食料や家畜の村への運搬、収穫作物の運搬などであった。運搬の料金は物の大きさや量、届け先までの距離によって交渉により決められていた。

### 6) ハウサとフルベの生業体系の比較

R村は南の地域で定住による農牧を営んでいたフルベの移住により形成された村落であった。R村のフルベは牧畜を主な生業としており、ウシの飼養を中心に小家畜の飼養を行っていた。雨季にはウシの移牧を行っており、ハウサと比べて牧畜への労働力の投資がみられた。また、コラリングによる家畜糞尿の農耕地への還元、牛乳の行商による現金獲得など、ハウサには見られなかった家畜の利用が行われていた。R村のフルベは雨季には家畜の移牧に加えて農耕にも世帯構成員の労働力を割いていた。R村のフルベのトウジンビエの収穫量は隣接するN村のハウサと大きな違いは見られなかった（表2-17、2-26）。

食料生産が不安定なサヘル地域の村落に暮らすフルベにとっても食料の確保が暮らしの最優先課題となっていた。食料は一次的には農耕により獲得されていたが、R村においても人口増加による土地の細分化、干ばつ、不規則な降水が原因となり、収穫だけでは世帯の1年分の食料を賄うことができないことが多かった（図2-79）。そして、食料は二次的には購入により

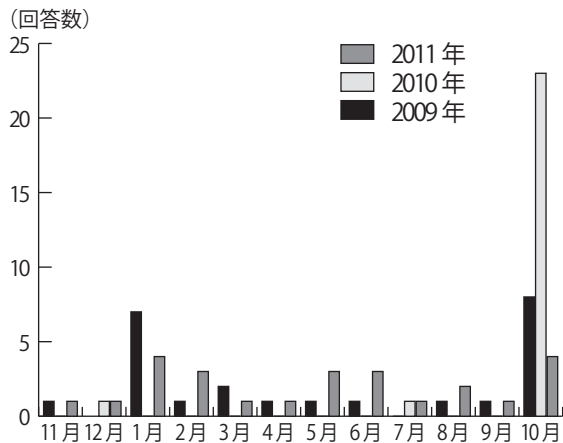


図 2-79 R村においてトウジンビエの収穫が  
払底した月 (2009～2011年)

獲得されており、現金を獲得するための生業が、換金作物の栽培、ウシや小家畜の飼養、出稼ぎ、牛乳の行商、その他の現金獲得活動であった。しかし、出稼ぎの人数や現金獲得活動の種類はハウサに比べて少なかった。これはフルベの全生業の中に占める牧畜への労働投資の割合が高いため、農耕と牧畜以外の生業行動の種類が少なくなっていると考えられた。

このように、ハウサと同様にフルベの主たる生業も牧畜と農耕であったが、それらに加えて出稼ぎ、牛乳の行商、その他の現金獲得活動などの様々な生業を時期と担い手を変えて組み合わせた生業複合により暮らしを営んでいた(図 2-80)。そして、生業を複合的に行うことにより、ひとつの生業が失敗した際のリスクを最小限に

抑える危機管理のしくみを確立してきたと考えられる。

### 第3節 域外における生業としての出稼ぎ

#### 1 サヘル地域における出稼ぎの変遷

サヘル地域の出稼ぎについての先行研究には以下のようなものがある。サヘル地域の人々にとって出稼ぎは食料確保において重要(石本 2012)と報告されており、収穫が終わると多くの青年壮年男性が周辺国へ出稼ぎに行く(Hampshire and Randall 1999)。西アフリカ内陸国からギニア湾沿岸諸国への移動は、アフリカにおける出稼ぎの経路の中でも主要なもののひとつ(室井 1987)であり、サヘル地域では1970年代と1980年代の大干ばつ以降に出稼ぎが増加した(Hampshire 2002)。サヘル地域から沿岸部へ移動経路をとる出稼ぎは歴史が浅いため研究は限定的である(石本 2012)が、サヘル地域における出稼ぎの先行研究には次のようなものがある。室井(1987)は、植民地期の出稼ぎの要因について、植民地政府の政策という観点から報告した。矢内原(1982)は、ブルキナファソのモシを事例に、出稼ぎが行われる要因を経済的要因と非経済的要因に分け、主要因は経済的要因であると結論付けた。石本(2012)は、ブルキナファソ北東部におけるケ

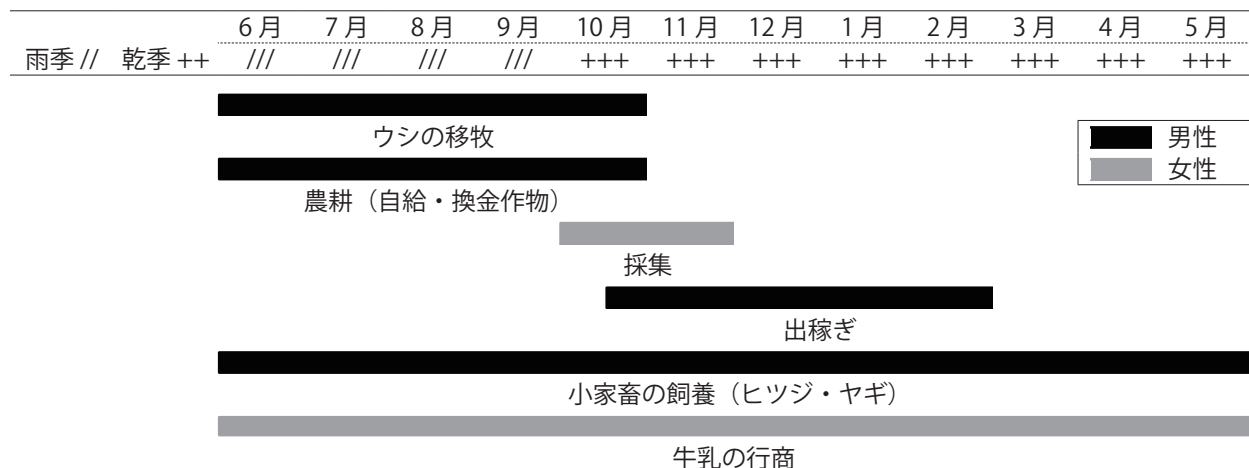


図 2-80 フルベの生業複合の例

ル・タマシエクを事例に出稼ぎが開始されて浸透する過程と出稼ぎが食料確保において重要であることを明らかにした。また、近年の農村から都市への出稼ぎは、貧困や生業の失敗によって引き起こされると報告されている (de Brujin and Van Dijk 1995、Hampshire 2002、Maliki *et al.* 1984)。西アフリカ諸国の中でブルキナファソのモシに関する出稼ぎの研究は多くなされてきたが、サヘル地域における他地域、他民族の出稼ぎに関する研究は多くはない。したがって、本節ではまだ研究が行われていないニジェール南部のハウサの出稼ぎに着目する。

## 2 調査方法

ハウサの生業に関する調査の中でも、出稼ぎに関する調査は、その状況をより詳細に把握するために、以下のように調査対象を年齢別に区分し調査を行った。具体的には、労働を担う年齢に達したとみなすことのできる各村の男性240名ずつ(17～29歳の80名、30～39歳の80名、40～49歳の80名の3つの年齢層に区分)の合計480名に対し、年齢、婚姻の有無、出稼ぎの経験の有無、過去5年間(2007～2011年)における出稼ぎの経験の有無を聞き取った。そして、過去5年間に「出稼ぎの経験がある」と回答した村人に対し、出稼ぎ先、出稼ぎ労働の内容、出稼ぎの期間、出稼ぎを始めた年齢に関する情報を聞き取った。調査対象者を各村240名ずつにした理由は、N村より人口が少ないT村において240名以上の調査対象者を見つけることができなかつたため、N村もT村に合わせて調査対象者を240名とした。調査村において女

性による出稼ぎは多くは行われていないため、聞き取りの対象を男性のみとした。村人は農業暦に合わせて雨季の始まりである6月から乾季の終わりである翌年の5月までを1年と捉えているため、本調査においても6月から翌年の5月までを1年と考えることとした。なお、本研究において出稼ぎとは、生活の本拠を置く村落を一時的・季節的に離れて、他の地域において単身で一定期間の就労をすることを定義する。

## 3 調査村落における出稼ぎの状況

過去に出稼ぎを経験したことがある村人の人数は、240名中、T村では226名(94%)、N村では184名(77%)であり、両村において多くの村人が出稼ぎを経験していた。過去5年間に「出稼ぎを行った村人(以下、出稼ぎ者)」の延べ人数は、T村では240名中115名(48%)、N村では59名(25%)であった(表2-29)。各年における出稼ぎ者数は、T村では多少の違いがあったが、N村では違いがみられず(図2-81)、両村では毎年一定の人数が出稼ぎに行っていた。出稼ぎとは別に、マラブー(イスラームの指導者)またはタリベ(イスラームの修行僧)として、国内または国外に移動した村人がT村では19名(8%)、N村では20名(8%)いた(表2-29)。マラブーは宗教儀式(結婚式、命名式、葬式、犠牲祭など)の際のお布施などにより、タリベはクルアーン学校に通っていない時間の労働により収入を得ていた。

5年間毎年出稼ぎに行った村人が、T村では115名中77名(67%)、N村では59名中54名(90%)おり(表2-29)、特にN村では出稼ぎ者が

表 2-29 調査村の概要と出稼ぎの状況

	T村	N村
人口※	1,789	2,272
世帯数※	256	325
出稼ぎ者の延べ人数	115/240 (48%)	59/240 (25%)
マラブーまたはタリベ	19/240 (8%)	20/240 (8%)
5年間毎年出稼ぎに行った村人の人数	77/115 (67%)	54/59 (90%)
5年間同じ出稼ぎ先で同じ労働を行った村人の人数	67/77(87%)	46/54 (85%)

※ Population Commune de Tessaoua (2012) 参照

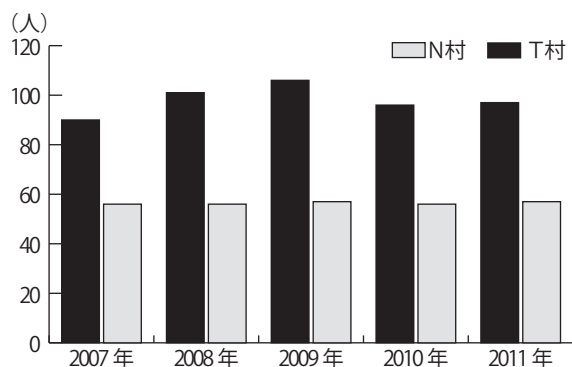


図 2-81 過去5年間における出稼ぎ者数の累計

固定されていた。さらに、5年間に毎年出稼ぎに行った村人のうちT村の77名中67名(87%)、N村の54名中46名(85%)は毎年同じ出稼ぎ先で同じ労働を行っていたことから、これらの村人にとっては出稼ぎが常態化していた。

出稼ぎ者数を年齢層別に見ると、T村では114名54名(47%)が、N村でも59名中28名(47%)が17歳から29歳の若年層であり(表2-30)、出稼ぎは主に若年層を中心として行われていた。また、出稼ぎ者のうちT村では114名89名(77%)が、N村では59名中53名(90%)が婚姻をしており、出稼ぎは主に既婚者により行われていた(表2-30)。出稼ぎ期間の平均はT村では3.6ヶ月、N村では4.2ヶ月であった。村人は、出稼ぎの期間はその年の収穫や世帯の経済状況によって決まると述べていた。出稼ぎは収穫が終わった後の10月から12月の間に始まり、11月に本村に出稼ぎに行った村人が最も多かった。2011年や2012年のように収穫後すぐの時期にタバスキなどの宗教行事がある年は、それが終わってから出稼ぎに行っていた。期間が長い村人は5月または6月まで出稼ぎを

行っていた。先行研究(石本2012、Hampshire and Randall 1999、Saqualli *et al.* 2010)で報告されているように、本調査村においても出稼ぎは収穫後から翌年の播種までの期間である農閑期に主に行われていた。

#### 4 出稼ぎ先

出稼ぎ先の数は、T村は32ヶ所、N村は8ヶ所であり、T村の村人の出稼ぎ先が様々な場所に分散していたのに対し、N村の村人の出稼ぎ先は限られていた(表2-31、図2-82)。T村の村人の主な出稼ぎ先はアブジャ(ナイジェリア)に集中しており、次にカドゥナ(ナイジェリア)と続くが、その他は国内外に分散していた(表2-31)。N村の村人の出稼ぎ先はコトヌー(ベナン)が最も多く、次にアガデス、ワリ(ナイジェリア)と続くがその他は少数であった(表2-31)。T村ではN村の主要な出稼ぎ先であるコトヌーとワリに、N村ではT村の主要な出稼ぎ先であるアブジャとカドゥナに行った村人はいなかった(表2-31)。また、T村の村人の出稼ぎがナイジェリア北部(カチナ州、カノ州、カドゥナ州、ナイジャ州)で多く行われていた(180件)のに対し、N村の村人のナイジェリア北部での出稼ぎは少数(5件)であった(表2-31、図2-82)。出稼ぎ先の国外の割合は、T村は88%、N村は69%であり、両村において出稼ぎは主に国外で行われていた(表2-31)。T村の村人の国外の出稼ぎ先はナイジェリアに集中しており、カメルーンが2件のみあった(表2-31)。一方、N村の村人はベナンが60%、ナイジェリアが38%、チャドが2%であった。以上のことから、同じコミュニティ内でも、村落

表 2-30 年齢別の出稼ぎ者と婚姻の有無

年 齢	T 村			N 村		
	既婚	未婚	合計	既婚	未婚	合計
17-29 歳	29	25	54	22	6	28
31-39 歳	37	1	38	23	0	23
40-50 歳	23	0	23	8	0	8
合 計	89	26	115	53	6	59

(名)

表 2-31 T村とN村の村人の出稼ぎ先とその人数（2007～2011年）

	国 外		国 内 (二)		
	T村 (人)	N村 (人)	T村 (人)	N村 (人)	
ラゴス (ナ)	22	24	ニアメ	2	0
ワリ (ナ)	0	44	マラディ	8	0
アブジャ (ナ)	205	0	ザンデル	8	0
ダマトウル (ナ)	5	0	アガデス	13	73
イロリン (ナ)	4	0	アーリット	1	10
ダンジャ (ナ)	1	0	アギエ	4	0
ダウラ (ナ)	5	0	マタメイ	2	0
ダンカマ (ナ)	6	0	ウラファン	10	5
カツィナ (ナ)	18	0	カナンバカチェ	5	0
ビチ (ナ)	1	0	チャドア	1	0
カノ (ナ)	25	0	サルキンアレワ	1	0
ザリア (ナ)	23	0	マザムニ	1	0
カドゥナ (ナ)	66	0	テラワ	3	0
ビルニングワリ (ナ)	6	5			
ガラディマワ (ナ)	4	0			
マガダ (ナ)	4	0			
サウラワ (ナ)	10	0			
グワダ (ナ)	10	0			
ミンナ (ナ)	1	0			
クセリ (カ)	2	0			
コトヌー (ベ)	0	116			
ンジャメナ (チ)	0	5			
国外合計	418	194	国内合計	59	88

(ナ) =ナイジェリア、(カ) カメルーン、(ベ) ベナン、(チ) =チャド、(二) =ニジェール

によって村人の出稼ぎ先が異なることがわかった。なお、ニジェール西部における村落の主な出稼ぎ先は、ナイジェリア、ベナン、ガーナ、トーゴと報告 (Hampshire and Randall 1999, Saqualli et al. 2010) されているが、両村においてガーナとトーゴに出稼ぎに行った村人はおらず (図 2-82)、ニジェール国内でも地域によって出稼

ぎ先の国が異なることがわかった。なお、出稼ぎ先までの移動には村人の予算と好みにより、バス、乗り合いのタクシーやワゴン、トラックなどを利用していた。

### 5 出稼ぎ労働の内容

T村の村人の主な出稼ぎ労働の内容は建設

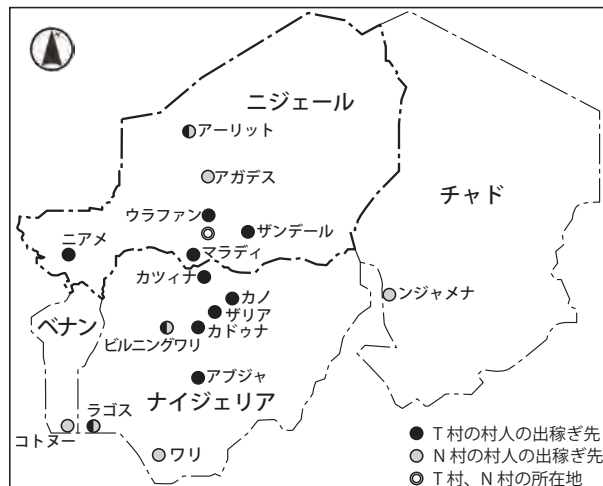


図 2-82 T村とN村の村人の出稼ぎ先の分布

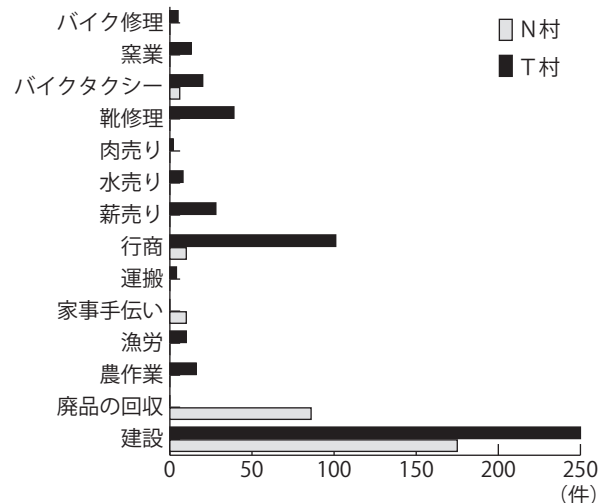


図 2-83 村人の出稼ぎ先での労働の内容



と行商で、その他は少数に分散していた（図 2-83）。N 村の村人の出稼ぎ労働の内容は建設と廃品の回収に集中していた（図 2-83）。両村で最も件数が多かった建設は、国内外の様々な出稼ぎ先で行われていた。特に、ビルや住宅の建設労働者の需要が高い国内外の大都市で多く、T 村の村人がアブジャで行った出稼ぎの 205 件中 166 件（81%）、N 村の村人がアガデスで行った出稼ぎの 73 件中 53 件（73%）、ワリで行った出稼ぎの 44 件中 43 件（98%）は建設業であった。建設業の日給は 1,500～6,000 Fcfa で、日給が高い仕事のひとつであるため出稼ぎ期間を短くすることができるが、その労働は肉体的に過酷であり、仕事が見つからない日もあるという。行商は主に T 村の村人により行われており、T 村の行商の 101 件中 70 件（69%）がナイジェリア北部（カチナ州、カノ州、カドゥナ州、ナイジャ州）で行われていた。行商は、雇用者から与えられた商品または自己資金で安く大量に買付けした商品を路上で販売することにより利益を得ていた。行商する商品は、ニンジン、マンゴー、オレンジ、パイナップルなどの青果、ビスケットや飴などの菓子類、サンダル、懐中電灯などの日用品などであり、そ

の日の売り上げに応じて一日あたり約 1,000～3,000 Fcfa を稼ぐという。行商は建設業のように肉体的に過酷ではないが、不安定な収入や低利益が理由で出稼ぎ期間が長くなることが問題であるという。廃品の回収は N 村の村人によりコトヌーを中心に行なわれており、コトヌーで行われた N 村の村人の出稼ぎの 116 件中 81 件（70%）は廃品の回収の仕事であった。コトヌーでは廃品の中でも鉄の需要があるため、村人は事業者から金を預かり市内や村落にて鉄を買い集め、収集量にあわせて 1,000～5,000 Fcfa の日給が支払われるという。

## 6 出稼ぎ労働者コミュニティ

ハウサはニジェール南部（ドッソ州東部、タウア州、マラディ州、ザンデル州）とナイジェリア北部（ソコト州、ナイジャ州、カノ州、カドゥナ州、カチナ州、バウチー州）を中心に、ガーナ、トーゴ、ベナン、カメルーンの各国北部とチャドにも広がる民族（松下 1987）であり、ハウサのコミュニティは西アフリカの諸都市に存在する（川田 1980、清水 2011）。調査を行った本コミュニティ内のハウサの 15 村落も国内外の都市に出稼ぎ労働者コミュニティを形成して

表 2-32 各村の出稼ぎ労働者コミュニティがある都市

村名	出稼ぎ労働者コミュニティがある都市
1 タカサバ・マラディ	(ナ) アブジャ・カノ・カドゥナ
2 イヤタワ	(ニ) アーリット・ディファ、(ナ) ジョス・カチナ、(リ) セブハー
3 カイワ	(ニ) マラディ・アガデス、(ナ) ラゴス・カノ・ダウラ
4 ガリン・マラン	(ニ) マラディ・アガデス、(ナ) アブジャ・カノ・カチナ
5 ダンジルガオ	(ニ) マラディ・アガデス、(ナ) ラゴス・カノ
6 タカジ	(ニ) マラディ・アガデス・ザンデル・ディファ、(ナ) ラゴス・カノ・カチナ、(リ) トリポリ、(カ) クスリ
7 マサシ	(ニ) マラディ、(ナ) アブジャ・カチナ・ザリア、(ベ) コトヌー、(リ) トリポリ
8 ナフタ	(ニ) ニアメ・アガデス、(ナ) ラゴス・ワリ、(ベ) コトヌー
9 コレ	(ニ) マラディ・ザンデル・アガデス・アーリット、(ナ) カノ・ヨラ
10 ラバ	(ニ) アガデス・タウア、(ナ) カノ、(ベ) コトヌー
11 ダンムッサ	(ナ) ラゴス・カノ・カチナ、(ベ) コトヌー、(リ) トリポリ
12 グンナカ	(ニ) マラディ・アガデス・アーリット、(ナ) アブジャ・ラゴス・カノ・ソコト、(リ) トリポリ
13 タチェグマ	(ニ) マラディ、(ナ) カノ・ベニン、(ベ) コトヌー、(リ) トリポリ
14 サメルクーラ	(ニ) マラディ・ザンデル・アーリット、(ナ) ラゴス・カノ
15 エルコルタ	(ナ) ラゴス・カドゥナ・カチナ

ニ＝ニジェール、ナ＝ナイジェリア、ベ＝ベナン、リ＝リビア、カ＝カメルーン

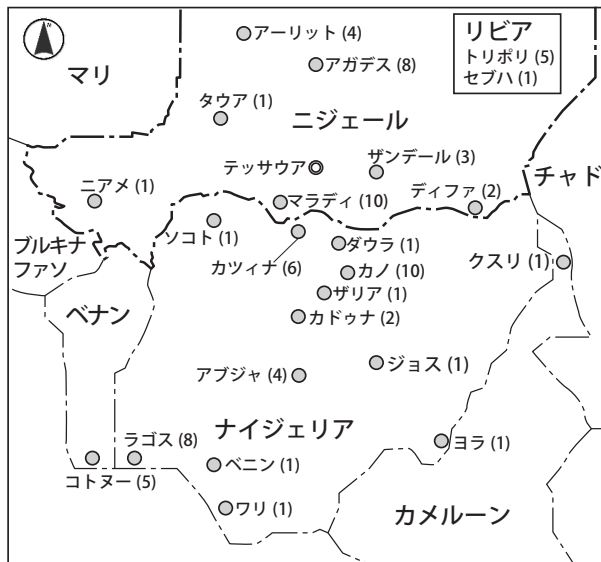


図 2-84 各村落の出稼ぎコミュニティの分布  
(カッコ内の数字はその都市にコミュニティを形成している村落の数)

おり、コミュニティがある都市は各村落によって異なっていた (図 2-84、表 2-32)。各村落のコミュニティは国内とナイジェリアが多かったが、村落によってはベナン、リビア、カメルーンにコミュニティを形成していた (図 2-84、表 2-32)。T 村はアブジャ、カドゥナ、カノに、N 村はコトヌー、ワリ、ラゴスに出稼ぎコミュニティを形成しており、多くの村人は各村の出稼ぎコミュニティがある都市で出稼ぎ労働を行っていた。出稼ぎコミュニティがある都市では、同じ村の村人と共同生活をするにより生活の安心が得られ、村人のネットワークがあることにより仕事を見つけやすいという。コミュニティができた経緯は、村落の出身者の中にその都市における出稼ぎ労働の先駆けとなった人物がいたからである。ある村人がある都市に出稼ぎ労働に行き成功を取めた場合には、その村人のもとに他の村人が集まりコミュニティが形成される。そして、先駆けとなった人物はコミュニティ内の事実上の長となる。N 村の村人の出稼ぎ労働はコトヌーでの廃品の回収の仕事が多かったが、この仕事は、N 村のマスル・イディという村人が始め、彼がきっかけとなり彼の家族や村人がコトヌーでの出稼ぎを始めた。マス

ル・イディは現在でもコトヌーにおける N 村の出稼ぎのリーダー的な存在となっており、村人が共同生活をするための家を多い時で 3～4 軒借りて N 村の出稼ぎ労働者コミュニティをコトヌーに形成している。村人は出稼ぎ労働者コミュニティを拠点に労働と生活を行い、家賃は出稼ぎに来た村人からの分担金により支払われる。一方、出稼ぎ労働者コミュニティがない都市に出稼ぎに行った村人は、親戚や知人がいる都市に行っていた。これらの村人は知人や親戚の家に仮住まいをさせてもらいながら、彼らの仕事を手伝ったり、仕事を紹介してもらったりしていた。

### 7 出稼ぎの目的

両村の村人が出稼ぎに行く目的は、食料の購入、衣類の購入、結婚、住居の建設などのために現金を得ることであった。これらの目的を分類すると、食料や衣類の購入、住居の建設などの生活基盤を整える目的、貯金、耕作地や家畜の購入、商売を始めるための資金準備などの生計を向上させる目的、冠婚葬祭、携帯電話やバイクの購入、親や親戚への仕送りなどのその他の目的に分類することができた (図 2-85)。

石本 (2012) が報告するように、出稼ぎで稼いだ現金を家族へ送りたいときには、出稼ぎを終えて村に戻る同郷者に託すことにより送金さ

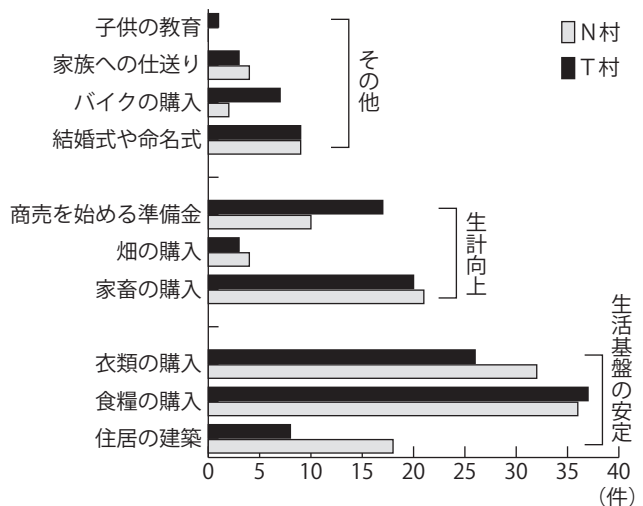


図 2-85 出稼ぎの目的

れていた。出稼ぎを終えて村に戻る時には、現金を持ち帰るのみならず国外で安価な食料を自家消費用に、または転売を目的にニジェールでは生産できない農作物を購入して持ち帰る村人もいる。村人が現金のほかに出稼ぎ先から持ち帰ったものは、食料（主にモロコシ）のほかに、衣類、バイク、携帯電話などであった。また、村人によると社会の変化により以前に比べて現金が必要になっているという。近年、電気がない村落にも携帯電話が普及し始めた。ござや履物は手作りから既製品の購入へと変わり、以前は自分たちで作っていたものでも買うようになった。食事はトウジンビエが中心であるが、以前はなかったコメやスパゲティを少しずつ食べるようになった。移動手段においても、これまでは畑や都市までは徒歩または家畜を利用して行ったが、現在では料金を支払って乗り合いワゴンなどを利用し、所有するバイクで畑に通う村人もいるくらいに移動手段は変化した。つまり、多くの現金を必要とせず自給自足で暮らしを営んでいた生活から、社会の変化とともに物が豊富になり、現金が必要な社会になった。

サヘル地域の村落において、多くの村人が現金収入を求めて出稼ぎに出る背景には、村人が言うような社会の変化も要因になっているのかもしれない。

## 8 出稼ぎをめぐる問題

T村では40名中38名(95%)が、N村では34名(85%)が出稼ぎには行きたくないと回答した。その理由として、家族がいる村内で働きたい(53件)、過酷な肉体労働が辛い(23件)、主な出稼ぎ先であるナイジェリアの治安に対する懸念(17件)と回答した。特に最近では、ナイジェリア北部におけるイスラム過激派(ボコ・ハラム)によるテロ行為により、村人は主要な出稼ぎ先であるナイジェリアの治安を懸念していた。テロ行為の影響で、ナイジェリア政府による外国人に対する取締りは厳しくなっており、ニジェール人に対する逮捕、暴行、強制送還が行われることもあるという。T村と

N村の村人の中にも、ナイジェリアやベナンにおいて逮捕された経験のある村人がいた。ナイジェリアにおいてニジェール人は不当な扱いや暴力行為を受けることがあるため、現地ではナイジェリア人と名乗ることもあるという。出稼ぎは村内では獲得する機会が少ない現金を得ることができるが、その労働内容は過酷なものであり、若い時にしかできないという。特に、日当の高い建設業は肉体的に辛く、出稼ぎに行く村人は若い時は日給が高い建設の仕事を大都市で行い、仕事が肉体的に辛くなると国内やナイジェリア北部などの近郊都市において小売りなどの仕事を選択するという。このような出稼ぎをめぐる困難や問題から、多くの村人は出稼ぎに行くことを望んではおらず、家族が暮らす村内で働くことを望んでいた。そのため、生計のためのみならず村で商売を始める資金を得るために出稼ぎに行く村人もおり、実際に出稼ぎで稼いだ資金により村内やテッサウア市内で小売りなどの商売を始めた村人もいた。

## 註

- 1 事前に各村の村長に貧困層、中間層、富裕層を同世帯数ずつ選出してもらった。
- 2 ここで言う「危機」とは、不規則な降水パターンが原因で起こる干ばつや、病害虫による農作物への被害、伝染病などによる家畜数の減少などにより、農作物生産や家畜の維持に困難をきたし、人々の生活が著しく困窮する状態を指す(Mortimore and Adams 2001)。
- 3 コーラの実(the fruit of *Cola nitida* and *C. acuminata*)は興奮剤、刺激剤としてサヘル地域の成人(特に中高年)の間でよく摂取され渇きや空腹を和らげる作用もある。高濃度のカフェインと低濃度のテオブロミン(theobromine)が含まれている(Etkin and Ross 1982)。
- 4 トリパノソーマ症(trypanosomiasis)は鞭毛虫類キネトプラスト門トリパノソーマ属原虫の感染を原因とする疾病の総称で、人の場合はブルーストリパノソーマ(*Trypanosoma brucei*)感

染を原因とする睡眠病が知られているが、家畜の場合は死に至る (Atawodi *et al.* 2001)。

- 5 シクンシ科は、つる性あるいは低木状の本木植物。世界の熱帯地域に約 250 種が分布。熱帯アフリカでは 10 種以上の種が民間薬として利用される。
- 6 *Foy* はザルマ語でソースという意味。直訳すると下 (*Ganda*) に生えるソースという意味。
- 7 牧畜民が農耕民の畑でコラリングを行い、その対価として牧畜民は農耕民から金銭あるいは食料を得る契約。

### 第3章 サヘル地域の村落における「危機の年」の認識と対処行動

本章では、ニジェール南西部に位置する農耕民ザルマ（以下ザルマ）とフルベの村落および南部に位置するハウサと牧畜民フルベ（以下フルベ）の村落においてそれぞれが認識した「危機の年」とその対処行動、村落の立地条件や民族、性差による「危機の年」の認識と対処行動の違いを明らかにし、サヘル地域の村落部住民の生業に内在する危機管理の仕組みを明らかにする。なお、ここでいう「危機の年」とは、不規則な降水パターンが原因で起こる干ばつや、病害虫による農作物への被害、伝染病などによる家畜数の減少などにより、農作物生産や家畜の維持に困難をきたし、人々の生活が著しく困窮する状態（Mortimore and Adams 2001）に陥った年とする。

#### 第1節 ニジェール南西部の人々が認識する「危機の年」と対処行動

##### 1 フルベの「危機の年」と対処行動

有用植物が危機の際の重要な食料となってい

たことは前章で述べた。それでは地域の人々が記憶する「危機の年」とはどのようなものだったのだろうか。聞き取りの結果から、半数以上のフルベが1984年を「危機の年」と回答したが、それ以外の年はいずれも少数件に止まっていた（表3-1）。対象地域のフルベは定住し、農耕も営んでいるため危機の内容は不作が大半を占めていた。1984年はニジェールのみならず、サヘル地域全域にわたって未曾有の大干ばつが起こった年であり、サヘル地域の多くのフルベは家畜を維持することが困難となり、餓死する前に家畜を売却するか、家畜の餌を得るために、より南へ移住した（Turner 1999）。ファカラ地域のフルベが1984年の危機の際に取った対処行動も半数以上が家畜の売却であった（表3-1）。また、1984年以外の「危機の年」を見ても、いずれも家畜の売却が常に上位の対処行動であった（表3-1）。フルベにとってウシや小家畜は生活の糧そのものであり、飢饉の際には重要な担保となっていることが分かった。しかし、1984年のような大飢饉の際には多くのフルベが家畜の価格暴落を経験した（Derrick

表3-1 フルベが答えた「危機の年」と「危機」の実態とその対処行動

危機年	回答世帯数 (n=38)	危機の内容	危機の原因	対処行動の内容（複数回答、カッコ内は件数）
1962	1	不作	不規則な降水	備蓄食料の売却 (1) ウシの売却 (13)、小家畜の売却 (9)、政府食料支援 (3)、篤志家からの贈与 (2)、家畜の消費 (2)、国内の出稼ぎ (2)、薪の販売 (1)、海外への出稼ぎ (1)、借金 (1)、牛乳の販売 (1)、食料の借用 (1)、備蓄食料の消費 (1)
1984	25	不作 家畜数の減少	早魃 不規則な降水	借金 (1)、国内の出稼ぎ (1) 小家畜の売却 (4)、ウシの売却 (3)、借金 (1)、国内の出稼ぎ (1)、仕立て屋の収入 (1) ウシの売却 (2)、小家畜の売却 (2) ウシの売却 (2)、小家畜の売却 (2) ウシの売却 (6)、小家畜の売却 (4)、仕立て屋の収入 (1)、食料の借用 (1)、国内の出稼ぎ (1)、備蓄食料の消費 (1)
1990	1	不作	不規則な降水	借金 (1)、国内の出稼ぎ (1)
1992	5	不作	不規則な降水	ウシの売却 (2)、小家畜の売却 (2)
1995	3	不作	不規則な降水	ウシの売却 (6)、小家畜の売却 (4)、仕立て屋の収入 (1)、食料の借用 (1)、国内の出稼ぎ (1)、備蓄食料の消費 (1)
1997	2	不作	不規則な降水	借金 (1)、国内の出稼ぎ (1)、送金の受取 (1)、ウシ売却 (1)
1998	8	不作	不規則な降水	*記述なし
1999	1	不作	不規則な降水	祈禱師厄除け (1)
2000	1	不作	不規則な降水	家畜予防接種 (1)
2002	1	家畜数の減少	感染症	
2003	1	家畜数の減少	ペスト	
2005	7	不作 家畜数の減少	早魃 不規則降水	ウシの売却 (1)、小家畜売却 (1)

※ここでいう早魃<sup>1</sup>とは、穀物生産や畜産に悪影響を及ぼすような降水量の不足を意味する「農業的早魃」を指す。

1984)。とりわけウシの価格暴落による損失は大きく、こうしたリスクを回避するためにヒツジやヤギといった小家畜に切り替える世帯も増えてきている (Ayantunde *et al.* 2007)。

後述するザルマ男性の対処行動の中には、政府からの食料支援を受けるケースが多く見られたが、フルベではほとんど見られなかった。これは、フルベの数年単位で移住を繰り返す居住形態が影響しているものと推測される。またフルベは定住していたとしても、村の中心から離れた場所に居を構える場合が大半を占める (Turner and Hiernaux 2002)。そのため、たとえ政府から援助物資の配給があったとしても、村落周辺に散在するフルベには行き渡らず、その情報すら入らなかった可能性も考えられた。

## 2 ザルマの「危機の年」と対処行動

フルベ男性と同様に 1984 年を「危機の年」と回答した世帯が最も多く、次いで 1991 年と続くが、その他の年の回答数は少数に止まった (表 3-2)。ザルマの対処行動で最も多いのは政

府からの食料支援であり、次いで国内での出稼ぎ、小家畜の売却、備蓄食料の消費と続いた (図 3-1)。しかし政府の食料支援があるのは、1973 年や 1984 年、1991 年のような大規模な「危機の年」のみであり、それ以外の比較的規模の小さい「危機の年」においては備蓄食料の消費や小家畜の売却、国内での出稼ぎが主な対処行動になっていた (表 3-2)。ザルマの対処行動は、フルベのそれと比較すると多岐に渡っていることが分かった (図 3-1)。言い換えれば最も回答数の多い政府からの食料支援に頼る他に確実な対処行動はなく、その時々において臨機応変に取れる手段を選択しながら「危機」に対処していることが明らかとなった。また、これはフルベについても言えることだが、1984 年の大飢饉の年や、1991 年を除く「危機の年」は、いずれも少数件に止まっていた。これは、事前に「危機」に陥らないための対処行動を多くの世帯が取っていた現れと見ることもできる。つまり、Bryceson (1999) が指摘するように、ザルマはこれまで経験してきた「危機の年」を通

表 3-2 ザルマ男性が答えた「危機の年」と「危機」の実態とその対処行動

危機年	回答世帯数 (n=47)	危機の内容	危機の原因	対処の内容 (複数回答、カッコ内は件数)
1973	6	不作 家畜数の減少	不規則な降水 干ばつ	政府食料支援 (3)、外国への出稼ぎ (3)、国内での出稼ぎ (1) 政府食料支援 (8)、野草の採集 (7)、国内での出稼ぎ (6)、薪売り (5)、食料の借用 (3)、篤志家による贈与 (3)、小家畜の売却 (3)、備蓄食料の消費 (2)、ウシの売却 (2)、外国への出稼ぎ (2)、親戚からの贈与 (2)、送金受取 (1)、借金 (1)
1984	24	不作 家畜数の減少	不規則な降水 干ばつ	政府食料支援 (1)、薪の販売 (1) 政府食料支援 (8)、食料の借用 (3)、備蓄食料の消費 (3)、国内での出稼ぎ (2)、小家畜の売却 (2)、借金 (1)、親戚からの贈与 (1)、篤志家からの贈与 (1)、送金受取 (1)、薪の販売 (1)、ウシの売却 (1)、外国への出稼ぎ (1)
1987	1	不作	不規則な降水	国内での出稼ぎ (1)
1991	17	不作	不規則な降水 害虫 (バッタ)	食料の借用 (2)、小家畜の売却 (2)、借金 (1)
1992	1	不作	不規則な降水 害虫 (バッタ)	備蓄食料の消費 (1)
1993	2	不作	不規則な降水 干ばつ	備蓄食料の消費 (2)、小家畜の売却 (2)、国内での出稼ぎ (1)、ウシの売却 (1)
1996	1	不作	不規則な降水	備蓄食料の消費 (1)、小家畜の売却 (1)
1997	5	不作	不規則な降水	国内での出稼ぎ (1)
1998	2	不作	不規則な降水	備蓄食料の消費 (1)、送金受取 (1)、小家畜の売却 (1)
1999	1	不作	不規則な降水	国内での出稼ぎ (1)
2001	1			備蓄食料の消費 (1)、送金受取 (1)、小家畜の売却 (1)
2005	1	不作	不規則な降水	国内での出稼ぎ (1)

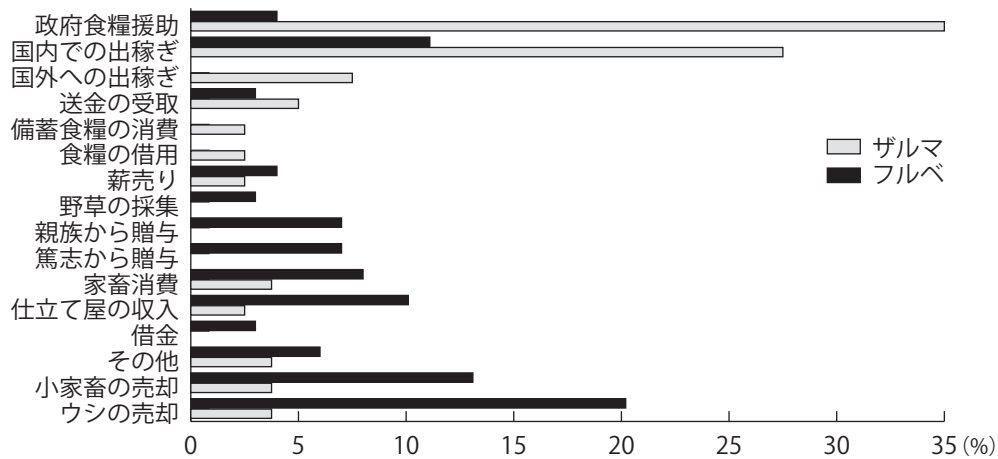


図 3-1 ザルマとフルベの「危機の年」の対処行動（全対処行動の総数に占める割合）

して、事前に「危機」の影響を受けにくい活動（国内外への出稼ぎや小売業など）を生業に取り入れ、独自のリスク管理システムや生業体系を発展させてきたと言える。

### 3 フルベとザルマで異なる「危機の年」

それぞれの「危機の年」を詳細に見ていくと、1984年のように両者に共通する「危機の年」が見られる一方で、ザルマの半数以上が「危機の年」と挙げた1991年をフルベは「危機の年」と認識していないことが分かった（図3-2）。これはザルマとフルベで「危機の年」の捉え方、あるいは判断基準が異なっていた可能性が考えられる。すなわち、ザルマがその年を「危機」と判断するか否かは、主要穀物であるトウジンビエの収穫の多寡によるものと推測できる。表3-2の1991年の危機の原因を見ると、不規則な降水と害虫（バッタ）による被害が挙げられている。国際連合食料農業機関（FAO）のサバクトビバッタ（*Schistocerca gregaria*）の被害報告によれば、この年8月から10月にかけてニジェールの北部でその発生が記録されている（FAO 1991）。これが南下し、収穫期のトウジンビエに甚大な被害をもたらしたかどうかは断定できないが、このようにトウジンビエの生育に十分な降水量や降水パターンに恵まれず、また収穫期に蝗害などに見舞われた場合には、その年を「危機の年」と認識する可能性は

高い。つまり、ある特定の局所的な環境条件が、「危機の年」か否かを定める主要因となり得る。ザルマは土地への縛りがある分、主生業自体に柔軟性を持たせることは困難であるが、天候の影響を受けにくい出稼ぎや薪の販売といった生業を、多様に組み合わせることで柔軟性を持たせているとも捉えられる。他方、フルベの「危機」の判断基準は、家畜の状態に拠るところが大きいと推測できる。作物の生育が不良の年であっても放牧地の草本や灌木の生育がよく、年間を通して十分な飼料に恵まれれば、その年を「危機の年」と認識するとは考えにくい。フルベは雨季の間、幾つかの経路を経て、水場や牧草地へと移動する（Boutrais 2007）。その移動経路には、幾つかのオプションがあり、フルベ間のネットワークによりその年の目的地を決定する

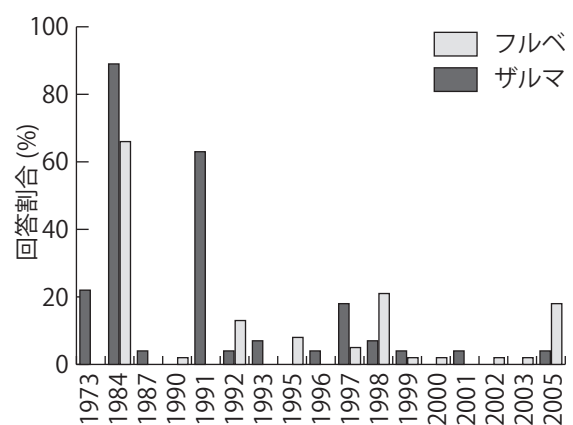


図 3-2 ザルマとフルベの「危機の年」の回答割合



図 3-3 ござの材料となる植物  
(※木の実も食料として採集される)

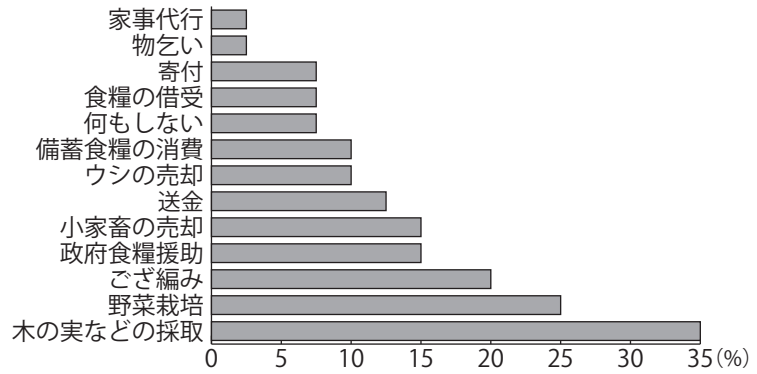


図 3-4 ザルマ女性の「危機の年」の対処行動  
(全対処行動の総数に占める割合)

(Thébaud and Batterbury 2001)。1973 年 や 1984 年のような大飢饉の年を除いては、幾つかの選択肢の中から、遊牧地を選ぶ柔軟性を持ち得ているともいえる。つまり、ザルマに比べて土地への縛りは弱く、牧畜という生業自体に柔軟性を持たせることが可能である。嶋田 (1992) は、フルベのこうした移動性に着目し、移動することで危機を回避していると言及している。また、フルベにとっては、ある特定の土地の降水量、降水パターンよりも、水飲み場や畑の開放日などの取り決めの方がより重要である (Batterbury and Warren 2000) という指摘もある。

#### 4 ザルマ女性の「危機の年」と対処行動

図 3-4 はザルマ女性 40 人が過去に経験した「危機の年」の対処行動をまとめたものである。対処行動の種類は多く、ザルマ男性のそれを上回った。最たる対処行動は、木の実などの採取で、次いで野菜栽培やござ編みといった現金収入につながる活動が続いた。また、聞き取りをした女性の証言によれば、1970 年代以前は、自ら対処行動をとることは稀で、出稼ぎや薪、飼料作物の収集に出た夫の帰りをただ待つしかなかった (図 3-4 「何もしない」に該当) が、次第に野草や木の実の採集、ござ編みといった能動的な行動を起こすようになってきた (表 3-3) ということである。この変化の一つの理由として、乾季の出稼ぎに伴い、村で若年男性が不在になる状況が考えられる。ザルマ女性は

乾季、最も食料が希薄になる時期も村に残り、世帯主に代わって家族の生活を守っていかねばならず、出稼ぎに出た男性からの仕送りが滞れば、すぐに危機に陥る不安定な状況に常にさらされてきた。こうした不安定な状況を改善するために、この地域の女性たちの一部は、より能動的な行動である野菜栽培を乾季に取り入れたものと推測できる。

#### 5 ザルマ女性の「危機の年」の村落間比較

表 3-3 はファカラ地域の二つの村、ボクサイ村 (以下 Bo 村とする) とマウレイ・クワラゼーノ村 (以下 MKZ 村とする) の女性各 10 名が答えた「危機の年」の年を示している。Bo 村、MKZ 村共に人口 400 人程度の小規模な村落である。彼女らのほとんどは未就学者で、全回答

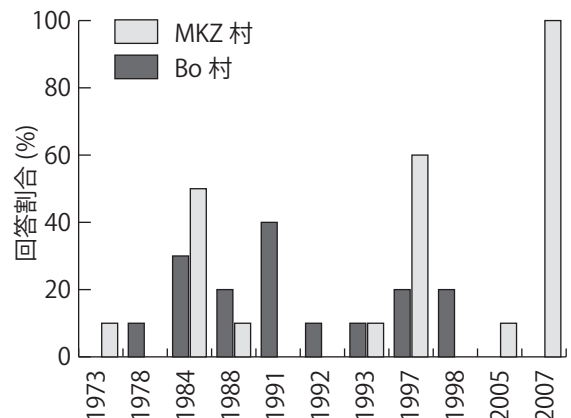


図 3-5 ザルマ女性の「危機の年」の村落間比較



表 3-3 ザルマ女性が答えた「危機の年」と「危機」の実態とその対処行動

(ボクサイ村)

年代	現地呼称	危機の内容	危機の原因	対処行動
1978	Koga	不作	不規則な降水	政府による食料援助授与 (1)
1982		不作	不規則な降水	ござ作り (1)
1983				ござ作り (1)
1985				野菜栽培・販売 (1)
1988	Kangai Kosu	家畜数の減少	ペスト	祈禱によるお祓い (1)、ござ作り (1)
		不作	不規則な降水	
1988	Hinja Diri	不作	不規則な降水	ござ作り (1)
1990				(家族からの) 仕送り (1)
1992				借金 (1)、ござ作り (1)
1993	Taru Sasa	不作	不規則な降水	野草や木の実採集 (1)
1999				ござ作り (1)
1991	Kairubaja ize	不作	不規則な降水	
1992				ござ作り (1)
1998				ござ作り (1)
1992		不作	病虫害	借金 (1)
1993	Tugu bisa	不作	バッタ被害	(家族からの) 仕送り (1)

(マウレイ・クワラゼーノ村)

年代	現地呼称	危機の内容	危機の原因	対処行動
1973	Koga	不作	不規則な降水	木の実などの採集 (1)
1982		不作	不規則な降水	木の実などの採集 (2)
1983				家畜売却 (1)
1988				他人の畑仕事や薪、草の収集 (2)
1988	Dasai	不作	不規則な降水	木の実などの採集 (1)
1993		不作	不規則な降水	政府による食料援助 (1)
1997	Taru Sasa	不作	不規則な降水	家畜売却 (1)
1998				木の実などの採集 (2)
2005	Koma dogo	感染症		木の皮など煎じて飲む (1)
2007		不作	不規則な降水	他人の畑仕事 (1)、薪や木の実採集 (2)、薪販売 (1)、野菜栽培 (2)

者のうち 5%が初等教育のみを受けていた。

各村の女性が回答した「危機の年」を見ると、ザルマ男性、フルベ男性共に最も回答が多かった 1984 年を挙げた女性がいなかったことが分かる。しかし、過去に経験した特徴的な危機の年には、それぞれ現地語の呼び名が付いており、Koga (現地語で「乾く」の意) と呼ばれる「危機の年」が両村で 1984 年前後に集中しているため、それらを同一の 1984 年の大干ばつを指すものと判断した。このように両村共通の「危機の年」がある一方、特定の村のみで見られる「危機の年」も存在する。それが顕著なのが 2007 年で、MKZ 村の全ての女性が 2007 年を「危機の年」に該当すると回答したのに対し、Bo 村ではこの年を「危機の年」と回答した女性はいなかった (図 3-5)。ここから、同じ地域に暮らすザルマ女性の間でも「危機」に対する認識は異なる

ことが明らかになった。

## 6 乾季の野菜栽培にみるリスク軽減のしくみ

第 2 章のザルマ女性の日課でみたように、この地域の女性は農繁期においては早朝から夜にかけて一日中休むことなく家事や農作業に従事していた。一方、乾季には所々で空き時間がある

表 3-4 Bo 村・MKZ 村の野菜栽培の状況 (2008 年 3 月現在)

	Bo 村	KKZ 村
村からマーケットまでの歩行距離	4 km	30 km
主な栽培野菜	カボチャ タマネギ	カボチャ スイカ
野菜栽培導入後の経過年数	7 ~ 24 年	2 ~ 5 年
販売の有無	○	×

り、この時間をこの地域の幾つかの村の女性は野菜栽培に充てている。Bo村、MKZ村においても乾季に野菜栽培が行われており、両村の野菜栽培の状況を示したのが表3-4である。Bo村における野菜栽培導入後の経過年数はMKZ村と比較して長く、さらにマーケットがある村から4kmと近いため、野菜栽培は概ね成功し、販売まで漕ぎ着けた女性は多い。しかしMKZ村ではその経過年数は短く、マーケットからも遠いため販売に至っていない状態であった。先に見た両村の「危機の年」に照らし合わせると、Bo村において野菜畑の敷地内に手汲み灌漑用の貯水槽が設置され、それをきっかけに野菜栽培に従事する女性が増えた2000年から調査時点の2008年まで「危機の年」を挙げる女性はいなくなっている。一方MKZ村においては2000年以降も「危機の年」が報告されている。このことからBo村において野菜栽培が同村のリスク管理において重要な役割を果たしていることが示唆された。このような事例はブルキナファソ北部の村落においても報告されている(Nielsen and Reenberg 2010)。この地域の女性も、慢性的な食料不足を緩和させるために、1980年代半ばから積極的に野菜栽培などの経済活動に従事するようになり、そこで得られた現金収入で不足分の穀物(主にトウジンビエ)を購入し、世帯収入に大きく貢献している。

### 7 「危機の年」の対処行動から恒常的な生業への移行

前節で、乾季の野菜栽培がリスク軽減に貢献にしている可能性を示した。しかし、Bo村、MKZ村両村に限ってみると、野菜栽培を「危機の年」の対処行動に挙げたのはそれぞれ1件と2件に止まっていた(図3-6)。乾季の野菜栽培が成功を収めているBo村においては、野菜栽培が生業のレベルにまで達していたため、「危機」に対する事前策として機能したものと考えられる。そのためBo村の女性は野菜栽培をもちや「危機」に対処する事後策としてではなく、毎年乾季に恒常的に行われる事前策、あるいは

一つの生業オプションとして捉えているものと考えられる。ファカラ地域内で、同じく乾季の野菜栽培が活発に行われているBo村の隣村においては、女性が一乾季に野菜栽培から得る平均の現金収入(52.50€)は、乾季に男性が出稼ぎで得る平均収入に匹敵するという報告もある(Saqalli et al. 2010)。他方MKZ村における野菜栽培は先に見た通り、調査時点では未だ成功には至っておらず、「危機」に対する事後策にもなり得ていなかった。そのため野菜栽培を対処行動に挙げる女性が少なかったものと考えられる。つまりMKZ村では未だ「危機」への対処行動が事後策でしかなく、そのため依然として「危機」に陥りやすい状況が続いているものと考えられた。

### 8 ニジェール政府の対応

これまでフルベ男性、ザルマ男性、ザルマ女性の「危機の年」についてみてきた。彼らが挙げた様々な「危機の年」は生業を異にする民族間、あるいは乾季の野菜栽培の取り組みの程度が異なる村の間で変わってくるのが先の調査で明らかになってきた。それではニジェール政府や国際機関、自他ともに認める「危機の年」とは一体どのようなものなのだろうか。そしてその「危機」に対して政府や国際機関はどのような対応策を講じてきたのだろうか。ここではサヘル地域全域を襲った1984年の干ばつとニジェール全土が深刻な飢饉に陥った2005年の

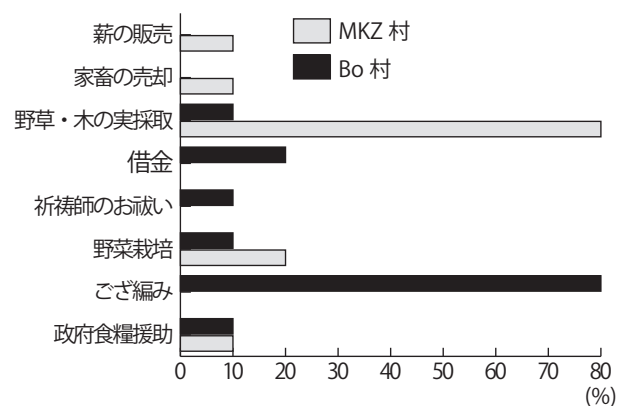


図3-6 ザルマ女性が認識する「危機の年」の対処行動(全対処行動の総数に占める割合)

事例をもとに検証する。

FAO (Food and Agriculture Organization) の記録によれば、1984年にニジェール政府は食料援助の他にも様々な対応を講じている。その内容は下に示した(1)から(8)で、ミクロレベルからマクロレベルのあらゆる対応策を早い段階から随時打ち出していることがわかる。

- (1) 政府高官が被災地に赴き、ザルマに対して乾季作を奨励し、フルベに対しては家畜牛がよい状態のうちに売却することを勧告
- (2) 近隣諸国(ベナン、ブルキナファソ、ナイジェリア)に危機の時期にフルベとその家畜の受入を要請
- (3) 乾季作を始めるために、トウモロコシ、麦、ジャガイモ、野菜の種、イモノキ(キャッサバ)やサツマイモの購入資金を国の内外で募る
- (4) 食料が迅速に輸入されるために近隣諸国に対してニジェールの国境を開放し、関税なども撤廃
- (5) 乾燥肉生産を行うためのパートナーを募る(フルベがウシを売却することでトウジンビエなどの食料を最低1袋購入できる適正な価格で買い取り、乾燥肉の生産と販売を行う。後にWFP(世界食料計画)はこれを買取り、無料で被災地の人々に配給した)
- (6) 家畜飼養のため綿花の種や麦の籾殻の購入
- (7) フルベに対しても乾季作を奨励
- (8) 被災地への食料配給

翌年に収穫された乾季作物の全収量は600,000トンにも上った(Rhissa 2005)。しかし、これらの対応が被災地全てで実行されたかどうかは疑問である。既述のフルベやザルマの1984年時の対処法を見ると確かに政府による食料援助を一部の回答者は受けている。しかし、食料援助以外の乾季作の奨励や、政府や外部援助機関による家畜牛の買取などの対応を受けたものは、少なくとも今回のファカラ地域の調査では見られなかった。

また、この後2004～2005年に起きた大飢饉では1984～1985年で得た経験も教訓も生かさ

れなかった。これは、2004年の不規則降水とバッタの被害によって引き起こされた食料危機でおよそ250万人もの人々が食料難に苦しんだといわれている。UNICEF (United Nations International Children's Emergency Fund: 国連児童基金)によれば、約80万人以上の子どもが栄養失調となった。このとき政府は、223,448トンの食料が不足し、家畜飼料にいたっては4,600,000トンが必要であることを発表した。そうしているうちにも、家畜という家畜は飢えにより次々に死に、家畜の値段も大暴落した。例えば、平常では150,000 Fcfaの値で取引されるウシが、そのときには5,000 Fcfaという破格の値段で売却されていた。またこの年には、1984年に行われたフルベ救済政策は取られなかったために、ナイジェリアからこの安価なウシを買い求め、それを乾燥肉にして自国で20倍もの値段で販売するという商人も多数存在した。このような状況に耐えかねて自殺をするフルベもいたという。

1984年から20年も経過した2005年の大飢饉を最小限に食い止めることはできなかったのだろうか。FAOによれば、2004年の不規則降水による不作状況から、このような危機的な状況に陥ることは予見できたことであり、実際、2004年12月にニジェールの3,000村において300万人余りの人々に緊急食料支援が必要になると警鐘を鳴らしていた。しかし、そのような危機的な状況の中で政府が取った対応は、砂糖、小麦粉、牛乳、水そして電気使用料などに19%の付加価値税をかけるというものであった。これに反対した市民は結託し、数千の人々が3月22日から3月31日の10日間もの間、首都ニアメでデモ行進を行ったためにニアメは文字通り麻痺状態に陥った(Rhissa 2005)。このような状況を受けてWFPは飢饉とバッタ被害の被災地住民約40万人への食料支援として300万ドルの援助を呼びかけた。そしてこの時点で漸く政府が打ち出した対応策が以下の4つであった。

- (1) 穀物の適正価格での販売(ex. トウジンビエ

10,000 Fcfa/100kg)

- (2) 既成の穀物銀行の強化および新たな穀物銀行の創設
- (3) 農耕・畜産技術の提供
- (4) 資金援助要請

これにより 22,000 トンの穀物が政府の言う適正価格で販売されたにもかかわらず、事態は一向に収束の兆しを見せなかった。さらに一般市民もこれに満足せず、全ての被災地に無償の食料援助を実施するよう政府に求めたのである。この要求を再度政府は拒み、さらに状況が悪化の一途を辿っていることを知りながら外部ドナーに対しては食料危機に対処するための改善計画を実施する準備は整っているという発表を行っていた。この間、FAO は 4 回にわたり、世界にニジェールの危機的な状況を発信し支援を募っていた。こうして外国からの援助が開始されたのは 2005 年 7 月半ばになってからで、最も深刻な飢饉を被った村落地域や砂漠地域の人々にとっては遅すぎる対応となってしまった。当然、ニジェール政府に対する国際的な非難は免れず、とりわけその対応の遅さと不適切な対応策が指摘された。

ここでは 1984～1985 年と 2004～2005 年の「危機の年」に対する政府の対応をみてきた。両者を比較すると、前者のケースは政府が 1984 年の早い段階から適宜、建設的な対応策を国内レベルから国際レベルまできめ細かくとっていたことが窺える。具体的には、政府高官自ら被災地に足を運び現状の把握を行い、さらに地域住民に対して適切な対応策を講じている。次いで近隣諸国に対しても具体的な支援を要請し、さらに国際機関に対しても援助を呼びかけていた。そこには非常事態時の政府の取るべき行動が、先手を取るかたちで打ち出されていた。他方、後者のケースはそうした好事例があったにもかかわらず、その経験は全く生かされなかったと言わざるを得ない。その対応は常に後手に回り、国際機関の度重なる警鐘に対しても的確な対応策を講じなかった。実際、筆者自身も 2005 年 7 月に首都ニアメから程近いニ

ジェール川沿いの村落を視察したが、そこでも食料不足は深刻な影を落としていた。上述の通り、国際機関や援助機関による食料・医療援助がこの時期から開始されているが、それも全ての被災地に適用されたものではなかった。この村落のように比較的首都から近く、ニジェール川沿いの地域はこうした援助機関からも見落とされ、文字通り為す術を失っていた。

さらに、先に触れたようにフルベが住む遠隔地や規模の小さい周辺の村にまで救援物資が届かないという問題もある。多くの場合、そうした物資は地域の中心の村や町にまとめて配送される。それより遠方の村に直接届けられることはほとんどないため、遠隔地に住む住民は、救援物資を求めて中心の村や町まで取りにいかねなければならない。徒歩で何時間もかけて配給所にたどり着いたときには、すでに救援物資は底をついていたといった悲惨なケースもみられた。ここに国際機関や外国の援助団体の限界をみると同時に、中央政府の持つ「危機の年」に対する感受性がどれほど鈍く、地域住民とかけ離れたものであるかがわかる。

## 9 まとめ

サヘル地域の人々にとって「危機の年」は一樣ではなく、牧畜や農耕といった生業の違いにより、「危機の年」の認識が異なることが明らかになった。フルベの多くは家畜を売却することで「危機」を凌いでおり、ザルマは政府からの食料支援や様々な生業を複合的に組み合わせることで「危機」に対応していた。フルベは平時においては、家畜の肥育、売却によって日々の糧を得ているが、ザルマの暮らしは、主生業である雨季の穀物栽培に、乾季の男性の出稼ぎや女性の野菜栽培といった複数の生業を組み合わせることで成り立っているといえる。そしてどの世帯も、危機を未然に防ぐための事前的なリスク対処行動を取っていることが示唆された。しかし、「危機」の程度によっては、さらに危機回避のための様々なオプションを加えなければ立ち行かなくなる。それが、政府からの

食料支援や、女性が主に行うごぎ編みや木の実の採集であった。

同じザルマ女性の間でも村落の違いによって「危機の年」は異なっていた。村落間でザルマ女性の「危機の年」の認識が異なっていたのは、乾季の野菜栽培が新たな生業オプション、もしくは「危機」に対する事前策になり得たか否かによるものと考えられた。野菜栽培の継続年数が長く、マーケットにも近いという好条件に恵まれた Bo 村においては、乾季作が雨季の不作を補う役割を果たし、結果として常襲的な「危機」を未然に防ぐレベルにまで達していた。一方の MKZ 村においては、野菜栽培の経験の浅さと、マーケットから遠い立地条件がそれを阻んでいる状態であった。

以上のように、サヘル地域のフルベとザルマに記憶されている「危機の年」と「危機」への対処行動を通して、ファカラ地域における、それぞれの危機管理のしくみや、環境の変化に柔軟に対応しながら変遷する生業体系を明らかにすることができた。ただし、多くの先行研究でも指摘されているように、フルベの中にも定住し、農耕を始める世帯が現れ、ザルマの中にも

主に小家畜を所有する世帯が増えてきており、女性の役割もまた多様化してきている。このような変化の中で、サヘル地域の人々の危機管理のしくみや生業体系は今後もさらに変化していくと考えられる。

## 第2節 ニジェール南部の人々が認識する「危機の年」と対処行動

### 1 「危機の年」の現地呼称とその意味

主要な「危機の年」にはハウサ語による現地呼称が付され（表3-5）、その経験は口承により記憶されていた。そこで、現地呼称とテッサウアの歴史資料（République du Niger Département de Maradi arrondissement de Tessaou Bureau d'arrondissement du recensement 発行年不詳）の照合と村人からの聞き取りにより「危機の年」の年号を特定した。

現地呼称は1973年や1984年のように回答数が多かった「危機の年」では各村において呼称が共通したが、「危機の年」によっては各村落で呼称が異なったり複数であったり不明であっ

表3-5 ザルマ女性が答えた「危機の年」と「危機」の実態とその対処行動

年号	「危機の年」の呼称	呼称の意味	年号	「危機の年」の呼称	呼称の意味
1942	May Tiya	食料を購入しなければならなかった	1986	Kan Wal Elbuhari	El Buhari の妹
1947	Chin Hwara	バッタ被害	1988	In Tiyale	タウア州の少女の歌
	May Ganni	醜い	1991	Sabi Barkwaka	用心せよ
1949	Kwajaja	苦しい	1995	Assané	アサネという男性
1953	Ouwal Sani	サニの母	1996	Al Kama	小麦粉（配給があった）
1963	Bakirikiri	不明	1997	Zou Kaou	不明
1969	Kokoudouma	儲け		Kaouda Kanka	見ないでくれ
1971	Zololo	痩せる	2003	Wazaka Gayama	君は誰に言うのですか
1973	Hilli	空間（作物が育たず、畑に何もなかった）	2004	Mi Zaki Gayamini	私に何を言うのですか（皮肉）
1974	Jan Dawa	赤い品種のソルガム	2005	El Kwamousso	痩せる
	Jan Jare	//	2007	不明	不明
1976	Tachi Birkita	ごろごろしていないで起きなさい	2008	Tourka	不明
1981	El Saini	セイニ・クンチェ大統領	2010	Tabara	去年
1984	El Buhari	ナイジェリアのブハリ大統領	2011	Tabana	今年
1985	Boussaou	不明		May Bobo	ニエベ害虫の名称

たりした（表 3-5、3-6、3-7）。また、聞き取りにより得られた呼称と歴史資料に記載された呼称が異なることもあったが、各表では各村の村人からの聞き取りにより得られた呼称を示した。

各呼称はそれぞれの「危機の年」の状況を表しており、例えば、1973年の Hilli は作物が育たなかったために畑が空間となったという意味があり、1984年の *El Buhari* は、後述するナイジェリアのブハリ大統領がニジェール・ナイジェリア間の国境を封鎖したことに由来していた（表 3-5）。その他の「危機の年」の呼称の意味については表 3-5 に示した通りであるが、聞き取りからは全ての「危機の年」の名称とその意味を把握することはできなかった。

このように干ばつや飢饉が起こった年にその状況を意味する現地呼称が付された事例は、ニジェール南西部（佐々木ほか 2011）やブルキナファソ北東部（石本 2012）でも報告されている。ニジェール南西部のザルマとフルベは 1984 年を *koga*（乾き）と名付けていた（佐々木ほか 2011）。ブルキナファソ北東部のケル・タマシェックは 1972～1973 年の干ばつを *awatai wan' inmotan sitan*（ウシが大量死した年）、1984～1985 年の干ばつを *awatai wan wajak*（採集が積極的に行われた年）と名付けていた（石本 2012）。

## 2 1984 年のサヘルの大干ばつ (*El Buhari*)

1984 年にサヘル地域は 20 世紀最大の干ばつに襲われ、多くの餓死者や食料難民が発生した。調査地においても 1984 年の干ばつは *El Buhari* という現地呼称で人々に記憶されており、干ばつという天災とニジェール・ナイジェリア間の国境封鎖という出来事によって過去最悪の「危機の年」となると認識されていた。本節では、この *El Buhari* について先行研究や文献、また人々からの聞き取りをもとに概観する。

### 1) *El Buhari*

1984 年はサヘル地域で 20 世紀最も降水量が

少ない年となり（門村 1992）、サヘル地域全体が大干ばつに襲われた（篠田 1992、セン 2000、Devereux 1993、Turner 1999）。本調査地でも、各村の全回答世帯が 1984 年を「危機の年」と回答し、*El Buhari* という現地呼称が付されていた（表 3-5、3-6、3-7）。なお、ニジェール西部では 1984 年の大干ばつに *koga*（ニジェール西部の主要言語のザルマ語で「乾く」の意）という現地呼称が付されており（佐々木ほか 2011）、現地呼称は同じサヘル地域内でも場所や言語により異なることがわかった。*El Buhari* という現地呼称は当時のナイジェリアの大統領であったムハンマド・ブハリ（Mohammadu Buhari）大統領（在任 1983～1985 年）に由来する。調査村では、当時に就労年齢に達していた男性のほとんどが *El Buhari* という「危機の年」を記憶していた（表 3-5、3-6、3-7）。この現地呼称の由来から、調査地では 1984 年の「危機の年」が大干ばつという天災だけでなく、ナイジェリアによるニジェール・ナイジェリア間の国境封鎖という出来事が相俟って「危機の年」となったことが村人や行政職員からの聞き取りにより明らかとなった。

### 2) ビアフラ内戦

ナイジェリアのブハリ大統領による国境封鎖のきっかけともなったビアフラ戦争について室井（2003）は以下のようにまとめている。

1960 年 10 月 1 日の独立後のナイジェリアの大きな民族構成は北部のハウサ、東のイボ、西のヨルバであった。当時、ハウサの生業は農耕と牧畜を中心とし、これらの産物の旧宗主国イギリスによる買い上げもあって他地域よりも経済的に豊かであり優勢勢力であった（現在では逆である）。しかし、1960 年の独立以降にイボを中心とする東の地域で油田が発見されると、これにより工業化を図り始めたイボはオジュク将軍がビアフラ共和国として 1967 年に東部州の独立を宣言した。独立により石油資源をイボに

独占されることを恐れたヤコブ・ゴウオン率いるハウサを中心としたヨルバを含む他勢力はイボの独立を認めず、双方による武力衝突が始まる。これがビアフラ内戦(1967～1970年)であった。

このビアフラ内戦にはニジェールも大きく関与していた。当時のニジェール初代大統領であるディオリ・アマニ(在任1960～1974年)はビアフラ内戦におけるナイジェリアのハウサを支援すべく、バヤロ副大統領を参謀に立て、ナイジェリアにサニ・スンナを指揮官としてニジェール軍を派遣した。この時、独立を図るイボは領土を守るべく前線に無数の地雷を仕掛けることによりハウサによる領土への侵入を防いでおり、これによりブハリ将軍(その後、1984年の大干ばつ時のナイジェリア大統領)率いるハウサは進軍することができずに苦戦を強いられていた。そこに戦地入りしたニジェール軍指揮官のサニ・スンナは、大量のウシを持ち込み、ウシに地雷が仕掛けられた前線を歩かせることにより地雷を避けてイボ領土へ進軍するという戦略を図り、この戦略が功を奏してハウサが優位に戦えるようになり、その後1970年にビアフラ内戦は終結した。このように、ビアフラ内戦におけるサニ・スンナの活躍によりニジェールはナイジェリアに大きく貢献したのである。

ビアフラ内戦後、ニジェールではクーデターによりセイニ・クンチェ最高軍事評議会議長(在任1974～1987年)が軍政を敷いていたが、数度のクーデター未遂事件が起こるなど政情は安定しなかった。セイニ・クンチェはビアフラ内戦で活躍した時の副大統領、サニ・スンナをクーデター疑惑により拘束した。これを聞きつけたナイジェリア政府はサニ・スンナの解放を求め、ビアフラ内戦でのサニ・スンナの戦友であるバハリを交渉団としてニジェールへ派遣した。しかし、セイニ・クンチェは自国の問題であり干渉するべきではないとしナイジェリアの要求を拒否した。その後、セイニ・クンチェはサニ・スンナを北部のアガデスの収容所で処

刑したため、ブハリはこのことに不満を抱いた。

### 3) ニジェール・ナイジェリア間の国境封鎖

1984年、ナイジェリア北部もこの干ばつの影響を受けたが、ニジェールほど干ばつの激しさはなく、南部はスーダン気候帯であるため食料生産が可能であった。それに加えて、ニジェールよりもともと国力があることなどから、ニジェールほど深刻な状況には陥らなかった。ニジェールはナイジェリアと約1,500 kmの国境を接しており、多くの食料や物品が経済大国であるナイジェリアから陸路輸入される。当時も、多くのニジェール人が食料の購入と出稼ぎを求めてナイジェリアに入ろうとした。しかし、サニ・スンナの処刑に対して不満を示した時の大統領バハリは数ヶ月(期間不明)に渡りニジェール・ナイジェリア間の国境封鎖をした。ブハリが国境を封鎖した理由は、サニ・スンナを処刑したニジェール政府に不満を抱いていたからとする説、ナイジェリア北部も少なからず干ばつの影響があったため食料の流出を防ぎ自国を保護するためであったとする説、その両者とする説がある。

その一方で、1984年にT村では5件、N村では17件、R村では7件の出稼ぎによる対処行動が取られており、ナイジェリアに出稼ぎに行った村人もいた。これらの村人は国境が封鎖される前にナイジェリアに入国、または主要道路を避けて夜間に入国したという。このように国境は封鎖されても出稼ぎに行くことは可能だったが、より深刻な問題はニジェール国内の食料価格の高騰であった。主要道路が封鎖されたためニジェール国内の市場に食料は入らず供給量が少なかったため在庫食料の価格は高騰し、人々は食料を購入することが困難な状況に陥った。

このように1984年は大干ばつという天災に加えて、ナイジェリア国境の封鎖という出来事により食料不足の状況が悪化したと人々は認識していた。

表 3-6 T 村の調査世帯が回答した「危機の年」とその対処行動 (25 世帯)

年号	現地呼称	回答 世帯数	内容	原因	対処行動の内容 (複数回答あり、カッコ内は回答件数)
1942	May Tiya	2	不作	干ばつ	採集 (2)、小家畜の売却 (1)、出稼ぎ (1)
1947	Chin Hwara May Ganni	3	不作	病害虫被害 不規則な降水	小家畜の売却 (3)、採集 (3)、出稼ぎ (1)、薪売り (1)
1949	Kwajaja	7	不作	病害虫被害 不規則な降水	採集 (7)、小家畜の売却 (5)、ウシの売却 (3)、薪売り (2)、出稼ぎ (1)、糠を食す (1)
1969	Kokoudouma	1	不作	不規則な降水	小家畜の売却 (1)、採集 (1)
1971	Zololo	2	不作	不規則な降水	採集 (2)、小家畜の売却 (2)、援助食料の受給 (1)、薪売り (1)
1973	Hilli	9	不作 家畜数の減少	干ばつ 病害虫被害	小家畜の売却 (9)、採集 (4)、出稼ぎ (2)、薪売り (2)、援助食料の受給 (1)、糠を食す (1)
1974	Jan Dawa	2	不作	不規則な降水 病害虫被害	小家畜の売却 (2)、援助食料の受給 (2)、採集 (1)
1976	Tachi Birkita	1	不作	病害虫被害	採集 (1)
1981	El Saini	3	不作	不規則な降水	小家畜の売却 (3)、出稼ぎ (2)、援助食料の受給 (2)、小家畜の売却 (3)、採集 (1)
1984	El Buhari	25	不作 家畜数の減少	干ばつ	小家畜の売却 (17)、援助食料の受給 (15)、採集 (14)、薪売り (9)、出稼ぎ (5)、ウシの売却 (3)、糠を食す (2)、その他 (3)
1996	Al Kama	1	不作	病害虫被害	出稼ぎ (2)、小家畜の売却 (1)
2003	Wazaka Gayama	1	不作	不規則な降水	小家畜の売却 (1)
2004	Mizakigayamini	1	不作	不規則な降水	小家畜の売却 (1)、援助食料の受給 (1)
2011	Tabana, Bobo	1	不作	病害虫被害	小家畜の売却 (1)

表 3-7 N 村の調査世帯が回答した「危機の年」とその対処行動 (25 世帯)

年号	現地呼称	回答 世帯数	内容	原因	対処行動の内容 (複数回答あり、カッコ内は回答件数)
1947	Chin Hwara May Ganni	3	不作	病害虫被害	採集 (2)、小家畜の売却 (2)、親戚からの贈与 (1)
1949	Kwajaja	2	不作	不規則な降水	小家畜の売却 (2)、採集 (2)、糠の摂取 (2)、物乞い (1)
1963	Bakirikiri	1	不作	不規則な降水	薪売り (1)
1973	Hilli	1	不作	干ばつ	出稼ぎ (1)、小家畜の売却 (1)、援助食料の受給 (1)
1984	El Buhari	25	不作 家畜数の減少	干ばつ	出稼ぎ (17)、小家畜の売却 (16)、援助食料の受給 (10)、ウシの売却 (7)、薪売り (7)、糠を食す (7)、採集 (6)、野鳥狩り (1)、物乞い (1)
1985	Boussaou	22	不作	不規則な降水	出稼ぎ (15)、小家畜の売却 (9)、ウシの売却 (6)、援助食料の受給 (5)、採集 (5)、糠を食す (4)、薪売り (2)
1986			家畜数の減少	病害虫被害	
1988	In Tiyale	1	不作	不規則な降水	薪売り (1)、採集 (1)
1991	Sabi Barkwaka	3	不作	不規則な降水	小家畜の売却 (3)、出稼ぎ (1)、ウシの売却 (1)
1995	Assané	1	不作	不規則な降水	ウシの売却 (1)、小家畜の売却 (1)、採集 (1)
2003	Kaouda Kanka	1	不作	不規則な降水	採集 (1)
2005	呼称不明	1	不作	不規則な降水	出稼ぎ (1)、小家畜の販売 (1)、援助食料の受給 (1)
2009	呼称不明	12	不作	不規則な降水	小家畜の売却 (9)、援助食料の受給 (9)、出稼ぎ (8)、ウシの売却 (2)、採集 (2)、薪売り (2)、親戚からの贈与 (1)
2010	Tabara	1	不作 家畜数の減少	土地の疲弊 家畜の伝染病	小家畜の売却 (1)、援助食料の受給 (1)
2011	Tabana, Bobo	15	不作	病害虫被害	出稼ぎ (8)、小家畜の売却 (8)、援助食料の受給 (2)、ウシの売却 (1)、採集 (1)、親戚からの贈与 (1)



表 3-8 R 村の調査世帯が回答した「危機の年」とその対処行動（25 世帯）

年号	現地呼称	回答 世帯数	内容	原因	対処行動の内容（複数回答あり、カッコ内は回答件数）
1949	<i>Kwajaja</i>	1	不作	不規則な降水	ウシの売却 (1)、小家畜の売却 (1)、採集 (1)
1953	<i>Ouwal Sani</i>	1	不作	不規則な降水	ウシの売却 (1)、小家畜の売却 (1)
1973	<i>Hilli</i>	2	不作 家畜の損失	干ばつ 病虫害被害	ウシの売却 (2)、援助食料の受給 (2)、出稼ぎ (1)、小家畜の売却 (1)、採集 (1)、糠を食す (1)
1974	<i>Jan Jare</i> <i>Jan Dawa</i>	5	不作 家畜の損失	不規則な降水 病虫害被害	ウシの売却 (3)、小家畜の売却 (3)、援助食料の受給 (3)、採集 (3)、出稼ぎ (2)、薪売り (1)、糠を食す (1)
1984	<i>El Buhari</i>	25	不作 家畜の損失	干ばつ 病虫害被害	ウシの売却 (21)、小家畜の売却 (18)、採集 (10)、糠を食す (8)、出稼ぎ (7)、援助食料の受給 (7)、薪売り (3)、畑の売却 (1)
1985 1986	<i>Boussaou</i>	15	不作 家畜の損失	不規則な降水 ネズミ被害	採集 (10)、小家畜の売却 (9)、ウシの売却 (8)、出稼ぎ (6)、糠を食す (3)、援助食料の受給 (3)、薪売り (2)、畑の売却 (1)、借金 (1)
1986	<i>Zou Kaou</i>	1	不作	不規則な降水	ウシの売却 (1)、小家畜の売却 (1)、採集 (1)
2003	呼称不明	1	不作	不規則な降水	ウシの売却 (1)、小家畜の売却 (1)、糠を食す (1)
2005	<i>El Kwamouso</i>	3	不作	強風	ウシの売却 (1)、小家畜の売却 (1)、採集 (1)、出稼ぎ (1)、援助食料の受給 (1)
2008	<i>Tourka</i>	1	不作	強風	ウシの売却 (1)、小家畜の売却 (1)、採集 (1)
2009	呼称不明	19	不作 家畜の損失	不規則な降水 強風	出稼ぎ (14)、ウシの売却 (3)、小家畜の売却 (3)、援助食料の受給 (8)、採集 (6)、糠を食す (1)
2010	<i>Tabara</i>	4	不作	病虫害被害	出稼ぎ (4)、ウシの売却 (2)、小家畜の売却 (2)
2011	<i>Tabana, Bobo</i>	22	不作 家畜の損失	病虫害被害	小家畜の売却 (12)、出稼ぎ (10)、ウシの売却 (8)、採集 (6)、薪売り (2)

### 3 「危機の年」の認識におけるハウサの村落間比較

T 村ではサヘルの大干ばつの年である 1973 年を 9 世帯が、1984 年を全回答世帯が「危機の年」と回答した（表 3-6）。その他は 1949 年を 7 世帯が回答したのを除いては少数であり、T 村は主にサヘルの大干ばつの年に「危機の年」を認識していた（表 3-6）。N 村も 1984 年を全世帯が「危機の年」と回答したが、1973 年を回答したのは 1 世帯のみであり、1973 年のサヘルの大干ばつの年を「危機の年」と認識していなかった（表 3-7）。T 村は 1984 年のサヘルの大干ばつの年の直後の 1985 年と 1986 年を「危機の年」と認識しなかった（表 3-6）が、N 村では 22 世帯が 1984 年の「危機」から回復できないまま 1985 年と 1986 年が「危機の年」となったと回答（表 3-7）し、「危機」の影響の大きさや「危機」からの回復力の違いにより後に続く年が村落によっては「危機の年」と認識されることが示唆された。また、N 村では 2009 年と 2011 年のような近年も「危機の年」を認識

していたが、T 村では 1984 年を最後に大きな「危機の年」を認識していなかった（表 3-6）。以上のように、ハウサの村落間において認識された「危機の年」が異なることがわかった。なお、回答が少数の年であっても、それぞれに現地呼称が付されている（表 3-6、3-7）ということは、大きな「危機」ではないとしても何らかの困難があった年として認識されたと考える。また、世帯ごとに「危機」の捉え方が異なるが、その背景を知るには更に詳細な調査が必要である。

ハウサの村落間で「危機の年」の認識が異なるのには、いくつかの理由が考えられる。T 村は毎週日曜日に定期市が開催されるテッサウア市までの距離が約 9 km、乗り合いのトラックやワゴン車による往復交通費は 200 Fcfa、道路はほぼ舗装されていた。一方、N 村はテッサウア市までの距離が約 15 km、往復交通費は 400 Fcfa、道路は全て未舗装であった。このことから T 村は N 村に比べ定期市へのアクセスが良いと言える。サヘル地域の人々は日常的に農作

表 3-9 各村が認識した主要な「危機の年」

区分	年	T村	N村	R村
サヘルの大干ばつ	1973	9件	1件	2件
	1984	25件	25件	25件
1984年の直後	1985	回答なし	22件	15件
	1986	回答なし	22件	15件
近年	2009	回答なし	12件	19件
	2011	1件	15件	22件

(件=回答数)

物や家畜の交易を行っており、交易により入手する食料にも依存している（セン 2000）と報告されており、両村の村人も定期市において食料の購入や家畜の売買を行っていた。したがって、定期市へのアクセスは食料確保や交易において重要であり、アクセスが容易な T 村は N 村に比べて恵まれた立地条件にあると言える。そして、T 村は季節河川を利用しての漁労や野菜栽培などの生業が確立されていた（第 2 章 第 2 節 3 - 4 参照）。これらの生業の多様性が「危機の年」となりうるような年でも T 村のハウサが「危機」を認識しなかった理由のひとつと考えられる。野菜栽培がリスク管理において重要な役割を果たす事例はニジェール南西部（佐々木ほか 2011）やブルキナファソ北部（Nielsen and Reenberg 2010）でも報告されている。一方、N 村には漁労や野菜栽培のような副生業はなく、定期市へのアクセスも T 村と比べると良くなかった。N 村の村人は換金作物と小家畜を売却した後に食料を得るためには出稼ぎに行くしかなくなると述べており、「危機」の感受性は T 村に比べて高いと言える。以上のように、立地条件の違いや生業の多様性の違いによりハウサの村落間で「危機の年」の認識が異なると考えられる。

#### 4 「危機の年」の認識における民族間比較

R 村においてもサヘルの大干ばつの年である 1984 年を全回答世帯が「危機の年」と回答したが、1973 年を回答したのは 2 世帯のみであり、N 村と同じく R 村も 1973 年のサヘルの大干ばつの年を「危機の年」と認識していなかった（表 3-8、3-9）。次いで、N 村と同じく 1984

年のサヘルの大干ばつの年の直後の 1985 年と 1986 年、2009 年と 2011 年のような近年と続くが、その他の回答は少数であった（表 3-8）。以上から、隣接するハウサの N 村とフルベの R 村の「危機の年」の認識が共通したことがわかり、「危機の年」の認識においては民族的差異よりも地域的差異があることが示唆された。一方、佐々木ほか（2011）は農耕を主な生業とするザルマと牧畜を主な生業とするフルベという民族間では「危機の年」の認識は異なり、「危機の年」の判断基準は、ザルマはトウジンビエの収穫の多寡によるとし、不作となった年が「危機の年」と認識され、フルベは家畜の損失によるとし、不作の年であっても家畜の飼料に恵まれれば「危機の年」と認識しないと報告している。N 村においても「危機の年」と認識された年は主に不作の年（表 3-7）であり、ハウサの「危機の年」の判断基準はザルマと同じと言える。R 村においても「危機の年」と認識された年には家畜の損失があった年が含まれていた（表 3-8）。R 村の 5 世帯が 1974 年を回答しており、これらの世帯は 1973 年には大干ばつの影響を受けなかったが、翌年の牧草の不足により 1974 年が「危機の年」となったと回答した。1984 年には全回答世帯が家畜の売却を行い、売却と死滅により 20 世帯が全家畜を損失していた。それが回復しないまま、続く 1985

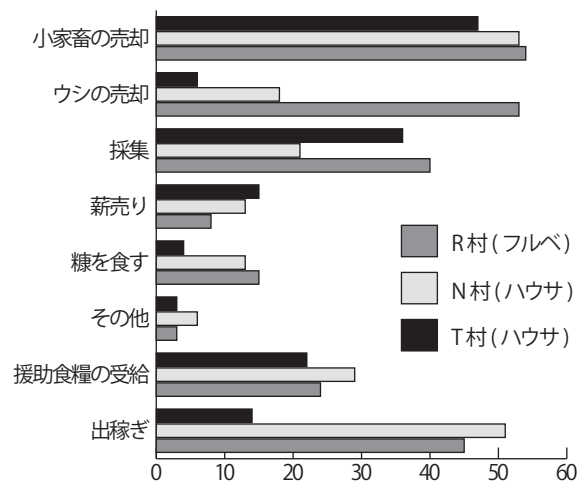


図 3-7 ハウサとフルベの村落における「危機の年」の対処行動（複数回答あり）

年と1986年も「危機の年」と認識されていた(表3-8、3-9)。このようにR村のフルベも家畜の損失があった年を「危機の年」と認識していたことから、R村のフルベの「危機の年」の判断基準も家畜の損失と言える。しかし、R村のフルベは家畜を損失した年だけでなく不作となった年も「危機の年」を認識していた(表3-8)。したがって、牧畜に加えて農耕が主たる生業であるR村のフルベの「危機の年」の判断基準は家畜の損失に加えて収穫の多寡と言える。以上のように、収穫の多寡がハウサだけでなく、フルベの「危機の年」の判断基準となっていたことから、R村のフルベの生業は、定住による家畜の飼養と農耕というハウサに類似した生業であると言える。

### 5 「危機の年」の対処行動

各村において、「危機の年」には小家畜の売却、ウシの売却、出稼ぎ、援助食料の受給、採集、薪売り、糠を食すという対処行動が取られていた(図3-7)。対処行動には、小家畜の売却、ウシの売却、出稼ぎ、採集のように「危機の年」になると量や回数や期間が日常の範囲を超えて行われる行動、薪売りと糠を食すことのように「危機の年」だけに行われる行動、食料援助の受給のように受動的に行われる行動があった。小家畜の売却による対処行動は3村で最も多く(図3-7)、各年で取られていた(表3-6、3-7、3-8)。Sen(1982)は、サヘル地域の人々にとって家畜は農作物に比べ高い商品価値を持つ財産であり、「危機」の際における重要な担保であると報告している。ウシを含む家畜の売却は、冠婚葬祭などで現金が必要になった時など日常でも行われるが、対処行動として行われた場合にはより多くが売却され、1984年には全家畜を売却した世帯もあった。

R村では小家畜に加えてウシの売却による対処行動も多く(図3-7)、各年で取られていた(表3-9)。一方、ウシを多くは飼養しないハウサのT村とN村ではウシの売却による対処行動は少数であった(図3-7)。ウシの売却は主にフル

ベにより取られた対処行動であり(図3-7)、対処行動における民族的差異が見られた。R村では1984年には全回答世帯がウシまたは小家畜の売却による対処行動を取っていた。フルベにとってウシの商品価値は最も高い(池谷2006、嶋田1992)と報告されているが、1984年にはウシの価格が暴落したという先行研究(Derrick1984)がある。1984年にウシを売却したR村の21世帯(表3-8)は、ウシの価格は暴落していたが食料を購入する現金を得るためにはウシが死滅する前に売却せざるを得なかったと回答した。フルベは優れた商人であり、家畜の商業生産を目的とする商業牧畜民(池谷2006)とも言われ、R村のフルベの中には家畜をより高く売るために徒歩により家畜をナイジェリアへ運び売却した世帯もあった。家畜の売却にはいくつもの優先順位があり、分娩能力があるメスよりもオスを先に売却し、商品価値が高いウシよりも小家畜を先に売却、小家畜の中でもヒツジより価値の低いヤギを先に売却するのが一般的であると村人は述べていた。

出稼ぎによる対処行動はT村とN村では各年で取られていた(表3-6、3-7)が、T村の14件に対しN村は51件(図3-7)でありN村で多く取られていた。1984年を見てもT村の5件(表3-6)に対しN村は17件(表3-7)であり、出稼ぎは特にN村で多く取られおり、対処行動における地域的差異が見られた。T村の22世帯、N村でも22世帯が家族の元を離れての過酷な肉体労働を伴う出稼ぎには行きたくないと回答し、小家畜を売却しても食料を賄えない場合に出稼ぎに行くと述べており、小家畜の売却の後に出稼ぎに行くという対処行動の優先順位があることがわかった。R村では出稼ぎによる対処行動は1984年、1985年、1986年を除いては多くは取られてこなかったが、2009年と2011年のような近年は出稼ぎによる対処行動が多く取られていた(表3-8)。R村では3世帯が家畜を飼養しておらず、4世帯は飼養する家畜が5頭以下(T村とN村の1世帯あたりの飼養家畜数の平均は5頭)であった。このよ

うに飼養する家畜が少ない状況から、近年、家畜の売却による対処行動を取ることができなくなったフルベがハウサと同じように出稼ぎによる対処行動を多く取るようになったと考える。採集による対処行動は各年に取られ、世帯、村落、民族を問わず広く取られた対処行動であった（表3-6、3-7、3-8、図3-7）。採集は損失や大きな移動を伴わずに食料を獲得できること、採集が最も盛んな時期は乾季の始まりであることから、他の対処行動と比較してまず最初に取りられる対処行動であった。採集は通常の年でも行われるが、「危機の年」には採集の回数と採集の量が増え、通常の年では採集しない種類の植物まで採集の対象となると村人は述べていた。

薪売りによる対処行動は、各村が大きな「危機」を認識した年（T村は1973年と1984年、N村は1984年、1985年、1986年、2009年、R村は1974年、1984年、1985年、2011年）に主に取られていた（表3-6、3-7、3-8）。薪の採集は、自家消費のみを目的に各世帯において日常でも行われるが販売目的には行われていなかった。販売を目的に薪の採集を日常的に行うのは薪売りを職業とするごく一部の村人だけであり、大部分の村人にとって薪売りは「危機の年」だけに取られた行動であった。

トウジンビエの穀粒を精白する際に出る糠を食すことによる対処行動も、各村が大きな「危機」を認識した年（T村は1973年と1984年、N村とR村は1984年、1985年、1986年）に主に取られていた（表3-6、3-7、3-8）。近年ではR村で2003年と2009年に1件ずつ取られたのみ（表3-8）であり、T村では1984年を最後に、N村では1986年を最後に取られていなかった（表3-6、3-7）。調査時に糠は家畜の飼料としてのみ利用されており、糠を食すことは他に食すものがない場合の限界時の行動と言え、主に1980年代以前の「危機の年」に取られた行動であった。

援助食料の受給がT村では1971年から、N村とR村では1973年から行われていた（図

3-7）ことから、調査地ではこの頃から国際機関などによる食料援助が始まったと考えられる。しかし、配給の量は世帯の1週間の食料を賄うほどでしかなく、配給が行き届いていない世帯もあった。R村のフルベは、援助食料は集村形態を取るN村で配給されるため、散村形態を取るR村のフルベは受給できない場合があると述べていた。食料援助の受給は、配布がなければ受給できないことから配給が行われた年だけの受動的な対処行動と言える。

上述のように、家畜の売却は出稼ぎより優先して行われ、売却される家畜の種類にはいくつかの順序があった。採集は他の対処行動と比較してまず最初に取りられる対処行動であった。また、糠を食すことや薪売りは「危機の年」だけに行われた行動であり、各村が大きな「危機の年」を認識した年だけに行われていた。このことから、世帯による違いはあるが「危機の年」の対処行動にはある程度決まった優先順位があり、各世帯の困窮度に合わせた対処行動が取られた可能性があると言える。なお、N村はT村に比べて認識した「危機の年」が多く（表3-9）、「危機の年」の感受性はT村に比べて高かったと言えるが、糠を食すことや出稼ぎなどの優先順位が低く困窮度が高い時に取られる対処行動がT村に比べて多く取られている（図3-7）ことからN村の「危機の年」の感受性はT村に比べて高かったと言える。

## 6 まとめ

サヘル地域の村落のハウサとフルベの生業を捉えたところ、牧畜に加えて農耕がフルベの主たる生業のひとつとなっていた。ハウサとフルベは、サヘルの大干ばつが起きた1973年や1984年以外にも「危機の年」を認識し、それらは現地呼称により記憶されていた。ハウサの「危機の年」の認識は、副生業の有無や立地条件の違いにより村落間で異なっていた。サヘル地域では民族の違いよりも生業の多様性や立地条件が「危機の年」の認識に影響することが示唆された。「危機の年」の認識におけるハウサ

とフルベの民族間比較では、異なる民族間で「危機の年」の認識が共通した。その理由は、フルベの「危機の年」の判断基準が家畜の損失に加えてハウサと同じく収穫の多寡となっていたからであった。この点からフルベの生業がハウサに類似した生業にあることを捉えることができた。「危機の年」の対処行動には、「危機の年」による差異、地域的差異、民族的差異があることを捉えることができた。また、「危機の年」だけに取られる行動、量や回数や期間が日常の範囲を超えて行われる行動、受動的に取られる行動があること、対処行動の中にはある程度決まった優先順位があること、家畜の減少により出稼ぎがフルベの重要な対処行動となりつつあることを捉えることができた。以上、干ばつや飢餓という問題を抱えるサヘル地域のハウサとフルベの村落において、各民族の生業、村落の立地条件や民族による違いに着目し、それぞれが認識した「危機の年」とその対処行動を捉えることができた。また、これらを通してフルベの生業が定住による家畜の飼養と農耕というハウサに類似した形態にあることを確認することができた。

## 註

- 1 早魃（干ばつ）は、乾燥気象が、深刻な水文のアンバランスを引き起こすほどある地域で続くことを指す「気象学的早魃」、平均降水量などが年間・月間などの同期間で非常に少なくなっていることを指す「気候学的早魃」、河川、貯水池、帯水層、湖、土壌における平均以下の水量が一定期間継続することを指す「水文学的早魃」と「農業的早魃」の4つに大きく分類される（NOAA 2006）。



## 参考文献

- 赤阪賢 1989.「ニジェールの住民・社会」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修『アフリカを知る辞典』平凡社,東京,316頁.
- 池谷和信 2006.『現代の牧畜民—乾燥地域の暮らし—』古今書院,東京.
- 石本雄大 2012.『サヘルにおける食料確保—旱魃や害虫への適応および対処行動— 京都大学アフリカ研究シリーズ 006』京都大学アフリカ地域資料センター,京都.
- 井上兼行 1989.「ハウサ諸国」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修『アフリカを知る辞典』平凡社,東京,329-330頁.
- 今川俊明 1992.「サヘルの土地と水」門村浩・勝俣誠編『サハラのほとり』TOTO出版,東京,154-170頁.
- 江口一久 1989.「フルベ」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修『アフリカを知る辞典』平凡社,東京,365頁.
- 大林稔・中村弘光 1989.「ニジェールの歴史」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修『アフリカを知る辞典』平凡社,東京,316-318頁.
- 勝俣誠 1992.「現代サヘル経済・政治の概要」門村浩・勝俣誠編『サハラのほとり』TOTO出版,東京,237-247頁.
- 川田順造 1980.「モシ族における王都の諸性格」富川盛道編『アフリカ社会の形成と発展—地域・都市・言語』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所,東京,3-42頁.
- セン, アマティア(黒崎卓・山崎幸治訳 2000) 1981.『貧困と飢饉』岩波書店,東京.
- 門村浩 1989.「サハラ南縁地域における歴史時代の旱魃と砂漠化」『アフリカ研究』34: 73-86.
- 門村浩 1992.「サヘル—変動するエコトーン—」門村浩・勝俣誠編『サハラのほとり』TOTO出版,東京,46-78頁.
- 佐々木夕子 2012.『西アフリカ・サヘル地域の村落における生業体系と外部技術の最適な導入および普及方法に関する研究』. 京都大学大学院地球環境学舎博士課程学位申請論文.
- 佐々木夕子・田中樹・伊ヶ崎健大・真常仁志・飛田 2011.「西アフリカ・サヘル地域の村落における農耕民および牧畜民の生業と暮らし—「危機の年」とその対処行動に注目して—」『システム農学』27(4): 149-157.
- 篠田雅人 1992.「サヘルの長期的干ばつの気候学的メカニズム」門村浩・勝俣誠編『サハラのほとり』TOTO出版,東京,79-92頁.
- 嶋田義仁 1992.「サヘルの民族と文化」門村浩・勝俣誠編『サハラのほとり』TOTO出版,東京,207-236頁.
- 嶋田義仁 2008.「西アフリカ最後の遊牧民」福井勝義・竹沢尚一郎・宮脇幸生編『世界の先住民—ファースト・ピープルズの現在—05 サハラ以南アフリカ』明石書店,東京,362-380頁.
- 嶋田義仁 2010.『黒アフリカ・イスラーム文明論』創成社,東京.
- 清水貴夫 2011.「アフリカ都市の都市計画と住民生活の変化—ワガドゥグ市のザカ計画 Projet ZACA とザングエテン住民の事例から—」『九州人類学会』38: 31-41.
- 関谷雄一 2010.『やわらかな開発と組織学習—ニジェールの現場から』春風社,東京.
- 中村弘光 1989.「フラニ王国」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修『アフリカを知る辞典』平凡社,東京,361頁.
- 端 信行 1989.「ニジェールの自然」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修『アフリカを知る辞典』平凡社,東京,316頁.
- 堀田満 2002.『世界有用植物辞典』平凡社,東京.
- 松下周二 1987.「ハウサの時間と空間」川田順造編『民族の世界史 12 黒人アフリカの歴史世界』山川出版社,東京,293-311頁.

- 松下周二 1988.『ハウサ語小事典』大学書林,東京.
- 松下周二 1989.「ハウサ語」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直監修『アフリカを知る辞典』平凡社,東京,329頁.
- 三浦勸一 2011.「サヘルの植物ウェブ図鑑「FAKARA PLANTS」」真常仁志編『国際農林水産業研究センター「アフリカ土壌」プロジェクト委託研究課題:「半乾燥熱帯アフリカの砂質土壌地帯における資源特性の解明」(平成15~19年度),「西アフリカ・サヘル地域の資源動態に基づいた土壌肥沃度管理技術の開発と効果の検証」(平成20~22年度)実施成果報告書』京都大学大学院農学研究科,3-22頁.
- 室井義雄 1987「アフリカにおける資本主義の浸透と労働力移動」森田桐郎編『国際労働力移動』東京大学出版会,東京.
- 室井義雄 2003『ビアフラ戦争—叢林に消えた共和国—』山川出版,東京.
- 矢内原勝 1982.「西アフリカの労働移動—土地余剰下の輸出経済形成」『アジア経済』23(1):2-16.
- Abdoulaye, T. and J. Lowenberg-DeBoer 2000. Intensification of sahelian farming systems : evidence from Niger. *Agricultural Systems* 64(2): 67-81.
- Ahmed, S. and M. Grainge 1986. Potential of the neem tree (*Azadirachta indica*) for pest control and rural development. *Economic Botany* 40(2): 201-209.
- Akponikpe, I. P. and K. Michels 2008. Integrated nutrient management of pearl millet in the Sahel combining cattle manure, crop residue and mineral fertilizer. *Experimental Agriculture* 44(4): 453-472.
- Amadou B. 1999. Le pastoralisme dans le Boboye et le Zarmaganda (Niger) Continué et ruperture. *Horizons nomades en Afrique sahélienne Société, développement et démocratie*. Editions Karthala, Paris, pp. 327-338.
- Ardant du Picq, C. 1933. *Une population Africaine Les Dyerma*, Comité d'études historiques et scientifiques. Bulletin 14(14), Larose, Paris.
- Atawodi, S. E., D. A. Ameh, S. Ibrahim, J. N. Andrew, H. C. Nzelibe, E. O. Onyike, K. M. Anigo, E. A. Abu, D. B. James, G. C. Njoku and A. B. Sallau 2001. Indigenous knowledge system for treatment of trypanosomiasis in Kaduna state of Nigeria. *Journal of Ethnopharmacology* 79: 279-282.
- Ayantunde, A. A., M. Kango, P. Hiernaux, H. M. J. Udo and R. Tabo 2007. Herders' Perception of Livestock Breeds and Breeding Management in Southwestern Niger. *Human Ecology* 35(1): 139-149.
- Ayantunde, A. A., P. Hiernaux, M. Briejer, H. Udo and R. Tabo 2009. Uses of Local Plant Species by Agropastoralists in South-western Niger. *Ethnobotany Research & Application* 7: 53-66.
- Batterbury, S. and A. Warren 2000. The African Sahel 25 years after the great drought: assessing progress and moving towards new agendas and approaches. *Global Environmental Change* 11: 1-8.
- Becker, B. 1983. The contribution of wild plants to human nutrition in the Ferlo, northern Senegal. *Agroforestry Systems* 1: 257-267.
- Bernus, E. 1967. Cueillette et exploitation des ressources spontanées du Sahel nigérien par les Kel Tamasheq. *Cahiers ORSTOM, série Sciences Humaines* 4: 31-52.
- Bernus, E. 1980. Famines et Sécheresses chez les Touaregs Sahéliens, les Nourritures de Substitution. *Africa* 50(1): 1-7.
- Boutrais, J. 2007. Crises écologiques et mobilités pastorales au Sahel : les Peuls du Dallol Bosso (Niger). *Sécheresse* 18(1): 5-12.
- Bryceson, D. H. 1999. African rural labor, income diversification and livelihood approaches : a long term development perspective. *Review of African Political Economy* 80: 171-189.
- Chika, A. and S. O. Bello 2010. Antihyperglycaemic activity of aqueous leaf extract of *Combretum micranthum* (Combretaceae) in normal and alloxan-induced diabetic rats. *Journal of Ethnopharmacology* 129: 34-37.
- Church, R. J. H. and D. Dalby 1973. *Drought in Africa : report of the 1973 symposium*. University of London, Center for African Studies, London.



- de Bruijn, M. E. and van H. Dijk 1995. *Arid Ways: Cultural Understandings of Insecurity in Fulbe Society*, Central Mali. Amsterdam: Thela Publishers.
- Devereux, S. 1993. Theories of famine, *Harvester Wheatsheaf*, New York.
- Derrick, J. 1984. West Africa's Worst Year of Famine, *African Affairs* 83(332): 281-299.
- Direction Departementale d'aménagement du territoire et du développement communautaire de Tessaoua 2012. *Population commune de Tessaoua 2012*.
- Direction Generale de l'Institut National de la Statistique Republique du Niger 2011. *Le Niger en chiffres 2011*, Ministere des Finances Institut National de la Statistique, Niamey.
- Etkin, N. L. and P. J. Ross 1982. Food as medicine and medicine as food an adaptive framework for the interpretation of plant utilization among the Hausa of Northern Nigeria. *Social Science & Medicine* 16: 1559-1573.
- Falconer, J. 1990. "Hungry season" food from the forests. *Unasylva* 160(41): 14-19.
- FAO 1995. *NIGER: Rapport de pays pour la conference technique internationale de la FAO sur les ressources phytogenetiques*, préparé par Mahamadou, I., S. Mahamane, L. Attaou and M. I. Magha. p. 43.
- Fleuret, A. 1979. The role of wild foliage plants in the diet: a case study for Lushoto, Tanzania. *Ecology of Food and Nutrition* 8: 87-92.
- Graef, F. and K. Stahr 2000. Land use systems and land use in Southwest Niger. *Final Report (1986-1999) of the Special Research Programme 308 "Adapted Farming in West Africa"*, *Adapted Farming in West Africa: Issues, Potentials and Perspectives*, University of Hohenheim, pp. 47-54.
- Grange, N. and S. Ahmed 1988. *Handbook of Plants with Pest Control Properties*. John Wiley & Sons, New York.
- Grivetti, L. E. 1978. Nutritional success in a semi-arid land: examination of Tswana agro-pastoralists of the eastern Kalahari, Botswana. *The American Journal of Clinical Nutrition* 31: 1204-1220.
- Grivetti, L. E. 1987. Bush foods and edible weeds of agriculture: Perspectives on dietary use of wild plants in Africa, their role in maintaining human nutritional status and implications for agricultural development. In R. Akar ed., *Health and disease in Tropical Africa : Geographical and Medical Viewpoints*. Harwood, London, pp. 51-81.
- Grivetti, L. E. and B. M. Ogle 2000. Value of traditional foods in meeting macro- and micronutrient needs: the wild plant connection. *Nutrition Research Review* 13: 31-46.
- Hampshire, K. and S. Randall 1999. Seasonal Labor Migration Strategies in the Sahel: Coping with Poverty or Optimising Security. *International Journal of population Geography* 5: 365-385.
- Hampshire, K. 2002. Fulani on the Move, Seasonal Economic Migration in the Sahel as a Social Process. *The Journal of Development Studies* 38(5): 15-36.
- Hermann, M. S., A. Anyamba and C. J. Tucker 2005. Recent trends in vegetation dynamics in the African Sahel and their relationship to climate. *Global Environmental Change* 15: 394-404.
- Hiernaux, P., A. Ayantunde, A. Kalilou, E. Mougouin, B. Gérard, F. Baup, M. Grippa and B. Djaby 2009. Trends in productivity of crops, fallow and rangelands in Southwest Niger: Impact of land use, management and variable rainfall. *Journal of Hydrology* 375: 65-77.
- Hiernaux, P. and A. Ayantunde 2004. The Fakara: a semi-ariagro-ecosystem under stress Report of research activities. In *First phase (July2002-June2004) of the DMP-GEF Program (GEF/2711-02-4516)*. International Livestock Research Institute (ILRI). Niamey, Niger, pp. 4-10.
- Hillocks, R. J. 1998. The potential benefits of weeds with reference to small holder agriculture in Africa. *Integrated Pest Management Reviews* 3: 155-167.
- Humphry, C. M., M. S. Clegg, C. L. Keen and L. E. Geivetti 1993. Food diversity and drought survival. The Hausa example. *International Journal of Food Sciences and Nutrition* 44: 1-16.
- Joireman, S. F. 2008. The Mystery of Capital Formation in Sub-Saharan Africa: Women, Property Rights and Customary Law. *Journal of World Development* 36(7): 1233-1246.

- Kalinganire, A., J. C. Weber, A. Uwamariya and B. Kone 2007. Improving rural livelihoods through domestication of indigenous fruit trees in the parklands of the Sahel. In F. K. Akinnifesi *et al.* eds., *Indigenous Fruit Trees in the Tropics: Domestication, Utilization and Commercialization*, pp. 186-203.
- Lamers, J., A. Buerkert, H. P. S. Makkar, M. Von Oppen and K. Becker, 1995. Biomass production, and feed and economic value of fodder weeds as by-products of millet cropping in a Sahelian farming system. *Experimental Agriculture* 32: 317-236.
- Lockett, C. T., C. C. Calvert and L. E. Grivetti 2000. Energy and micronutrient composition of dietary and medicinal wild plants consumed during drought. Study of rural Fulani, Northeastern Nigeria. *International Journal of Food Sciences and Nutrition* 51: 195-208.
- L'Institut National de la Statistique 2002. *RGP/H 2001 Codes numériques des variables qualitatives ouvertes*. Niamey.
- Maaliki, A., C. White, L. Loutan and J. J. Swift 1984. The Wodaabe. In *Pastoral Development in Central Niger : Report on the Niger Ranger and Livestock Project*. USAID/ Ministry of Rural Development, Niamey, pp. 255-530.
- Marchal, M. 1983. *Les Paysages Agraires de Haute-Volta analyse structurale par la méthode graphique*. Atlas des structures Agraires au Sud du Sahara 18, ORSTOM, Paris.
- Matlock, W. G., and E. L. Cockrum 1976. Agricultural production systems in the Sahel. In M. H. Glantz ed., *The Politics of Natural Disaster*. Praeger, New York, pp. 232-255.
- Maydell, Von H. J. 1986. *Trees and shrubs of the Sahel – their characteristics and uses*. GTZ MBH, Eschborn.
- Mortimore, J. M. and M. W. Adams, 2001. Farmer adaptation, change and 'crisis' in the Sahel. *Global Environmental Change* 11: 49-57.
- Nielsen, J. and A. Reenberg 2010. Temporality and the problem with singling out climate as a current driver of change in a small West African village. *Journal of Arid Environments* 74: 464-474.
- Nordecide, M. B., A. Hatløy, M. Følling, E. Lied and A. Oshaug 1996. Nutrient composition and nutritional importance of green leaves and wild food resources in an agricultural district, Koutiala, in Southern Mali. *International Journal of Food Science and Nutrition* 47: 455-468.
- Olivier de Sardan, J.-P. 1984. *Les sociétés songhay-zarma (Niger-Mali)-Chefs, guerriers, esclaves, paysans*. Karthaka, Paris.
- Population commune de Tessaoua 2012. *Direction Departementale d'aménagement du territoire et du développement communautaire de Tessaoua*.
- Poschen, P. 1986. An evaluation of the *Acacia albida*-based agroforestry practices in the Haraghe highlands of Eastern Ethiopia. *Agroforestry System* 4(2): 129-143.
- Powell, J. M., S. Fernandez-Rivera, P. Hiernaux and M. D. Turner 1996. Nutrient cycling in integrated rangeland/cropland systems of the Sahel. *Agricultural Systems* 52(2-3): 143-170.
- Rahmato, D. 1988. Peasant survival strategies in Ethiopia. *Disasters* 12: 326-344.
- Raynaud, C. and P. L. Delville 1997. The Diversity of Farming Practices. In C. Raynaud ed., *Societies and Nature in the Sahel*. Routledge, London, pp. 159-183.
- Rebecca Huss-Ashmore and Susan L. Johnston, 1997. Wild Plants as Famine Foods Food Choice under Conditions of Scarcity. In Helen M. MacBeth ed., *Food Preferences and Taste: Continuity and Change*. Berghahn Books, New York, pp. 83-100.
- République du Niger Département de Maradi arrondissement de Tessaou Bureau d'arrondissement du recensement nd. *Calendrier Historique de Tessaoua*.
- Rhissa, Z. 2005. The Current Food Crisis in Niger 2005: What Strategy for the Future? *FAO regional Policy office Briefing Note*. Accra.
- Rouch, J. 1954. *Les Songhay*. Monographies Ethnologiques Africaines publiées sous le patronage de l'Institut International Africain de Londres.

- Salifou, A. 1989. *Histoire du Niger*. Editions NATHAN, Niamey.
- Salih, O. M., A. M. Nour and D. B. Harper 1992. Nutritional quality of uncultivated cereal grains utilized as famine foods in western Sudan as measured by chemical analysis. *Journal of the Science of Food and Agriculture* 58: 417-424.
- Saqalli, M., L. C. Bielders, B. Gerard and P. Defourny 2010. Simulating Rural Environmentally and Socio-Economically Constrained Multi-Activity and Multi-Decision Societies in a Low-Data Context: A Challenge Through Empirical Agent-Based Modeling. *Journal of Artificial Societies and Social Simulation* 13(2): 1-21.
- Saqalli, M., B. Gérard, C. L. Bielders and P. Defourny 2010. Targeting rural development interventions: Empirical agent-based modeling in Nigerien villages. *Agricultural Systems* (in press).
- Secoy, D. M. and A. E. Smith 1983. Use of plants in control of agricultural and domestic pests. *Economic Botan* 37: 28-57.
- Sen, Amartya K. 1982. *Poverty and famines, An essay on entitlement and deprivation*. Oxford university press, New York.
- Shinjo, H., K. Hayashi, T. Abdoulaye and T. Kosaki 2008. Management of livestock excreta through corralling practice by sedentary pastoralists in the Sahelian region of West Africa - A case study in Southwestern Niger-. *Tropical Agriculture and Development* 52(4): 97-103.
- Thébaud, B. and S. Batterbury 2001. Sahel pastoralists: opportunism, struggle, conflict and negotiation. A case study from eastern Niger. *Global Environmental Change* 11: 69-78.
- Turner, M. D. 1999. Merging local and Regional Analyses of Land-Use Change: The Case of Livestock in The Sahel. *Annals of the Association of American Geographers* 89(2): 191-219.
- Turner, M. D. and P. Hernaux 2002. The Use of Herders' Accounts to Map Livestock Activities across Agropastoral Landscapes in Semi-Arid Africa. *Landscape Ecology* 17: 367-385.
- USAID FEWS NET Project 2005. *Niger Livelihood Profiles January 2005*. USAID, p. 56.
- Valenza, J. and A. K. Diallo 1972. Etude des pâturages naturels du Nord Sénégal. Maisons Alflort, IEMVT. *Etude Agrostologique* 34: 311.
- Villard, L. and C. J. Bates 1987. Dietary intake of vitamin A precursors by rural Gambian pregnant and lactating women. *Human Nutrition* 41: 135-145.
- Warner, K., C. Erhart, A. de Sherbinin, S. B. Adamo and T. C. Onn 2009. *In Search of Shelter, Mapping the effects of climate change on human migration displacement*, UNU-EHS, Cooperative for Assistance and Relief Everywhere, Inc.
- Wezel, A. and J. Haigis 2000. Farmers' Perception of vegetation changes in Semi-arid Niger. *Land Degradation & Development* 11: 523-543.
- Winkel, T., J.-F. Renno and W. A. Payne 1997. Effect of the timing of water deficit of growth, phenology and yield of pearl millet (*Pennisetum glaucum* (L.) R. Br.) grown in Sahelian conditions. *Journal of Experimental Botany* 48(310): 1001-1009.
- Wijkman, A. and L. Timberlake 1984. *Natural disasters : acts of God or acts of man*. Earthscan paperback, New York.
- Wolcott, G. U. N. 1928. Increase in insect transmitted plant disease and insect damage through weed destruction in tropical agriculture. *Ecology* 9: 461-3.
- 外務省 2011 年 7 月 . 「ニジェール共和国」, URL=<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/niger/data.html> (2013 年 1 月 7 日閲覧)
- 電気事業連合会 2007. 「電気需要実績 (2007 年度分)」, URL=[http://www.fepc.or.jp/library/data/demand/\\_icsFiles/afieldfile/2008/08/20/2007b.pdf](http://www.fepc.or.jp/library/data/demand/_icsFiles/afieldfile/2008/08/20/2007b.pdf) (2012 年 12 月 28 日閲覧)
- FAO 1991. *Locust watch, Desert Locust Archives 1991*, URL=<http://www.fao.org/ag/locusts/en/archives/archive/index>.

- html*, FAO, Rome. (2009年12月20日閱覽)
- IRIN (Integrated Regional Information Networks) 2008. *Sahel: Backgrounder on the Sahel, West Africa poorest region*, URL= <http://www.unhcr.org/refworld/docid/4847bb8f0.html>, The United Nations Refugee Agency. (2011年11月7日閱覽)
- JISAO ( Joint Institute for the Study of the Atmosphere and Ocean) 2011. *Sahel Precipitation Index (20-10N, 20W-10E)*, URL= <http://www.jisao.washington.edu/data/sahel>, University of Washington. (2011年12月10日閱覽)
- NOAA 2006. *Drought Information Center, All About Droughts*, URL=<http://www.wrh.noaa.gov/fgz/science/drought.php?wfo=fgz> (2011年10月23日閱覽)
- PROTA ( Plant Resources of Tropical Africa) 2005. “ *Prota 3 : Dye and tannins / Colorants et tanins Record display*”, URL=[http://database.prota.org/PROTAhtml/Combretum%20glutinosum\\_En.htm](http://database.prota.org/PROTAhtml/Combretum%20glutinosum_En.htm) (2012年9月24日閱覽)
- The Observatory of Economic Complexity 2010. *Learn More About: Trade in Niger*, URL=<http://atlas.media.mit.edu/country/ner/> (2013年1月31日閱覽)
- World Bank 2012. *World Development Indicators*, URL=<http://www.worldbank.org/>, World Bank, Washington DC. (2012年12月27日閱覽)

砂漠化をめぐる風と人と土 フィールドノート 1  
西アフリカ・サヘル地域の人びとの暮らしと生業  
—ニジェール共和国の村落の事例から—

田中 樹 監修  
佐々木 夕子・小村 陽平 著

2014年3月30日発行

発行 総合地球環境学研究所 「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト  
京都市北区上賀茂本山 457 番地 4  
kazehitotsuchi@chikyu.ac.jp

印刷・製本 中西印刷株式会社  
京都市上京区下立売通小川東入る

◇表紙、裏表紙写真撮影：佐々木 夕子

◇編集、ロゴマーク作成：遠藤 仁（総合地球環境学研究所 プロジェクト研究員）

総合地球環境学研究所  
R-07 資源領域プログラム  
「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト  
2012～2016年度

